
東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

活動報告

2010年4月－2015年3月



目 次

1. 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

1-1, 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク	3
1-2, 日本・アジアに関する教育研究ネットワークの沿革	4
1-3, ASNET の運営委員	6

2. 教育活動

2-1, 『日本・アジア学』教育プログラムとは.....	11
・開講科目数（2010 年度から 2014 年度まで）	11
・開講科目数、履修者、単位取得者数の変化（2010 年度から 2014 年度まで）	12
・『日本・アジア学』教育プログラム修了者数	13
・ASNET 企画科目（ASNET の教員が企画した科目）	14
・「アジアのフィールドワーク論」国内外フィールド実習報告（抜粋）.....	17
・ASNET 関係の図書の出版	21
・総合科目群開講一覧（2010 年度から 2014 年度）	24
・言語科目群開講一覧（2010 年度から 2014 年度）	30
2-2, 学部生向け『日本・アジア学概論』.....	34

3. 研究・交流活動

3-1, 東文研・ASNET 共催セミナーの開催	41
・共催セミナー開催記録.....	41
3-2, JSPS「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の実施	48
・国際セミナーやエクスカージョンの実施記録.....	51

4. 広報活動

4-1, ASNET メールマガジン	63
4-2, ASNET ウェブサイト	68
4-3, 東大－イェール・イニシアティブ	70

5. アウトリーチ活動

5-1, グレーター東大塾『アジアの新しい形を構想する』の実施	73
5-2, ASNET 特別セミナー	78

資料

(1) 総長室総括委員会組織図	83
(2) 東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク内規	84
(3) 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク運営委員会要項	85
(4) 『日本・アジア学』講座シラバス（2010 年度から 2014 年度）	86
(5) 『学内広報』「ASIAN DIVERSITY」	128
(6) 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧	140
(7) グレーター東大塾パンフレット	149

1. 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

1. 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

1-1, 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）

【機構名】

日本語名：日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）

英語名：Network for Education and Research on Asia

【活動目的】

「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（通称：ASNET）」は、日本を含むアジアを対象とする研究者が部局の枠を超えて集まり、新しい教育や研究の可能性を探るために設立された。ASNET はふたつの特徴を持っている。ひとつは、近年アジアでフィールドワークを行う自然科学分野の研究者が急増していることを受けて、理系の研究者が多数参加している、文字通り文理横断型ネットワークであること。いまひとつは、独自の部局横断的な大学院カリキュラムをもつ教育プログラムであること。ASNET は、東京大学のアジアに関する研究・教育の振興に積極的な役割を果たしたいと考えている。

【代表者名】

古田元夫（大学院総合文化研究科・教授）

【設置年月日】

2010 年 4 月 1 日設置

【事務担当部局】

東京大学東洋文化研究所

【参加部局の構成】

日本・アジアに関する教育研究ネットワークへの参加部局は、総合文化研究科、農学生命科学研究科、学際情報学府、工学系研究科、人文社会系研究科、医学系研究科、経済学研究科、教育学研究科および教養学部・文学部である。

これら研究科は、「日本・アジア学」教育プログラムにおいて、総論（総合文化研究科）、自然環境論（総合文化研究科学生命科学研究科）、情報論（学際情報学府）、社会技術論（工学系研究科）、社会・文化論（人文社会系研究科）、健康論（医学系研究科）、特論（経済学研究科、経済学研究科）、および言語科目群（教養学部・文学部）を担当している。

【総長室総括委員会組織図】

資料(1)参照

【東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク内規】

資料(2)参照

1-2, 日本・アジアに関する教育研究ネットワークの沿革

年	概要
2000 年	・東京大学の教員有志の間でネットワークの構想が生まれる
2001 年	・「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク・ラウンドテーブル」（座長：小林正彦副学長） ・「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク WG」（座長：羽田正・東文研教授） ・Tokyo School of Asian Studies 構想（私案）（古田元夫・総合文化研究科教授） ・日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）の正式発足（事務局：東洋文化研究所） ・各部局に依頼して、日本を含むアジア研究者の一覧を作成（理系研究者が予想よりも多かったことが、ASNET が文理融合学際ネットワークとして特徴づけていく） ・ASNET メールマガジンを開通する
2003 年	・ASNET のホームページを開設する ・学内の日本・アジア研究者全員への個別インタビューの開始
2004 年	・教養学部で 1・2 年生向けの科目開講 ・ASNET 主催シンポジウム「東京大学における日本・アジア研究」開催（2004 年 10 月） ・『東京大学における日本・アジア研究 研究者リスト（暫定版）』発行
2005 年	・ASNET メールマガジン開始（2005 年 1 月） ・『東京大学における日本・アジア研究 研究者リスト』の正式版発行（2005 年 3 月） ・国際連携本部に ASNET 推進室設置（事務局が本部棟に移る）（2005 年 10 月） ・東京大学 東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（EALAI）への科目提供
2006 年	・『List of Japanese and Asian Studies Researchers at the University of Tokyo』発行（2006 年 1 月） ・AGS/ASNET/TIGS 共催研究会「アジアの食文化とグローバリゼーション」（2006 年 4 月～） ・研究科等横断型文理融合教育としての『日本・アジア学講座』が 11 科目で開始（2006 年 10 月）
2007 年	・東京大学 130 周年記念事業 ・東京大学シンポジウム『アジアと語る希望・幸福』開催（2007 年 11 月 3-4 日） ・講談社『東京大学アクションプランガイドブック』（2008 年発行）に取材される
2008 年	・ジェロントロジー寄付研究部門（現・高齢社会総合研究機構/ASNET）共催 HORIBA-APRU 国際シンポジウム「Strategies for “Aging in Place” Networking of Junior Gerontologists in the Pacific Rim Countries」（2008 年 9 月） ・外国出身研究者データベースの構築と運用開始（文科省委託事業「外国人研究者の日本定着促進手法の開発」の一環）
2009 年	・『日本・アジア学講座』が東京大学の全学研究科等横断型教育プログラムに発展 ・日本・アジア SATOYAMA 教育イニシアティブ（環境省アジア環境人材育成イニシアティブ：農学生命科学研究科主管）への参加 ・東大・イエール・イニシアティブへの参画 ・ASNET 企画科目「アジア研究のフィールドワーク」の国内実習を開始する
2010 年	・日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）として全学機構へと発展 ・第 1 回東文研・ASNET 共催セミナーを開催（2010 年 5 月 19 日） ・ASNET メールマガジンの発行回数が計 300 回を超える（2010 年 8 月 20 日） ・東京大学『学内広報』に「ASIAN DIVERSITY」を連載する
2011 年	・日本学術振興会「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の実施（2011 年-2013 年） ・『日本・アジア学』講座の修了者に初めて修了証を発行する ・東大学部生向け「日本・アジア学概論：国際社会で活躍する基盤を身に付ける」科目の開講

2012 年	・ 東文研・ASNET 共催セミナーの開催が計 50 回を超える（2012 年 5 月 24 日） ・ ASNET メールマガジンの発行回数が計 400 回を超える（2012 年 7 月 20 日） ・ 日本学術振興会「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」を継続的に実施する（2011 年-2013 年） ・ ASNET 主催グレーター東大塾『アジアの新しい形を構想する』を開催する（2012 年 10 月～2013 年 2 月）
2013 年	・ ASNET メールマガジンの購読者が 1000 名を超える ・ ASNET メールマガジンに「自著を語る」欄を追加する（2013 年 4 月 12 日～） ・ 日本学術振興会「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」を継続的に実施する（2011 年-2013 年）
2014 年	・ 古田元夫監修、卯田宗平編『アジアの環境研究入門』（東京大学出版会）を刊行する（2014 年 7 月） ・ 東文研・ASNET 共催セミナーの開催が計 100 回を超える（2014 年 10 月 9 日） ・ ASNET メールマガジンの発行回数が計 500 回を超える（2014 年 7 月 18 日） ・ GJS（国際総合日本学ネットワーク）との共催セミナーを始める（2014 年 7 月 10 日）

1-3, ASNET の運営委員

ASNET は、総長に指名されたネットワーク長のほか、副ネットワーク長と教員、学内各部局から推薦された運営委員が企画や運営を担っている。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク運営委員会

【歴代委員一覧】

所属	職	氏名	任期・備考
大学院総合文化研究科	教授	古田 元夫	委員長
東洋文化研究所	教授	池本 幸生	平成 21 年 10 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
大学院法学政治学研究科		藤原 帰一	平成 21 年 10 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
大学院医学系研究科	教授	渡邊 知保	平成 20 年 10 月 1 日-平成 22 年 9 月 30 日
	准教授	梅崎 昌裕	平成 22 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
大学院工学系研究科	教授	伊藤 毅	平成 21 年 10 月 1 日-平成 25 年 9 月 30 日
	准教授	大月 敏雄	平成 25 年 10 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
大学院人文社会系研究科	教授	水島 司	平成 20 年 10 月 1 日-平成 26 年 9 月 30 日
	准教授	島田 竜登	平成 26 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
大学院理学系研究科	教授	多田 隆治	平成 21 年 10 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
大学院農学生命科学研究科	教授	木南 章	平成 20 年 10 月 1 日-平成 26 年 9 月 30 日
	准教授	八木 信行	平成 26 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
大学院経済学研究科	准教授	天野 論文	平成 21 年 10 月 1 日-平成 24 年 2 月 28 日
	教授	岡崎 哲二	平成 24 年 3 月 1 日-平成 25 年 9 月 30 日
	教授	澤田 康幸	平成 25 年 10 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
大学院総合文化研究科	教授	村田 雄二郎	平成 21 年 4 月 1 日-平成 24 年 9 月 30 日
	准教授	川島 真	平成 24 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
大学院教育学研究科	教授	白石 さや	平成 21 年 10 月 1 日-平成 25 年 3 月 1 日
	准教授	李 正連	平成 25 年 4 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
大学院薬学系研究科	准教授	折原 裕	平成 20 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
大学院数理科学研究科	准教授	ウィロックス ラルフ	平成 22 年 4 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
大学院新領域創成科学研究科	准教授	戸堂 康之	平成 22 年 4 月 1 日-平成 22 年 9 月 30 日
	教授	柳田 辰雄	平成 22 年 10 月 1 日-平成 26 年 9 月 30 日
	准教授	坂本 麻衣子	平成 26 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
大学院情報理工学系研究科	教授	江崎 浩	平成 21 年 10 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
学際情報学府	教授	姜 尚中	平成 20 年 10 月 1 日-平成 24 年 9 月 30 日
	准教授	北田 暁大	平成 24 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
社会科学研究所	教授	丸川 知雄	平成 21 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
生産技術研究所	教授	目黒 公郎	平成 21 年 10 月 1 日-平成 22 年 4 月 19 日
	教授	沢田 治雄	平成 22 年 10 月 1 日-平成 25 年 9 月 30 日
	准教授	竹内 渉	平成 25 年 10 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日
史料編纂所	准教授	松方 冬子	平成 20 年 10 月 1 日-平成 24 年 9 月 30 日
	准教授	小野 将	平成 24 年 10 月 1 日-平成 28 年 9 月 30 日
大気海洋研究所	准教授	井上 広滋	平成 21 年 10 月 1 日-平成 22 年 3 月 31 日
	教授	西田 周平	平成 22 年 4 月 1 日-平成 27 年 9 月 30 日

地震研究所	教授	加藤 照之	平成 22 年 4 月 1 日-平成 24 年 3 月 31 日
	教授	佐竹 健治	平成 24 年 4 月 1 日-平成 28 年 3 月 31 日
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク	特任准教授	古澤 拓郎	平成 22 年 4 月 1 日-平成 22 年 12 月 31 日
	特任講師	卯田 宗平	平成 23 年 1 月 1 日-平成 28 年 3 月 31 日
東洋文化研究所	助教	安田 佳代	平成 24 年 4 月 1 日-平成 25 年 3 月 31 日
	助教	後藤 絵美	平成 25 年 4 月 1 日-平成 28 年 3 月 31 日
東洋文化研究所	教授	羽田 正	元室長・オブザーバー
	教授	菅 豊	前室長・オブザーバー

ネットワーク教員

【歴代ネットワーク教員一覧】

所属	職	氏名	任期・備考
大学院農学生命科学研究科	教授	井上 真	平成 22 年 4 月 1 日-平成 27 年 3 月 31 日
大学院工学系研究科	教授	堀井 秀之	平成 22 年 4 月 1 日-平成 27 年 3 月 31 日
社会科学研究所	教授	丸川 知雄	平成 23 年 4 月 1 日-平成 27 年 3 月 31 日
大学院教育学研究科	教授	白石 さや	平成 23 年 4 月 1 日-平成 25 年 3 月 31 日
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク	特任准教授	古澤 拓郎	平成 22 年 4 月 1 日-平成 22 年 12 月 31 日
	特任講師	卯田 宗平	平成 23 年 1 月 1 日-平成 28 年 3 月 31 日
東洋文化研究所	助教	安田 佳代	平成 24 年 4 月 1 日-平成 25 年 3 月 31 日
	助教	後藤 絵美	平成 25 年 4 月 1 日-平成 28 年 3 月 31 日

【日本・アジアに関する教育研究ネットワーク運営委員会要項】

資料(3)参照

2. 教育活動

2. 教育活動

2-1、『日本・アジア学』教育プログラム

『日本・アジア学』とは、日本を含むアジアについての教育活動を、部局と分野を超えて新たに体系化・総合化したもので、意欲ある大学院学生が、所属する研究科・教育部局固有の教育カリキュラムに加えて履修し、修了する教育プログラムである。

本プログラムは、総合科目群と言語科目群に大別される。総合科目群は、本プログラムの中核をなすもので、分野横断・部局横断のカリキュラムを通じて、日本を含むアジアについて理解を深めるものである。各研究科・教育部において正規課程の科目として実施される授業がこれに該当する。総論、社会・文化論、社会技術論、自然環境論、健康論、情報論、特論からなる。また、言語科目群は教養学部あるいは文学部の学部後期課程（3～4年生）で開講される外国語科目のうち、日本・アジアに関わるものを、意欲ある大学院学生が履修することを奨励するものである。

総合科目群のみから、あるいは言語科目群と総合科目群の合計で12単位以上を取得した場合に、プログラムを修了したと認定し、修了証を発行する。ただし、言語科目群から取得した単位を、修了要件の一部とする場合には、4単位を上限としている。

■開講科目数（2010年度から2014年度まで）

【総合科目群】

年度	開講科目数	内訳
2010年	35科目	総論（総合文化研究科）：8科目 社会・文化論（人文社会系研究科）：7科目 社会技術論（工学系研究科）：3科目 自然環境論（農学生命科学研究科）：5科目 健康論（医学系研究科）：7科目 情報論（学際情報学府）：3科目 特論（経済学研究科・教育学研究科）：2科目
2011年	36科目	総論（総合文化研究科）：8科目 社会・文化論（人文社会系研究科）：8科目 社会技術論（工学系研究科）：4科目 自然環境論（農学生命科学研究科）：5科目 健康論（医学系研究科）：7科目 情報論（学際情報学府）：2科目 特論（経済学研究科・教育学研究科）：2科目
2012年	34科目	総論（総合文化研究科）：10科目 社会・文化論（人文社会系研究科）：4科目 社会技術論（工学系研究科）：4科目 自然環境論（農学生命科学研究科）：5科目 健康論（医学系研究科）：7科目 情報論（学際情報学府）：2科目 特論（経済学研究科・教育学研究科）：2科目
2013年	39科目	総論（総合文化研究科）：18科目

		社会・文化論（人文社会系研究科）：3 科目 社会技術論（工学系研究科）：3 科目 自然環境論（農学生命科学研究科）：5 科目 健康論（医学系研究科）：7 科目 情報論（学際情報学府）：2 科目 特論（経済学研究科）：1 科目
2014 年	45 科目	総論（総合文化研究科）：15 科目 社会・文化論（人文社会系研究科）：5 科目 社会技術論（工学系研究科）：2 科目 自然環境論（農学生命科学研究科）：4 科目 健康論（医学系研究科）：7 科目 情報論（学際情報学府）：11 科目 特論（経済学研究科）：1 科目

【言語科目群】

年度	開講科目数	内訳
2010 年	93 科目	文学部：14 科目、教養学部：79 科目
2011 年	111 科目	文学部：15 科目、教養学部：96 科目
2012 年	99 科目	文学部：15 科目、教養学部：84 科目
2013 年	114 科目	文学部：12 科目、教養学部：102 科目
2014 年	100 科目	文学部：15 科目、教養学部：85 科目

■開講科目数、履修者、単位取得者数の変化（2010 年度から 2014 年度まで）

【総合科目群】

2010 年度（計 35 科目）総履修者数：512 名、単位取得者数：365 名
 2011 年度（計 36 科目）総履修者数：655 名、単位取得者数：480 名
 2012 年度（計 34 科目）総履修者数：未集計、単位取得者数：未集計
 2013 年度（計 39 科目）総履修者数：648 名、単位取得者数：479 名
 2014 年度（計 45 科目）総履修者数：467 名、単位取得者数：364 名

【言語科目群】

2010 年度（計 93 科目）総履修者数：726 名、単位取得者数：556 名
 2011 年度（計 111 科目）総履修者数：853 名、単位取得者数：未集計
 2012 年度（計 99 科目）総履修者数：未集計、単位取得者数：未集計
 2013 年度（計 114 科目）総履修者数：729 名、単位取得者数：520 名
 2014 年度（計 100 科目）総履修者数：628 名、単位取得者数：473 名

■『日本・アジア学』教育プログラム修了者数

対象	プログラム名	2010 年 3 月末	2011 年 3 月末	2012 年 3 月末	2013 年 3 月末	2014 年 3 月末	2015 年 3 月末	合 計
学部	ジェロントロジー	6	9	9	3	4	4	35
	メディアコンテンツ	2	2	0	2	3	0	9
	バリアフリー教育	—	—	2	4	2	1	9
	死生学・応用倫理	—	—	—	—	1	6	7
研究科	<u>日本・アジア学</u>	<u>0</u>	<u>2</u>	<u>5</u>	<u>4</u>	<u>9</u>	<u>9</u>	<u>29</u>
	海洋学際	0	17	18	20	16	14	85
	デジタル・ヒューマニテ ィーズ	—	—	—	—	2	0	2
	科学技術イノベーション 政策の科学	—	—	—	—	6	12	18
合計		8	30	34	33	43	46	194

■ ASNET 企画科目（ASNET の教員が企画した科目）

ASNET では、各国のフィールドで最新の調査・研究を展開している専門家の協力を得ながらオムニバス形式の科目を開講してきた。開講科目と開講年、授業内容は以下のとおりである。

科目名：『アジアの環境研究の最前線（地域文化研究特別講義Ⅱ）』（2011 年、2012 年）

〔時間〕 夏学期、木曜、3 限（13:00-14:30）

〔授業内容〕

本講義では、日本を含むアジア地域で発生している環境問題とそれに関わる最新の研究成果を理解する。具体的には、砂漠化や生物多様性、熱帯雨林の減少、化学物質汚染、健康、水汚染、食糧問題、大気などについて、毎週 1 つのテーマを取り上げ、各国のフィールドで最新の調査・研究を展開している東京大学の専門家の協力を得ながらオムニバス形式で進めていく。

こうした授業を通じて、アジアの環境に関わる最新の研究成果を幅広く理解するとともに、環境問題の将来を考察できる素養を身につけることを目指す。

〔授業日程〕

各回の講義タイトルと担当の講師

2011 年 4 月 14 日：卯田宗平（生態人類学）“絶対解”なき環境研究のこれから

2011 年 4 月 21 日：大久保悟（地域生態学）里山二次林と植生管理

2011 年 4 月 28 日：田中求（環境社会学）メラネシアにおける商業伐採と日本の森林

2011 年 5 月 12 日：本多了（環境工学）タイの水利用・環境汚染と対策

2011 年 5 月 19 日：卯田宗平（生態人類学）中国・長江中流域の環境変化と生計維持

2011 年 5 月 26 日：池本幸生（経済学）コーヒーから世界をのぞく

2011 年 6 月 2 日：掛山正心（毒性学）環境中化学物質と学習・情動機能への影響

2011 年 6 月 9 日：小西祥子（人類生態学）トンガ王国における肥満と栄養、食環境

2011 年 6 月 16 日：大堀研（地域社会学）日本のグリーン・ツーリズムの現状と課題

2011 年 6 月 23 日：星子智美（都市工学）アジアの都市大気汚染と健康影響

2011 年 6 月 30 日：岡安智生（緑地創成学）モンゴル国の土地荒廃と自然管理

2011 年 7 月 7 日：学生からの質問と教員による返答①

2011 年 7 月 14 日：学生からの質問と教員による返答②

2012 年 4 月 19 日：卯田宗平（生態人類学）アジアで環境研究に求められていること

2012 年 5 月 10 日：加賀谷隆（生態学）河川環境の人為的改変と底生生物への影響

2012 年 5 月 17 日：宮本有紀（精神看護学）病に対する意味づけを問う

2012 年 5 月 24 日：鶴坂智則（情報工学）ユビキタス・コンピューティング技術と場所情報システム

2012 年 5 月 31 日：安岡潤子（国際保健学）環境改善でマラリア予防！

2012 年 6 月 7 日：安田佳代（国際政治学）国際衛生協力とアジアの国際関係

2012 年 6 月 14 日：小熊久美子（環境工学）アジアの水環境汚染と健康リスク

2012 年 6 月 21 日：鯉淵幸生（沿岸環境学）東京湾、有明海の水環境とその背景

2012 年 6 月 28 日：萩原久美子（社会学）日本の労働世界とジェンダー

2012 年 7 月 5 日：学生からの質問と教員による返答①

2012 年 7 月 12 日：学生からの質問と教員による返答②

2012 年 7 月上旬：足尾銅山へのフィールド調査

〔授業形式〕

受講者には毎回、A4 一枚分の感想・質問文の提出を課す。

成績は、授業への参加の積極性によって総合的に評価する。

科目名：『中国を見る眼（地域文化研究特別講義Ⅱ）』（2013 年、2014 年）

〔時間〕 夏学期、木曜、3 限（13:00-14:30）

〔研究科〕 総合文化研究科

〔授業内容〕

本講義では、中国に関わる最新の研究成果を多分野の専門家の協力を得ながらオムニバス形式で学ぶ。具体的には、中国の農村資源管理や地方財政、工業化、言葉、漫画史、日本のイメージ、ノーベル文学賞受賞後の波紋などについて、毎週 1 つのテーマを取り上げ、講義と議論を通じて理解する。この授業を通じて、中国に関わる最新の研究成果を幅広く理解するとともに、中国と日本の将来を考察できる素養を身につけることを目指す。

〔授業日程〕

2013 年 4 月 11 日：卯田宗平（生態人類学）「序論：中国を理解するコツ」
2013 年 5 月 9 日：尾崎文昭（中国文学）「ノーベル文学賞受賞の波紋とその背景」
2013 年 5 月 16 日：王雪萍（東アジア国際関係）「中国の教育と中国人の日本イメージ」
2013 年 5 月 23 日：大野公賀（中国近現代文学）「中国漫画史における竹久夢二」
2013 年 5 月 30 日：前田真砂美（語学）「程度を何で表すか—現代中国語の程度副詞」
2013 年 6 月 6 日：小野泰教（中国近代思想史）「西洋近代社会をいかに認識するか」
2013 年 6 月 13 日：加島潤（経済史）「地方財政から見る中国という国家—歴史と現状」
2013 年 6 月 20 日：伊藤亜聖（経済学）「『世界の工場』中国を解剖する」
2013 年 6 月 27 日：山田七絵（農業経済学）「中国における農村資源管理」
2013 年 7 月 4 日：学生からの質問と教員による返答①
2013 年 7 月 11 日：学生からの質問と教員による返答②
2014 年 4 月 10 日：卯田宗平（生態人類学）「中国を見る眼オリエンテーション」
2014 年 4 月 17 日：卯田宗平（生態人類学）「中国人たちの行動を理解する」
2014 年 4 月 24 日：卯田宗平（生態人類学）「中国の自然環境を理解する」
2014 年 5 月 8 日：山田七絵（農業経済学）「中国の『村』を理解する」
2014 年 5 月 15 日：松永光平（地域研究）「21 世紀の中国黄土高原に生きる人々」
2014 年 5 月 22 日：中村知子（文化人類学）「西部大開発政策と中国の地方社会」
2014 年 5 月 29 日：山口真美（地域研究/社会学）「若者たちの現代中国：都市と農村」
2014 年 6 月 5 日：王雪萍（東アジア国際関係論）「戦後日中関係と日本華僑」
2014 年 6 月 12 日：河原功（台湾文学）「日本・台湾での台湾文学研究」
2014 年 6 月 19 日：任哲（現代中国政治研究）「土地から見る現代中国」
2014 年 6 月 26 日：秋山知宏（水文学）「シルクロードのロマンと現実」
2014 年 7 月 3 日：学生からの質問と教員による返答①
2014 年 7 月 10 日：学生からの質問と教員による返答②
2014 年 7 月 10 日：学生からの質問と教員による返答②

〔授業形式〕

受講者には毎回、A4 一枚分の感想・質問文の提出を課す。
成績は、授業への参加の積極性によって総合的に評価する。

科目名：『アジアのフィールドワーク論（地域文化研究特別講義Ⅱ）』（2012-2014 年）

〔時間〕

夏学期、金曜、3 限（13:00-14:30）

〔研究科〕

総合文化研究科

〔授業内容〕

文系・理系のさまざまな分野に焦点をあてて、アジアを対象としたフィールドワークの理論と方法と成果を学んでいく。異分野の手法を取り入れたい学生、フィールドワークを行おうとしている学生、ローカルな視点から見たアジアを学びたい学生など、所属を問わず広く歓迎する。講義（安全対策や倫理も含む）を行ったあと、海外で実習を行う。

第1回：「イントロダクション」

第2回：「エスノグラフィック・フィールドワークとは」

第3回：「聞き取りの方法」

第4回：「フィールドノートの書き方」

第5回：「調査のスキル①：家系図、生業暦、ライフヒストリー」

第6回：「調査のスキル②：性差、年齢差、通婚圏、動植物」

第7回：「概念力を鍛える」

第8回：「具体的な調査の事例から方法論を学ぶ①」

第9回：「具体的な調査の事例から方法論を学ぶ②」

第10回：「iPadを使った野外調査：概要、データ収集の準備」

第11回：「iPadを使った野外調査：データ収集」

第12回：「iPadを使った野外調査：発表」

7月中旬：国内フィールド実習（現場で何かを「発見」し、それを調べて発表する）

8月下旬：海外フィールド実習（気付きを深く突き詰める）

〔国内外フィールドワークの日程と場所〕

2012年7月1日：新潟県小千谷市小栗山闘牛

2012年7月7日：栃木県日光市足尾銅山

2012年7月24-25日：千葉県南房総市千倉町の漁村調査

2012年7月15日-22日：中国海南島五指山市リー族の村落

2012年7月25日-8月1日：ベトナム

2013年6月8-9日：長良川鵜飼における鵜匠への聞き取り調査

2013年7月22-23日：埼玉県秩父市大滝の村落調査

2013年7月29日-8月3日：北京市郊外の村落変容に関わる視察

2013年8月27日-9月5日：ベトナム・ホーチミン、ダナンの村落視察

2014年6月1日：新潟県小千谷市の小千谷闘牛

2014年7月28日-29日：神奈川県三浦市三崎町周辺

2014年9月22日-29日：カンボジア

■「アジアのフィールドワーク論」国内外フィールド実習報告（抜粋）

□2012年7月1日：新潟県小千谷市小栗山闘牛

ASNET 科目の学生だけでなく、東大の留学生にも参加を呼びかけ多数の学生たちが参加した。現地では、伝統的な牛の角突きの技術やそれを育む文化に触れ、また東洋文化研究所の菅豊教授が所有する「天神」号を応援しつつ観戦した。



「天神」号の戦いぶりを見学

□2012年7月7日：栃木県日光市足尾銅山

大規模な銅山開発により煤煙、鉍毒水などの深刻な環境問題が発生し、日本の環境問題の原点ともいわれている足尾銅山鉍毒事件。現在、荒廃した山間部では森林を復元するために植林事業が実施されている。当日は、環境研究を学ぶ学生たちと山間部で植林された森林の生長の状況などを観察した。



山間部で植林された森林の生長を見学する

□2012年7月24-25日：千葉県南房総市千倉町の漁村調査

房総半島の漁村を対象に、学生たちは2人または3人一組になって過去に撮影された写真などを手がかりに現地の人たちに村の歴史や近年の変化を聞き取る作業を行なった。その夜、聞き取り調査により新たに発見した事柄を学生自らが撮影した10枚の写真とともに報告した。事前勉強会では想像もできなかった内容が学生から多く報告され、たいへん有意義な調査となった。



その日の発見を報告する学生たち

□2012 年 7 月 15 日-22 日：中国海南島五指山市リー族の村落

海南島五指山市のふたつの農村の変化を観察した。ひとつは五指山のふもとにあり観光・レジャー開発が行なわれた農村。もうひとつはあまり観光開発がなされずバナナやゴム栽培で盛んな農村。経済発展が著しい中国海南島の内陸部における二つの村の異なった生業戦略、自然利用のあり方を理解することができた。



現地の人にかつての焼畑の状況を聞く学生

□2013 年 6 月 8-9 日：長良川鵜飼における鵜匠への聞き取り調査

ASNET 科目の学生だけでなく、東大の留学生や訪問学者にも呼びかけ多数の人たちが参加しました。1300 年以上の歴史をもつ長良川鵜飼。昼は鵜匠宅で話をうかがい、夜は鵜舟の上から長良川鵜飼を鑑賞した。篝火の下で泳ぐ鵜とそれを操る鵜匠。留学生たちも興味深く鑑賞した。



山下鵜匠に鵜飼い漁の現状を伺う

□2013 年 7 月 22-23 日：埼玉県秩父市大滝の村落調査

埼玉県秩父市大滝、栃本地区の農村を対象に、学生たちが 3 人一組になって現地の人たちに村の歴史や現状、課題、近年の変化を聞き取る作業を行なった。

現地では、集落の人口が急激に減少している現状やそれに伴う小学校の統廃合、新たな換金作物の栽培、動物による農作物の被害などを聞き取った。その夜、聞き取り調査を通じて新たに「発見」した内容を学生自らが撮影した 10 枚の写真とともに報告した。事前勉強会では想像もできなかった内容が学生から多く報告され、たいへん有意義な調査となった。



その日の発見を夜の報告会で発表する学生たち

□2013 年 7 月 29 日-8 月 3 日：北京市郊外の村落変容に関わる視察

北京市において東京大学の院生と中央民族大学の教員および学生の交流活動を開催した。その後、北京市の歴史的建造物およびポスト北京オリンピックの現状を現地の学生たちと見学した。日中の学生たちが数日間行動を共にし、友好的で発展的な関係が構築された。



中央民族大学の教員や学生と交流をする

□2014 年 6 月 1 日：新潟県小千谷市の小千谷闘牛

ASNET 科目の学生だけでなく、東大の留学生にも参加を呼びかけ多数の学生たちが参加した。現地では、伝統的な牛の角突きの技術やそれを育む文化に触れ、また東洋文化研究所の菅豊教授が所有する「天神」号を応援しつつ観戦した。

□2014 年 7 月 28 日-29 日：神奈川県三浦市三崎町周辺

三崎町の漁村や商店街を対象に、現地の人たちに地域の歴史や近年の変化を聞き取る作業を行った。その夜の報告会では、新たに発見した事柄を学生自らが撮影した 10 枚の写真とともに紹介した。報告会では「漁村の衰退と映画ロケ地としての再生」や「マグロ漁の現状」、「伝統的な行事」など、事前勉強会では想像もできなかった内容が学生から報告された。

この実習には ASNET の学生のほかにも、医学部医学科および看護学科の学生も参加した。



新たに発見した事柄を発表する報告会

□2014 年 9 月 22 日 - 29 日：カンボジア

カンボジアにおいて海外学生フィールドワーク実習を行った。①プノンペン近郊の村において都市近郊農村の現状と課題の調査、②KampongChnang 地区の農村で素焼き技術の普及と貧困克服に関する調査、③SiemReap の KanSaeng 村で影絵の保存活動を題材に、伝統的な技術の維持と課題に関わる調査を行なった。



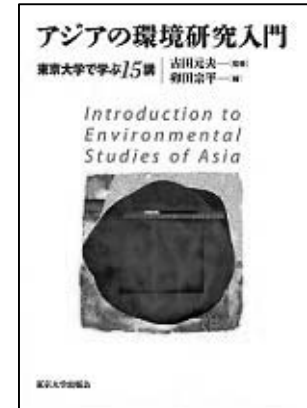
農村において素焼き技術の普及と貧困克服に関する調査をおこなう学生

■ ASNET 関係の図書の出版

- 「アジアの環境研究の最前線」科目をまとめた図書を東京大学出版会から刊行
古田元夫監修、卯田宗平編『アジアの環境研究入門－東京大学で学ぶ 15 講－』
単行本：298 ページ、出版社：東京大学出版会（2014/7/25）
ISBN-10：4130603116、ISBN-13：978-4130603119

【内容】

本書は、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（以下、ASNET）が企画した大学院生向け科目「アジアの環境研究の最前線」の 2011 年度、2012 年度の講義のなかから 15 講をまとめたものである。アジア各地で起きている環境問題の現実とは？ そして、それを解決するためにはどのような研究アプローチ法がありうるのか？ 学際的な視点と俯瞰的な視点を融合し、若手研究者が生き生きと語る東大講義「アジアの環境研究の最前線」を書籍化した。



【目次】

- はじめに（古田元夫）
ガイダンス 環境研究に「絶対解」はあるのか？（卯田宗平）
I 社会のなかの個人
第1講 トンガ人はなぜ太る？（小西祥子）
第2講 病は誰が決めるのか？（宮本有紀）
第3講 環境改善でマラリアは予防できるか？（安岡潤子）
II 自然の振る舞い
第4講 なぜ里山の生物多様性を守るのか？（大久保悟）
第5講 濁った海は汚いのか？（鯉渕幸生）
第6講 人は森林とどう暮らすか？（田中 求）
第7講 スギは河川の生物にとって「悪者」か？（加賀谷隆）
III 他者とのかかわり
第8講 国際保健事業とどのようにかかわるべきか？（安田佳代）
第9講 災害に「強い」社会とは？（萩原久美子）
第10講 グリーン・ツーリズムは地域再生に役立つか？（大堀 研）
IV 展開される知
第11講 アジアの水は安全か？（小熊久美子）
第12講 新しいコンピューティング環境を創造できるか？（鵜坂智則）
第13講 都市の大気汚染はなぜ解決されないのか？（星子智美）
第14講 どうして水不足が生じるのか？（本多 了）

□「アジアでがんを生き延びる」科目の内容をまとめた図書を東京大学出版会から刊行
赤座英之・河原ノリエ編『アジアでがんを生き延びる—東京大学横断型講義—』
単行本：220 ページ、出版社：東京大学出版会（2013/4/24）
ISBN-10：413063402X、ISBN-13：978-4130634021

【内容】

感染症から非感染症へと疾病構造が変容するなか、アジアにおけるがんは急増している。医療のみならず、政治や経済、外交、文化などさまざまな課題と密接に関わるがんは、私たちはどのように向き合えばよいのか。東京大学「日本・アジア学」の講義を書籍化した。



【目次】

はじめに（赤座英之・河原ノリエ）

プロローグ アジアのがんを見据えたふたつのまなざし（赤座英之・河原ノリエ）

第 I 部 日本の医療の課題と展望

第 1 講 アジアのがんの特徴と今後の課題（垣添忠生）

第 2 講 医療制度の構図と日本の課題——日本型超高齢社会をいかに迎えるのか（辻哲夫）

第 3 講 PMDA の機能と改革について（近藤達也）

第 4 講 市場主義は医療にふさわしいのか（金子勝）

第 II 部 今、日本ができることとは

第 5 講 がん医療とアジア（西山正彦）

第 6 講 保健・医療分野における先導的成熟国家としての日本（武見敬三）

第 7 講 グローバルヘルスとがん（渋谷健司）

第 8 講 アジアとともに生きる——経済協力の次に日本が世界で貢献しうること（門間大吉）

第 III 部 新規医薬品開発の未来

第 9 講 アジアでの抗がん剤開発をめぐる状況と製薬企業のあり方（岩崎甫）

第 10 講 アジアにおける製薬企業の抗がん剤開発（野木森雅郁）

第 11 講 アジア諸国におけるオンコロジー——臨床開発における課題とチャンス（パスカル・リゴディ）

第 12 講 日本における抗がん剤の開発物語（寺田清）

第 IV 部 グローバリズムとナショナリズムの超克

第 13 講 がん撲滅はアジア諸国と日本の共通の連携基盤となるか（大滝義博）

第 14 講 アジア協調外交におけるリアリズム（趙世暎）

第 15 講 帰亜親欧——日中の関係をどのように築いていくか（加藤紘一）

第 V 部 がんと文化を考える

第 16 講 がんという文化（永六輔）

第 17 講 取材者として、がん患者として（鳥越俊太郎）

第 18 講 民間厚生省を目指して（大竹美喜）

エピローグ 講義を終えて——専門領域を超えて見えてくるがんの今日的課題
Cross-boundary Cancer Studies の地平を目指して（赤座英之・河原ノリエ）

- 「アジアでがんを生き延びる」科目の内容をまとめた図書を Oxford Univ. Press から刊行
Hideyuki Akaza and Norie Kawahara(eds),
Surviving Cancer in Asia: Cross-boundary Cancer Studies, The University of
Tokyo, Japan-Asia Studies Program2012-2013, Oxford University Press. 2014.
科目担当の赤座英之特任教授および河原ノリエ特任助教が中心に編集

- ASNET 後援のシンポジウムの内容をまとめた図書の刊行
Makoto Inoue and Ganesh Shivakoti, (eds),
Multi-level forest governance in Asia: Recognizing diversity. SAGE
Publications. (2015 年春出版予定)、約 700 頁、価格 1,691 円

■総合科目群開講一覧（2010 年度から 2014 年度） 資料(4) 過去 5 年間のシラバス
2010 年度 『日本・アジア学』総合科目群一覧

分野	科目名	担当教員
総論	第二次世界大戦後の日本の社会人文科学のアジア認識（多元世界解析演習Ⅱ）	古田元夫
	通文化研究基礎論Ⅰ	菅豊
	人間環境論Ⅳ	永田淳嗣
	サステナビリティの戦略Ⅱ	永田淳嗣
	アジア研究のフィールドワーク（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生
	書き直される中国近現代史（その3）（国際社会科学特別講義Ⅳ）	川島真
	中東の経済発展・政治変動と文化社会変容（通文化研究基礎論Ⅱ）	長澤栄治
	世俗化・宗教・国家（通文化研究基礎論Ⅱ）	羽田正
社会・文化論	グローバルヒストリーと南アジア（比較アジア社会文化論演習）	水島司
	東南アジア現代史（アジア史学特殊研究）	加納啓良
	アジア海域世界と世界史（比較アジア社会文化論特殊研究）	羽田正
	中国仏教文献講読（東アジア思想文化学特殊研究）	丘山新
	韓国朝鮮言語社会特殊研究（社会比較論）	本田洋
	韓国朝鮮言語社会特殊研究（文化比較論）	本田洋
	東アジアの王権と宗教（多分野交流演習）	小島毅
社会技術論	都市の再生学A	家田仁ほか
	都市の再生学B	家田仁ほか
	アジアの環境課題とリーダーシップB	小貫元治ほか
自然環境論	里山学総論	大黒俊哉他
	アジア自然共生論	大黒俊哉他
	健康から考える格差と発展（汎アジア経済論Ⅰ）	池本幸生
	少数民族の「貧困」と「開発」（汎アジア経済論Ⅱ）	池本幸生
	アジアの食と農・健康（農学国際特論Ⅲ）	井上真他
健康論	人類生態学特論Ⅰ	渡辺知保
	国際地域保健学特論Ⅰ	神馬征峰
	医療コミュニケーション学講義	木内貴弘他
	医療コミュニケーション学実習	木内貴弘他
	健康保険学（健康教育（職域・地域））	甲斐一郎他
	精神保健学Ⅰ（精神保健の疫学と第一次、第二次、第三次予防）	川上憲人他
	精神保健学Ⅱ	島津明人他
情報論	ITASIA 101 Introduction to Asian Studies: History and International Relations (Lecture)	Roger Smith、田中明彦
	文化・人間情報学特論Ⅰ	真鍋祐子
	韓国併合 1000 年と日米安保 50 年を再考する（学際情報学国際共同演習Ⅰ）	吉見俊哉、姜明求
特論	日中関係の多様な相貌（アジア経済）	丸川知雄他
	ポピュラーカルチャーと東アジア（教育人類学Ⅱ（国民国家とグローバル化）	白石さや

2011 年度 『日本・アジア学』総合科目群一覧

分野	科目名	担当教員
総論	アジアの環境研究の最前線（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生・卯田宗平
	人間環境論Ⅱ	永田淳嗣
	アジアでがんを生き延びる（地域文化研究特別講義Ⅱ）	赤座英之・河原ノリエ
	現代民俗学の可能性と課題（通文化研究基礎論Ⅰ）	菅豊
	中等の経済発展・政治変動と文化社会変容（通文化研究基礎論Ⅱ）	長澤榮治
	書き直される中国近現代史（その４）（国際社会科学特別講義Ⅳ）	川島真
	アジア研究のフィールドワーク（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生・卯田宗平
	サステナビリティの戦略Ⅱ	永田淳嗣
社会・文化論	世界史を考える（比較アジア社会文化論特殊研究）	羽田正
	東南アジア現代史（東南アジア地域歴史学演習）	加納啓良
	グローバル・ヒストリーと南アジア（比較アジア社会文化論演習）	水島司
	中国仏教文献講読（東アジア思想文化学特殊研究）	丘山新
	東アジアの王権と宗教（多分野交流演習）	小島毅
	上座仏教文献研究	馬場紀寿
	人類学と歴史：東アジア民族誌の諸課題Ⅰ（韓国朝鮮言語社会演習）	本田洋
	人類学と歴史：東アジア民族誌の諸課題Ⅱ（韓国朝鮮言語社会演習）	本田洋
社会技術論	国際プロジェクトの事例分析特論	堀井秀之
	アジアの環境課題とリーダーシップ（Ｂ）	小貫元治
	都市の持続再生学（Ａ）	家田仁ほか
	都市の持続再生学（Ｂ）	家田仁ほか
自然環境論	有機農業と持続可能な発展（汎アジア経済論Ⅲ）	池本幸生
	アマルティア・センの正義論（汎アジア経済論Ⅳ）	池本幸生
	アジアの食と農・環境（農学国際特論Ⅲ）	井上真
	里山学総論	大黒俊哉
	アジア自然共生論	大黒俊哉
健康論	国際地域保健学特論Ⅰ	神馬征峰
	精神保健学Ⅰ	川上憲人
	医療コミュニケーション学講義	木内貫弘
	医療コミュニケーション学実習	木内貫弘
	人類生態学特論Ⅰ	渡辺知保
	精神保健学Ⅱ	島津明人
	健康教育学 健康教育（国内、国際）	甲斐一郎
情報論	Introduction to Asian Studies: History and International Relations (ITASIA 101)	田中明彦
	文化・人間情報学特論Ⅰ	真鍋祐子
特論	日中関係の多面的な相貌（アジア経済）	丸川知雄
	ポピュラーカルチャーと東アジア（教育人類学Ⅱ—国民国家とグローバル化—）	白石さや

2012 年度 『日本・アジア学』総合科目群一覧

分野	科目名	担当教員
総論	アジアの環境研究の最前線（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生・卯田宗平
	アジア研究のフィールドワーク（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生・卯田宗平
	アジアでがんを生き延びる（地域文化研究特別講義Ⅱ）	赤座英之・河原ノリエ
	現代民俗学の可能性と課題（通文化研究基礎論Ⅰ）	菅豊
	中東の社会変容（通文化研究基礎論Ⅰ）	長澤栄治
	書き直される中国近現代史（その5）（国際社会科学特別講義Ⅳ）	川島真
	人間環境論Ⅱ（現代社会における社会－生態システム変動）	永田淳嗣
	サステナビリティの戦略Ⅱ（現代社会における社会－生態システム変動）	永田淳嗣
	第二次世界大戦後の日本のアジア認識（地域文化研究特殊研究Ⅰ）	古田元夫
	グローバルエコノミーとインドの開発と環境（地域文化特別講義Ⅰ）	水島司
社会・文化論	アジア海域世界と世界史（比較アジア社会文化論演習）	羽田正
	グローバルヒストリーとアジア（比較アジア社会文化論演習）	水島司
	社会比較論（韓国朝鮮言語社会特殊研究）	本田洋
	文化比較論（韓国朝鮮言語社会特殊研究）	本田洋
社会技術論	国際プロジェクトの事例分析特論	堀井秀之
	アジアの環境課題とリーダーシップ（B）	小貫元治
	都市の持続再生学（A）	工学系三専攻
	都市の持続再生学（B）	工学系三専攻
自然環境論	有機農業と持続可能な発展（汎アジア経済論Ⅰ）	池本幸生
	アマルティア・センの正義論（汎アジア経済論Ⅱ）	池本幸生
	アジア自然共生論	大黒俊哉
	里山学総論	大黒俊哉
	アジアの食と農・環境（農学国際特論Ⅱ／環境政策特別講義）	井上真
健康論	国際地域保健学特論Ⅰ	神馬征峰
	精神保健学Ⅰ	川上憲人
	精神保健学Ⅱ	島津明人
	医療コミュニケーション学講義	木内貴弘
	医療コミュニケーション学実習	木内貴弘
	Human EcologyⅠ	渡辺知保
	健康教育学 健康教育（国内、国際）	小林廉毅
情報論	Information, Technology, and Society in Asia（ITASIA 101）	松田康博
	文化・人間情報学特論Ⅰ	真鍋祐子
特論	日中関係（アジア経済）	丸川知雄
	教育人類学Ⅱ（比較教育学特殊研究）	白石さや

2013 年度 『日本・アジア学』総合科目群一覧

分野	科目名	担当教員
総論	中国を見る眼（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生・卯田宗平
	アジアのフィールドワーク論（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生・卯田宗平
	アジアでがんを生き延びる（地域文化研究特別講義Ⅱ）	赤座英之・河原ノリエ
	アジアでがんを生き延びる（地域文化研究特別講義Ⅱ）	赤座英之・河原ノリエ
	現代中国論—中国人眼的日本論—（地域文化研究特別講義Ⅱ）	池本幸生・卯田宗平
	現代民俗学の可能性と課題（通文化研究基礎論Ⅰ）	菅豊
	中東の経済発展・政治変動と文化社会変容（通文化研究基礎論Ⅱ）	長澤榮治
	途上国農村経済論（アジア太平洋文化交流論Ⅱ）	高橋昭雄
	途上国農村経済論（アジア太平洋文化交流論Ⅱ）	高橋昭雄
	明治維新期の日本（アジア太平洋地域文化演習Ⅰ）	三谷博
	明治維新期の日本Ⅱ（アジア太平洋地域文化演習Ⅰ）	三谷博
	朝鮮半島をめぐる政治経済・国際政治（多元地域協力論Ⅰ）	木宮正史
	人間環境論Ⅱ	永田淳嗣
	サステナビリティの戦略Ⅱ	永田淳嗣
	第二次世界大戦後の日本のアジア認識（地域文化研究特殊研究Ⅰ）	古田元夫
	戦後日本社会の形成と変容（アジア太平洋地域文化交流論Ⅱ）	外村大
	韓国社会論（アジア社会比較発展論Ⅱ）	有田伸
	書き直される中国近現代史（国際社会科学特別講義Ⅳ）	川島真
社会・文化論	アジア海域世界と世界史（比較アジア社会文化論演習）	羽田正
	民族誌と歴史（韓国朝鮮言語社会演習）	本田洋
	モダニティの民族誌（韓国朝鮮言語社会演習）	本田洋
社会技術論	都市の持続再生学（A）	工学系三専攻
	都市の持続再生学（B）	工学系三専攻
	国際プロジェクトの事例分析特論	堀井秀之
自然環境論	有機農業と持続可能な発展（汎アジア経済論Ⅲ）	池本幸生
	アマルティア・センの正義論（汎アジア経済論Ⅳ）	池本幸生
	アジアの食と農・環境（農学国際特論Ⅲ／環境政策特別講義）	井上真
	里山学概論	大黒俊哉
	アジア自然共生論	大黒俊哉
健康論	国際地域保健学特論Ⅰ	神馬征峰
	精神保健学Ⅰ	川上憲人
	精神保健学Ⅱ	島津明人
	医療コミュニケーション学講義	木内貴弘
	医療コミュニケーション学実習	木内貴弘
	Human EcologyⅠ	渡辺知保
	健康教育学	橋本英樹
情報論	Information, Technology, and Society in Asia（ITASIA 101）	松田康博
	文化・人間情報学特論Ⅰ	真鍋祐子
特論	アジア経済（日中関係）	丸川知雄

2014 年度 『日本・アジア学』総合科目群一覧

総論	中国を見る眼 2014（地域文化研究特別講義Ⅰ）	卯田宗平
	アジアのフィールドワーク論（地域文化研究特別講義Ⅱ）	卯田宗平
	アジアでがんを生き延びる（地域文化研究特別講義Ⅱ）	赤座英之・河原ノリエ
	中国の環境と人類学（地域文化研究特別講義Ⅱ）	卯田宗平
	現代民俗学の可能性と課題（通文化研究基礎論Ⅰ）	菅豊
	中東の経済発展・政治変動と文化社会変容（通文化研究基礎論Ⅱ）	長澤榮治
	途上国農村経済論（アジア太平洋文化交流論Ⅱ）	高橋昭雄
	明治維新期の日本（アジア太平洋文化演習Ⅱ）	三谷博
	明治維新期の日本Ⅱ（アジア太平洋文化演習Ⅱ）	三谷博
	朝鮮半島をめぐる政治経済・国際政治（多元地域協力論Ⅰ）	木宮正史
	人間環境論Ⅱ	永田淳嗣
	サステナビリティの戦略Ⅱ	永田淳嗣
	第二次世界大戦後の日本のアジア認識（地域文化研究特殊研究Ⅰ）	古田元夫
	戦後日本社会の形成と変容（アジア太平洋文化交流論Ⅰ）	外村大
	書き直される中国近現代史（7）（国際社会科学特別講義Ⅳ）	川島真
社会・文化論	世界史研究の方法（比較アジア社会文化論演習）	羽田正
	近代アジアの開発と社会変化（比較アジア社会文化論演習）	水島司
	グローバル・ヒストリーとアジア（アジア史学演習）	水島司
	社会比較論（韓国朝鮮言語社会特殊研究）	本田洋
	韓国の社会人類学（韓国朝鮮言語社会特殊研究）	本田洋
社会技術論	Advanced Lectures on Sociotechnology	HORII Hideyuki
	Case Studies of International Projects	HORII Hideyuki
自然環境論	有機農業と持続可能な発展（汎アジア経済Ⅰ）	池本幸生
	アマルティア・センの正義論（汎アジア経済論Ⅱ）	池本幸生
	アジアの食と農・環境（農学国際特論Ⅲ／環境政策特別講義）	井上真
	SATOYAMA 学特論（緑地創成学特論）	大黒俊哉
	国際地域保健学特論Ⅰ	神馬征峰
	精神保健学Ⅰ	川上憲人
	精神保健学Ⅱ	島津明人
	医療コミュニケーション学講義	木内貴弘
	医療コミュニケーション学演習	木内貴弘
	Human EcologyⅠ	渡辺知保
	健康教育学	橋本英樹
情報論	Introduction to Asian Studies: History and International Relations (ITASIA 101)	MATSUDA Yasuhiro
	International Politics in East Asia (ITASIA 121)	TANAKA Akihiko
	International Conflict Study (ITASIA 124)	FUJIWARA Kiichi
	Surviving Cancer in Asia (ITASIA 128)	AKAZA Hideyuki
	Understanding Asia and Japan through Hong Kong (ITASIA 129)	SONODA Shigeto
	Modern Japanese Diplomacy (ITASIA 131)	OSHIMA Shotaro

	Assimilation and Japanese Nationalism (ITASIA 132)	LEE Hyunsun
	Japanese Foreign Economic Policy (ITASIA 133)	IIDA Keisuke
	Understanding Taiwan and Japan in Global Settings (ITASIA 143)	SONODA Shigeto
	MindHacks: Organizing Knowledge, Resources and Research in the Internet Era (ITASIA 319)	Micheal SCHILTZ
	文化・人間情報学特論 I	真鍋祐子
特論	日中関係	丸川知雄

■言語科目群開講一覧（2010 年度から 2014 年度）

2010 年言語科目 開講科目（計 95 科目）

学部	科目名
文学部 14 科目	中国語前期(1)、中国語前期 (2)、中国語後期(1)、中国語後期 (2)、 ヒンディー語(1)、ヒンディー語(2)、韓国朝鮮語初級(1)、韓国朝鮮語初級(2)、 アラビア語(1)、アラビア語(2)、ペルシア語(1)、ペルシア語(2)、チベット語(1)、 チベット語(2)
教養学部 81 科目	日本語学Ⅰ、日本語学Ⅱ、中国語（初級）(1)、中国語（初級）(2)、中国語（初級）(3)、中国語（初級）(4)、中国語（中級会話）(5)、中国語（中級会話）(6)、中国語（中級講読）(5)、中国語（中級講読）(6)、中国語（中級講読）(7)、中国語（中級講読）(8)、中国語（中級作文）(5)、中国語（中級作文）(6)、中国語（中級作文）(7)、中国語（中級作文）(8)、中国語（上級会話）(5)、中国語（上級会話）(6)、中国語（上級講読）(5)、中国語（上級講読）(6)、中国語（上級作文）(5)、中国語（上級作文）(6)、中国語（初級表現演習）(3)、中国語（初級表現演習）(4)、中国語（中級表現演習）(1)、中国語（中級表現演習）(2)、韓国朝鮮語（初級）(1)、韓国朝鮮語（初級）(2)、韓国朝鮮語（中級講読）(1)、韓国朝鮮語（中級講読）(2)、韓国朝鮮語（上級講読）(1)、韓国朝鮮語（上級講読）(2)、韓国朝鮮語（中級作文）(1)、韓国朝鮮語（中級作文）(2)、韓国朝鮮語（初級会話）(1)、韓国朝鮮語（初級会話）(2)、韓国朝鮮語（中級会話）(3)、韓国朝鮮語（中級会話）(4)、韓国朝鮮語（上級作文）(1)、韓国朝鮮語（上級作文）(2)、アラビア語（初級）(1)、アラビア語（初級）(2)、アラビア語（中級）(1)、アラビア語（中級）(2)、アラビア語（会話）(1)、アラビア語（会話）(2)、ヒンディー語（初級）(1)、ヒンディー語（初級）(2)、ヒンディー語（中級）(1)、ヒンディー語（中級）(2)、マレー・インドネシア語（初級）(1)、マレー・インドネシア語（初級）(2)、マレー・インドネシア語（初級）(3)、マレー語（中級）(1)、マレー語（中級）(2)、ペルシア語(1)、ペルシア語(2)、シリア語(2)、ヘブライ語(1)、ヘブライ語(2)、ベトナム語（初級）(1)、ベトナム語（初級）(2)、ベトナム語（中級）(1)、ベトナム語（中級）(2)、トルコ語（初級）(1)、トルコ語（初級）(2)、トルコ語（中級）(1)、トルコ語（中級）(2)、上海語(1)、上海語(2)、台湾語(1)、台湾語(2)、サンスクリット語(1)、サンスクリット語(2)、タイ語(1)、タイ語(2)、モンゴル語（初級）(1)、モンゴル語（初級）(2)、モンゴル語(2)、モンゴル語（中級）(1)、モンゴル語（中級）(2)

2011 年言語科目 開講科目（計 107 科目）

学部	科目名
文学部 15 科目	中国語前期(1)、中国語前期(2)、中国語後期(1)、中国語後期(2)、ヒンディー語(1)、ヒンディー語(2)、韓国朝鮮語初級(1)、韓国朝鮮語初級(2)、韓国朝鮮語中級、アラビア語(1)、アラビア語(2)、ペルシア語(1)、ペルシア語(2)、チベット語(1)、チベット語(2)
教養学部 92 科目	中国語（初級）(1)、中国語（初級）(2)、中国語（初級）(3)、中国語（初級）(4)、中国語（中級会話）(1)、中国語（中級会話）(2)、中国語（中級会話）(3)、中国語（中級会話）(4)、中国語（中級会話）(5)、中国語（中級会話）(6)、中国語（中級講読）(1)、中国語（中級講読）(2)、中国語（中級講読）(3)、中国語（中級講読）(4)、中国語（中級講読）(5)、中国語（中級作文）(1)、中国語（中級作文）(2)、中国語（中級作文）(3)、中国語（中級作文）(4)、中国語（上級会話）(1)、中国語（上級会話）(2)、中国語（上級講読）(1)、中国語（上級講読）(2)、中国語（上級講読）(3)、中国語（上級講読）(4)、中国語（上級作文）(1)、中国語（上級作文）(2)、

	中国語（中級表現演習）(3)、中国語（中級表現演習）(4)、中国語（初級）(5)、中国語（初級）(6)、中国語（初級）(7)、中国語（初級）(8)、中国語（初級会話）(1)、中国語（初級会話）(2)、中国語（初級作文）(1)、中国語（初級作文）(2)、韓国朝鮮語（初級）(3)、韓国朝鮮語（初級）(4)、韓国朝鮮語（中級講読）(3)、韓国朝鮮語（中級講読）(4)、韓国朝鮮語（上級講読）(3)、韓国朝鮮語（上級講読）(4)、韓国朝鮮語（中級作文）(3)、韓国朝鮮語（中級作文）(4)、韓国朝鮮語（初級会話）(3)、韓国朝鮮語（初級会話）(4)、韓国朝鮮語（中級会話）(5)、韓国朝鮮語（中級会話）(6)、韓国朝鮮語（上級作文）(3)、韓国朝鮮語（上級作文）(4)、アラビア語（初級）(3)、アラビア語（初級）(4)、アラビア語（中級）(3)、アラビア語（中級）(4)、アラビア語（会話）(3)、アラビア語（会話）(4)、ヒンディー語（初級）(3)、ヒンディー語（初級）(4)、ヒンディー語（中級）(3)、ヒンディー語（中級）(4)、ペルシア語(3)、ペルシア語(4)、シリア語(4)、ヘブライ語(3)、ヘブライ語(4)、ベトナム語（中級）(3)、ベトナム語（中級）(4)、トルコ語（初級）(3)、トルコ語（初級）(4)、トルコ語（中級）(3)、トルコ語（中級）(4)、広東語（初級）(3)、広東語（中級）(3)、上海語(3)、上海語(4)、サンスクリット語(3)、サンスクリット語(4)、タイ語(3)、タイ語(4)、モンゴル語（初級）(3)、モンゴル語（初級）(4)、モンゴル語（中級）(3)、モンゴル語（中級）(4)、インドネシア語（中級）(3)、インドネシア語（中級）(4)、インドネシア語（初級）(3)、インドネシア語（初級）(4)
--	---

2012 年言語科目 開講科目（計 99 科目）

学部	科目名
文学部 15 科目	中国語前期(1)、中国語前期(2)、中国語後期(1)、中国語後期(2)、韓国朝鮮語初級(1)、韓国朝鮮語初級(2)、韓国朝鮮語中級、アラビア語(1)、アラビア語(2)、ヒンディー語(1)、ヒンディー語(2)、ペルシア語(1)、ペルシア語(2)、チベット語(1)、チベット語(2)
教養学部 84 科目	中国語（中級会話）(7)、中国語（中級会話）(8)、中国語（中級会話）(9)、中国語（中級講読）(7)、中国語（中級作文）(5)、中国語（中級作文）(6)、中国語（上級講読）(5)、中国語（上級講読）(6)、中国語（上級作文）(5)、中国語（初級作文）(3)、中国語（初級）(9)、中国語（初級）(10)、中国語（初級）(11)、中国語（初級）(12)、韓国朝鮮語（初級）(1)、韓国朝鮮語（上級講読）(1)、韓国朝鮮語（中級作文）(1)、韓国朝鮮語（初級会話）(1)、韓国朝鮮語（中級会話）(1)、韓国朝鮮語（中級会話）(2)、韓国朝鮮語（上級作文）(1)、アラビア語（初級）(1)、アラビア語（中級）(1)、アラビア語（会話）(1)、ヒンディー語（初級）(1)、ヒンディー語（中級）(1)、ペルシア語(1)、ヘブライ語(1)、ベトナム語（初級）(1)、ベトナム語（中級）(1)、トルコ語（初級）(1)、トルコ語（中級）(1)、広東語（初級）(1)、上海語(1)、台湾語(1)、サンスクリット語(1)、タイ語(1)、モンゴル語（初級）(1)、モンゴル語（中級）(1)、インドネシア語（中級）(1)、インドネシア語（初級）(1)、共通中国語(2)、共通中国語(4)、共通中国語(6)、共通中国語(8)、共通中国語(10)、共通中国語(12)、共通中国語(14)、共通中国語(16)、共通中国語(18)、共通中国語(20)、共通中国語(22)、共通中国語(24)、共通韓国朝鮮語(2)、共通韓国朝鮮語(4)、共通韓国朝鮮語(6)、共通韓国朝鮮語(8)、共通韓国朝鮮語(10)、共通アラビア語(2)、共通アラビア語(4)、共通アラビア語(6)、共通ギリシア語(2)、ヒンディー語(2)、ヒンディー語(4)、ベトナム語(2)、ベトナム語(4)、トルコ語(2)、トルコ語(4)、広東語(2)、インドネシア語(2)、インドネシア語(4)、上海語(2)、台湾語(2)、タイ語(2)、モンゴル語(2)、ペルシア語(2)、ヘブライ語(2)、サンスクリット語(2)、専門韓国朝鮮語(1)、専門韓国朝鮮語(2)、専門アラビア語(1)、専門中国語、専門中国語

2013 年言語科目 開講科目（計 112 科目）

学部	科目名
文学部 12 科目	中国語前期(1)、中国語前期(2)、中国語後期(1)、中国語後期(2)、韓国朝鮮語初級(1)、韓国朝鮮語中級、アラビア語(1)、アラビア語(2)、ペルシア語(1)、ペルシア語(2)、チベット語(1)、チベット語(2)
教養学部 100 科目	共通中国語(25)(文法)、共通中国語(26)(文法)、共通中国語(27)(作文)(初級)、共通中国語(28)(作文)(初級)、共通中国語(29)(作文)(中級)、共通中国語(30)(作文)(中級)、共通中国語(31)(作文)(中級)、共通中国語(32)(作文)、共通中国語(33)(作文)(上級)、共通中国語(34)(作文)(上級)、共通中国語(35)(会話)(初級)、共通中国語(36)(会話)(初級)、共通中国語(37)(会話)(中級)、共通中国語(38)(会話)(中級)、共通中国語(39)(会話)(中級)、共通中国語(40)(会話)(中級)、共通中国語(41)(会話)(上級)、共通中国語(42)(会話)(中級)、共通中国語(43)(精読)(中級)、共通中国語(44)(精読)(中級)、共通中国語(45)(精読)(上級)、共通中国語(46)(精読)(上級)、共通中国語(47)(精読)(上級)、共通中国語(48)(精読)(上級)、共通韓国朝鮮語(11)(文法)、共通韓国朝鮮語(12)(文法)、共通韓国朝鮮語(13)(作文)、共通韓国朝鮮語(14)(作文)、共通韓国朝鮮語(15)(会話)、共通韓国朝鮮語(16)(会話)、共通韓国朝鮮語(17)(精読)、共通韓国朝鮮語(18)、共通韓国朝鮮語(19)、共通韓国朝鮮語(20)、共通アラビア語(7)(初級)、共通アラビア語(8)、共通アラビア語(9)(中級)、共通アラビア語(10)、共通アラビア語(11)、共通アラビア語(12)、共通ギリシア語(3)、共通ギリシア語(4)、共通ラテン語(3)、共通ラテン語(4)、セルビア・クロアチア語(5)(初級)、セルビア・クロアチア語(6)(初級)、セルビア・クロアチア語(7)(中級)、セルビア・クロアチア語(8)(中級)、ポーランド語(5)、(初級)ポーランド語(6)(初級)、ポーランド語(7)(中級)、ポーランド語(8)(中級)、ヒンディー語(5)(初級)、ヒンディー語(6)(初級)、ヒンディー語(7)(中級)、ヒンディー語(8)(中級)、ベトナム語(5)(初級)、ベトナム語(6)(初級)、ベトナム語(7)(中級)、ベトナム語(8)(中級)、トルコ語(5)(初級)トルコ語(6)(初級)、トルコ語(7)(中級)、トルコ語(8)(中級)、広東語(3)(初級)、広東語(4)(初級)、インドネシア語(5)(初級)、インドネシア語(6)(初級)、インドネシア語(7)(中級)、インドネシア語(8)(中級)、上海語(3)(初級)、上海語(4)(初級)、台湾語(3)(初級)、台湾語(4)(初級)、タイ語(3)、タイ語(4)、モンゴル語(3)(初級)、モンゴル語(4)(中級)、モンゴル語(4)(初級)、ペルシア語(3)、ペルシア語(4)、ヘブライ語(3)、ヘブライ語(4)、サンスクリット語(3)、サンスクリット語(4)、シリア語(4)、専門中国語(3)、専門中国語(4)、専門中国語(5)、専門中国語(6)、専門韓国朝鮮語(3)、専門韓国朝鮮語(4)、専門韓国朝鮮語(5)、専門アラビア語(2)、専門ギリシア語(2)、専門ギリシア語(3)、専門ラテン語(2)、専門ラテン語(3)

2014 年言語科目 開講科目（計 100 科目）

学部	科目名
文学部 15 科目	中国語前期(1)、中国語前期(2)、中国語後期(1)、中国語後期(2)、ヒンディー語(1)、ヒンディー語(2)、韓国朝鮮語初級(1)、韓国朝鮮語初級(2)、韓国朝鮮語中級、アラビア語(1)、アラビア語(2)、ペルシア語(1)、ペルシア語(2)、チベット語(1)、チベット語(2)

教養学部 85 科目	共通中国語(1)(初級文法)、共通中国語(2)(初級会話)、共通中国語(3)(中級講読)、共通中国語(4)(中級講読)、共通中国語(5)(中級講読)、共通中国語(6)(中級講読)、共通中国語(7)(中級会話)、共通中国語(8)(中級会話)、共通中国語(9)(中級会話)(PEAK 中級)、共通中国語(10)(中級会話)(PEAK 中級)、共通中国語(11)(中級会話)、共通中国語(12)(中級作文)、共通中国語(13)(中級作文)、共通中国語(14)(中級作文)、共通中国語(15)(上級講読)、共通中国語(16)(上級講読)、共通中国語(17)(上級講読)、共通中国語(18)(上級講読)、共通中国語(19)(上級会話)、共通中国語(20)(上級会話)、共通中国語(21)(上級作文)、共通中国語(22)(上級作文)、共通中国語(23)(上級講読)、共通中国語(24)(中級文法)、共通中国語(49)(PEAK 初級)、共通中国語(50)(PEAK 初級)、共通韓国朝鮮語(1)、共通韓国朝鮮語(2)、共通韓国朝鮮語(3)、共通韓国朝鮮語(4)、共通韓国朝鮮語(5)(PEAK 中級)、共通韓国朝鮮語(6)(PEAK 中級)、共通韓国朝鮮語(7)、共通韓国朝鮮語(8)、共通韓国朝鮮語(9)、共通韓国朝鮮語(10)、共通韓国朝鮮語(21)(PEAK 初級)、共通韓国朝鮮語(22)(PEAK 初級)、共通アラビア語(1)、共通アラビア語(2)、共通アラビア語(3)、共通アラビア語(4)、共通アラビア語(5)、共通アラビア語(6)、ヒンディー語(1)、ヒンディー語(2)、ヒンディー語(3)、ヒンディー語(4)、ベトナム語(1)、ベトナム語(2)、ベトナム語(3)、ベトナム語(4)、トルコ語(1)、トルコ語(2)、トルコ語(3)、トルコ語(4)、広東語(1)(初級)、広東語(2)(中級)、広東語(3)(中級)、広東語(4)(初級)、インドネシア語(1)、インドネシア語(2)、インドネシア語(3)、インドネシア語(4)、上海語(1)(初級)、上海語(2)(初級)、台湾語(1)(初級)、台湾語(2)(初級)、タイ語(1)、タイ語(2)、モンゴル語(1)、モンゴル語(2)、ペルシア語(1)、ペルシア語(2)、ヘブライ語(1)、ヘブライ語(2)、サンスクリット語(1)、サンスクリット語(2)、シリア語(2)、専門中国語(7)、専門中国語(8)、専門韓国朝鮮語(6)、専門韓国朝鮮語(7)、専門韓国朝鮮語(8)、専門アラビア語(3)
--------------------------	--

2-2, 学部生向け『日本・アジア学概論』

〔講義題目〕「日本・アジア学概論Ⅲ：国際社会で活躍する基盤を身に付ける」

〔趣旨〕本講義は ASNET に参画する教員による「日本・アジア学」の概論と位置づけられる。様々な視点からアジアを切り取る方法論や知識を学ぶことにより、日本・アジア学の魅力を体験し、国際社会で活躍するためにどのような知識・能力・スキルが必要となるのかを理解する。

〔責任教員〕古田元夫（総合文化研究科・教授）

〔参加教員〕大木康（東洋文化研究所）、堀井秀之（工学系研究科）、
池本幸生（東洋文化研究所）、加藤浩徳（工学系研究科）、
井上真（農学生命科学研究科）、永田淳嗣（総合文化研究科）、
福士謙介（サステナビリティ学連携研究機構）、卯田宗平（ASNET）

〔開講日〕月曜日 1 限（9：00－10：30）

〔授業の目的、概要〕

わが国の国内経済は曲がり角を迎え、多方面で構造改革が叫ばれている。一方で国境の垣根はますます低くなり、世界標準（グローバルスタンダード）が押し寄せてくるとともに、環境問題のように地球全体で取り組むべき課題も山積している。これからは、国際社会で活躍できる人材が求められている。

近年、アジアの成長は目覚ましく、アジアにおける経済、政治、技術、環境など各動向は、国際社会全体を大きく左右する。すなわち、アジアを学ぶことは国際社会で活躍するために不可欠である。

本講義は、本学の「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)」に参画する教員による日本・アジア学の概論と位置づけられる。様々な視点からアジアを切り取る方法論や知識を学ぶことにより、日本・アジア学の魅力を体験し、国際社会で活躍するためにどのような知識・能力・スキルが必要となるのかを理解する。

〔授業計画〕（2014 年度分）

第 1 回「日本・アジア学入門」

（大木康教授、東洋文化研究所・堀井秀之教授、工学系研究科社会基盤学専攻）

講義の前半は大木が担当し、専門の中国文学の立場から、「日本・アジア」がなぜ重要なのか？日本・アジアに注目すると、何が見え、何が分かるのか？といった日本・アジア学に関わるいくつかの基本的な問いに答えながら、日本・アジア学が持つ学問的な意味と可能性について解説する。また、講義の後半は堀井が担当し、次回以後の授業の進め方を具体的に説明する。

第 2・3 回「タイ高速道路 BOT 事業における紛争のケース その 1・その 2」

（堀井秀之教授、工学系研究科社会基盤学専攻）

1990 年代前半にタイ・バンコクで起こった「第二高速道路」に関わる争議を取り上げ、国際プロジェクトに関わる知識、問題分析方法・能力、問題解決策立案方法・能力を習得する。「第二高速道路」は、タイ政府と日本の熊谷組との間で締結された BOT 契約事業として計画されが、タイ政府との間で争議が発生した。(1) この紛争はどのようなプロセスをたどったのか、(2) 海外の企業が現地（途上国）で事業を行う際にどのようなリスクが存在しているのか、(3) そうしたリスクはどのように避けるべきか、(4) そもそも高速道路事業という公共事業を BOT 事業とすることが適切なのか、といったことを考えながら、(5) どのような解決が可能かを議論する。

第 4 回「タイにおける制度の柔構造」

(池本幸生教授、東洋文化研究所)

タイ社会は「柔構造」だと言われてきた。実は、制度も「柔構造」であり、人間関係によって大きく左右される。1990 年代前半にタイ・バンコクで起こった「第二高速道路」に関わる争議は、そのことを典型的に示している。BOT 契約事業として始まったものの、実際に運用の段階に移ると、契約は反故にされ、結局、タイ側に都合の良い方向に展開していった。タイ人にとって、契約も法律も憲法さえも絶対的なものではなく、自らの利益に適うように柔軟に変えうるものである。そこがタイの「柔構造」のしたたかさである。

第 5・6 回「インドネシアの環境と開発—カリマンタンの森林開発を巡る諸問題」

(井上真教授、農学生命科学研究科)

かつて森と川の世界であったカリマンタン (Indonesian Borneo) では、先住民族ダヤック人が焼畑農業、狩猟採集、川での漁労、外部世界との交易によって生計を営んでいた。このような人々の生活と環境は、1970 年代以降の「木材革命」、「合板革命」、「造林革命」などにより大きく変化した。そして森林が劣化した 2000 年代中頃から活発になってきたのが、アブラヤシ農園開発と石炭開発（露天掘り）である。バイオ燃料原料としての活用も視野に入れたアブラヤシ農園開発は、人々のライフスタイルを決定的に変えることになる。第 5 回ではこのような歴史的変遷を解説したうえで、受講者たちを主要な利害関係者（先住民、企業、行政、環境団体）ごとにグループ分けする。そして、第 6 回ではグループごとに PPT を使用した発表および質疑応答を行う。最後は日本の一消費者としてどう考えるべきか一人一人に意見を発表してもらい、議論する。

第 7 回「インドネシアの資源開発と社会変動・地域社会」

(永田淳嗣准教授、総合文化研究科)

インドネシアのスマトラ島中部では、過去 30 年間にアブラヤシ農園部門が急激な拡大をみせ、地域の生態環境を一変させると同時に、地域の社会・経済に深い影響を与えている。しかし同部門の拡大の過程をつぶさに観察すると、インドネシアの政治社会変動や、土地資源の現実的な制約と連動しながら、開発のスタイルを変え、複雑な過程を経て今日の状況に至っていることがわかる。本講義では、インドネシア外島部の資源開発と社会変動に関わる諸問題を、州レベルの空間的範囲を視野に入れながら、地域社会の側に焦点を当てつつ読み解く方法論を提示したい。

第 8・9 回「ベトナム（ハノイ）の都市開発問題に関するケーススタディの講義 その 1・その 2」

(加藤浩徳准教授、工学系研究科社会基盤学専攻)

ハノイ市の中心に位置する旧市街地である Ancient Quarter と呼ばれる地域は有名な観光スポットであるとともに、古くから商業のまちとして栄えてきた。ところが、外部訪問者の増加や新たな商業活動の参入によって、交通渋滞が深刻化し、また、既存の歴史的建造物の破壊などの問題も発生している。商業地、観光地、地元住民の生活の場という性格をあわせもつこの地区の発展を、どのように方向付けるのが望ましいのかについては、多くの議論や提案がなされてきているが、ここでは、JICA が 2007 年に発表した計画調査の内容をもとに、(1)Ancient Quarter 地域で発生している問題の構造を整理し、(2)多様なステークホルダーの問題構造認識を分析した上で、(3)JICA の提案する解決案を実現するための方策を検討・提案する。

第 10 回「ベトナム社会論—異質の併存と下からのイニシアティヴ」

(古田元夫教授、総合文化研究科)

少し前のハノイでは、都市計画による立ち退きを拒否して、大きな道路の進路に立ちふさがる民家を、よく見かけた。社会主義体制をとるベトナムは、「上からの統制」がよくきいた社会と思われがちだが、実際には、「下々の意思」や「下からのイニシアティヴ」が重要な役割を果たしている社会である。ベトナム社会の特徴を「異質の併存」と「下からのイニシアティヴ」という角度から検討する。

第 11 回「途上国における環境汚染とその対策－中国の都市近郊農業を例に

(福士謙介准教授、サステイナビリティ学連携研究機構／工学系研究科都市工学専攻)

発展途上国の工業化で重要な役割を果たす軽工業の中には比較的環境負荷の低い物から、鍍金、金属加工、薬品、廃棄物処理等の有害物質を環境中に排出する可能性のあるものも多く存在する。資金的問題、有害性に関する認識不足、法の遵守の問題等から環境中に汚染物質が排出される例は少なくない。雨量の少ない中国の華北地域では、排水を農地に利用しているが、そこには、家庭排水に加えて、分散的に発展した重金属類などの有害物質を出す工場などからも排水が流れ込む。都市周辺の農地は重金属の蓄積が観察され、農業に影響が出ている。しかし、急速に発展する中国経済は市民の意識も変え、環境の保全、食料の安全に対する意識の高まりはこのような状況を看過しない。本講義では中国天津市周辺における事例を題材に、このような環境汚染、食料生産の問題を考え最終的には華北地域における都市周辺農業の運営を考えていきたい。

第 12 回「中国の環境・開発・保全を理解するコツ」

(卯田宗平特任講師、日本・アジアに関する教育研究ネットワーク)

天津市における工業排水の事例を踏まえ、天津市に代表される開発区で環境問題が発生する背景を、中国の政治体制や環境政策、中国人の考え方から考える。まず、中国のどのような場所でどのような環境問題が起こりやすいのかを概観する。その後、地域開発が推進され、継続される理由を政績制度や融資プラットフォームといった日本ではあまり聞き慣れないシステムから考える。そして、中国の環境問題の解決に向けた道筋を、湖南省洞庭湖の水質改善政策や北京オリンピックの際の大気汚染対策、首都の水不足を解決する南水北調プロジェクトの事例から検討する。最後に、中国人の環境や発展に対する考え方とその変化を考察する。

第 13 回「中国の事例をめぐる発表と討論」

(福士謙介准教授、卯田宗平特任講師)

第 11、12 回の授業を踏まえて、まず中国における環境汚染の現状とそれを引き起こすファクター、解決策をグループ（または個人）で考え、図示する。そして、各グループがまとめた問題の構造図を授業中に発表し、その内容に関してほかの学生や教員も含めて議論する。詳しくは授業中に説明する。

【授業の方法】

1 回目の概括的な講義以降は、タイ、ベトナム、インドネシア、中国 4 か国のケースを取り上げ、まず各地で国際プロジェクトや開発、経済発展が引き起こしている具体的な問題を紹介し、それをどのように分析するのか、どのような解決方法がありうるのかを、可能であればグループに分かれて分析、討論する。そののち、これらの国を地域研究の対象としている教員により、こうしたケースの背景にあるそれぞれの社会の歴史的変遷や現在直面している問題を解説する講義を行う。参考書・資料は授業ごとに紹介する。

〔成績評価方法〕

授業で取り上げる４か国のうちから２か国を選んで、指定された課題に関するレポートを提出する。
これに出席点を加味して成績評価を行う。

〔履修状況〕

2011年度 履修登録：36名（文23名、理13名）、単位取得：20名（文12名、理8名）
2012年度 履修登録：46名（文40名、理6名）、単位取得：40名（文37名、理3名）
2013年度 履修登録：27名（文21名、理6名）、単位取得：24名（文19名、理5名）
2014年度 履修登録：31名（文22名、理9名）、単位取得：18名（文15名、理3名）

3. 研究・交流活動

3. 研究・交流活動

3-1, 東文研・ASNET 共催セミナーの開催

○趣旨：アジア研究に携わる東京大学の若手研究者に発表の場を提供する

○日時・場所：毎週木曜日、東京大学東洋文化研究所、17 時～18 時

□共催セミナー開催記録

資料(6) 共催セミナーのポスター

回	年月日	発表者名（所属）、発表タイトル
第 1 回	2010 年 5 月 19 日	金 氣興（日本学術振興会・外国人特別研究員） 「持続可能な開発における有機農業の役割—日本と韓国を中心に—」
第 2 回	2010 年 5 月 27 日	吉田真吾（日本学術振興会・特別研究員） 「日米同盟の制度化」
第 3 回	2010 年 6 月 3 日	池本幸生（東洋文化研究所・教授） 「健康と幸福と不平等」
第 4 回	2010 年 6 月 10 日	池本幸生（東洋文化研究所・教授） 「コーヒー豆の不平等—ベトナム・コーヒーの美味しい飲み方—」
第 5 回	2010 年 6 月 17 日	古澤拓郎（ASNET・特任准教授） 「人間の健康の生態学—地域研究から—」
第 6 回	2010 年 6 月 24 日	後藤絵美（日本学術振興会・特別研究員） 「イスラームの女性観—男女の優劣をめぐる啓示解釈を中心に—」
第 7 回	2010 年 7 月 1 日	鶴飼敦子（東洋文化研究所・特任研究員） 「エミール・ガレと『オリエント』」
第 8 回	2010 年 7 月 8 日	大川謙作（日本学術振興会・特別研究員） 「現代チベット研究と代替民族誌の問題」
第 9 回	2010 年 8 月 19 日	菅 豊（東洋文化研究所・教授） 「私が牛を買った理由—『実践』研究の自己へのインパクトに関する再帰的研究」
第 10 回	2010 年 9 月 2 日	安田佳代（東洋文化研究所・助教） 「戦間期東アジアにおける国際衛生事業」
第 11 回	2010 年 9 月 9 日	荻谷康太（日本学術振興会・特別研究員） 「溶け合うアラビア語詩の形—西アジアから西アフリカへと広がる広域知的連関網—」
第 12 回	2010 年 9 月 16 日	Sylvie Beaud（東洋文化研究所・外国人研究員/パリ第 10 大学人類学科博士課程） 「Being Han in a Multi-Ethnic Region of the People's Republic of China: An Anthropological Perspective on the Inhabitants of Yangzong Valley, Yunnan Province」
第 13 回	2010 年 9 月 30 日	藤波伸嘉（日本学術振興会・特別研究員） 「オスマン立憲政の諸問題—比較史の観点から—」
第 14 回	2010 年 10 月 7 日	内藤まりこ（日本学術振興会・特別研究員） 「文学の逆遠近法—比較という方法の可能性—」
第 15 回	2010 年 10 月 14 日	小西公大（日本学術振興会・特別研究員） 「"Folk Music"が生み出される時—インド北西部における芸能集団をめぐる現状とモダニティの諸相—」

第 16 回	2010 年 10 月 21 日	阿部尚史（東京大学グローバル COE・特任研究員） 「ファトフアリー・ハーン之母、妻、嫁—19 世紀イランの地方有力者の『家』と女性—」
第 17 回	2010 年 10 月 28 日	嶺崎寛子（日本学術振興会・特別研究員） 「法・正義概念の再審理にむけて—イスラーム言説の利用にかかる女性の日常実践を事例に—」
第 18 回	2010 年 11 月 11 日	卯田宗平（日本学術振興会・特別研究員） 「環境史研究の可能性—生業技術からみるミクロな人間－環境系—」
第 19 回	2010 年 11 月 25 日	王智弘（東洋文化研究所・特任研究員） 「小産地の資源論—屋久島のかつお節製造業の消長と日本の天然資源政策—」
第 20 回	2010 年 12 月 2 日	金 銀眞（東洋文化研究所・訪問研究員） 「(ソウル) パゴダ公園の誕生及び変容とその都市史的意義」
第 21 回	2010 年 12 月 9 日	大野公賀（東洋文化研究所・特任准教授） 「立達学園と開明書店—民国期知識人グループの一例として—」
第 22 回	2010 年 12 月 16 日	池本幸生（東洋文化研究所・教授） 「ベトナム・フィールドワーク実習を終えて」
第 23 回	2011 年 1 月 13 日	ミヒャエル・ブルチャー（東洋文化研究所・准教授） 「政治と言葉—中江兆民《日本に哲学なし》再考—」
第 24 回	2011 年 1 月 20 日	名和克郎（東洋文化研究所・准教授） 「意味への収斂とその外部—ランの葬送儀礼の変容をめぐる—」
第 25 回	2011 年 1 月 27 日	馬場紀寿（東洋文化研究所・准教授） 「お経を『聴く』—アジア各地の聖なる歌—」
第 26 回	2011 年 2 月 3 日	鈴木英明（日本学術振興会・特別研究員） 「生業・移動のリズムの連動と物質文化の類似性から浮かび上がるインド洋西海域世界—新しい世界史へ向けて—」
第 27 回	2011 年 2 月 10 日	伊藤未帆（日本学術振興会・特別研究員） 「民族寄宿学校と『少数民族』—現代ベトナムにおける地方のイニシアティブと人々の認識—」
第 28 回	2011 年 4 月 28 日	森本一夫（東洋文化研究所・准教授） 「普林斯顿修行生活顛末」
第 29 回	2011 年 5 月 26 日	塚原伸治（日本学術振興会・特別研究員） 「経営戦略における伝統の拘束性—『老舗』をめぐる経営文化論—」
第 30 回	2011 年 6 月 2 日	湯川 拓（日本学術振興会・特別研究員） 「東南アジア国際関係における規範をどのように理解するか？—外交当事者の見る ASEAN と研究者の見る ASEAN—」
第 31 回	2011 年 6 月 23 日	金 氣興（日本学術振興会・特別研究員） 「地域に根ざす有機農業—日本と韓国の経験—」
第 32 回	2011 年 6 月 30 日	後藤絵美（日本学術振興会・特別研究員） 「自発的なヴェール着用をどう読み解くか—夢に関する『語り』からの一考察—」
第 33 回	2011 年 7 月 7 日	渡邊祥子（日本学術振興会・特別研究員） 「国家と対峙する宗教—アルジェリア・ウラマー協会におけるイスラームと政治—」

第 34 回	2011 年 9 月 1 日	諫早庸一（日本学術振興会・特別研究員） 「イランにおける「新天文学」の受容—19 世紀ペルシア語天文書『形象学訳稿 Tarjome-ye Hei' at』を中心に—」
第 35 回	2011 年 9 月 15 日	鵜飼敦子（東洋文化研究所・特任研究員） 「ジャポニズムかアジアニズムか—異文化交渉史研究の再考—」
第 36 回	2011 年 9 月 22 日	平位 匡（日本学術振興会・特別研究員） 「人間開発アプローチの有効性と課題—客観的幸福指標の可能性—」
第 37 回	2011 年 10 月 6 日	嶺崎寛子（日本学術振興会・特別研究員） 「自己承認と宗教をめぐる試論—「イスラーム電話」の電話相談を事例として—」
第 38 回	2011 年 10 月 20 日	古井龍介（東洋文化研究所・准教授） 「碑文から何を読み取れるの？ —3 点のバーラ期碑文を例に—」
第 39 回	2011 年 11 月 10 日	Ji Meng（東洋文化研究所・訪問研究員） 「A corpus-based sociolinguistic study of early modern Chinese scientific translations」
第 40 回	2011 年 11 月 17 日	松田康博（東洋文化研究所・准教授） 「イエール大学の一年間—研究・教育・戦略の再構築—」
第 41 回	2011 年 12 月 1 日	池本幸生（東洋文化研究所・教授） 「アマルティア・センの『正義のアイデア』」
第 42 回	2011 年 12 月 8 日	佐藤仁（東洋文化研究所・准教授） 「資源統治と国家権力—明治日本とシャム（タイ）の比較から—」
第 43 回	2012 年 1 月 26 日	鎌田陽司（NPO 法人懐かしい未来・代表理事） 「ドキュメンタリー映画を見る（第 1 弾）—『懐かしい未来：ラダックから学ぶ』」
第 44 回	2012 年 2 月 9 日	笠原眞弓（国際有機農業映画祭・運営委員） 「ドキュメンタリー映画を見る（第 2 弾）—『それでも種をまく』—」
第 45 回	2012 年 3 月 1 日	藤波伸嘉（大学院総合文化研究科・特任助教） 「オスマン帝国と立憲政」
第 46 回	2012 年 3 月 8 日	大森信治郎（石巻専修大学経営学部・特命教授） 「復興支援ツーリズムの可能性」
第 47 回	2012 年 4 月 12 日	鶴見太郎（東京大学／明治学院大学・非常勤講師） 「ロシア帝国のユダヤ人がパレスチナを志向したとき」
第 48 回	2012 年 5 月 10 日	Seiji Shirane（プリンストン大学・博士課程） 「Monitoring Cross-Straits Information: Japanese Censorship of Chinese-Language Publications in Colonial Taiwan」
第 49 回	2012 年 5 月 17 日	Yuanhong Wang/ 王 元崇（コーネル大学・博士課程） 「“The Chosŏn Model” and the Reconstruction of “the Heavenly Dynasty” of the Qing, 1637-1761」
第 50 回	2012 年 5 月 24 日	寺田悠紀（日本学術振興会・特別研究員） 「イランにおける現代美術—美術館が映し出す継続性—」
第 51 回	202 年 5 月 31 日	荻谷康太（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教） 「アラビア語著作から読み解く西アフリカのイスラーム」

第 52 回	2012 年 6 月 7 日	Sylvie Beaud (Doctorante en ethnologie Université Paris Ouest Nanterre-La Défense Laboratoire d' ethnologie et de sociologie comparative (UMR 7186, CNRS) Research fellow, Institut de recherche de la Maison franco-japonaise (Tokyo)) 「 The sociological context at the origins of the Guan Suo Opera in nineteenth century Yunnan (China)」
第 53 回	2012 年 6 月 14 日	中村晋一郎 (生産技術研究所・特任助教) 「36 答申にみる都市河川廃止論」
第 54 回	2012 年 6 月 21 日	鈴木啓之 (日本学術振興会・特別研究員) 「抗う市長—パレスチナ被占領地における抵抗運動の一局—」
第 55 回	2012 年 6 月 28 日	アンドリュー・コック／Andrew Cock (東洋文化研究所・訪問研究員) 「The Cambodian System of Capitalism(カンボジアの資本主義システム)」
第 56 回	2012 年 7 月 5 日	宋 声泉／Song Shengquan (東洋文化研究所・訪問研究員) 「 The Literary Circles of the Early Republican Period and Literature Revolution : A Case Study of the Emergence of Chinese Women's Fiction ” (民初文壇与文学革命—从中国女性小说创作的发生谈起—)」
第 57 回	2012 年 10 月 11 日	Thomas Wilkins (東洋文化研究所・訪問研究員) 「Korean Unification and the Future of Regional Security Order」
第 58 回	2012 年 10 月 18 日	Joyman Lee (経済学部・訪問研究員) 「Chinese industrialization as viewed from the Japanese economic sector, 1910-1940」
第 59 回	2012 年 11 月 1 日	Michael Walter Charney (東洋文化研究所・特任教授) 「Village warfare in the Burma Pacification Campaign」
第 60 回	2012 年 11 月 8 日	片倉鎮郎 (東京大学・博士課程) 「『インド洋世界』を超えて—19 世紀インド洋西海域史研究のために—」
第 61 回	2012 年 11 月 22 日	高橋絵里香 (日本学術振興会・特別研究員) 「フィンランドの親族介護者支援にみる福祉国家の論理と範疇」
第 62 回	2012 年 12 月 6 日	山崎典子 (日本学術振興会・特別研究員) 「中国のムスリムとユーラシアの近代—20 世紀前半における「回」概念を手がかりにして—」
第 63 回	2013 年 1 月 17 日	吉田真吾 (日本学術振興会・特別研究員) 「日米同盟の制度化—日本政府の同盟戦略と制度化の論理—」
第 64 回	2013 年 1 月 31 日	塚原伸治 (日本学術振興会・特別研究員) 「伝統を売る人々—地方都市小売業における商行為の伝統化—」
第 65 回	2013 年 2 月 21 日	安田佳代 (東洋文化研究所・助教) 「東洋文化研究所・ASNET での 3 年間を振り返って」
第 66 回	2013 年 4 月 25 日	卯田宗平 (ASNET 機構・特任講師) 「鶺鴒鑑賞のテクニック (入門編)」
第 67 回	2013 年 5 月 9 日	李 元徳 (韓国国民大学校・教授／東洋文化研究所・訪問研究員) 「日韓歴史摩擦の政治学」
第 68 回	2013 年 5 月 16 日	山本伸裕 (東洋文化研究所・特任研究員) 「他力思想への視座—植木等のスーダラ節—」

第 69 回	2013 年 5 月 23 日	藤岡 洋（東洋文化研究所・特任研究員） 「リックライダーの夢は現在…」
第 70 回	2013 年 6 月 6 日	許 慶永（東洋文化研究所・訪問研究員） 「中国の冥婚—生者と死者のかかわり—」
第 71 回	2013 年 6 月 13 日	ビルギット・トレムル／Birgit Tremml（日本学術振興会・外国人特別研究員） 「How to answer big questions with micro-historical studies: Another plea for a new diplomatic history（小さな事件から大きな問題を考える—外交史の可能性—）」
第 72 回	2013 年 6 月 20 日	佐藤尚平（日本学術振興会・特別研究員） 「誰が国をつくるのか？ 何のためにつくるのか？ —アラブ首長国連邦の歴史から考える—」
第 73 回	2013 年 7 月 18 日	マーシャル・クレイグ／Marshall Craig（東洋文化研究所・訪問研究員） 「ある朝鮮人の日記にみる秀吉の半島侵略—16 世紀東アジアのアイデンティティ問題—」
第 74 回	2013 年 7 月 4 日	井戸美里（東洋文化研究所・特任助教） 「日本中世の風俗画における図像の引用と変容—「月次風俗図」のイコノロジー—」
第 75 回	2013 年 7 月 4 日	松村智雄（東京大学・学術研究員） 「インドネシア政治の中の華人」
第 76 回	2013 年 9 月 12 日	後藤絵美（東洋文化研究所・助教） 「『宗教国家』の内側で—ヴェールをめぐる裁判にみるエジプトの政教関係—」
第 77 回	2013 年 10 月 3 日	Jim de Sève & Kian Tjong（映画監督） 「アジアを知る—インドネシアのドキュメンタリー映画 『オトコと鳩』 から—」
第 78 回	2013 年 10 月 17 日	ポール・クライトマン／Paul Kreitman（東洋文化研究所・訪問研究員） 「日中戦争期における三峡ダム構想—大谷光瑞とジョン・ルシアン・サヴェーエジの役割を中心に—」
第 79 回	2013 年 10 月 24 日	飯野りさ（東洋文化研究所・特任研究員） 「アラブ古典音楽の聴き方入門—記号論で聴き解くアレppoの伝統—」
第 80 回	2013 年 10 月 31 日	レイチェル・サンダース／Rachel Saunders（東洋文化研究所・訪問研究員） 「語り出す絵画—14 世紀の日本の絵巻にみる玄奘三蔵の物語をめぐる—」
第 81 回	2013 年 11 月 7 日	劉 家幸（東洋文化研究所・訪問研究員） 「『世説新語補』から読み解く江戸時代（江戸時代《世説新語補》的閱讀與接受）」
第 82 回	2013 年 11 月 21 日	サファー・ヌール（東洋文化研究所・訪問研究員） 「『フェミニズム』を語る—英米・日本・エジプトの視点を中心に—」
第 83 回	2013 年 12 月 5 日	松山洋平（日本学術振興会・特別研究員） 「『かわいい』化する現代宗教—日本を中心に—」
第 84 回	2013 年 12 月 12 日	朱 莉麗（東洋文化研究所・特任研究員） 「遣明使の見た都市—寧波—」
第 85 回	2014 年 1 月 23 日	高野さやか（日本学術振興会・特別研究員） 「裁くことと裁かないことの民族誌」
第 86 回	2014 年 2 月 6 日	アンドリュー・コック／ Andrew Cock（日本学術振興会・外国人特別研究員） 「The Tension between Self-sufficiency and Integration in Cambodia's Modern History（「自存」と「統合」のあいだで—カンボジア資本主義の近現代史—）」

第 87 回	2014 年 2 月 20 日	張 馨元（東洋文化研究所・助教） 「食糧産業から見る中国経済」
第 88 回	2014 年 2 月 27 日	楊 琴／杨 琴 Yang Qin（東洋文化研究所・訪問研究員） 「中国苗族の紛争及び解決—貴州苗族の事例を中心に—（中国苗族的纠纷及解決—以貴州苗族纠纷解决事例为主—）」
第 89 回	2014 年 5 月 8 日	寺内大左（日本学術振興会・特別研究員） 「ボルネオ焼畑民の生計戦略」
第 90 回	2014 年 5 月 15 日	ウエンディ・ガース／Wendy Gears（Curator Taiwan Ceramics Biennale 2014） 「A critical reflection on Ceramics Biennales in East Asia（東アジアのビエンナーレと陶磁器展示）」
第 91 回	2014 年 5 月 22 日	エイミー・ホアン／Amy Hwang（東洋文化研究所・訪問研究員） 「A New History of Early Chinese Literati Painting（中国初期文人画を再考する）」
第 92 回	2014 年 5 月 29 日	菅 豊（東洋文化研究所・教授） 「地域文化の読み取り方—Deep play としての闘牛」
第 93 回	2014 年 6 月 5 日	辻明日香（日本学術振興会・特別研究員） 「いかにして伝記を著すか—14 世紀コプト聖人伝の場合—」
第 94 回	2014 年 6 月 12 日	王 汝娟／Wang Rujuan（東洋文化研究所・訪問研究員） 「宋代士大夫たちの禅悟—蘇東坡の悟道を中心に（The Zen Practices of the Scholar-officials in Song Dynasty: Focusing on So-Syoku）」
第 95 回	2014 年 6 月 19 日	キャラ・エイブラムソン／Kara Abramson（東洋文化研究所・訪問研究員） 「Situating Xinjiang Studies（新疆学の位置づけ）」
第 96 回	2014 年 7 月 3 日	趙 瑩／ZHAO YING（東洋文化研究所・訪問研究員） 「清朝の「京報」と外国人読者—1870 年代の世界的大飢饉を中心として—」
GJS/ASNET セミナー	2014 年 7 月 10 日	若松由理香／Yurika Wakamatsu（東洋文化研究所・訪問研究員） 「Gender and Literati Art in 19th-Century Japan」
第 97 回	2014 年 7 月 17 日	張 厚泉／Zhang Houquan（東洋文化研究所・訪問研究員） 「日中「近代化」の意味と変遷—グローバルヒストリーの視点で」
第 98 回	2014 年 7 月 24 日	藤岡 洋（東洋文化研究所・助教） 「劣化からみるデジタルコンテンツ」
第 99 回	2014 年 7 月 24 日	ケヴィン・ムルホランド（東洋文化研究所・訪問研究員） 「Honor Among Thieves: The Textual Evolution of Jiraiya monogatari(盗賊たちの栄誉—『自来也説話』におけるテキストの革命—)」
第 100 回	2014 年 10 月 9 日	古田元夫（ASNET 機構長） 「ベトナム研究の魅力」
第 101 回	2014 年 10 月 16 日	伊藤未帆（東京大学 東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ・特任講師） 「私立学校はなぜ潰れるのか？ —移行経済期ベトナムにおける公・私関係の再編成—」
第 102 回	2014 年 10 月 23 日	Mia M. Mochizuki（New York University Abu Dhabi / Institute of Fine Arts, New York） 「矢代幸雄と美術史における場の問題」
第 103 回	2014 年 10 月 30 日	山下里香（日本学術振興会・特別研究員） 「バイリンガル児童のこぼれ—ウルドゥー語引用のリアル—」

第 104 回	2014 年 11 月 13 日	後藤絵美（東洋文化研究所・助教） 「地域の研究と「地域研究」—東京大学におけるその誕生と今後の行方—」
第 105 回	2014 年 11 月 20 日	新居洋子（東洋文化研究所・CPAG 特任研究員） 「東西思想の邂逅—18 世紀在華イエズス会士の報告を中心に—」
第 106 回	2014 年 12 月 4 日	リサ・ヘルマン／Lisa Hellman（東洋文化研究所・訪問研究員） 「見えない女性たち—18 世紀広州における社会関係と権力構造—（Invisible women: social relations and power in 18th century Canton）」
第 107 回	2014 年 12 月 11 日	橋本 悟（シカゴ大学・Society of Fellows） 「禁じられた啓蒙—間-東アジア比較の視点から再読する李光洙『無情』—」
第 108 回	2014 年 12 月 18 日	パトリック・シュウェマー／Patrick Schwemmer（プリンストン大学） 「Ryūkyū Play-ing China against Japan: Paintings of Theatrical Diplomacy in the British Library（日本の前で中国を演じる近世琉球—大英図書館蔵『琉球奏楽図』を巡って—）」
第 109 回	2015 年 1 月 8 日	Thorsten Pattberg（東洋文化研究所・訪問研究員） 「Knowledge is a Polyglot Japan and China in the Global Competition for Terminologies」
第 110 回	2015 年 1 月 15 日	Bingyu Zheng（プリンストン大学） 「Diary of a Poor Bannerman: Surviving Day-to-Day in Qing Beijing in the Early Nineteenth Century」
第 111 回	2015 年 1 月 22 日	ダンラップ梨佳（東洋文化研究所・訪問研究員） 「Buddhist Eschatology and Hope: Shinran's Hope in the Age of /Mappō（仏教終末論と希望—末法における親鸞の希望—）」
第 112 回	2015 年 1 月 29 日	オー・ソウ・サン／Oak Soe San（東洋文化研究所・訪問研究員） 「The Changing Nature of Japan's ODA Policy towards Myanmar since 1988（日本の対ミャンマー政府開発援助—1988 年以降の政策変容の過程について—）」
第 113 回	2015 年 2 月 5 日	張 馨元（東洋文化研究所・助教） 「中国フード・レジーム—1950～70 年代「南糧北調」の再考—」

3-2, JSPS「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の実施

【課題名】

ケイパビリティ・アプローチによる貧困の学際的研究

Interdisciplinary Study on Poverty based on Capability Approach

【概要】

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワークが主導的な役割を果たし、日本とタイ、ラオス、カンボジア、ベトナムの研究者と交流ネットワークを築き、「貧困」をテーマに共同研究やセミナーを実施した。また、活動報告はASNETのホームページで紹介した。

【拠点機関】

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET 機構）

【実施組織代表者】

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク・ネットワーク長・古田元夫

【コーディネーター】

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク／東洋文化研究所・教授・池本幸生

【実施機関】

2011年4月から2014年3月

【対象国と相手国実施組織】

〔ベトナム〕

拠点機関：Vietnam National University Hochiminh City（ベトナム国家大学・ホーチミン校）

コーディネーター：

Center for Vietnamese and Southeast Asian Studies・Director・Tran Dinh LAM

〔ラオス〕

拠点機関：National Academy of Politic and Public Administration (NAPPA)（国立政治行政学院）

コーディネーター：

NAPPA・Vice President・Thongsalith MANGNOMEK

〔カンボジア〕

拠点機関：Royal University of Agriculture (RUA)（王立農業大学）

コーディネーター：Faculty of Animal Science and Veterinary Medicine・Lecturer・Sopha
CHEAT

〔タイ〕

拠点機関：Khon Kaen University（コンケン大学）

コーディネーター：Faculty of Humanities and Social Sciences・Associate Professor・Sataporn
ROENG TAM

【参加メンバー】

〔日本〕

古田元夫（東京大学教授・ベトナム現代史）

池本幸生（東京大学教授・経済開発論）

渡辺知保（東京大学教授・人類生態学）

卯田宗平（東京大学特任講師・生態人類学）

後藤絵美（東京大学助教・西アジア地域研究）

古澤拓郎（京都大学准教授・人類生態学）

平位 匡（東京大学特任研究員・経済開発論）

新谷春乃（東京大学博士課程学生・カンボジア地域研究）

NARISSARA Charoenphan（東京大学博士課程学生・タイ経済）

金 氣興（東京大学特任研究員・社会的企業と有機農業）

RUTTIYA Bhula-or（東京大学博士課程学生・農村開発）

〔ベトナム〕

Tran Dinh LAM (Vietnam National University, Director, Economics)

Than PHAN(Vietnam National University, Doctor, Cultural Anthropology)

H'wen Nie KDAM(Tay Nguyen University, Lecturer, Agricultural Economics)

Dao Thi Hoang MAI(Vietnam Academy of Social Sciences, Researcher, Rural Development)

Ho ngoc PHUONG(University of Economics Ho Chi Minh City, Senior Lecturer, Economics)

〔ラオス〕

THONGSALITH Mangnomek(National Academy of Politic and Public Administration,Vice President, Economics)

SENEATHITH Simonekeo(National University of Laos, Lecturer, Tourism)

〔カンボジア〕

CHEAT Sophal(Royal University of Agriculture, Lecturer, Economic)

THY Naroeun(Royal University of Phnom Penh, Head of Sociology Department, Economic)

HENG Naret(Royal University of Phnom Penh, Lecturer, Economic)

〔タイ〕

SATAPORN Roengtam(Khon Kaen University, Associate Professor, Rural Development)

KRIANGSUK Boontian(Mahasarakam University, Lecturer, Agriculture)

RUTTIYA Bhula-or(Chulalongkorn University, Research Assistant, Economic Development)

PREECHA Piampongsan(Burapha University, Professor, Economic Development)

IMRON Sohsan(Khon Kaen University, Student, Rural development)

【全機関を通じた研究交流目標】

東京大学「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク」（以下、ASNET と略記）は、東京大学においてアジアと接点を持つ研究者をつなぐ学際的なネットワークとして 2000 年に始まり、2010 年度から機構化され、分野横断型の学際的なアジア研究者のネットワークの構築と、それに基づく研究の推進を目指してきた。一方、学生向けには全学研究科等横断型教育プログラム「日本・アジア学」を提供している。本事業の目的は、これらの活動を通して ASNET が構築してきた研究者ネットワークと教育プログラムを研究活動に活用することを目的とし、そのために多様な分野の研究者が参加しうる貧困問題という学際的課題に取り組もうとするものである。

貧困問題は、1990 年代から発展途上国の開発課題の中心に位置付けられてきた。本事業の対象となるベトナム・カンボジア・ラオスはアセアン諸国内の後発国であり、貧困問題は深刻で、アセアン域内格差の重要な課題となっている。それに対して、タイはアセアンの中では先進国であるが、近年、しばしば政治暴動が報じられているように、国内の格差問題（相対的貧困）は深刻である。これらの国々の貧困を総合的に捉えるためには、経済的理解だけでなく、健康、教育から政治参加までを含む包括的なアプローチが有効である。それは、アマルティア・センがケイパビリティ・アプローチとして提唱している方法であり、国際援助の分野では人間開発アプローチとして主流の考え方となっているものである。

本事業では、日本側コーディネーターとコアメンバーがこれまで実施してきたベトナムおよびタイにおける貧困・地域開発・健康に関する研究によって構築してきたネットワークを基礎として、まだ十分に研究体制の整っていないラオスとカンボジアにそのネットワークを広げ、この地域における貧困研究を促進し、特に日本を含むすべての参加国の若手研究者の育成に努める。さらにラオス・カンボジアにおける学術研究の水準の向上に寄与することを目的とする。

本研究の活動拠点として、日本側コーディネーターが主として活動してきたベトナムの中部高原地方を設定する。同地方の中心都市バンメトートにあるタイグエン大学は東洋文化研究所と交流協定を結んでおり、同大学に「定点観測拠点」を形成する。

【実施内容】

2011年9月4-11日にベトナムとカンボジアで国際セミナーとエクスカージョンを実施

2011年10月23-28日に東京で国際セミナーとエクスカージョンを実施

2011年1月14-23日にタイとラオスで国際セミナーとエクスカージョンを実施

2012年9月17-22日：カンボジアにて国際セミナーとエクスカージョンの開催

2012年11月22-27日：東北地方の被災地にて国際セミナーとエクスカージョンの実施

2013年1月10-15日：ベトナムにて国際セミナーとエクスカージョンの実施

2013年9月14-23日：タイのコンケン大学にて国際セミナーとエクスカージョンの開催

2014年2月8-15日：ベトナムにて国際セミナーとエクスカージョンの実施

2014年3月5-12日：東京大学にて国際セミナーとエクスカージョンの実施

□国際セミナーやエクスカージョンの実施記録

○ベトナムとカンボジアにおける国際セミナーとエクスカージョン（2011年9月）

2011年9月4日から11日にかけて、「ケイパビリティ・アプローチによる貧困の学際的研究」(JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業)のセミナーをベトナムとカンボジアで実施した。

〔日程〕2011年9月4日-11日

〔場所〕

The University of Social Sciences and Humanities(USSH), Vietnam.。

〔参加者〕

池本幸生（東京大学教授・経済開発論）

渡辺知保（東京大学教授・人類生態学）

卯田宗平（東京大学特任講師・生態人類学）

平位 匡（東京大学特任研究員・経済開発論）

新谷春乃（東京大学博士課程学生・カンボジア地域研究）

NARISSARA Charoenphan（東京大学博士課程学生・タイ経済）

金 氣興（東京大学特任研究員・社会的企業と有機農業）

Tran Dinh LAM (Vietnam National University, Director, Economics)

Than PHAN(Vietnam National University, Doctor, Cultural Anthropology)

Ho ngoc PHUONG(University of Economics Ho Chi Minh City, Senior Lecturer, Economics)

SENEATHITH Simonekeo(National University of Laos, Lecturer, Tourism)

CHEAT Sophal(Royal University of Agriculture, Lecturer, Economic)

HENG Naret(Royal University of Phnom Penh, Lecturer, Economic)

SATAPORN Roengtam(Khon Kaen University, Associate Professor, Rural Development)

PREECHA Piampongsan(Burapha University, Professor, Economic Development)



(写真) Vietnam National University Ho Chi Minh City で実施した国際セミナー



(写真) Soc Trang Twon, Vietnam で開催したタウンミーティング

○東京における国際セミナーとエクスカージョン（2011年10月）

2011年10月24日から27日にかけて、「ケイパビリティ・アプローチによる貧困の学際的研究」(JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業)のセミナーを東京で開催した。

〔日程〕2011年10月24日-27日

〔場所〕東京大学東洋文化研究所

〔参加者〕

池本幸生（東京大学教授・経済開発論）

卯田宗平（東京大学特任講師・生態人類学）

平位 匡（東京大学特任研究員・経済開発論）

新谷春乃（東京大学博士課程学生・カンボジア地域研究）

NARISSARA Charoenphan（東京大学博士課程学生・タイ経済）

金 氣興（東京大学特任研究員・社会的企業と有機農業）

Tran Dinh LAM (Vietnam National University, Director, Economics)

Than PHAN(Vietnam National University, Doctor, Cultural Anthropology)

Ho ngoc PHUONG(University of Economics Ho Chi Minh City, Senior Lecturer, Economics)

SENEATHITH Simonekeo(National University of Laos, Lecturer, Tourism)

CHEAT Sophal(Royal University of Agriculture, Lecturer, Economic)

HENG Naret(Royal University of Phnom Penh, Lecturer, Economic)

SATAPORN Roengtam(Khon Kaen University, Associate Professor, Rural Development)

PREECHA Piampongsan(Burapha University, Professor, Economic Development)

〔セミナープログラム〕

Welcome and Introduction:

8:50-9:00 Opening remarks (Ikemoto Yukio, ASNET, UT)

Morning session (9:00-11:30)

9:00-9:45 Vietnam: Dr. Tran Dinh Lam

(Center for Vietnamese and Southeast Asian Studies, Vietnam)

9:45-10:30 Vietnam: Dr. Ho Ngoc Phuong(University of Economics HCMC)

10:30-10:45 Tea Break

10:45-11:30 Thailand : Dr. Sataporn Roengtam (Khon Kaen University)

Lunch and break (11:30-14:00)

Afternoon session (14:00-16:50)

14:00-14:45 Cambodia : Dr. CHEAT Sophal (Royal University of Agriculture)

14:45-15:30 Cambodia : Dr.HENG NARET (Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

15:30-15:45 Tea Break

15:45-16:15 Japan : Dr.Tadashi Hirai (The university of Tokyo)

16:15-16:50 General comments and discussion

〔活動写真〕



(写真) 神奈川県小田原市の有機農業の見学



(写真) 加藤憲一小田原市長から有機農業の現状と課題の説明を受ける

○カンボジアにおける国際セミナーとエクスカージョン (2012 年 9 月)

2012 年 9 月 17 日から 22 日にかけて、JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業「ケイパビリティ・アプローチによる貧困の学際的研究」の一環として、カンボジアで国際セミナーとエクスカージョンを実施した。今回は、アジア各国の若手研究者に発表の機会を与え、各自の研究の方向性に関わる話し合いを行い、若手研究者の交流ネットワークの構築を進めた。

〔日程〕 2012 年 9 月 16 日から 22 日

〔場所〕 カンボジア・Royal University of Phnom Penh

〔参加者〕

Ikemoto Yukio (The University of Tokyo, Japan)

Uda Shuhei (The University of Tokyo, Japan)

Kim Kihueng(The University of Tokyo, Korea)

Kozakai Maki(The University of Tokyo, Japan)

Shintani Haruno(The University of Tokyo, Japan)

Narissara Charoenphandhu(The University of Tokyo, Thai)

Dao Thi Hoang Mai(Vietnam Institute of Economics, Vietnam)

Thanh Phan(University of Social Sciences and Humanities, Vietnam)

Thy Naroeun(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

Heng Naret(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

〔セミナーの話者とタイトル〕

Shintani Haruno

:How to write the past: examining the textbook published since 1979 in Cambodia

Kozakai Maki:Situation analysis of Devastated Children in Cambodia

Narissara Charoenphandhu

: Income Distribution and Medium Term trend of Inequality in Thailand

Kim Kihueng

: Organic Agriculture and Sustainable Development: Case Study of Japan and Korea

Dao Thi Hoang Mai :Poverty in Vietnam: Selected Issues

Heng Naret:Social Vulnerability In Kampong Speu Province, Cambodia

Thy Naroeun:Road Crash Situation in Cambodia

〔活動写真〕



(写真) 若手研究者の交流の機会となったカンボジアでのセミナー



(写真) 隣国タイで保護されたカンボジアの子供たちに様々な手工技術を教える NGO グループでの聞き取り調査



(写真) 聞き取りに参加してくれた子供たちと記念撮影

○東京と東北における国際セミナーとエクスカージョン（2012 年 11 月）

2012 年 11 月 22 日から 27 日にかけて、JSPS『アジア・アフリカ学術基盤形成事業』「ケイパビリティ・アプローチによる貧困の学際的研究」の一環として、東京および東北地方で国際セミナーとエクスカージョンを実施した。

〔日程〕2012 年 11 月 22 日-27 日

〔場所〕

東京大学東洋文化研究所

〔参加者〕

Ikemoto Yukio (The University of Tokyo, Japan)

Uda Shuhei (The University of Tokyo, Japan)

Kim Kihueng(The University of Tokyo, Korea)

Narissara Charoenphan (The University of Tokyo, Japan)

Ruttiya Bhula-or (The University of Tokyo, Thai)

Sataporn Roengtam(Khon Kaen University, Thai)

Thy Naroeun(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

Heng Naret(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

Tran Dinh Lam (University of Social Sciences and Humanities, Vietnam)

SENESATHITH Simonekeo(National University of Laos/ Rikkyo University, Laos)

〔セミナーの話者とタイトル〕

Ms.Ruttiya Bhula-or (The University of Tokyo, Thai)

: Inequality and Discrimination at Work, Review. Tend and challenge in selected Asian countries.

Dr.Sataporn Roengtam(Sataporn Roengtam, Thai)

: The Notion on Provincial Self-Governance, Thailand.

Prof.Tran Dinh Lam (University of Social Sciences and Humanities, Vietnam)

: Vietnam's SWOT analysis for economic development.

Dr.Heng Naret(Cambodia)

: Social Vulnerability, Cambodia

Prof.Thy Naroeun(Cambodia)

: Road Crash Situation and sociology in Cambodia

〔活動写真〕



（写真）復興ボランティアのグループと復興支援のあり方を話し合い、実際に活動に参加する東南アジアの研究者たち



(写真) 船の上から被災の状況を確認する



(写真) 地元の漁師に被災当時の状況や復興過程、これからの課題を聞き取る研究者たち



(写真) セミナーでの発表者

○ベトナムでの国際セミナーとエクスカージョン（2013年1月）

2013年1月10日から15日にかけて、JSPS『アジア・アフリカ学術基盤形成事業』「ケイパビリティ・アプローチによる貧困の学際的研究」の一環として、ベトナムで国際セミナーとエクスカージョンを実施した。

今回は、貧困や飢餓に関わるセミナーを USSH で実施し、その後にメコンデルタ地域においてその経済発展と環境保全に関わる調査を行なった。また、ベトナムにおける交流ネットワークの構築も進めた。

〔日程〕

2013年1月10日-15日

〔場所〕

The University of Social Sciences and Humanities(USSH), Vietnam.。

〔参加者〕

Furuta Motoo (The University of Tokyo, Japan)

Uda Shuhei (The University of Tokyo, Japan)

Ito Miho(The University of Tokyo, Japan)

Shintani Haruno (The University of Tokyo, Japan)

Tran Dinh Lam (University of Social Sciences and Humanities, Vietnam)

Thanh Phan (University of Social Sciences and Humanities, Vietnam)

Dao Thi Hoang Mai(Vietnam Institute of Economics, Vietnam)

Sataporn Roengtam(Khon Kaen University, Thailand)

Thy Naroeun(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

Heng Naret(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

〔セミナーの話者とタイトル〕

Prof. Vo Van Sen, President of University of Social Sciences and Humanities

: Welcome speech

Prof. Furuta Motoo, University of Tokyo

: The characteristics of Doi Moi process in Vietnam

Assoc. Prof. Thanh Phan, University of Social Sciences and Humanities

: Weaving traditional handicraft in Vietnam (Case study of the Cham people in Vietnam)

Dr. Uda Shuhei, University of Tokyo

: Biodiversity in Lake Biwa, Japan

Dr. Tran Dinh lam, University of Social Sciences and Humanities

: The Role of the State in Vietnam's Economic Renovation

Dr. Ito Miho, University of Tokyo

: The employment of Vietnamese graduates nowadays

Dr. Dao Thi Hoang Mai, Vietnam Institute of Economics

: Combining resilience with human capabilities: A socio-economic assessment of bio-fuel policy in Vietnam

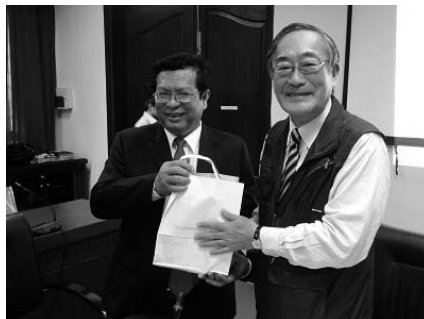
〔活動写真〕



(写真) ベトナムでの国際セミナーの参加者



(写真) Vo Van Sen 学長 (USSH) によるベトナム経済の現状に関わる基調講演



(写真) 古田元夫機構長 (ASNET) と Vo Van Sen 学長 (USSH)



(写真) メコンデルタ地帯の果物農家での聞き取り調査

○ベトナムにて国際セミナーとエクスカーションの実施（2013年2月）

2014年2月8日から15日にかけてベトナムにて国際セミナーとエクスカーションを実施した。

〔日程〕

2014年2月8日-15日

〔場所〕

ベトナム

〔参加者〕

池本幸生（東京大学教授・経済開発論）

卯田宗平（東京大学特任講師・生態人類学）

新谷春乃（東京大学博士課程学生・カンボジア地域研究）

金 氣興（東京大学特任研究員・社会的企業と有機農業）

Tran Dinh LAM (Vietnam National University, Director, Economics)

Than PHAN(Vietnam National University, Doctor,Cultural Anthropology)

Dao Thi Hoang Mai(Vietnam Institute of Economics, Vietnam)

HENG Naret(Royal University of Phnom Penh, Lecturer, Economic)

Thy Naroeun(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

SATAPORN Roengtam(Khon Kaen University, Associate Professor, Rural Development)

〔活動写真〕



（写真）無農薬でコーヒーの木を栽培する農家への聞き取り



（写真）市街地で有機野菜を販売している店舗での調査

○東京において国際セミナーとエクスカージョンの実施（2014年2月）

2013年2月8日から15日にかけてベトナムにて国際セミナーとエクスカージョンを実施した。

〔日程〕

2014年3月7日から12日

〔場所〕

東京大学東洋文化研究所

〔参加者〕

池本幸生（東京大学教授・経済開発論）

卯田宗平（東京大学特任講師・生態人類学）

新谷春乃（東京大学博士課程学生・カンボジア地域研究）

金 氣興（東京大学特任研究員・社会的企業と有機農業）

平位 匡（東京大学特任研究員・経済開発論）

NARISSARA Charoenphan（東京大学博士課程学生・タイ経済）

Tran Dinh LAM (Vietnam National University, Director, Economics)

Than PHAN(Vietnam National University, Doctor,Cultural Anthropology)

Dao Thi Hoang Mai(Vietnam Institute of Economics, Vietnam)

HENG Naret(Royal University of Phnom Penh, Lecturer, Economic)

Thy Naroeun(Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

SATAPORN Roengtam(Khon Kaen University, Associate Professor, Rural Development)

〔セミナー話者とタイトル〕

Dr. Dao Thi Hoang Mai(Vietnam Institute of Economics, Vietnam)

:Rural tourism: from theory to practice

Prof. Thanh Phan(Center for Vietnamese and Southeast Asian Studies, Vietnam)

:Traditional Methods of Rice Agriculture of the Cham People

Prof. Tran Dinh Lam (Center for Vietnamese and Southeast Asian Studies, Vietnam)

:Organic Agriculture - An Economic Development Solution For Sustainable Agriculture – The Case Of Thoai Son District

Prof. Thy Naroeun (Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

Dr. HENG NARET (Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

:Rural Livelihood Improvement through learning and Sharing Knowledge of Model Farmers in Cambodia: Case Study in Kirivong District Takeo Province

4. 広報活動

4. 広報活動

4-1, ASNET メールマガジン

ASNET では毎週金曜日に「ASNET メールマガジン」を発信している。メールマガジンでは、『日本・アジア学』講座の科目紹介や講義情報、日本やアジアに関わるシンポジウム、研究会の周知、新刊情報の紹介などをおこなっている。また、2011 年から 2012 年にかけては「アジアがわかるコラム」、2013 年からは「自著を語る」を連載している。

メールマガジンは 2005 年 1 月から始め、2015 年 1 月 31 日現在で計 525 号を発信した。

メールマガジンの購読者数の変化と年間発信回数は以下の通りである。

2009 年度末までの登録者数	720 名		
2010 年度末までの登録者数	857 名 (137 名増加)	年間発信回数	56 回
2011 年度末までの登録者数	914 名 (57 名増加)	年間発信回数	53 回
2012 年度末までの登録者数	930 名 (16 名増加)	年間発信回数	50 回
2013 年度末までの登録者数	1147 名 (217 名増加)	年間発信回数	52 回
2014 年度 1 月までの登録者数	1310 名 (163 名増加)	発信回数	41 回

ASNET メールマガジンのサンプル (2015 年 1 月 16 日送付分)

ASNET メールマガジン

No. 523 2015/1/16

Since Jan. 2005

日本・アジアに関する情報をお届けします

----- 目次 -----

- 【1】東文研・ASNET 共催セミナー
- 【2】日本・アジア学講座
- 【3】シンポジウム・研究会
- 【4】お知らせ
- 【5】新刊案内
- 【6】自著を語る
- 【7】編集後記

◆◇-----

◇ 【1】東文研・ASNET 共催セミナー

◆ 第 111 回/ GJS セミナー8 回

仏教終末論と希望—末法における親鸞の希望／Buddhist Eschatology and Hope:
Shinran's Hope in the Age of /Mappo/

日 時 : 2015 年 1 月 22 日 (木) 17:00-18:00

場 所 : 東京大学本郷キャンパス

報告者 : ダンラップ梨佳氏 (東京大学)

詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7776>

◆ 第 112 回 日本の対ミャンマー政府開発援助—政策変容の過程について

The Changing Nature of Japan's ODA Policy towards Myanmar since 1988

日 時 : 2015 年 1 月 29 日 (木) 17:00-18:00
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
報告者 : オー・ソウ・サン氏 (東京大学)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7762>

◆ 第 113 回 中国フード・レジーム—1950～70 年代「南糧北調」の再考

日 時 : 2015 年 2 月 5 日 (木) 17:00-18:00
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
報告者 : 張 馨元 氏 (東京大学)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7798>

今年度の開催リストはこちら

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7618>

◆◇-----
◇ 【2】日本・アジア学講座

ASNET は、東京大学において、学際的な視点からの研究科等横断型
『日本・アジア学』教育プログラムを実施しています。詳しくはこちらをご覧ください。
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7368>

【講義】変更のお知らせ

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7718>

【講義】アジアの食と農・環境 / Food, agriculture, and environment in Asia
[集中 / Intensive] (1/24)

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7600>

◆◇-----
◇ 【3】シンポジウム・研究会

◆ Exploring Vulnerability and Agency through Women's Networks in Saudi Arabia/
サウジアラビアにおける女性のネットワークから探る脆弱性とエイジェンシー

日 時 : 2015 年 1 月 20 日 (火) 13:00-15:00
場 所 : 東京大学駒場キャンパス
報 告 : 辻上奈美江氏 (東京大学)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7786>

◆ Changing Attitudes Toward Japanese Modernity

日 時 : 2015 年 1 月 23 日 (金) 13:00-15:00
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
報 告 : Peter Nosco 氏 (University of British Columbia)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7773>

◆ Pleasure and Pain of an Indigenous Psychologist:
A personal history of struggle in international academia

日 時 : 2015 年 1 月 23 日 (金) 17:00-19:00
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
報 告 : 山口勸氏 (東京大学)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7783>

◆ 2014 年台湾統一地方選挙の分析

日 時 : 2015 年 1 月 23 日 (金) 18:00-20:00
場 所 : 早稲田大学早稲田キャンパス
報 告 : 小笠原欣幸氏 (東京外国語大学)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7784>

◆ 古田元夫教授：一つの世界の中のベトナム——『ベトナムの世界史』のその後

日 時 : 2015 年 1 月 23 日 (金) 9:00-17:30
場 所 : 東京大学駒場キャンパス
内 容 : 最終講義・公開研究会
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7785>

◆ 史料情報の新たな発信

日 時 : 2015 年 1 月 24 日 (土) 10:00-17:00
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
内 容 : シンポジウム (二部制)
主 催 : 東京大学史料編纂所
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7774>

◆ 清末民初のミリタリズムとその課題

日 時 : 2015 年 1 月 31 日 (土) 16:00-17:30
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
講 師 : 小野寺史郎氏 (埼玉大学)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7735>

◆ むすび、ひらくアジア—アジア研究図書館の構築に向けて

日 時 : 2015 年 1 月 31 日 (土) 13:30-17:30
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
内 容 : シンポジウム (二部制)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7772>

◆ 川上泰徳氏 講演会 「私の中東取材」

日 時 : 2015 年 1 月 31 日 (土) 14:00-16:30
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
内 容 : 朝日新聞退社記念講演会
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7781>

◆ 中国雑豆研究会 講演会 10

日 時 : 2015 年 2 月 6 日 (金) 14:00-17:00
場 所 : 東京大学本郷キャンパス
講 師 : 西果林氏 (東京大学)、張馨元氏 (東京大学)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7788>

◆ ANESC 生物資源環境学セミナー

日 時 : 2015 年 2 月 20 日 (金) 9:30-12:30
場 所 : 東京大学弥生キャンパス
講 師 : 卯田宗平氏 (東京大学)、ウィ・ウィルフレド氏 (ミンダナオ州立大学)、パラニサミ・クバンナン氏 (国際水管理研究所)
詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7769>

◆ 中東政治におけるリベラリズム再考

日 時 : 2015 年 2 月 20 日 (金) 13:30-17:30

場 所 : 東京大学本郷キャンパス

内 容 : 水谷周氏著『20 世紀エジプト思想におけるリベラリズム』合評会
およびシンポジウム

詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7770>

◆ 合理的思考の要素 : 『清浄道論』における「想」の説明について

日 時 : 2015 年 2 月 20 日 (金) 16:00-18:00

場 所 : 東京大学本郷キャンパス

講 師 : Achim Bayer 氏 (東國大 學 校)

詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7780>

◆ ウミウの誕生からみる鵜飼の未来

日 時 : 2015 年 2 月 28 日 (土) 13:30-16:30

場 所 : 京都大学

講 師 : 卯田宗平氏 (東京大学) 他

詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7790>

◆ Revisit Markets and Institutions in Early Modern East Asia:
Beyond Exceptionalism and Generalisation

日 時 : 2015 年 3 月 6 日 (金) 10:00-17:30

場 所 : Harvard Yenching Institute

内 容 : 東アジア経済史に関するワークショップ

詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7787>

◆ 『自然』を中心テーマとする人類学の四十年

日 時 : 2015 年 3 月 12 日 (木) 14:00-16:00

場 所 : 東京大学本郷キャンパス

講 師 : 松井 健 氏 (東京大学)

詳細 URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7789>

◆◇-----
◇ 【4】お知らせ

◆ 参加者募集: Global History Collaborative サマースクール 2015
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7779>

◆ Open to Register: 22nd International Congress of Historical Sciences
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7768>

◆ 2015 POSCO TJ Park Foundation Research Grants for Asian Studies
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7752>

◆ 5th Congress of Asian and the Pacific studies 2015 (発表者募集)
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7743>

◆◇-----
◇ 【5】新刊案内

- ◇ 佐伯弘次編『中世の対馬—ヒト・モノ・文化の描き出す日朝交流史』
勉誠出版 2014 年 12 月
http://bensei.jp/index.php?main_page=product_book_info&products_id=100408
- ◇ ヴォー・グエン・ザップ著、古川久雄訳『愛国とは何か：
ヴェトナム戦争回顧録を読む』京都大学学術出版会 2014 年 12 月
<http://www.kyoto-up.or.jp/book.php?id=1994>
- ◇ 島田正郎『契丹国 遊牧の民キタイの王朝』
東方書店 2014 年 12 月
<http://www.toho-shoten.co.jp/toho-web/search/detail?id=4497214195&bookType=jp>
- ◇ 柴田哲雄・やまだあつし編『中国と博覧会—中国 2010 年上海万国
博覧会に至る道』成文堂 2014 年 12 月
<http://www.seibundoh.co.jp/pub/search/028141.html>



- ◇ 自著を語る No. 42
-

村上正和『清代中国における演劇と社会』を語る

本書は清代中国における都市演劇を、①政府による演劇政策、②賤視されていた俳優と、社会的エリートである士大夫との結びつきという 2 点に重点を置いて議論したものです。

都市演劇が政治と絡み合いつつ生成されていく過程と、士大夫と俳優が、同性愛的な情愛や賤視といった様々な感情を交錯させながら結びつき、演劇文化を作り出していった様相を描こうと試みました。

山川出版社、2014 年 11 月
<http://www.yamakawa.co.jp/product/detail/2349/>



- ◇ 【7】編集後記
-

次回の ASNET 共催セミナーは「末法における親鸞の希望」です。
「希望」という現代の私たちにとっても馴染み深い言葉について、
親鸞の「他力の概念」を通して論じるものです。ぜひご参集ください。
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7776>

「自著を語る」は村上さんをお願いしました。
明清期最大の娯楽産業だったという演劇。それにまつわる文化が
つくられている様子が丁寧に描かれています。ぜひご覧ください。

インフルエンザが猛威をふるっています。
お体にはくれぐれもお気をつけて、よい週末をお迎えください。

2015 年 1 月 16 日 後藤

-

- ◇ MM配信の停止・アドレス変更のご連絡、ASNET に対するご意見や
ご要望、情報の提供は asnet@asnet.u-tokyo.ac.jp までお願いします。
- ◇ ASNET（正式名称：日本・アジアに関する教育研究ネットワーク）は、
研究者が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな
可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

4-2, ASNET ウェブサイト

ASNET ではウェブサイト運営し、『日本・アジア学』講座の科目紹介や講義情報、日本やアジアに関わるシンポジウム、研究会の周知、新刊情報の紹介などをおこなっている。

H 25 年 4 月 19 日現在 アクセス数 計 387100 回

H 26 年 4 月 19 日現在 アクセス数 計 515213 回

H 27 年 1 月 27 日現在 アクセス数 計 614758 回

ASNET ウェブサイトのサンプル（トップページ、2015 年 2 月 1 日）



東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
ASNET Network for Education and Research on Asia

» Chinese, Simplified

» English

» 日本語

ASNET機構について

» ASNET機構とは

» 機構長の挨拶

» ASNET運営委員

» お問い合わせ

ASNET 機構の活動

» ASNETの活動

» 部局横断型『日本・アジア学』講座

» 『日本・アジア学概論』科目の開講

» 共催セミナーの開催

» メールマガジンの発信(登録無料)

» アジアの研究機関との連携強化

» グレーター東大塾の開催

『日本・アジア学』講座

東京大学大学院研究科等横断型
『日本・アジア学』教育プログラム

□ 履修方法など、詳しくはこちら



H26シラバスのダウンロード(7.6MB)

メールマガジン

アジア研究の情報を満載したメールマガジンを発行しています。
購読はこちらから

・毎週金曜日発行

・研究会、シンポジウム、新刊情報

・どなたでも購読できます

平成26年度 東文研・ASNETセミナー／TOBUNKEN & ASNET SEMINARS



» 【第113回】中国フード・レジーム—1950〜70年代「南糧北調」の再考(2015年2月5日)

» 2014年度 開催リスト / List of Lectures

平成26年度『日本・アジア学』講座／JAPAN-ASIA STUDIES PROGRAM

◇ 平成26年度講座のお知らせ

※紙媒体のシラバスは各研究科および東洋文化研究所の事務室にあります。



» 【冬学期講義】お知らせ

» 【集中講義】アジアの食と農・環境(第五回講義のお知らせ:1月24日)

» 【冬学期講義】アジアでがんを生き延びる/ Surviving Cancer in Asia

» 【冬学期講義】国際プロジェクトの事例分析特論E/ Case Studies of International Projects

» 【冬学期講義】戦後日本社会の形成と変容

» 【冬学期講義】植民地主義・魂の植民地化・移動とネットワーク

» 【冬学期講義】書き直される中国近現代史Ⅶ

» 【冬学期講義】中国の環境と人類学

» 【出版】ASNETアジアの環境研究入門—東京大学で学ぶ15講(東京大学出版会)が出版されました

» 【実施報告】2014年度ASNET「アジアのフィールドワーク論」科目の実習

その他の講義に関してはシラバスをご覧ください。

シンポジウム・研究会情報／SYMPOSIUM & LECTURES

» 【研究会】無形文化遺産からみる〈世界〉と〈地元〉の関係
開催日:2月4日

» 【講演会】中国雑豆研究会 講演会10
開催日:2月6日

» 【セミナー】Buddhism, Social Justice and the Status of the Caṇḍāla
開催日:2月6日

» 【ワークショップ】普遍をめぐる問い—18〜20世紀東アジアから考える
開催日:2月7日

» 【研究会】映画から見る中東社会の変容(『ガーダー/バレスチナの詩』)
開催日:2月11日

» 【シンポジウム】中南海サバイバル戦略の再検討
開催日:2月15日

» 【セミナー】東京大学東洋文化研究所『現代台湾文庫』—その資料的価値と可能性
開催日:2月17日

» 【研究会】先秦血縁集団の研究と出土資料
開催日:2月19日

・もちろん無料
 ・東大内外で1200人以上の購読者
 ・発行回数が500号を超える
 (いずれも2014年7月現在)
 ・情報掲載を希望される方はASNETまで

LINKS & PROJECTS

- » 東大・イェールイニシアティブ
- » 東京大学東洋文化研究所
- » 東京大学出版会
- » アジア研究情報ゲートウェイ
- » 日本・アジアSATOYAMA教育イニシアティブ
- » 現代中国研究拠点
- » 東大130周年記念シンポジウム
- » ジェントロジープロジェクト



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

アクセス数
 Total: 617722
 Today: 0149
 Yesterday: 0427

- » 【セミナー】ANESC生物資源環境学セミナー
開催日:2月20日
- » 【シンポジウム】中東政治におけるリベラリズム再考
開催日:2月20日
- » 【セミナー】合理的思考の要素:『清浄道論』(Visuddhimagga)における「想」の説明について
開催日:2月20日
- » 【研究会】朝鮮史研究会関東部会 2015年2月例会
開催日:2月21日
- » 【シンポジウム】「ウミウの誕生からみる鶴鯛の未来」
開催日:2月28日
- » 【Workshop】Revisit Markets and Institutions in Early Modern East Asia : Beyond Exceptionalism and Generalisation
開催日:3月6日
- » 【シンポジウム】畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション
開催日:3月7日
- » 【講演会】Network Asia Globalization and Regional Studies / ネットワークとしてのアジア グローバリゼーションと地域研究
開催日:3月9日
- » 【ワークショップ】〈間にあるもの〉の現代史—ロシア・中東・東アジアにおける仲介人と境界人
開催日:3月11日
- » 【研究会】『自然』を中心テーマとする人類学の四十年
開催日:3月12日

お知らせ／INFORMATION

- » 【報告者募集】第13回日中韓農業史学会国際大会（締切 2月28日）
- » 【参加者募集】Global History Collaborative サマースクール2015（締切 2月15日）
- » 【Open to Register】22nd International Congress of Historical Sciences
- » 【Grant】2015 POSCO TJ Park Foundation Research Grants for Asian Studies（締切 1月30日）
- » 【Call for Proposals】5th Congress of Asian and the Pacific studies 2015（締切 2月27日）
- » 【HP開設】東京大学附属図書館アジア研究図書館 上原倫理財団寄付研究部門【U-PARL】
- » 【学術雑誌】Asian Journal of Comparative Politics 刊行のお知らせ
- » 【留学関連】Hong Kong PhD Fellowship Scheme

ASNET 活動報告/ACTIVITIES REPORTS

- » メールマガジン「自著を語る」バックナンバー no.1-no.33
- » 2013年度 東文研・ASNET共催セミナー 開催報告
- » 2012年度 東文研・ASNET共催セミナー 開催報告
- » 2011年度 東文研・ASNET共催セミナー 開催報告
- » 2010年度 東文研・ASNET共催セミナー 開催報告
- » 2014年度ASNET「アジアのフィールドワーク論」科目の実習報告
- » 2013年度ASNET「アジアのフィールドワーク論」科目の実習報告
- » 2012年度ASNET「アジアのフィールドワーク論」科目の実習報告
- » 国際セミナー&エクスカーションをベトナムで開催しました (2013年1月10日-15日)
- » 国際セミナー&エクスカーションを東北地方で開催しました (2012年11月22日-27日)
- » 連載コラム「Asian Diversity」『学内広報』1403号 (2010.9.24)より

4-3, 東大－イェール・イニシアティブ

2010 年より、ASNET では東大－イェール・イニシアティブの活動の一部に参画することになった。東大－イェール・イニシアティブとは、以下の理念に基づいて、イェール大学内外の研究者との協同により実施されるものである。

1. 人文学、社会科学の諸分野における日本・日本関連研究の海外発信の強化という緊急の課題を実現すること。
2. 国際社会に発信力のある人材、特に若手研究者を育成すること。

具体的には、ASNET 事務局が東大－イェール・イニシアティブのウェブサイト (http://todai-yale.jp/index_jp.html) の更新と来日研究者のセミナー・講演会の開催などの一部を担ってきた。

東大－イェール・イニシアティブのウェブサイトの抜粋

English サイトマップ サイトポリシー		
 The Todai-Yale Initiative Academic Collaboration of The University of Tokyo and Yale University		
Home 東大－イェール・イニシアティブについて 東大－イェール・イニシアティブの活動 東大－イェール・イニシアティブの関係者 若手研究者の育成 Links	TYI Home > 東大－イェール・イニシアティブについて > 理念と活動	
	理念と活動	
	理念 東京大学は、東大－イェール・イニシアティブを通じて、次の2つの理念の実現を図ります。 1. 人文学、社会科学の諸分野における日本・日本関連研究の海外発信の強化という緊急の課題を、イェール大学、さらにはイェール大学外の研究者との協同により実現すること。 2. 国際社会に発信力のある人材、特に若手研究者を育成すること。 米国における日本研究は、フェノロサの日本美術の研究と米国への紹介、イェール大学の朝河貢一やハーヴァード大学のエドウィン・ライシャワーの歴史研究、またドナルド・キーン博士の古典文学研究など、すばらしい成果をあげてきました。しかし、近年、米国における日本研究の拠点及び研究者の数は減っており、特に人文学、社会科学の領域において日本研究の後退の兆しが危惧されるようになってきました。	Enlargement

5. アウトリーチ活動、その他

5. アウトリーチ活動、そのほか

5-1, グレーター東大塾『アジアの新しい形を構想する』の実施 資料(7)パンフレット

本講座では、インド、インドネシア、ベトナム、ミャンマーという様々な国々を取り上げ、アジアの発展を歴史的スパンで捉えなおし、参加者全員の討議を通じて「新しいアジアの形」を展望した。

〔講義の概要〕

名目 GDP で日本が中国に「追い越された」こと自体には何の意味もないが、それは、日本経済が成熟期から収縮期に向かっており、再び GDP 競争に参戦することは日本の進むべき道ではないことを象徴的に示している。明治維新以降の日本の経済発展を眺めてみると、高度成長期は異常な時期であり、その時期に作られた楽観的な成長シナリオに基づく制度は将来に亘って持続可能であるはずはなく、「失われた 20 年」と呼ばれる停滞は、その制度から脱却し、新しい制度を模索している過程と見るべきだろう。

日本がこのような歴史的な転換点にあり、そして、かつての成長シナリオに戻ることはできないのであれば、新しい日本のあり方を構想しなければならない。それは「成長するアジアにおける日本の位置」を模索することになる。将来が過去の延長線上にないとするれば、新しい将来像は、新たな枠組みでアジアや世界を捉えなおすことを必要とする。「新しい世界史」を描くことは、日本とアジアの将来像を描く上で不可欠である。本プログラムでは、インド、インドネシア、ベトナム、ミャンマーという多様な国々を取り上げ、各国の様々な分野の最先端の研究を学ぶことを通して、アジアの発展を歴史的スパンで捉え直し、参加者全員の討議を通して「新しいアジアの形」を展望してみたい。

*塾長：古田元夫（総合文化研究科・教授）

*対象：商社、運輸業、製造業、食品産業等の社会人

*日時・期間：2012 年度冬学期、金曜日夜 19 時から 21 時半

□開催記録

2012 年 10 月 5 日（金）

第 1 回：「新しい世界史」の模索

羽田正（東京大学東洋文化研究所教授）

通常、私たちは「アジア」が存在することを当然として、世界の政治、経済や国際関係を語る。しかし、実は、アジアという空間概念は、近代の産物である。現在私たちが「アジア」ととらえる空間は、もともとあったわけではなく、作られたのである。新しい世界史は、ヨーロッパとアジアをはじめから区別するのではなく、一つの世界を想定し、その過去を描こうとする。新しい世界史の観点に立つと、現在の「アジア」という地域の過去は、どのように描けるのだろうか。参加者とともに議論して考えたい。

【講座①】：インド研究の最先端：何が変わり、どこへ向かうのか？

想像を超えた変貌を遂げるインド。何がインドを動かし、どこが変わったのか。それはいつから始まり、どこへ向かうのか。いや、それとも何も変わっていないのか。本講義では、大きく変化しつつあるかに見えるインドを世界の長期変動の中に位置づけ、と共に、インドそのものの長期変動の段階と特徴を 18 世紀から現在までを対象に経済史の視点から整理することによって、インドが進む方向を展望する。

2012 年 10 月 12 日（金）

第2回：「グローバル・エコノミーの成立とインド」

水島司（東京大学人文社会系研究科教授）

20世紀半ばを境として、地域別GDP成長率の圧倒的な伸びを示し、一人当たりGDPについても、1970年代から唯一顕著な増加を示しているアジアの動きは、リ・オリエント、アジアの復権なのか？18世紀半ばからの近代の動きは、歴史上の例外であったのか？A.G. フランクが突きつけたこの問題は、中国と並ぶアジアの雄、インドの長期変動の中で検証されなければならない。講義では、インドの近世から植民地化までの時期を対象に、グローバル・エコノミーの成立にインドがどのような役割を果たし、自らどう変化したのかを、農村構造、綿業、東西交易、植民地都市の成長をとりあげて論ずる。そして、18世紀から現在、そして将来に及ぶ世界の構造変化の方向と、そこにおけるアジアやインドの位置について議論したい。

2012年10月19日（金）

第3回：「植民地化とインド社会の変容」

水島司（東京大学人文社会系研究科教授）

近世のインド社会の変動は、植民地化とどうつながったのか？植民地化は、どのような意味をもっていたのか？講義では、はじめに、開発、アジア的専制論、私的所有の意味、空間の切片化をテーマにして、この問題を考える。続いて、植民地化という経済的な搾取とされる状況の中で、なぜ耕地も人口も増えたのかという問題を、農村構造、税負担、商人の動向と連関させて論ずる。最後に、人口や耕地の拡大が招いた飢饉や生産の不安定さの問題をどう評価するかという問題を議論する。

2012年11月2日（金）

第4回：「都市のインパクト：インドはどこへ向かうのか」

水島司（東京大学人文社会系研究科教授）

インド農村は、耕地拡大の限界と人口爆発の問題にどのように対処したのか？緑の革命はどう評価すべきなのか？劇的な都市の拡大は、農村にどのようなインパクトを与えているのか？農村と都市との連関の中で、家族関係、教育への取り組み、カースト間関係、階層格差はどう動いているのか？講義では、これらの問題を具体的なデータに基づき検討し、最後に、21世紀のインドの役割と、それに対する日本の対応について議論したい。

【講座②】：ベトナム

フランスからの独立、ベトナム戦争と共産主義経済の混乱の後、1986年のドイモイ政策への転換によって経済開放と市場経済化を進め、ベトナムは目覚ましい経済成長を遂げてきた。米の輸出ではタイを抜いて世界第1位になると言われているし、コーヒーなどの一次産品でも世界の主要な輸出国となっている。その優秀な労働力と、安定した政治・社会、日本・中国・ASEANに近いという地理的優位性により、中国への一極集中を避け、投資リスクを分散させるという「チャイナプラスワン」の有力候補として注目を浴びている。この背景で何が起きているのかを、社会、コーヒー、外交の面から見ていく。

2012年11月12日（月）

第5回：ベトナムの歴史・文化・社会—異質の併存と社会の活気

古田元夫（東京大学総合文化研究科教授）

20 世紀の反植民地民族解放運動の旗手でありながら、コロニアルな遺産を自らの誇りとする国、20 世紀には対立する概念だった資本主義と社会主義を「共存」させようとするドイモイの試み、伝統的な漢字文化圏にありながら、文字をローマ字化した唯一の国など、ベトナムの魅力を「異質の併存」に見出しつつ、国家を圧倒する社会の活力という面からベトナム社会の特徴を考える。

2012 年 11 月 15 日（木）

第 6 回：ベトナム・コーヒーから見るグローバル経済と世界の貧困問題

池本幸生（東京大学東洋文化研究所教授）

ベトナムは 1990 年代に世界第 2 位のコーヒー輸出国に発展した。しかし、そのことが 2000 年代初めに世界のコーヒー価格の大暴落をもたらし、世界中のコーヒー生産者が貧困にあえぐ「コーヒー危機」と呼ばれる状況をもたらすひとつの要因となったとしてベトナムは非難された。なぜそれほど急激にコーヒー生産を伸ばすことができたのだろうか。コーヒーというグローバルな商品を通して、グローバル経済のインパクトが地方のコーヒー生産者にまで届く様子、それがもたらす貧困と環境問題、それを克服するための様々な国際的な支援と努力について考える。

2012 年 11 月 30 日（金）

第 7 回：ベトナムの外交とアイデンティティ

古田元夫（東京大学総合文化研究科教授）

ドイモイ時代の全方位外交は、ベトナムをめぐる国際環境の大幅な好転をもたらした。中でもかつて対立していた ASEAN（東南アジア諸国連合）にベトナムが加盟したことは、ベトナムの国際的地位を安定させただけでなく、ASEAN 自体の国際的役割を増大させた。こうして「東南アジアの一員」となったベトナムは、一方で、その個性を生かした発展のためには、かつては漢字文化圏、東アジア世界の一員であったという伝統を想起すべきだ、という声が国内で強まっており、漢字教育復活論なども提唱されるようになっている。現在のベトナムを世界の中でどう位置付けるのか、そのアイデンティティをめぐる葛藤を検討する。

【講座③】：インドネシア経済発展の軌跡とプランテーション産業の変遷

20 世紀末のアジア経済危機の打撃とそれに続く政変劇をくぐり抜けたインドネシアは、21 世紀に入ってから年率平均 6 % を越える安定した経済成長を続け、その潜在力に世界の注目が集まっている。しかしその成長の中身を見ると、東アジア、東南アジアの他の新興諸国とは対照的に、いわゆる輸出指向工業化とはかなり異なるパターンが見いだされる。注目されるのは、工業製品以上に新しいタイプの一次産品輸出が好調であること、また内需が旺盛で、国内総生産（GDP）に対する輸出額の比率つまり輸出依存度に低下の傾向が見られることだ。この講座では、このような経済発展の軌跡を 19 世紀後半からの近現代経済史全体の歴史的過程のなかで位置づけたうえで、一次産品輸出の主な担い手であるプランテーション産業の歴史と現状を、いくつかの産品に即して明らかにしたい。

2012 年 12 月 7 日（金）

第 8 回：インドネシア近現代経済史概論

加納啓良（京都大学名誉教授）

19 世紀半ばから現在までのインドネシア経済の歴史的変化を、まず主な輸出産業の変遷という視点から整理する。次に、人口成長と米を中心とする食糧生産の長期的推移を眺め、それが輸出産業の変遷とどう関連しているかを検討する。最後に、過去数十年間の人口構成、労働人口の産業部門別学歴

別構成の変化、都市人口と家族構成の変化などを検討して社会経済構造がどう変わってきたかを押さえたうえで、21世紀に入ってから経済成長のパターンの特徴をいくつかの基礎的統計データを示しながら説明する。

2012年12月14日（金）

第9回：世界経済とインドネシアの主要輸出品の盛衰（1）：コーヒー、砂糖、米

加納啓良（京都大学名誉教授）

かつてオランダ領植民地であったインドネシアで19世紀半ばまで最も重要な輸出品であったコーヒーの生産が19世紀末から20世紀初めにかけていったん衰退したあと徐々に復活し、世界第4位の輸出国の地位を確保するに至った経過を検討する。次に、19世紀後半から最重要輸出品になった砂糖が1910～20年代の繁栄を経て1930年代には大きく後退し、独立後1970年代からは増産を続けたにもかかわらず輸出競争力をなくして砂糖輸入国に転じた過程を振り返ってその意味を考える。1860年代までインドネシア（ジャワ）は東南アジア最大の米輸出地域だったがプランテーション産業発達と裏腹に1870年代から米輸入国に変わったこと、独立後は「緑の革命」により米の大増産を達成したが依然米輸入は続いていること、そしてそれはなぜなのかを検討する。

2012年12月21日（金）

第10回：世界経済とインドネシアの主要輸出品の盛衰（2）：ゴムとアブラヤシ

加納啓良（京都大学名誉教授）

隣国であった英領マラヤの後を追いついて1910年代から急増したインドネシア（当時はオランダ領東インド）の天然ゴム生産は1930年代には最重要輸出産業となり、独立後も1960年代初めまでその地位を保った。1960年代後半からは石油が最重要輸出品となり、天然ゴムは合成ゴムとの競争に押されて国際価格も低迷したが、1990年代からふたたび世界的需要が急増し成長産業としての地位を回復した。それは、世界経済全体の構造変化とどう関連しているのかを観察する。ゴム以上に近年成長が目覚ましいのが、1970年代にマレーシアで増産が始まり1980年代からはインドネシアにもそれが波及したアブラヤシの栽培とそれを原料とするパーム油の輸出である。現在、インドネシアはマレーシアを抜き世界一のアブラヤシ生産国となった。その過程と歴史的意味を、やはり世界的視野から検討する。

【講座④】：ミャンマー

ミャンマーでは1988年のクーデター以来「軍政」が続いていたが、2008年の憲法制定、2010年の総選挙を経て「民政」に移行した。さらに2012年4月、軍政下で自宅軟禁が続いていたアウンサンスーチー氏が国会議員に当選し、民主化そして同時並行して経済の自由化が雪崩を打ったように進展し始めた。本講義では、こうした変化の背景と現状および今後の展望を経済問題—特に人口の大半を占める農村・農業問題—を中心に議論していく。

2013年1月11日（金）

第11回：ビルマとミャンマー—政治経済体制の変容—

高橋昭雄（東京大学東洋文化研究所教授）

独立後から社会主義を志向し、ビルマ式社会主義という特殊な体制を続けてきたミャンマー。体制はなぜ行き詰ったのか、ビルマからミャンマーへの国名変更にはどんな意味があるのか、1988年以降の軍政は社会主義を放棄したのか、現在進行中の民主化と経済自由化はどんな意味を持つのか、といった視点から、ミャンマーの政治経済史を検討する。

2013 年 1 月 17 日（木）

第 12 回：ミャンマーの経済と農業

高橋昭雄（東京大学東洋文化研究所教授）

ミャンマーの農業部門は国民総生産、労働人口、農村居住人口といった指標で見ると、国民経済の大層を占め、ミャンマー経済の屋台骨を背負ってきた。ミャンマーの農業といえば、平原やデルタが直ぐに想起されるが、それだけではない多様な側面を持っている。また重要産業であるがために経済体制に大きく作用されてきた。ミャンマー農業の地域構造、経済体制と農業との関係、農業技術体系の発展といった観点から、ミャンマーの農業と経済を考える。

2013 年 1 月 24 日（木）

第 13 回：ミャンマー農村の実像

高橋昭雄（東京大学東洋文化研究所教授）

2010 年の総選挙以降、ミャンマーは突然世界の注目を集めるようになった。今後欧米の経済制裁が解かれる中、堰を切ったように外国資本が流入し、農業から商工業へ、農村から都市へ、大規模な人口移動が起こるであろう。ではどのような人々が村から町に出てくるのか。6000 万人口の 4 分の 3 が居住する農村部は依然として報道も注目もされないブラックボックスである。ミャンマーの農村社会構造にはどのような特徴があるのか、日本の村との違いはどこにあるのか、村人の価値観はどのようなものであるか、といった視座から、ミャンマー農村社会の実像に迫る。

2013 年 2 月 8 日（金）

第 14 回：アジアを巡る国際政治

田中明彦（独立行政法人国際協力機構理事長・東京大学東洋文化研究所委嘱教授）

2013 年 2 月 15 日（金）

第 15 回：総合討論：新しいアジアの形、日本の役割

5-2, ASNET 特別セミナー

ASNET では共催セミナーのほかに、特別セミナーと題して以下の企画を実施した。

○英語論文の書き方セミナー

ASNET特別企画 

英語論文の書き方セミナー

ASNETでは、このたび、「英文校正エディテージ」の協力を得て、
英語論文の書き方セミナーを開催することになりました。
下記要領でご登録の上、ぜひご参加ください。

- ◆ 日 時: 2013年5月29日(水) 15:00-17:00
- ◆ 会 場: 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3F 大会議室
- ◆ 講 師: ミリンダ・ハル氏 (ニューヨーク州立大学・言語学専攻卒。1985年以来、日本で英語指導に従事。現在は東京大学医学部 非常勤講師、東京工業大学特任准教授)
- ◆ 内 容: 英語論文を書く前に必要な準備と心構え、英語論文の構成方法、日本人研究者の英語論文を用いた事例研究
- ◆ 参加費: 無料(要申込)
- ◆ 登録方法: ①氏名 ②所属・身分 ③メールアドレスを明記の上、「英語論文の書き方セミナー参加希望」の旨を asnet@asnet.u-tokyo.ac.jp までメールにてご連絡ください。
- ◆ お問い合わせ: 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク事務局
電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加いただけます。お昼のお昼食をお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>



「英文校正エディテージ」の協力を得て、英語論文の書き方セミナーを開催しました。

【日 時】 2013年5月29日(水) 15:00-17:00

【会 場】 東京大学 東洋文化研究所 3階 大会議室

【講 師】 ミリンダ・ハル氏

(ニューヨーク州立大学・言語学専攻卒。

1985年以来、日本で英語指導に従事。

現在は東京大学医学部 非常勤講師、

東京工業大学特任准教授)

【内 容】① 英語論文を書く前に必要な準備と心構え

② 英語論文の構成方法

③ 日本人研究者の英語論文を用いた事例研究

【参加費】 無料 (要登録)

○アジアを知るー インドネシアのドキュメンタリー映画 『オトコと鳩』 から

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

アジアを知る

インドネシアのドキュメンタリー映画『オトコと鳩』から



舞台はインドネシアのジャワ島。数千のイスラム教徒の男たちが、鳩の入った籠を抱えて集まってくる。競技開始の合図とともに男達は地面から7メートルの位置にある鳩の籠をゆすり始める。審判を魅了する美しい鳴き声を出させようとするのだ。ドキュメンタリーを撮る二人の監督の視線を通じ、映画では、インドネシア社会やジェンダー、宗教に関わる問題に光が当てられる。

◆ 日 時： 2013年 10月 3日 (木) 17:00-19:00

◆ 会 場： 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3F 大会議室

◆ プログラム： 17:00 「インドネシアを知るために」 高地薫 (東京大学)
17:30 ドキュメンタリー映画『オトコと鳩 ManDove』上映
(Jim de Sève & Kian Tjong 監督、2012年)
18:30 両監督を交えての議論

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは毎週本曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでも参加頂けます。資料のお越しをお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia

東大ASNET ASNET

＜Tobunken/ASNET Seminar＞

Knowing Asia

Indonesian Documentary Film MANDOVE



When the opening of the Championship is announced, thousands of Muslim men arrive at the grounds. Seven hundred poles stand in the center. Men hoist their doves seven meters up and dangle them in a sea of colorful cages, waiting to hear the birds' coos. In a travelogue of two filmmakers, this film highlights some of the critical issues related to the Indonesian society and the beyond.

◆ Date : October 3 (Thursday) 17:00-19:00

◆ Venue : Main Conference Room, 3rd floor, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, Japan

◆ Program : 17:00 "Knowing Indonesia" Kaoru Kochi (Lecture in Japanese)
17:30 Screening of MANDOVE (2012)
18:30 Discussion with directors, Jim de Sève & Kian Tjong

Tobunken/ASNET Seminar

IASA (Tobunken) and ASNET organize collaborated seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia

東大ASNET ASNET

インドネシアを舞台とした映画の上映を行いました。事前にインドネシア研究者の高地薫氏の概説を聞き、映画の視聴後に二人の監督とのQ&Aを行ったことで映画がより面白くなりました。また、いろいろな受け止め方、そしていろいろな解釈をしてもらいたいと願いながら作った」という監督の言葉通り、開かれた映画で議論も弾みしました。

【日 時】 2013年 10月 3日 (木) 17:00-19:00

【会 場】 東京大学 東洋文化研究所 3階 大会議室

【題 名】 アジアを知るー インドネシアのドキュメンタリー映画 『オトコと鳩』 から

舞台はインドネシアのジャワ島。数千の男たちが、鳩の入った籠を抱えて集まってくる。競技開始の合図とともに男達は地面から7メートルの位置にある鳩の籠をゆすり始める。審判を魅了する美しい鳴き声を出させようとするのだ。ドキュメンタリーを撮る二人の監督の視線を通じ、映画では、インドネシア社会やジェンダー、宗教に関わる問題に光が当てられる。

【プログラム】

17:00 「インドネシアを知るために」 高地薫 (東京大学)

17:30 ドキュメンタリー映画 『オトコと鳩』 上映

監督 Jim de Sève & Kian Tjong

インドネシア語・英語 (英語字幕付き)、65分、2012年

18:30 両監督を交えての議論

資 料

総長室総括委員会組織図

H26.4.8

総長室(東大基本組織規則第13条第2項)

総長室総括委員会

(構成)

委員長
：副学長

委員
：副学長 2 名以上
教育研究部局の長 7 名以上
総括プロジェクト機構の長

(任務)

- 総括プロジェクト機構に対するもの
・管理・運営、教員選考等
- 総括プロジェクト機構以外の各機構に対するもの
・管理運営体制の確認など共通的事項及び機構の教員選考等
- 東京大学基本組織規則第13条及び第18条の規定に基づき設置された各室等の教員選考等
- 東京大学基本組織規則第21条に定める全学センターの設置、廃止等の審議(専門委員会)

(専門委員会)

評価委員会

教員選考委員会

(構成)

- 総括委員会委員(若干名)
- 関係の室の教授(若干名)

室、総括プロジェクト機構、機構等の教員選考を実施

管理・運営に関する事項の審議

総括プロジェクト機構(機構長は総長が任命)

寄付研究部門

・「食と生命」総括寄付講座

H21.06.01 - H28.05.31
農学生命科学研究科(事務部)

・「プラチナ社会」総括寄付講座

H24.04.01 - H29.03.31
工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

・「航空イノベーション」総括寄付講座

H21.08.01 - H26.07.31
工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

・「電力ネットワークイノベーション(デジタルグリッド)」総括寄付講座

H24.06.01 - H29.05.31
工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

・「太陽光を軸とした持続可能グローバルエネルギーシステム」総括寄付講座

H22.11.01 - H27.10.31
工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

学内研究連携ユニット

- ・現代ヨーロッパ経済史(CHEESE)研究連携ユニット
- ・先端地球物質科学研究連携ユニット
- ・生命・医療倫理科学研究連携ユニット
- ・東大水フォーラム研究連携ユニット
- ・死生学研究連携ユニット
- ・NMR利用研究連携ユニット
- ・航空イノベーション研究連携ユニット
- ・「疾患分子工学」研究連携ユニット

- ・発達知研究連携ユニット
- ・サービスイノベーション研究連携ユニット
- ・戸田御浜再生プロジェクト研究連携ユニット
- ・現代中国研究連携ユニット
- ・脳神経倫理研究連携ユニット
- ・構造生物学研究連携ユニット
- ・知識情報マネジメント研究連携ユニット
- ・磁気力場研究連携ユニット

管理運営体制の確認など共通的事項の審議

地球観測データ統合連携研究機構(EDITORIA)

H18.04設置 生産技術研究所(事務部)

放射光連携研究機構

H18.04設置 物性研究所(事務部)・分子細胞生物学研究所(事務部)
工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

創薬オープンイノベーションセンター

H18.06設置 薬学系研究科(事務部)

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構

H18.10設置 生産技術研究所(事務部)

知の構造化センター(ネットワーク)

H19.05設置 工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

海洋アライアンス

H19.07設置 理学系研究科(理学系研究科等事務部)

トランスレーショナル・リサーチ・イニシアティブ

H19.07設置 医学部附属病院(事務部)・医学科学研究所(事務部)

IRT研究機構

H20.03設置 情報理工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

大学発教育支援コンソーシアム推進機構

H20.11設置 大学総合教育研究センター(本部学務課)

高齢社会総合研究機構

H21.04設置 工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

生命科学ネットワーク

H21.04設置 総合文化研究科(教養学部等事務部)

フューチャーセンター推進機構

H21.04設置 新領域創成科学研究科(事務部)

海洋基礎生物学研究推進センター

H21.06設置 理学系研究科(理学系研究科等事務部)

マイクロ・ナノ多機能デバイス研究ネットワーク

H21.07設置 工学系研究科(工学系・情報理工学系等事務部)

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

H22.04設置 東洋文化研究所(事務部)

文書館

H26.04設置 本部総務課

東大基本組織規則第18条の規則に基づき設置された室

- ・国際本部
- ・環境安全本部
- ・調達本部
- ・財務戦略室
- ・キャンパス計画室
- ・教育企画室
- ・広報室
- ・評価支援室
- ・バリアフリー支援室
- ・業務改革推進室
- ・監査室
- ・情報システム本部
- ・産学連携本部
- ・渉外本部
- ・卒業生室
- ・男女共同参画室
- ・研究費適正管理推進室
- ・学生相談ネットワーク本部
- ・サステナブルキャンパスプロジェクト室
- ・エグゼクティブ・マネジメントプログラム室
- ・ライフサイエンス研究倫理支援室
- ・保健・健康推進本部
- ・国際化推進学部入試担当室
- ・入試企画室
- ・安全保障輸出管理支援室
- ・リサーチアドミニストレーター推進室
- ・総合技術本部
- ・グローバルリーダー育成プログラム推進室
- ・ハラスメント相談所
- ・事業推進グループ
- ・研究倫理推進室

計31室

平成 21 年 10 月 29 日
総 長 裁 定

(趣旨)

第1条 この内規は、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（以下「本ネットワーク」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(目的)

第2条 本ネットワークは、地域やディシプリンを問わず、広く日本・アジアと接点をもつ教育・研究に従事する人のネットワークを構築し、これに伴い研究者間の協力及び交流を活性化し、日本を含むアジアに関わる新しい教育及び研究を創出することにより、東京大学における教育・研究とアジア諸国との友好の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 本ネットワークにおいては、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 日本・アジアに関する研究の学際的推進
- (2) アジア地域を俯瞰的視野から理解する人材育成を目的とした教育プログラムの運営
- (3) 日本・アジアに関する研究者のデータベース構築
- (4) 日本・アジアに関する人の交流促進
- (5) 日本・アジアに関する情報の交換
- (6) 日本・アジアに関する全学的なシンポジウムの開催
- (7) その他前条の目的達成のために必要な業務

(組織等)

第4条 本ネットワークに、専任教員、兼任教員、特任教員、事務職員、特任専門員等を置くことができる。

2 前項の専任教員及び特任教員の選考は、東京大学総長室総括委員会が行う。

(ネットワーク長)

第5条 本ネットワークに、ネットワーク長を置く。

- 2 ネットワーク長は、本学の教員のうちから、総長が指名する。
- 3 ネットワーク長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(副ネットワーク長)

第6条 本ネットワークに、副ネットワーク長を置くことができる。

- 2 副ネットワーク長は、本学の教員のうちから、ネットワーク長が指名する。
- 3 副ネットワーク長は、ネットワーク長を補佐するものとし、ネットワーク長に事故があるときはその職務を代理する。
- 4 副ネットワーク長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営委員会)

第7条 本ネットワークに、その管理及び運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

- 2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第8条 本ネットワークに関する事務は、東洋文化研究所事務部で行う。

(補則)

第9条 この内規に定めるもののほか、機構の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この内規は、平成22年4月1日から施行する。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク運営委員会要項

平成 22 年 4 月 1 日
日本・アジアに関する教育
研究ネットワーク長 裁定

(趣旨)

第 1 この要項は、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク内規第 7 条第 2 項に基づき、日本・アジアに関する教育研究ネットワーク運営委員会（以下「委員会」という。）の運営に関して必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第 2 委員会は、日本・アジアに関する教育研究ネットワークの管理及び運営に関する事項を審議する。

(組織)

第 3 委員会は、委員長及び委員をもって組織する。

(委員長)

第 4 委員長は、日本・アジアに関する教育研究ネットワーク長（以下「ネットワーク長」という。）をもって充てる。

第 5 委員長は、委員会を招集し、会務を統括する。

(委員)

第 6 委員は、次の各号に掲げる者にネットワーク長が委嘱する。

(1) 各研究科、及び各研究部推薦の教授又は准教授 各 1 名

(2) 附置研究所推薦の教授又は准教授 若干名

(3) その他ネットワーク長が必要と認めた者 若干名

第 7 委員の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

第 8 委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(庶務)

第 9 委員会の庶務は、東洋文化研究所総務チームにおいて処理する。

(その他)

第 10 この要項に定めるもののほか、委員会の運営に関して必要な事項は、委員会の定めるところによる。

附 則

1. この要項は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

2. この要項の施行に伴い、ASNET 運営委員会要項（平成 17 年 12 月 1 日国際連携本部長通知）は廃止する。ただし、本要項の施行日の前日に、ASNET 運営委員会要項第 6 に定める委員であった者の施行日以後の任期は、従前の任期を引き継ぐものとする。



ASNET
Asian Studies Network
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

東京大学全学研究科等横断型教育プログラム

日本・アジア学

平成22年度シラバス

Japan-Asian Studies Program
Academic Year 2010-2011

参加資格
Eligibility

東京大学の大学院生
(所属研究科・教育部は問いません)
All University of Tokyo students
(Regardless of graduate school or educational department)

修了要件
Completion
criteria

12単位
(言語科目群は4単位まで)
12 credits
(No more than four from language-related disciplines)



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

ASNET
Asian Studies Network
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

東京大学全学研究科等横断型教育プログラム

日本・アジア学

平成23年度シラバス

Japan-Asian Studies Program

Academic Year 2011-2012



もっとアジアを
知りたい！

参加資格
Eligibility

東京大学の大学院生
(所属研究科・教育部は問いません)

All University of Tokyo students
(Regardless of graduate school or educational department)

修了要件
Completion
criteria

12単位
(言語科目群は4単位まで)

12 credits
(No more than four from language-related disciplines)

修了証
Certificate
of Program
Completion

東京大学が授与する
正式な修了証

Certificate formally awarded
by University of Tokyo

そんな想いをもつあなたに。

「日本・アジア学」教育プログラムは、
文系・理系を問わず、激動するアジアを広く、
そして深く知ることができるカリキュラムです。

Students voice

生徒の声

●受講生／田口純子

●所 属／大学院工学系研究科建築学専攻修士課程
村松伸研究室

私は、修士課程の2009、2010年度にかけて「日本・アジア学」を履修し、総論、社会技術論、自然環境論など、様々な分野の講義を受けました。自身が建築や都市を学びながら、現代の国際社会や環境というものを総合的に捉える必要を感じたことから、全学研究科等横断型教育プログラムという形で講義を履修できたことは非常に良い機会でした。今、私たちに求められることは、アジアをはじめとした広域の社会や環境に向き合うこと、そして、専門領域の知識の深化のみならず、学問領域を超えた知の集積に向き合うことだと思います。学生がより広い視野を養う機会として、「日本・アジア学」が今後も発展を続けることを期待いたします。



留学生たちと(本人は中央)

●受講生／池北眞帆

●所 属／大学院総合文化研究科地域文化専攻
修士課程1年

本講義の受講の決め手となったのは、実際に現地でフィールドワークを経験できることだ。今回滞在したベトナム、バンメトート市では、池本先生の調査地であるコーヒー農園やエコツーリズムを行う村などを訪れた。ベトナムは初めてであったが、現地に滞在経験がある先生方のおかげで、個人ではなかなか行けない場所を訪問できた。さらに、ベトナムに行った学生の分野は多岐にわたっており、大変刺激を受けた。私は普段、スペインのムスリム移民について研究をしているが、建築、生物などの背景を持つ参加者の視点を垣間見ることができた。今夏よりスペインで1年間、調査をする予定である。今回の経験を生かして調査を行いたい。



フィールドにて

Teachers voice

先生の声

●責任教員／渡辺知保(医学系研究科・教授)

●担当科目／人類生態学特論Ⅰ
Human Ecology I

人類生態学は、ヒトの環境への適応を研究する学問であり、近年の環境問題・食料問題・人口問題の理解に基本的な知見を提供する学問分野として期待されている。本講義では、「人間活動が環境に及ぼすインパクト」と「インパクトを受けた環境から人間自身が受けた影響」という人間-環境系の複雑な関わりを人口統計学や栄養学、環境保健学、精神毒性学、生態学を切り口に読み解いていく。



アジア・オセアニア地域において進む近代化や都市化、人口増加、自然環境の劣化、医療技術の発展、健康転換の現状とその解決策を多面的な視点から理解したい学生の受講を歓迎します。我われ人類が直面する課題をともに考えましょう。

●責任教員／大黒俊哉(農学生命科学研究科・准教授)

●担当科目／里山学総論
Satoyama, the traditional rural landscape of Japan

本講義では、長い間日本人の暮らしの場であった「里山」を対象に、自然と人間のダイナミックな関係の変遷、多様な生きものが暮らせるしくみ、そして里山の将来(はあるか?)について、生態学、緑地環境学、農村計画学、社会学、人類生態学など、多様な学問領域からのアプローチによって紐解いてゆき、自然共生社会を拓く「自然との共生の智慧」を皆さんとともに考えていきます。最終日には東京近郊の里山に出かけ、「里山のいま」を実感することができます。講義はすべて英語で行いますので、留学生の皆さんの参加をとくに歓迎します。里山の問題を、アジアそしてグローバルな視点から分野や国境を越えて考えてみたい方、是非ご参加下さい！



最終日の里山巡検



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

ASNET
Asian Studies Network
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

東京大学全学研究科等横断型教育プログラム

日本・アジア学

平成24年度シラバス

Japan-Asian Studies Program

Academic Year 2012-2013



もつとアジアを
知りたい！

参加資格
Eligibility

東京大学の大学院生
(所属研究科・教育部は問いません)

All University of Tokyo students
(Regardless of graduate school or educational department)

修了要件
Completion
criteria

12単位
(言語科目群は4単位まで)

12 credits
(No more than four from language-related disciplines)

修了証
Certificate
of Program
Completion

東京大学が授与する
正式な修了証

Certificate formally awarded
by University of Tokyo

そんな想いをもつあなたに。

「日本・アジア学」教育プログラムは、
文系・理系を問わず、激動するアジアを広く、
そして深く知ることができるカリキュラムです。

受講生の声

●受講生／大場 寛之

●所 属／農学生命科学研究科

私はインドネシアをフィールドに、人びとの生業の変化と社会関係のあり方について研究しています。自分がフィールドで得た知見がどのように地域固有のものなのか、相対的に捉えることができるよう、修士1年次は、アジア諸国で起きているさまざまな事象を広範に学べる科目を履修したいと考えていました。科目選択の際、一般的に農学など「分野」で科目が紐づけられているのに対し、ここではアジアという「地域」を軸として構成されていたことが、「多様な側面から切り取ることでアジアを知りたい」そんな自分の想いにマッチし、プログラム履修しました。講義を受けた後に国内外でフィールド調査を経験できる科目もあり、非常に魅力的なプログラムです。

●受講生／波多野 綾子

●所 属／法学政治学研究科

私は、法学政治学研究科の修士課程（法曹養成専攻）のコースを取りながら、2009～2011年にかけて「日本・アジア学」のコースを履修し、メディア、環境、経済、哲学など様々な講義を受講しました。専門研究科で日本の法律を実体法を中心に学びつつも、アジアの国際関係や環境問題、法整備支援に関心があった私にとって、「日本・アジア学」は素晴らしいコースでした。「アジアの環境課題とリーダーシップ」の授業では、アジアをはじめ世界各国からの留学生と環境問題についての議論が出来ました。「アジア環境研究の最前線」では、他ではなかなか受講の機会のない各分野の気鋭の先生方に、日本やアジアの環境問題について講義いただきました。里山の問題などでは土地の所有権について現実に起きている法的問題を考えることもできました。私たちが生きる日本は、必然的にアジアの国々、気候、文化と密接な関連をもっています。アジアという地域ときちんと向き合い、ともに生きるために、専門領域の知識を深めるのみならず、専門領域を超えた学際的視点が今必要とされているのではないのでしょうか。

●受講生／Robert Baum

●所 属／Graduate School of Engineering

My name is Robert Baum, I am from Germany. During my three years as a student of architecture in the doctor course at Tokyo University I participated in seven courses offered under the umbrella of the Japan-Asian Studies Program at five different graduate schools. The program is a great opportunity to look beyond the knowledge base of one's own subject and field, it is a truly interdisciplinary learning approach not limited to but based on a wider Asian background. As a foreign student with limited Japanese language ability I especially appreciate that a number of courses are offered in English, enough to fulfill the requirement for a successful completion of the program. Furthermore, the courses offered are a healthy mixture of full semester courses once every week and intensive short-term courses that can be taken in the semester break period. Many courses are some kind of lecture series presented by changing speakers, ensuring a varied presentation of different points of view on a common topic. I regret that I didn't have the time to benefit from the large number of language courses offered. However, very memorable for me is the course 'Satoyama', that included a field trip to a satoyama like NPO in Yokohama. The theoretical knowledge presented with lectures and discussions was perfectly combined with hands-on experience and impressions from a real case in this course.



the field trip to Niiharu Citizen's Forest in Yokohama

●受講生／李 依真

●所 属／総合文化研究科

透过切身的实习来体会田野调查的微妙，是本学期我选修这门课的主因。这门课的特点在于老师不受理论制约、藉由分析个案直接切入研究核心。作为基础训练、老师教导我们从多样



中国海南島にて

的现象中整理出合理的逻辑、从繁琐的讯息里挖掘潜在的动因、其活泼生动的内容令人惊叹连连。而实际走访海南岛、深入中国少数民族(黎族)的村落、在临场与村民的互动中展开访谈、更是妙趣横生。在田野调查中所遇到的意外与冲击、都将成为理解与把握该地情况的重要线索、先将自己掏空虚心接受意外的洗礼、原来是田野调查的不二法门、这是在本学期的课程中我学习到最宝贵的经验。



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

平成25年度シラバス

東京大学全学研究科等横断型教育プログラム

日本・アジア学

Japan-Asian Studies Program

Academic Year 2013-2014

参加資格
Eligibility

東京大学の大学院生
(所属研究科・教育部は問いません)
All University of Tokyo students
(Regardless of graduate school or educational department)

修了要件
Completion
criteria

12単位
(言語科目群は4単位まで)
12 credits
(No more than four from language-related disciplines)

修了証
Certificate
of Program
Completion

東京大学が授与する
正式な修了証
Certificate formally awarded
by University of Tokyo

「日本・アジア学」教育プログラムは、
文系・理系を問わず、激動するアジアを広く、
そして深く知ることができるカリキュラムです。

アジアを生き抜くために。



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia

受講生の声

●受講生／鈴木 啓之

●所 属／総合文化研究科

「真剣に向き合うとはどういうことか」を学ぶ機会であったと思います。私が受講した「アジア研究のフィールドワーク」は、文字通り身体を動かして学び取る講座でした。フィールドワークといえばペンとノートでひたすら地道に記録を取るのだろうという先入観は完全に崩れ、最新のGPS機器やソフトを活用した演習、さまざまな先生方による対話型のレクチャーが刺激的でした。また、最後のフィールド実習では、人やモノと全身全霊で対話しながら問いを建てていく苦しさも経験しました。偏見や先入観のもとだと否定的に考えてきた「(自分にとっての)当たり前」という感覚が、この講座を通じて時に最も有益な羅針盤になることに気づかされたと思います。



研究で訪れたヨルダンの首都アンマンにて

●受講生／新谷 春乃

●所 属／総合文化研究科

私は、総合文化研究科の地域文化研究専攻の修士課程に在籍しつつ、2011年から2012年にかけて「日本・アジア学」のコースを履修しました。「日本・アジア学」は、アジアという広がりを様々な専門分野を通して学際的に学ぶことができるコースです。私自身、専門である文献資料を主に対象としたカンボジア研究という枠組みを超えて、講義を履修してきました。「アジア研究のフィールドワーク」では、座学だけではなく多様な専門の学生や留学生と共にベトナムで研修することを通し、現場を見る目を養うことができました。「第二次世界大戦後の日本のアジア認識」では、日本人のアジアへのまなざしの歴史的変遷を追うことで、アジア研究の背後にある研究者の意識や、研究の時代性を学ぶことができました。アジアという視点は、今日日本で生きる私たちにとって欠かすことのできないものです。自らの専門を超え、アジアを学ぶ自らも相対化しつつ、学際的にアジアを理解する力が今求められていると思います。



カンボジアでの聞き取り調査にて

●受講生／张予思

●所 属／学际情报学府 学际情报学专业

不论是研究题目、工作志向及个人兴趣，“日本・亚洲学”都是契合我的需要的一门讲座。我选修了包括亚洲经济、亚洲自然共生论、中东研究、民俗学、地域文化研究特别讲义（田间调查）等课程，还获得了去中国海南岛黎族地区及越南进行田间调查的宝贵体验。

“日本・亚洲学”首先让我在自己感兴趣的题目下体验到了真正的“跨学科”。在各学科教授的指导下，与各国的同学一起就亚洲的问题学习讨论、进行田间调查，更是难得的经历。

并且，“日本・亚洲学”让我更加理解亚洲，也让我深刻的感受到，就算是自己的祖国，我的了解也远远不够。而在此接触到的亚洲自然环境、乡村发展等议题，则为我指出了一条新鲜且值得追寻的道路。



海南島リー族の村にて



東京大学全学研究科等横断型教育プログラム

平成26年度シラバス

Japan-Asian Studies Program
Academic Year 2014-2015

「日本・アジア学」教育プログラムは、
文系・理系を問わず、
激動するアジアを広く、
そして深く知ることができる
カリキュラムです。

参加資格
Eligibility

東京大学の大学院生
(所属研究科・教育部は問いません)
All graduate students of University of Tokyo
(Regardless of graduate school or educational department)

修了要件
Completion
criteria

12単位
(言語科目群は4単位まで)
12 credits
(No more than four from language-related disciplines)

修了証
Certificate
of Program
Completion

東京大学が授与する
正式な修了証
Certificate formally awarded
by University of Tokyo

アジアは広く、深い

日本・アジア学



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



「日本・アジア学」教育プログラムとは

日本を含むアジアについての教育活動を、部局と分野を超えて新たに体系化・総合化したもので、意欲ある大学院生のみなさんが、所属する研究科・教育部局固有の教育カリキュラムに加えて履修し、修了するものです。

本プログラムは、総合科目群と言語科目群に大別されます。総合科目群は、本プログラムの中核をなすもので、分野横断・部局横断のカリキュラムを通じて、日本を含むアジアについて理解を深めるものです。各研究科・教育部において正規課程の科目として実施される授業がこれに該当します。総論、社会・文化論、社会技術論、自然環境論、健康論、情報論、特論からなります。また言語科目群は、教養学部あるいは文学部の学部後期課程（3-4年生）で開講される外国語科目のうち日本・アジアと関わるものを、意欲ある大学院生が履修することを奨励するものです。

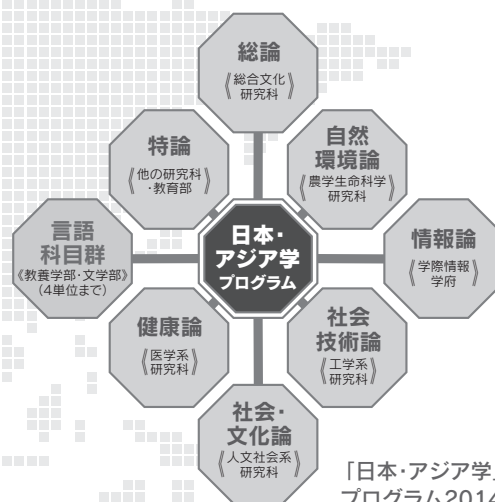
総合科目群のみから、あるいは言語科目群と総合科目群の合計で12単位以上を取得した場合に、プログラムを修了したと認定し、修了証を発行します。ただし、言語科目群から取得した単位を、修了要件の一部とする場合には、4単位を上限とします。

Japan-Asian Studies Program

The Japan-Asian Studies Program is an educational undertaking that represents a new systemization and a newly comprehensive approach to Asia, including Japan, that transcends departments and fields. It can be participated in and completed by all graduate students interested in it as a supplement to the specific educational curriculum of whatever graduate school or faculty department they belong to.

The program can be broadly divided into general and language-related subjects. The general subjects form the core of the program, and offer a deeper understanding of Asia, including Japan, by way of an interdisciplinary, interdepartmental curriculum. Classes held by each graduate school and faculty as part of its standard curriculum come under the program, which comprises Liberal Arts and Sciences, Society and Culture, Social Technology, Natural Environment, Health Sciences, Information Sciences, and Advanced Studies. Furthermore, when it comes to language-related disciplines, students who wish to do so are encouraged to take the Asian foreign language courses offered in the Undergraduate course senior division (third and fourth year) curriculum of the College of Arts and Sciences and Faculty of Letters.

In the case of a total of 12 or more credits having been gained from general theory-related disciplines only or from language-related disciplines and general theory-related disciplines, recognition will be given of course completion, and a certificate of completion will be issued. However, no more than four credits may be gained from language-related disciplines for the purposes of satisfying completion requirements.



「日本・アジア学」
プログラム2014

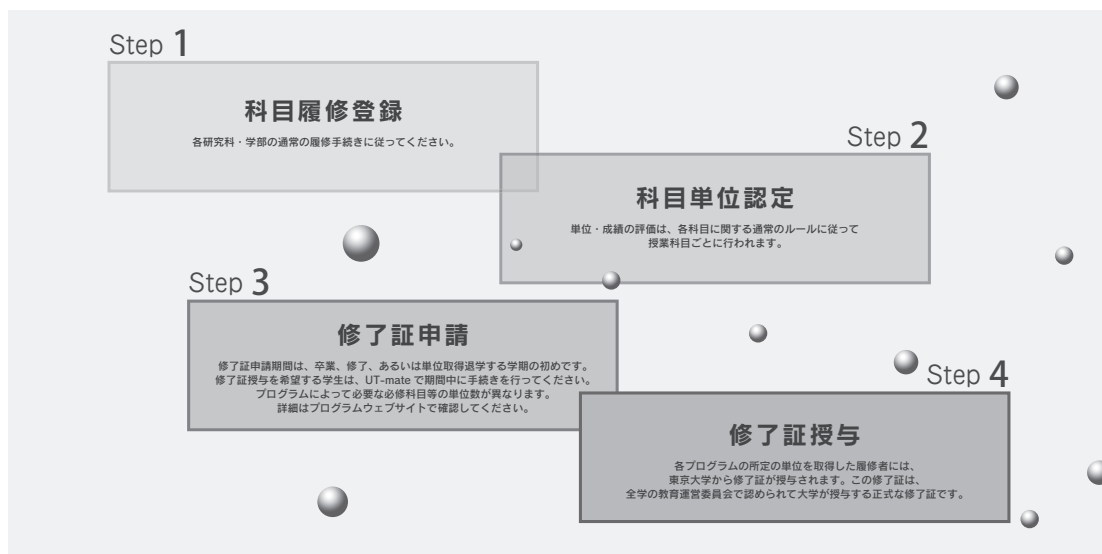
Japan-Asian
Studies Program 2014



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO



1

科目履修方法

東京大学のすべての大学院研究科・教育部に所属している学生が履修できます。修了証の取得を目的とした履修だけでなく、個々の科目のみを履修することも歓迎します。

履修にあたっては、UT-mate上で登録を行ってください。ただし、医学系研究科など、UT-mateに対応していない研究科・教育部の学生は教務課にて手続きを行ってください。

また、履修する科目が所属している研究科・教育部の科目となっていない場合には「他研究科(教育部)履修」の手続きを、また言語科目群の履修は「学部科目履修」の手続きをおこなってください。

1. Program participation: Enrolling each course

All students in the University of Tokyo's graduate schools may take part in the program. Students who take part not for the purpose of gaining a certificate of completion but only for certain courses are also welcome.

To enroll, please follow the prescribed enrolment procedures of your graduate school. In case the course you are taking is not part of the graduate school to which you belong, please complete the "Other graduate school enrolment" procedures, or, for the language-related disciplines, the "Undergraduate course enrolment" procedures.

2

プログラムへの参加

「日本・アジア学」プログラムに参加しようと考えている方は、下記のホームページで連絡先等の登録を行ってください。事務局から、適宜、連絡を受けることができます。

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6727>

2. Program participation: Enrolling the program

All students who wish to receive the Certificate of Completion are required to register at the following URL. The Managing Committee or the network office will hereafter provide you with necessary information.

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6727>

3

修了

修了要件である12単位(言語科目群からは4単位まで)を満たしたものは、課程修了前(単位取得満期退学含む)にUT-Mateにて手続きを行ってください。手続きの時期等は、各研究科の掲示板ならびにASNETのホームページにて通知されます。ただし、所属部局がUT-Mateに対応していない場合は、所属部局の大学院係・教務係に手続きを聞いてください。

3. Completion

Please submit Certificate Request through UT-Mate website, if you are able to use the UT-Mate system. Otherwise, please ask the network office. [Note: UT-Mate is at present available only in Japanese. Please contact the office if you cannot read Japanese].

4

注意事項

- 最新情報は常にホームページで確認してください。
- 何かわからないことがあれば、お気軽に事務局までご連絡ください。

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

4. Important points.

- >Please check the website regularly for information updates.
- >Please direct any inquiries to the network office.

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

受講生の声

●受講生／井堂 有子

●所 属／総合文化研究科

「アジア」を学ぶことはすなわち「日本」を振り返ること

勤務と留学で中東やアフリカ、欧州等に滞在して12年ぶりに復学した私にとって、刻々と変化する「アジア」を学ぶことはすなわち「日本」を振り返ることでもありました。

そんな私に貴重な機会を与えてくれた本講座。2013年度夏学期に『途上国農村経済論』を受講、「開かれたミャンマーの農村」と「閉ざされた日本の農村」から見えてくる多様な「農村」のあり方や、「共同体とは何か」という永遠の問いについて考えさせられました。また『日中関係』では、歴史学や経済学、社会学からの様々な日中関係の「今」を覗かせて頂きました。私の指導教官である長澤先生の『中東経済発展・政治変動と文化社会変容』も本講座の一つです。地域概念として長年議論されてきた「中東」までも含みこんでしまう伸縮自在な「アジア」。「国民国家」の枠などに飛び越えて、複合的視点とアプローチで挑んでいかねばならないことを痛感しました。ありがとうございました。



シリア北部アレッポのクルド人家族とともに
(内戦の早期終結を祈りつつ)

●受講生／笠原 慧

●所 属／新領域創成科学研究科

研究のその先にいる人々を想像できるようになった

理系（農学、生命系）の私が本プログラムを受講した意義はこれに尽きると思います。

「アジアのフィールドワーク論」「途上国農村経済論」では人間のありのままの姿を見聞きて、「アマルティア・センの正義論」「アジアでがんを生き延びる」では今まで触れたことのない多様なものの考え方を学びました。たとえ専門と直接関係ある分野では無くとも、新たな分野の学習は自分の専門を見つめなおす良いきっかけになりました。



ミャンマーの農村にて

特に印象的だったのは「途上国農村経済論」で学んだミャンマーの農村です。習ったことを確かめるべく長期休暇に訪問したのですが、「政府に抑圧されて暮らす農民」という先入観を打ち砕く、流動性の高い農村の姿がそこにはありました。「日本・アジア学」にはこのように先入観を克服するチャンスが沢山あると思います。日本に生きる者として、自分のバックグラウンドに+αで「アジア」の視点を付加することは、非常に意義のあることではないでしょうか。

●受講生／岡 美千瑠

●所 属／学際情報学府 社会情報学コース

社会人の私が感じたこと

私は社会人学生として修士課程に在籍しつつ、2013年に『日本・アジア学』を履修しました。

当該コースの魅力のひとつは、様々なバックグラウンドや国籍の学生が参加していることです。実際「里山学総論」の受講生は半数以上が留学生で、多国籍な環境での討論や共同作業はとても刺激的であるとともに、新たな視点から多様な価値観を再認識することができました。また「アジア研究のフィールドワーク論」では世界遺産登録を目指す長良川鵜飼の鵜匠に話を伺ったり、ベトナムや中国での海外調査に同行させていただきました。自分の専門分野以外の調査手法を実地で学ぶことは修士論文の貴重な教示となるとともに、そうして培われた日本・アジアに対する視点や魅力的な人との出会いは、今後の調査・研究のみならず、豊かな人生の糧になったと考えます。



ベトナムで家庭料理を手伝う



●受講生／江暉

●所 属／学際情報学府 社会情報学コース

中国古語有云，“致知在格物，物格而后知至”。

这虽是传统的儒家思想，在今天将其理解作为一种做学问做研究、追求真理的态度，亦是难能可贵的。如今，媒体的发展带来了信息的高速流通，似乎为人们认识世界提供了极大的便利。然而，在媒体构建的华丽世界里，试问有多少人疲于应付，不求甚解？例如对中国、对日本，对东南亚这些若近若远的国家和地区，我们的认识里面究竟有多少部分是似是而非、实乃自以为是的结果呢。选修《中国を見る眼》和《中国人眼里的日本论》这两门课程，给了我一个很好的机会，不仅了解到日本学者有关中国各个领域研究的最新成果，还学会如何从客观地角度来重新审视中国，思考中日间的问题。在知识积累的同时，更重要的是在研究方法论方面得到的提高。面对纷杂的社会现象，如何摒弃成见，从学术的高度加以分析说明，这是成为研究者所必需的素质，也是我今后为之努力的方向。



タイ・バンコクにて

●受講生／Karim Honein

●所 属／Graduate School of Agriculture and Life Science

My name is Karim Honein and I was a doctoral student at the University of Tokyo from 2010 to 2013. During those three years, I enlisted in the ASNET Japan-Asia graduate program and had the opportunity to attend a wide range of courses from architecture to environmental economics and history. My main incentives for joining the program were the desire of improving my knowledge of Japan and the need of taking a break from my usual lab work and research. Indeed, the program gave me the chance of learning a lot while moving away from my routine as a researcher and refreshing my mind.

The program is constructed in a way that tackles many pressing issues currently facing Japan and Asia and classes include lectures from invited speakers of different nationalities and backgrounds allowing a truly Asian approach to the problem.



Trip in Yamanashi

Finally, I enjoyed the fact that the classes offered us were not particularly tailored to meet the needs of students from different backgrounds, making it all the more challenging and interesting to attend. I strongly recommend this program for anyone looking to make the best out of his/her time as a graduate student in the University of Tokyo.

●受講生／Nong Yixin

●所 属／Graduate School of Agricultural and Life Sciences

I always believe that learn from others, we can know better about ourselves. This is reason firstly drew me to this wonderful lesson. It turned out to be one of the most rewarding experiences to me.

This lecture is nothing about the superficial phenomenon that people generally already know about China or telling student how to judge or measure China's relation with Japan. On the contrary, I got to learn about China from many perspectives, modern economy and finance, traditional education system, land reform and comparison of some typical cartoon artists between Chinese and Japan. Learning those entire inventive and fascinating topics and feeling teachers' passion at the same time, making me realize that Japan and China could never isolate to one another. However, Chinese should try to open heart and learn about Japanese culture, not only modern entertaining culture but also its traditions and essence. Another merit of the lecture is not only Japanese teacher will give us lectures, but also Chinese teacher, really giving us a broad points of view.

There are a thousand Hamlets in a thousand people's eyes. To me, this lecture is very instructive and thought provoking.

担当教員の声

- 担当教員：大黒俊哉（農学生命科学研究科）
- 講義題目：SATOYAMA 学概論（緑地創成学特論）

本講義では、長い間日本人の暮らしの場であった「里山」を対象に、自然と人間のダイナミックな関係の変遷、多様な生きものが暮らせるしくみ、そして里山の将来について、生態学、緑地環境学、農村計画学、社会学など、多様な学問領域からのアプローチによって紐解いてゆき、自然共生社会を拓く「自然との共生の智慧」を皆さんとともに考えていきます。講義だけでなく、里山巡検もあり、「里山のいま」を実感することができます。最終日には国連大学高等研究所で、同大学修士コースの学生やスタッフとともに、里山や自然共生社会をテーマとした学生プレゼンテーションと討論を行う予定です。講義はすべて英語で行いますので、留学生の皆さんの参加をとくに歓迎します。里山の問題を、アジアそしてグローバルな視点から分野や国境を越えて考えてみたい方、是非ご参加下さい！



里山巡検の様子・「森の工房」見学

- 担当教員：赤座英之（先端研）・河原ノリエ（先端研）
- 講義題目：アジアでがんを生き延びる



藤崎一郎上智大学特別招聘教授・前駐米大使と受講生「日米関係からみたアジアという構造的視点の中からアジアのがんを取り巻く状況をユニークな授業形式で学んだ」

高齢化社会に突入していく日本とアジア。がんという共通の克服課題を通して、高齢化、医療格差、社会的正義、死生観、グローバリズムとナショナリズムのねじれ、など今日的な課題が浮かび上がってくる。

本講義は、がんを医学はもとより、政治・経済・文化など様々な領域から捉えてみることを通して、外部講師の各分野の第一人者によってそれぞれの専門性のなかから、日本とアジアのありようを読み解く授業である。

受講者は、専門分野に引き寄せて各テーマごとに深掘りされていく場所に降りていくことで、自らの研究の相対化に繋がる仕掛けともなっている。

- 担当教員：卯田宗平（ASNET）
- 講義題目：中国を見る眼 2014

中国に親しみを感ずる日本人の割合が 20% を切った今日、まずは大学教育の現場から日中の相互理解を進める必要があります。本講義は、中国に関わる最新の研究成果を東京大学等の研究者の協力を得ながらオムニバス形式で学ぶものです。

具体的には、中国の農村資源管理や西部大開発、華僑、土地問題、沙漠化、出稼ぎ、土地問題、文学作品などについて、毎週 1 つのテーマを取り上げ、講義と議論を通じて考えていきたいと思います。毎回の講義後には質疑応答の時間もあります。中国がもつ多様性やさまざまな研究アプローチを学びたい学生たちの受講を歓迎します。講義の最終回には東京近郊に見学に行く予定です。

この授業を通じて、中国に関わる最新の研究成果を幅広く理解するとともに、中国と日本の将来を考察できる素養を身につけることを目指します。



日中の大学院生交流ウォーキング in 天城山

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

Contents

目次

分野	科目名	担当教員	開講学期	ページ
総論	●中国を見る眼 2014（地域文化研究特別講義Ⅰ）	卯田宗平	夏	P.07
	●アジアのフィールドワーク論（地域文化研究特別講義Ⅱ）	卯田宗平	夏	P.07
	●アジアでがんを生き延びる（地域文化研究特別講義Ⅱ）	赤座英之・河原ノリエ	夏	P.08
	●中国の環境と人類学（地域文化研究特別講義Ⅱ）	卯田宗平	冬	P.08
	●現代民俗学の可能性と課題（通文化研究基礎論Ⅰ）	菅豊	夏	P.09
	●中東の経済発展・政治変動と文化社会変容（通文化研究基礎論Ⅱ）	長澤榮治	夏	P.09
	●途上国農村経済論（アジア太平洋文化交流論Ⅱ）	高橋昭雄	夏	P.09
	●明治維新期の日本（アジア太平洋地域文化演習Ⅱ）	三谷博	夏	P.10
	●明治維新期の日本Ⅱ（アジア太平洋地域文化演習Ⅱ）	三谷博	冬	P.10
	●朝鮮半島をめぐる政治経済・国際政治（多元地域協力論Ⅰ）	木宮正史	夏	P.11
	●人間環境論Ⅱ	永田淳嗣	夏	P.11
	●サステナビリティの戦略Ⅱ	永田淳嗣	冬	P.12
	●第二次世界大戦後の日本のアジア認識（地域文化研究特殊研究Ⅰ）	古田元夫	冬	P.12
	●戦後日本社会の形成と変容（アジア太平洋文化交流論Ⅰ）	外村大	冬	P.13
社会・文化論	●書き直される中国近現代史(7)（国際社会科学特別講義Ⅳ）	川島真	冬	P.13
	●世界史研究の方法（比較アジア社会文化論演習）	羽田正	通年	P.14
	●近代アジアの開発と社会変化（比較アジア社会文化論演習）	水島司	通年	P.14
	●グローバル・ヒストリーとアジア（アジア史学演習）	水島司	通年	P.15
社会・文化論	●社会比較論（韓国朝鮮言語社会特殊研究）	本田洋	夏	P.15
	●韓国の社会人類学（韓国朝鮮言語社会特殊研究）	本田洋	冬	P.16
社会・文化論	●Advanced Lectures on Sociotechnology	HORII Hideyuki	夏	P.17
	●Case Studies of International Projects	HORII Hideyuki	冬	P.18
自然環境論	●有機農業と持続可能な発展（汎アジア経済論Ⅰ）	池本幸生	夏	P.19
	●アマルティア・センの正義論（汎アジア経済論Ⅱ）	池本幸生	冬	P.19
	●アジアの食と農・環境（農学国際特論Ⅲ / 環境政策特別講義）	井上真	集中	P.20
	●SATOYAMA 学特論（緑地創成学特論）	大黒俊哉	夏集中	P.20
健康論	●国際地域保健学特論Ⅰ	神馬征峰	夏	P.21
	●精神保健学Ⅰ	川上憲人	夏	P.22
	●精神保健学Ⅱ	島津明人	冬	P.22
	●医療コミュニケーション学講義	木内貴弘	夏	P.23
	●医療コミュニケーション学演習	木内貴弘	夏	P.24
	●Human EcologyⅠ	渡辺知保	夏	P.25
	●健康教育学	橋本英樹	冬	P.25
	●Introduction to Asian Studies: History and International Relations (ITASIA101)	MATSUDA Yasuhiro	冬	P.26
	●International Politics in East Asia(ITASIA121)	TANAKA Akihiko	夏	P.26
	●International Conflict Study(ITASIA124)	FUJIWARA Kiichi	夏	P.27
情報論	●Surviving Cancer in Asia (ITASIA128)	AKAZA Hideyuki	冬	P.27
	●Understanding Asia and Japan through Hong Kong(ITASIA129)	SONODA Shigeto	夏	P.27
	●Modern Japanese Diplomacy(ITASIA131)	OSHIMA Shotaro	冬	P.28
	●Assimilation and Japanese Nationalism(ITASIA132)	LEE Hyunsun	冬	P.28
	●Japanese Foreign Economic Policy(ITASIA133)	IIDA Keisuke	冬	P.28
	●Understanding Taiwan and Japan in Global Settings(ITASIA143)	SONODA Shigeto	夏	P.29
	●MindHacks: Organizing Knowledge, Resources and Research in the Internet Era(ITASIA319)	Michael SCHILTZ	夏	P.29
	●文化・人間情報学特論Ⅰ	真鍋祐子	冬	P.29
	●日中関係	丸川知雄	夏	P.30
特論				

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)

分野／総論 (総合文化研究科) Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

中国を見る眼 2014 ～地域文化研究特別講義Ⅰ～

Advanced Lecture in Asian Studies I

科目番号 Course ID Number	31M/D220-1312S	使用言語 Language	日本語・英語 Japanese, English
担当教員 Teacher	卯田宗平 (ASNET) Shuhei Uda (ASNET)	場 所 Venue	東洋文化研究所三階大会議室 Meeting Room, 3rd floor, Institute for advanced Studies on Asia, Hong Campus
授業時間 Semester/ Time	夏学期、木曜日、3 限 (13:00-14:30) Summer, Thursday (13:00-14:30)	履修上の注意 Important points	受講者には毎回、A4 一枚分の感想・質問文の提出を課す。 成績は、授業への参加の積極性によって総合的に評価する。

授業内容
The contents of
a lesson

本講義では、中国に関わる最新の研究成果を多分野の専門家の協力を得ながらオムニバス形式で学ぶ。具体的には、中国の農村資源管理や西部大開発、華僑、土地問題、沙漠化、出稼ぎ、土地問題、文学作品などについて、毎週 1 つのテーマを取り上げ、講義と議論を通じて理解する。
この授業を通じて、中国に関わる最新の研究成果を幅広く理解するとともに、中国と日本の将来を考察できる素養を身につけることを目指す。

講義日程

4 月 10 日／卯田宗平 (生態人類学) 「中国を見る眼 2014 オリエンテーション」
4 月 17 日／卯田宗平 (生態人類学) 「序論：中国社会と中国の人たちを理解するヒント」
5 月 8 日／山田七絵 (農業経済学) 「中国の『村』を理解するー共有資源管理を手掛かりにー」
5 月 15 日／松永光平 (地域研究) 「21 世紀の中国黄土高原に生きる人々」
5 月 22 日／中村知子 (文化人類学) 「西部大開発政策と中国の地方社会」
5 月 29 日／山口真美 (地域研究 / 社会学) 「若者たちの現代中国：都市と農村」
6 月 5 日／王雪萍 (東アジア国際関係論) 「戦後日中関係と日本華僑」
6 月 12 日／河原功 (台湾文学) 「日本・台湾での台湾文学研究ーその経緯と魅力」
6 月 19 日／任哲 (現代中国政治研究) 「土地から見る現代中国」
6 月 26 日／秋山知宏 (水文学) 「Interactions between human activities and hydrological cycle in an arid region of China」
7 月 3 日／この科目のまとめと質疑応答
7 月 上旬／東京郊外の視察

分野／総論 (総合文化研究科) Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

アジアのフィールドワーク論 ～地域文化研究特別講義Ⅱ～

Advanced Lecture in Asian Studies II

科目番号 Course ID Number	31M /D220-1322S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	卯田宗平 (ASNET) Shuhei Uda (ASNET)	場 所 Venue	東洋文化研究所三階第2会議室 Meeting Room, 3rd floor, Institute for advanced Studies on Asia, Hong Campus
授業時間 Semester/ Time	夏学期、金曜日、3 限 (13:00-14:30) Summer, Friday (13:00-14:30)	履修上の注意 Important points	成績は、授業への参加の積極性、課題発表、レポートによって評価する。

授業内容
The contents of
a lesson

本講義では、アジアを対象としたフィールドワークの成果、インフォーマントとの関係、民族誌の書き方、調査の方法、iPad と FileMaker を利用した野外情報の収集スキル、フィールドワークの経験、仮説の立て方など学ぶ。講義 (安全対策や倫理も含む) を行ったあと、日本 (秋田地方など) やアジアの国 (中国、ベトナム、カンボジアなど) で実習を行う予定 (実習は自費)。
【協力講師】
梅崎昌裕 (東京大学：人類生態学)
田所聖志 (秋田大学：文化人類学)
石川正敏 (東京成徳大学：情報工学)

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／総論 (総合文化研究科) Field: Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit: 2

アジアでがんを生き延びる ～地域文化研究特別講義Ⅱ～

Surviving Cancer in Asia

科目番号 Course ID Number	31M/D220-1326S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	赤座英之 (先端研)、河原ノリエ (先端研) Hideyuki Akaza (RCAST), Norie Kawahara (RCAST)	場 所 Venue	医学部教育研究棟第1セミナー室 (2 階) ほか Seminar Room 1, Faculty of Medicine Experimental Research Bldg., Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、月曜日、4 限 (14:50-16:20) Summer, Monday (14:50-16:20)	履修上の注意 Important points	大学院生以外の聴講も可能 (事前登録必要)
キーワード Keywords	グローバルヘルスアジェンダ、国際共同治験、超高齢化社会、歴史認識、癌研究国際戦略 Global health agenda, International clinical study, Super aged society, Understanding of history, Strategic investigation on comprehensive cancer network	講 師 陣 Lectures	赤座英之・河原ノリエ・増井徹・井上肇・堀江重郎・高橋悟 (モデレーター)
授業内容 The contents of a lesson	感染症から非感染症へ疾病構造が変容する中、アジアにおけるがんは急増している。がんという病には、遺伝的素因や生活習慣など、長い時間軸の中で一つのくらしの営みや文化が色濃く影を落としている。これまでアジアは、医療水準、医療者、患者の価値観もまちまちで、データも単純比較できず、連携が難しい地域であった。経済成長著しい一方、未だにこの地域に横たわる、歴史的負債は大きく、グローバルズムとナショナリズムの「ねじれ」が先鋭に浮かび上がる地域である。アジアのがん医療における、新規薬剤開発や安全かつ有効な治療法の開発などを旨とする「総合癌研究国際戦略推進」寄附研究部門は、その活動の一つとしてがんという共有課題を乗り越えることで、この「ねじれ」を克服していくことを目指し、がんをグローバルヘルスアジェンダにすることなどの政策提言活動を行ってきた。がんは政治、経済、文化など、様々な課題と密接にかかわっている病である。それぞれの領域の第一人者に、アジアのがんに纏わる問いを投げかけ、日本がアジアとどう向き合うべきなのか、対話の回路としての語りを重ねたいと考えている。 Against the backdrop of a global transformation in the structure and nature of disease, with focus shifting from infectious diseases to non-communicable diseases, cancer incidence in Asia is rapidly increasing. Cancer is a pernicious disease that develops over a long period of time, affected by genetic factors and lifestyle choices. It is a disease that casts a long, dark shadow over human culture and activities. To date in Asia there has been great divergence in medical standards, and also in the values of physicians and patients alike. What is more, data from Asian countries is not immediately comparable, making cross-border cooperation and information sharing difficult. While on the one hand Asia is experiencing astonishing economic growth, there are still historical legacies that pervade the region and a stark disjoint between globalism and nationalism can also be perceived. The Department of Strategic Investigation on Comprehensive Cancer Network aims to develop new drug therapies as well as safe and effective methods of treatment for cancer in Asia. The Asia Cancer Forum is based in this department and is engaged in efforts overcome the regional disjoint in Asia by promoting joint action on common issues. We are accordingly engaged in various policy proposal formulation activities, aimed at achieving the inclusion of cancer on the global health agenda. Cancer is a disease that is closely related to various challenges and issues, which are variously political, economic and cultural in nature. In this course we aim to direct questions relating to cancer in Asia to leading figures and create a forum for dialogue on how Japan should engage with Asia in fighting cancer.		

○授業計画
様々な領域の第一人者である外部講師を招聘して、オムニバス方式で、がんを社会の中でどのようにとらえるかという思索を重ねる。高齢化社会、死生観の多様性、医療格差を乗り越える社会的正義など、アジアが抱える様々な今日的な課題が、浮かびあがってくるような構成となっている。学期末に海外大学との遠隔交流授業も予定している。

○授業の方法：講義・討論
モデレーター 赤座英之 河原ノリエ
赤座英之 (東大先端研教授)
真鍋祐子 (東大東文研)
牧野 篤 (東大教育学部教授)
田中英夫 (地域癌登録協議会理事長)
辻 哲夫 (東大高齢者総合研究機構教授)
堀江重郎 (順天堂大学教授)
三宅 淳 (大阪大学教授)
藤崎一郎 (上智大学教授・前駐米大使)
ほか詳細は HP www.siccn.org

○成績評価方法
成績は、レポートと授業への参加の積極性によって総合的に評価する。

○その他
冬学期には本授業と連動した授業が開講している (時間割コード 4971280)
Information, Technology, and Society in Asia 128
Surviving Cancer in Asia: Cross-boundary Cancer Studies,

分野／総論 (総合文化研究科) Field: Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit: 2

中国の環境と人類学 ～地域文化研究特別講義Ⅱ～

Advanced Lecture in Asian Studies II

科目番号 Course ID Number	31 M/D220-1322W	使用言語 Language	中国語、日本語 Chinese, Japanese
担当教員 Teacher	卯田宗平 (ASNET) Shuhei Uda (ASNET)	場 所 Venue	東洋文化研究所三階第2会議室 Meeting Room, 3rd floor, Institute for advanced Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、金曜日、3 限 (13:00-14:30) Winter, Friday (13:00-14:30)	履修上の注意 Important points	授業の方法：中国語論文の輪読および内容の発表、ディスカッション 成績：授業への参加の積極性によって総合的に評価する。 注意：授業は主に中国語でおこなう。
授業内容 The contents of a lesson	中国の自然環境に注目し続けてきた人類学者・楊庭碩の研究論文を精読する。彼の研究成果を通じて、中国の環境問題や人類学のアプローチ、理論、在地の人びとの生き方、今後の課題を理解する。なお、授業は主に中国語でおこなう。		

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）

分野／総論（総合文化研究科） Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

現代民俗学の可能性と課題 ～通文化研究基礎論Ⅰ～

Foundation of Trans-regional Studies I

科目番号 Course ID Number	31M/D220-1132S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	菅豊（東洋文化研究所） Yutaka Suga (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 706 室 706 Room, Institute for Advances Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/ Time	夏学期、水曜日、1 限（9:00-10:30） Summer, Wednesday (9:00-10:30)	キーワード Keywords	民俗学、文化資源、学問の公共性、構築主義、公共民俗学、民間学知
履修上の注意 Important points	開講教室確定の都合のため、受講希望者は、必ず 4 月 7 日までに菅宛にメール (suga@ioc.u-tokyo.ac.jp) で連絡すること。 授業は本郷キャンパス東京大学東洋文化研究所で開講する。		
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 本年度は、中国の言葉遊び、民間工芸、花鳥魚虫、家畜等によつた文化を題材に、中国文化の奇性と、それを生み出すための認知的、物理的加工の技術について民俗学的に検討する。 ○授業の方法 教員による基本的なレクチャーをもとに、受講者は教員が設定する課題について発表し、討論する。 ○成績評価方法 評価は、出席、発表、議論への寄与、試験などをもとに行う。		

分野／総論（総合文化研究科） Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

中東の経済発展・政治変動と文化社会変容 ～通文化研究基礎論Ⅱ～

Foundation of Trans-regional Studies II

科目番号 Course ID Number	31M/D220-1141S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	長澤栄治（東文研） Eiji Nagasawa (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 804 室 804 Room, Institute for advanced Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/ Time	夏学期、水曜日、3 限（13:00-14:30） Summer, Wednesday (13:00-14:30)	キーワード Keywords	中東、アラブ、社会変容、イスラーム The Middle East, Arab, Islam, Social Change
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 中東の社会変容に関する考察を通じて、同地域が直面する様々な問題に対する客観的な分析を可能にする方法論の態度を学ぶ。 ○授業計画 中東諸国の経済発展と政治変動、およびそれに伴う文化社会変容をめぐる諸問題を多面的に考察する。 第 1 回 オリエンテーション、第 2 回以降 文献講読 ○授業の方法 文献講読と報告、議論 ○成績評価方法 出席状況および報告内容 ○教科書 Gabriel Baer, <i>Fellah and Townsman in the Middle East</i>, Studies in Social History, 1982. テキスト準備については開講時に指示する。		

分野／総論（総合文化研究科） Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

途上国農村経済論 ～アジア太平洋文化交流論Ⅱ～

Cultural Exchange in Asia and the Pacific Area II

科目番号 Course ID Number	31M/D220-0982S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	高橋昭雄（東文研） Akio Takahashi (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 606 室 Room 606, Institute for Advanced Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/ Time	夏学期、火曜日、4 限（14:50-16:50） Summer, Tuesday (14:50-16:50)	キーワード Keywords	農村社会経済、地域発展、東南アジア、経済史、コミュニティ Village economy, Regional development, Southeast Asia, Economic history, Community
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 東南アジアを中心に、発展途上国農村の社会・経済について勉強する。「農業」経済ではなく「農村」経済であるので、当然のことながら、農村工業、労働移動、就業構造、都市化、貧困といった問題も含めて演習の課題とする。2014 年度は、スコットの『ソミア』の翻訳版を輪読し、東南アジア大陸部の政治経済に関する理解を深める。 ○授業の方法 教科書を輪読する。学生は順番に教科書の内容を報告し、疑問点や参考にすべき点等について指摘し、その後出席者で議論を進める。 ○成績評価方法 授業での報告・発言内容、平常点等 ○参考書 ジェームズ・C・スコット（著）佐藤 仁（監修翻訳）『ソミア 脱国家の世界史』みすず書房		

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／総論（総合文化研究科） Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

明治維新期の日本 ～アジア太平洋地域文化演習Ⅱ～

科目番号 Course ID Number	31M/D220-1002S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	三谷博（総合文化研究科） Hiroshi Mitani (Art and Sciences)	場 所 Venue	駒場キャンパス 12 号館 1233 号室 Room1233, Bldg.12, Komaba Campus
授業時間 Semester/ Time	夏学期、水曜日、4 限（14:50-16:20） Summer, Wednesday (14:50-16:20)	キーワード Keywords	明治維新 幕末 明治初期 政治 革命 国際関係 新聞 ジャーナリズム 公議 公論 民主化 史学史 Meiji restoration, revolution, Late Tokugawa period, international relations, newspaper, journalism, public sphere
履修上の注意 Important points	アジア研究の志望者以外にも勧める。今からでも遅くないので、現代の日本と深い関係を持つ地域の歴史について、最先端の知識を身につけてほしい。		
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 日本を含む近世・近代のアジア史について、その骨子、研究状況、および研究工具を俯瞰する。取り上げる地域は日本、韓国・朝鮮、中国、中国周辺部、東南アジア、インドで、それぞれにつき二回ずつ、若手の研究者の協力を仰いで解説してもらう予定である。 ○授業計画 第一回は趣旨説明。夏学期の第二回以後は講義。 ○授業の方法 各地域について二回ずつ連続講義を行う。毎回、質疑の時間を取るので、積極的に議論してほしい。 ○成績評価方法 出席とレポート ○教科書 三谷博・並木頼寿・月脚達彦編『大人のための近現代史 19 世紀編』東京大学出版会		

分野／総論（総合文化研究科） Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

明治維新期の日本Ⅱ ～アジア太平洋地域文化演習Ⅱ～

科目番号 Course ID Number	31M/D220-1002W	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	三谷博（総合文化研究科） Hiroshi Mitani (Art and Sciences)	場 所 Venue	駒場キャンパス 12 号館 1233 号室 Room1233, Bldg.12, Komaba Campus
授業時間 Semester/ Time	冬学期、水曜日、4 限（14:50-16:20） Summer, Wednesday (14:50-16:20)	キーワード Keywords	明治維新 幕末 明治初期 政治 革命 国際関係 新聞 ジャーナリズム 公議 公論 民主化 史学史 Meiji restoration, revolution, Late Tokugawa period, international relations, newspaper, journalism, public sphere
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 日本近代史に関わる基本史料を講読する。 ○授業計画 基本史料 1 点を、毎回、少しずつ読んでゆく。 ○授業の方法 史料解釈の基本を確認する。出席者が順番に、音読、現代語による解釈を行い、さらに背景解説、疑問点の摘出、比較、一般化などを試みる。史料の選択については、9 月までに希望を寄せられたい。 ○成績評価方法 出欠による。		

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）

分野／総論（総合文化研究科） Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

朝鮮半島をめぐる政治経済・国際政治 ～多元地域協力論Ⅰ～

科目番号 Course ID Number	31M/D220-0012S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	木宮正史（学際情報学府） Tadashi Kimiya (Interfaculty Initiative in Information Studies)	場 所 Venue	駒場キャンパス、8号館 210号室 Room 210, Bldg.8, Komaba Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、火曜日、5限（16:30-18:00） Summer, Tuesday (16:30-18:00)	キーワード Keywords	冷戦、デタント、1970年代、米中和解、朝鮮半島 the cold war, detente, 1970s, the US-China rapprochement, the Korean Peninsula
履修上の注意 Important points	本授業は、大学院法学政治学研究科、大学院学際情報学府との合併授業であり、場所は駒場キャンパスで行う。		
授業内容 The contents of a lesson	○授業の概要 1970年代の国際政治は「デタント」として特徴づけられる。1960年代の冷戦の絶頂期が70年代に入り、米中和解や米ソデタントなど、大国間国際政治のレベルで「デタント」と呼ばれる緊張緩和への動きが生まれ、それが一定程度制度化されたにもかかわらず、必ずしも堅固化しなかったという点に特徴があると思われる。また、大国間国際政治におけるデタントが、冷戦体制に組み込まれた諸地域や諸国家に対してどのような影響を及ぼし、どのような帰結をもたらしたのかに関しても、近年、外交文書の公開とともに研究が蓄積されつつある。本授業では、当該分野に関する最先端の研究成果を読み、1970年代国際政治に関する研究に新たな視点を取り入れることを目指す。そのうえで、受講者の関心に沿って、1970年代国際政治に関連した事例研究を行い、発表してもらうことも考えている。 ○授業の方法 演習（基本的には担当を決めて、内容を要約して発表、それに関する論点を提示してもらったうえで、議論を通して当該テーマに関する理解を深める。） ○成績評価方法 平常点とレポートによる。 ○教科書 追って指示する。		

分野／総論（総合文化研究科） Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

人間環境論Ⅱ

Human Geography II

科目番号 Course ID Number	31M/D282-0620S	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	永田淳嗣（総合文化研究科） Junji Nagata (Art and Sciences)	場 所 Venue	駒場キャンパス、2号館 202号室 Room 202, Bldg.2, Komaba Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、火曜日、2限（10:40-12:10） Summer, Tuesday (10:40-12:10)	キーワード Keywords	社会－生態システム変動、社会科学方法論、人文地理学
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 現代社会における社会変動と生態システム変化の複雑な関係を読み解くための、現場での現象理解に立脚した方法論・手法を受講者とともに探る。理論面とともに日本や東南アジアでの研究に基づく実践面からの検討を行う。主体的な問題意識を持ち、インテンシブな文献購読、濃密なディスカッション、十分に準備されたプレゼンテーションに意欲を持つ者に受講を限る。 ○授業の方法 文献購読と、それに基づくプレゼンテーション、ディスカッションを中心とする。 ○成績評価方法 平常点とレポートによる。 ○教科書 特になし		

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／総論 (総合文化研究科) Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

サステナビリティの戦略 II

Sustainability Strategy II

科目番号 Course ID Number	31M/D290-0180W	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	永田淳嗣 (総合文化研究科) Junji Nagata (Art and Sciences)	場 所 Venue	駒場キャンパス、5 号館 534 号室 Room 534, Bldg.5, Komaba Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、火曜日、3 限 (13:00-14:30) Winter, Tuesday (13:00-14:30)	キーワード Keywords	社会－生態システム変動、人文地理学、社会科学方法論
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 現代社会における社会変動と生態システム変化の複雑な関係を読み解くための、現場での現象理解に立脚した方法論・手法を受講者とともに探る。理論面とともに日本や東南アジアでの研究に基づく実践面からの検討を行う。主体的な問題意識を持ち、インテンシブな文献購読、濃密なディスカッション、十分に準備されたプレゼンテーションに意欲を持つ者に受講を限る。 ○授業の方法 文献購読と、それに基づくプレゼンテーション、ディスカッションを中心とする。 ○成績評価方法 平常点とレポートによる。 ○教科書 特になし		

分野／総論 (総合文化研究科) Field : Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit : 2

第二次世界大戦後の日本のアジア認識 ～地域文化研究特殊研究 I～

Advanced Lecture in Asian Studies I

科目番号 Course ID Number	31M/D220-1330W	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	古田元夫 Motoo Furuta (Art and Sciences)	場 所 Venue	TBA
授業時間 Semester/Time	冬学期、火曜日、2 限 (10:40-12:10) Winter, Tuesday (10:40-12:10)	キーワード Keywords	アジア、世界史の基本法則、停滞社会、日本
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 大塚久雄、竹内好、江口朴郎、上原専記、梅棹忠夫、遠山茂樹、田中正俊、浜下武志など、第二次世界大戦後の日本の社会人文学のアジア認識の変遷を代表する研究者の論文を検討する。 ○授業計画 下記のテキストを取り上げる。 大塚久雄 (1946)『生産力における東洋と西洋』、竹内好 (1948)『近代とは何か』、江口朴郎 (1950)『帝国主義の諸問題』、梅棹忠夫 (1957)『文明の生態史観』、遠山茂樹 (1965)『世界史における地域史の諸問題』、田中正俊 (1967)『アジア社会停滞論批判的方法的反省』、浜下武志 (1990)『近代アジア史研究の課題』「朝貢システムと近代アジア」(『近代中国の国際的契機』)、川勝平太 (1997)『鎖国と近代世界システム』(『文明の海洋史観』)、古田和子 (1994)『アジアにおける交流・交易のネットワーク』(平野健一郎『講座現代アジア4地域システムと国際関係』)、中村哲 (2001)『東アジア資本主義形成史論』 ○授業の方法 テキストを参加者が分担して報告。 ○成績評価方法 通常の授業での発表。小テスト。 ○教科書 教材は授業中に配布する。		

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）

分野／総論（総合文化研究科） Field: Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit: 2

戦後日本社会の形成と変容 ～アジア太平洋文化交流論Ⅰ～

科目番号 Course ID Number	31M/D220-0970W	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	外村大（総合文化研究科） Masaru Tonomura (Art and Sciences)	場 所 Venue	TBA
授業時間 Semester/Time	冬学期、火曜日、2限（10:40-12:10） Winter, Tuesday (10:40-12:10)	キーワード Keywords	戦後社会、民衆生活、冷戦、経済復興、経済成長
授業内容 The contents of a lesson	○授業の概要 高度経済成長期・安定成長期を中心に戦後の日本の経済や労働、民衆生活がどのように変化していったかの理解を目指す。その際、各時期・各分野の重要な文献、キーパーソンの回想記や証言、日本政府の行政刊行物や各種統計、社会調査など、基礎的な史料の読解を軸に授業を進める。 ○授業計画 最初の1, 2回は、授業参加者の問題関心を踏まえて共通認識、この時期を把握するための前提として、高度経済成長期の日本の政治・経済についての概説と研究状況の整理を行う。それを踏まえて、共通に読むべき基礎的な史料を選定しそれに基づいて報告と討論を行う。 ○授業の方法 基本的には共通のテキストを読み、受講者の報告をもとに討論する形式で進める。ただし受講者数が少ない場合は教員からの説明を中心とする回も組み込む。 ○成績評価方法 通常の授業での報告および討論のあり方と学期末のレポートをもとに評価を行う。		

分野／総論（総合文化研究科） Field: Liberal Art and Sciences

単位／2 Credit: 2

書き直される中国近現代史(7) ～国際社会科学特別講義Ⅳ～

Specific Lecture: International Studies Ⅳ

科目番号 Course ID Number	31M/D230-1140W	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	川島真（国際社会科学専攻） Shin Kawashima (Art and Sciences)	場 所 Venue	TBA
授業時間 Semester/Time	冬学期、木曜日、5限（16:30-18:00） Winter, Thursday (16:30-18:00)	キーワード Keywords	国際関係史、国際政治史、東洋史、地域研究、東アジア外交史、中国史
履修上の注意 Important points	この講義は、ASNET「日本・アジア学」講座2014年度冬学期授業として、また東京大学現代中国研究拠点（社会科学研究所）の事業として実施される（ http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/kyoten/asnet/ ）。		
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目標 この講義は、2014年度で第七回目を迎える。第一年度（2008年度）は人物評価を、第二年度（2009年度）は事件・運動を、第三年度（2010年度）はローカルな空間や社会集団を軸に講義を組み立て、第四年度（2011年度）は史料・資料に焦点を当て、第五年度（2012年度）は主に若手研究者をゲストに招き、その視線から見た新しい研究動向を扱い、第六年度（2013年度）は昨今進展著しい戦後東アジア国際政治史、東アジア冷戦史について多様な角度から検討した。その内容は、東京大学現代中国研究拠点（社会科学研究所）ウェブサイトに掲載されている（http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/kyoten/）。2014年度は昨今注目が集まっている日中戦争史を扱うことにしたい。従来、日中戦争については幾つかの面で新たな突破がある。日本史側であれば果たして関東軍、陸軍暴走という論点だけで説明できるのかという疑義が提起され、中国史側であれば蒋介石日記の公開によってその内的な戦争理解が明らかになった。さらに、アメリカ、イギリス、ソ連、ドイツなどの多様な文書を組み合わせることによって立体的な日中戦争像が提供されるようになった。さらに、その戦争の記憶、あるいは戦争裁判をめぐる問題についての研究も進展著しい。この講座では、内外の教員によって、その日中戦争研究の先端について提供したい。 ○授業の方法 学内外の教員、ゲストによるオムニバス形式の講義。具体的な講義内容は、http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/kyoten/asnet/ を確認ください。 ○成績評価方法 レポートによる。 ○教科書 特に指定しない。 ○授業計画 予定されている講義は以下の通り。予定が変更になることもあるので、詳細は下記の関連ホームページを参照されたい。		

- 10月9日（木）第一回 岩谷将（防衛省防衛研究所）・川島真（東京大学）
「ガイダンス」（川島真）
「盧溝橋から真珠湾へー日中戦争概観ー」（岩谷将）
- 10月16日（木）第二回 田嶋信雄（成城大学）
「ドイツから見る満洲国・日中戦争」
- 10月23日（木）第三回 加藤陽子（東京大学）
「何故日本は戦争しなかったのか」
- 10月30日（木）第四回 村田雄二郎（東京大学）
「国共両党にとっての日中戦争一辺境問題からー」
- 11月6日（木）第五回 相澤 淳（防衛省防衛研究所）
「日中戦争と海軍」
- 11月13日（木）第六回 川島真（東京大学）
「『蒋介石日記』に見る日中戦争」
- 11月20日（木）第七回 白戸健一郎（日本学術振興会）
「メディア戦から見る日中戦争と満洲国」
- 11月27日（木）第八回 笹川裕史（上智大学）
「中国の農村社会から見る日中戦争」
- 12月4日（木）第九回 石井弓（東京大学）
「中国の農村から見る戦争の記憶」
- 12月11日（木）第十回 庄司潤一郎（防衛省防衛研究所）
「日中歴史認識問題」
- 12月18日（木）第十二回 劉傑（早稲田大学）
「漢奸裁判」
- 1月15日（木）第十三回 日暮吉延（帝京大学）（交渉中）
「東京裁判をいかに捉えるか」

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／社会・文化論 (人文社会系研究科) Field: Society and Culture

単位／4 Credit: 4

世界史研究の方法 ～比較アジア社会文化論演習～

科目番号 Course ID Number	21142863	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	羽田 正 (東文研) Masashi Haneda (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 806 号室 Room806, Institute for advanced Studies on Asia, Hong Campus
授業時間 Semester/ Time	通年、金曜日、3 限 (13:00-14:40) All year, Friday (13:00-14:40)	キーワード Keywords	世界史、グローバルヒストリー World History, Global History
授業内容 The contents of a lesson	世界史 / グローバル・ヒストリーの新しい潮流について理解を深めること、関連文献を読み、世界史をどのように理解し、叙述すべきかについて、方向性を確認することを目標とする。 ○授業の方法 指定された文献 (英語、日本語) を受講者全員があらかじめ読んで、授業に参加する。担当者の報告とコメントにもとづき、全員で議論し、理解を深める。 ○成績評価方法 出席と報告の内容による。 ○教科書 最初の授業で指定し、コピーを準備する。		

分野／社会・文化論 (人文社会系研究科) Field: Society and Culture

単位／4 Credit: 4

近代アジアの開発と社会変化 ～比較アジア社会文化論演習～

科目番号 Course ID Number	21142864	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	水島 司 (人文) Tsukasa Mizushima (Humanities and Sociology)	場 所 Venue	法文 1 号館 1424 研究室 Room 1426, Law and Letters Building 1, Hongo Campus
授業時間 Semester/ Time	通年、月曜日、4 限 (14:50-16:30) All year, Monday (14:50-16:30)	履修上の注意 Important points	・初回は 4 月 21 日開講とする。 ・演習参加者は、パソコンを用意する。
授業内容 The contents of a lesson	19 世紀以降のアジア諸地域における開発に関して、各国の人口統計 (センサス) を演習参加者がそれぞれ担当し、現在までの人口動向とセンサスに含まれる各種統計を利用して、開発のプロセスの特徴と共通性に関して議論する。 ○授業の方法 演習の最初の時間に、それぞれが担当する国を定める。続いて、1-2 ヶ月間は関連する史料の探索、関連する研究のリスト作成を課題にしながら、下記教科書の 1 にある論文を輪読する。後半は、教科書 2 を輪読するのと平行して、それぞれの担当する地域のセンサスに基づき、年代を追ってその内容と時期的特徴、グローバル・エコノミーとの関連などにつき議論する。なお、参加者は毎回それぞれの担当箇所に関する作業の進展について報告の義務を負う。 ○成績評価方法 無断欠席および 3 回以上欠席した場合は、単位を認定しない。評価は、ハンドアウトの内容、授業での議論への参加度、最後に提出するレポートで行なう。 ○教科書 1. Tim Dyson (ed.), India's Historical Demography: Studies in Famine, Disease and Society, SOAS, U. of London, 1989. 2. Ravindran Gopinath, Historical Demography and Agrarian Regimes, Orient Black Swan, 2010.		

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)

● ● ● ●

分野／社会・文化論 (人文社会系研究科) Field : Society and Culture 単位／4 Credit : 4

グローバル・ヒストリーとアジア ～アジア史学演習～

科目番号 Course ID Number	21142855	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	水島 司 (人文) Tsukasa Mizushima (Humanities and Sociology)	場 所 Venue	法文 1 号館 1424 研究室 Room 1426, Law and Letters Building 1, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	通年、月曜日、5 限 (16:40-18:20) All year, Monday (16:40-18:20)	履修上の注意 Important points	初回は 4 月 21 日開講とする
授業内容 The contents of a lesson	19 世紀から本格化するグローバル・エコノミーの一体化の中で、アジア各地で従来の都市とは異質な新たな都市の形成が見られた。本演習では、参加者がアジアの中の特定の都市を選び、その誕生から現代に至る過程を解明する。 ○授業の方法 演習開始時点から 6 月にかけて、参加者は、それぞれ自身が担当する都市に関する地図、研究論文、研究書などのリストの作成と史料収集を行ない、毎回作業の進展状況を報告する。7 月以降は、担当する都市に関して、人口動向、空間形成、都市のレイアウトと各空間の機能、他の都市および地域社会との関係などをテーマにして分析し、その結果を報告する。また、こうした都市分析に必要な GIS (地理情報システム) ソフトの使い方についての基礎的学習も行なう。 ○成績評価方法 無断欠席および 3 回以上欠席した場合は、単位を認定しない。評価は、演習での報告のハンドアウトの内容、終了時点で提出するレポート、および演習での議論への参加度などで行なう。 ○教科書 初回に指示する。		

分野／社会・文化論 (人文社会系研究科) Field : Society and Culture 単位／2 Credit : 2

社会比較論 ～韓国朝鮮言語社会特殊研究～

Seminar in Ethnography and History

科目番号 Course ID Number	21146504	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	本田 洋 (人文) Hiroshi Honda (Humanities and Sociology)	場 所 Venue	赤門総合研究棟 赤門 723 演習室 Seminar Room 723, Akamon General Bldg., Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、月曜日、3 限 (13:00-14:40) Summer, Monday (13:00-14:40)		
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目的 韓国朝鮮社会を対象とする民族誌的文献の講読を通じ、社会人類学の視点と方法についての理解を深めるとともに、研究対象の同定・定義、問題設定、資料収集、分類・分析・解釈といった、社会比較を念頭に置いた質的研究の基礎的な方法を学ぶ。購読文献としては、主に農村社会の現地調査に基づくモノグラフを扱う。韓国社会の社会経済的持続性と近代化・産業化過程での変化に焦点を合わせた論考が主となる。 ○授業の方法 授業は演習形式で行う。初回にガイダンスを行い、2 回目から文献購読に入る。講読する文献には一部、日本語のものも含まれるが、主体は韓国語と英語で書かれたものとなる。受講者は韓国語の基礎的な読解能力を具えていることが望ましいが、英語文献の発表や討論への積極的な参加が可能であれば、必ずしも韓国語が分からなくても受講を歓迎する。また、修士課程 2 年以上の受講者については、個人研究発表の機会も設けたい。 ○成績評価方法 平常点 (出席状況、発表、討論、その他授業への参加姿勢)。		



分野／社会・文化論 (人文社会系研究科)

Field : Society and Culture

単位 / 2 Credit : 2

韓国の社会人類学 ～韓国朝鮮言語社会特殊研究～

科目番号 Course ID Number	21146506	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	本田 洋 (人文) Hiroshi Honda (Humanities and Sociology)	場 所 Venue	法文 1 号館 212 教室 Room 1212, Law and Letters Building 1, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、火曜日、5 限 (16:40-18:20) Summer, Tuesday (16:40-18:20)		
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目的 モダニティ (近代性) についての民族誌的研究のひとつの試みとして、担当教員が 1980 年代末から現在に至るまで韓国南西部南原地域で行なってきたフィールドワークの成果を、朝鮮半島中・南部の農村社会を対象とした民族誌の批判的読み直しと対照しつつ、歴史人類学的、ならびに実践理論的観点から再分析する。東アジアの一地域の農村社会に暮らす人たちが、植民地・近代の経験、産業化の経験、ならびにグローバル資本主義の経験を織り込みつつ、家族の再生産や場所・共同性の構築を含む生活 (生き方) の諸実践をどのように組み立て、組み換えてきたのかを、民族誌資料に基づき具体的に考察するものである。このような作業を通して、変化に開かれた持続性の諸様相が明らかされる。 ○授業の方法 授業は基本的に講義形式で行うが、電子メールでリアクション・ペーパーを提出してもらい、授業中にそれに対する回答やコメントを行うことで、相互性を確保する。初回にイントロダクション、2 回目にフィールドの概況と理論的視角について説明したうえで、3 回目から本論に入る。本論で取り上げるトピックとしては、農村社会の歴史人類学、威信の共同体、植民地・近代の経験、農村社会における家族の再生産、産業化過程での社会経済的变化、産業化過程での家族の再生産、地域産業の再構築、都市から農村への移住、等を予定している。 ○成績評価方法 平常点と期末レポートによる		

分野／社会技術論 (工学系研究科) Field : Social Technology

単位 / 2 Credit : 2

Advanced Lectures on Sociotechnology

科目番号
Course ID Number

3713-071

使用言語
Language

English

担当教員
Teacher

Professor Hideyuki Horii (Engineering)
Dr. Shunsaku Komatsuzaki (Engineering)

場 所
Venue

工学部 1 号館 17 講義室
Room 17, Faculty of Engineering, Bldg.1

授業時間
Semester/ Time

夏学期、金曜日、3 限 (13:00-14:40)
Summer, Friday (13:00-14:40)

授業内容
The contents of a lesson

Objective of the course:

Contemporary social problems, such as BSE and the Great East Japan Earthquake, cannot be solved by any single discipline and we must have a competency to manage, or even initiate, multidisciplinary problem solving. Sociotechnology (Shakai-Gijutsu) is a means to solve societal issues by a multidisciplinary approach using natural and social scientific knowledge and methodologies.

You students are expected to learn the abilities and knowledge of Sociotechnology by case method. In the first half of the semester, using orthodox case method, you will learn methods to analyze problem and a logical process to reveal fundamental cause(s). In the second half, you will create new case(s) by employing the methods and knowledge you learn in the first half. You will finally acquire the competency to practice the methods and knowledge of Sociotechnology to solve social problems in the real world.

Related courses:

"Sociotechnology" (Undergrad, Japanese, winter semester)
"Case studies of international project" (Undergrad, Japanese, summer semester)
"Advanced case studies of international project" (Graduate, English?, winter semester)

Recommended reading (in Japanese):

"Sociotechnology: Design for Problem Solution" (Hideyuki Horii, 2012, The University of Tokyo Press)

Outline of the course:

[The First Half: Case Method]

1. Brazil Electricity Crisis (Kennedy)

Objectives: Clarify the overall structure of problem, find fundamental cause(s), policy process analysis

Related courses: "Infrastructure management" (Graduate, English, summer semester)

"Project management" (Undergrad, Japanese, winter semester)

"Introduction to international project" (Undergrad, Japanese, winter semester)

"Public management" (Undergrad, Japanese, winter semester)

Reference: 「発送電分離の政治経済学 - 世界の電力セクター改革からの教訓」(長山浩章, 2012, 東洋経済新報社)

「国際インフラ事業の仕組みと資金調達 - 事業リスクとインフラファイナンス」(加賀隆一, 2010 年, 中央経済社)

Shively, B. and Ferrare, J. (2010) "Understanding today's electricity business"

Banks, J.P. (2006) "Privatization of the electricity sector in emerging markets", The electricity journal, 19(9), 45-54.

Besant-Jones, J. and Tenenbaum, B. (2001) "The California power crisis: Lessons for developing countries", Energy and mining sector board discussion paper series, 1, World Bank.

2. Hurricane Katrina (A)-(C) (Kennedy)

Objectives: Clarify the overall structure of problem, find fundamental cause

Related courses: "Natural Disasters and Urban Disaster Prevention" (Graduate/Undergrad, Japanese, winter semester)

"Urban Disaster Mitigation Engineering" (Graduate, English, summer semester)

Reference: 「カトリナが洗い流せなかった貧困のアメリカ」等多数.

Dyson, M.E. (2007) "Come Hell or High Water: Hurricane Katrina and the Color of Disaster"

3. Accident at Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Station (UT)

Objectives: Clarify the overall structure of problem, find fundamental cause, design solution

Related courses:

Reference: 「制度と文化：組織を動かす見えない力」(佐藤郁哉・山田真茂留, 2004 年, 日本経済新聞出版社)

「津波と原発」(佐野真一, 2011 年, 講談社)

Sovacool, B. and Valentine, S.V. (2012) "The National Politics of Nuclear Power: Economics, Security, and Governance"

[The Second Half: Case Writing]

Pick up a case of any social problem and create a "case" (for case method) which will be used to teach methods/knowledge of problem analysis, decision analysis, policy process analysis and/or solution design.

Students will be divided into groups and each group has three to five students. Case will be created through group work and must be submitted no later than August 12th.

You can even choose a case from the following examples:

- Lessons learned from the disaster of 1960 Chilean Tsunami
- Manila Water and Aetra: What's needed for successful water PPP project?
- Daiichi-Sankyo's acquisition of Ranbaxy Laboratories: Sequel
- Panasonic's acquisition of Anchor
- India's National Highway Development Plan (NHDP) and PPP: Why it is failing?
- JICA's Visionary Leaders for Manufacturing (VLFM) project: How it succeeded?

Grade:

Attendance 30%

Short Report / Presentation 30%

Case Writing (required) 40%

Note: This course does not allow "withdrawal". If your grade does not reach 50, you will simply fail. Be careful of this condition when you register for this course.

Software:

The free software below would be useful for analysis of problem.

[For Japanese Windows users]

IdeaFragment2

<http://nekomimi.la.cocacn.jp/freesoft/ideafrag2.htm>

iEdit

<http://homepage3.nifty.com/kondoumh/software/iedit.html>

[For Mac OS, Linux, or international Windows users]

VUE (Visual Understanding Environment)

<http://vue.tufts.edu/>

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／社会技術論（工学系研究科） Field : Social Technology

単位／2 Credit : 2

Case Studies of International Projects

科目番号 Course ID Number	3713-073	使用言語 Language	English
担当教員 Teacher	Professor Hideyuki Horii(Engineering) Professor Riki Honda (Engineering) Professor Hironori Kato (Engineering) Professor Tetsuya Ishida (Engineering) Mr. Takashi Kumon (Engineering) Dr. Shunsaku Komatsuzaki (Engineering)	場所 Venue	工学部 1 号館 17 講義室 Room 17, Faculty of Engineering, Bldg.1
授業時間 Semester/Time	冬学期、水曜日、3 限 (13:00-14:40) Winter, Wednesday (13:00-14:40)		
授業内容 The contents of a lesson	Course objectives: We civil engineers are involved not only in construction of infrastructure but also in solving a variety of social problems. For example, the Great East Japan Earthquake set a new task to build new embankments along the Sanriku Coast. It is not a purely technical issue but a social one as social acceptance would be necessary to build those embankments. Even experts of structural mechanics cannot avoid or ignore it. The same thing can be said to international project for example, Kotopanjang Dam project in Indonesia caused a strong public opposition, which was actually evoked by NGO, and ended in court. You, as future civil engineers, must have competencies to deal with such various aspects of international project. Students are expected to learn the skills of problem solving (analysis, evaluation and forecast) and solution design and the professional knowledge of international project through case method in this course. The instructors with different professional backgrounds will give you an opportunity to learn a wide range of expertise to manage and/or initiate international project in future. Related courses: "Advanced Lectures on Sociotechnology" (Graduate, English, summer semester) "Infrastructure Management" (Graduate, English, summer semester) "Sociotechnology" (Undergrad, Japanese, winter semester) "Case studies of international project" (Undergrad, Japanese, summer semester) Outline of the cases: 1. Resettlement Problem in Batangas Port Development Project in Philippines (UT) = Prof. Kato Objectives: To learn the process of consensus-building in infrastructure project in developing country Related courses: Social decision-making Theory (Prof. Kato, undergraduate, winter, in Japanese) Reference: N/A 2. The "Miracle" of Kamaishi: The Solution that Achieved the Miracle (UT) = Dr. Komatsuzaki Objectives: Learning the problem of tsunami disaster preparation and the methods of problem analysis Related courses: "Seminar on Flood disaster mitigation" (Prof. Tajima, graduate, summer) "Urban Disaster Mitigation Engineering" (Prof. Meguro & Ohara, graduate, summer) Reference: N/A 3. Congestion Pricing for Stockholm (Kennedy) = Prof. Horii Objectives: Learning the implementation process of solution to social problem and the role of leadership Related courses: N/A Reference: Eliasson, J., Jonsson, L., (2011). The unexpected yes!: Explanatory factors behind the positive attitudes to congestion charges in Stockholm, <i>Transport Policy</i>, 18: 636-647. Eliasson, J., (2009). Expected and unexpected in the Stockholm Trial, <i>Congestion taxes in city traffic. Lessons learnt from the Stockholm Trial</i>, Nordic Academic Press 4. TBA = Prof. Ishida Objectives: Related courses: Reference: 5. Unilever in India: Hindustan Lever's Project Shakti - Marketing FMCG to the Rural Consumer (HBS) = Mr. Kumon Objectives: Learning BOP business, how to enter foreign market, and evaluation of strategy Related courses: N/A Reference: N/A Grade: Attendance 30% Contribution in each case 70% <u>Note: This course does not allow "withdrawal". If your grade does not reach 50, you will simply fail. Be careful of this condition when you register for this course.</u>		

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)

分野／自然環境論 (農学生命科学研究科) Field: Natural Environment

単位／2 Credit: 2

有機農業と持続可能な発展 ～汎アジア経済論Ⅰ～

Pan-Asian Economics I

科目番号 Course ID Number	3905125	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	池本幸生 (東文研) Yukio Ikemoto (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	農学部 1 号館 9 番講義室 Room9, Faculty of Agriculture, Bldg.1, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、水曜日、3 限 (13:00-14:40) Summer, Wednesday (13:00-14:40)	キーワード Keywords	持続可能な開発、有機農業、アジア Sustainable Development; Organic Farming; Asia

授業内容 The contents of a lesson

- 授業の目的
本授業で取り上げる有機農業は単に農法を問題とするのではない。有機農業を支えている社会的な仕組みを経済学的に考察することが目的である。有機農業に関わる人たちは、「顔の見える関係」に見られるように人と人との結びつきを重視する。環境問題や安全のような市場では解決できない問題を克服するために、人と人との連帯を利用していると考えられる。従来の経済学のアプローチと異なるのは次の 2 点である。ひとつは、市場では十分に評価されてこなかった環境や健康といった情報を取り込むことである。そのために、アマルティア・センのケイパビリティ・アプローチを用いる。もうひとつの点は、経済学が想定するような利己的動機ではなく、助け合いといった利他的動機を加えることである。これは、理論的にはアマルティア・センの『正義のアイデア』を応用することを意味しており、授業ではセンのケイパビリティ・アプローチを用いる。
- 本授業ではまず、アマルティア・センの『正義のアイデア』を参考書として用い、望ましい社会を達成するために、どうアプローチすべきかを考える。そして、本授業の後半では、日本およびアジア (韓国、タイ、ベトナムなど) で有機農業がどのように実践されているかを具体的に見ていく。そして、それらを理論的に考察していく。これらを通して、持続可能な発展のあり方について考える。
- 授業計画
理論：人間開発、ケイパビリティ・アプローチ、Well-being、フェアトレード
事例：日本、韓国、タイなどにおける「有機農業」の活動について見ていく。
- 授業方法
講義形式
- 教科書
金氣興『地域に根ざす有機農業：日本と韓国の経験』筑波書房 2011 年
- 参考書
アマルティア・セン『正義のアイデア』明石書店 2011 年
- 成績評価方法
出席およびレポート

分野／自然環境論 (農学生命科学研究科) Field: Natural Environment

単位／2 Credit: 2

アマルティア・センの正義論 ～汎アジア経済論Ⅱ～

Pan-Asian Economics II

科目番号 Course ID Number	3905126	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	池本幸生 (東文研) Yukio Ikemoto (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 第 2 会議室 Meeting Room2, 3rd floor, Institute for advanced Studies on Asia, Hong Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、水曜日、3 限 (13:00-14:40) Winter, Wednesday (13:00-14:40)	キーワード Keywords	アマルティア・セン、正義論、ケイパビリティ・アプローチ Amartya Sen, The Idea of Justice, Capability Approach

履修上の注意 Important points

講義形式で解説していくので、特に正義論やセンのケイパビリティ・アプローチについての知識は必要としない。

授業内容 The contents of a lesson

- 授業の目的
Amartya Sen, The Idea of Justice (アマルティア・セン『正義のアイデア』明石書店) を読んでいく。社会をもっと正義に近づけたものに変えていくために、どのようにアプローチすべきかを考える。それは、「正義とは何か」を考えるような抽象的な議論ではなく、目の前にある問題を克服するために、どう進むべきかを考えるアプローチである。そのためには、人々の暮らしを直接捉えようとするケイパビリティという概念を用いること、それを用いてどう社会を変えていくかに合意するために民主的で理性的な討議を必要とすることをセンは主張する。
- アマルティア・センの『正義のアイデア』は大著であるため、各章の要点を解説する形で進めていく。
- 授業の方法
講義形式
- 教科書
Amartya Sen, The Idea of Justice, Capability Approach (邦訳 アマルティア・セン『正義のアイデア』明石書店) 購入にあたっては割引されるケースもあるので、買う前に池本に相談してください。
- 成績評価方法
出席、授業中の発言、レポート

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／自然環境論 (農学生命科学研究科)

Field : Natural Environment

単位／2 Credit : 2

アジアの食と農・環境 ～農学国際特論Ⅲ／環境政策特別講義～

Food, agriculture and environment in Asia

科目番号 Course ID Number	3910132 (農学国際特論Ⅲ) 3910217 (環境政策特別講義)	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	井上真 (農学生命科学研究科) Makoto Inoue (Agriculture)	場 所 Venue	農学部 7 号館 B 棟講義室 Lecture room at Bldg.7B (7B-231/232), Faculty of Agriculture, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏・冬、集中講義 (10:00-17:00) Summer, Winter, Intensive	キーワード Keywords	生計/地域開発/気候変動/食糧生産/家畜/生態系サービス Livelihood/rural development/climate change/food production/ livestock/ ecosystem services
履修上の注意 Important points	出席により評価する。単位取得のためには年間4回の出席が必要である。 Evaluation is based on the attendance. The credit requires four attendances in a year.		
授 業 内 容 The contents of a lesson	○目的 /purpose アジアの食料、農業および環境問題の現状と解決策について、俯瞰的な視野を持つとともに、ローカルな現場のリアリティに立脚して検討できるような複眼的な視点を養う。 To acquire multiple viewpoints for tackling the problems of agriculture and environment against the reality at the local as well as global scales. ○Contents (1) April 26, 2014: Climate change impacts on agriculture and forestry, farm forestry adaptations and management strategies: An analytical review (by Prof. Mangala De Zoysa, Faculty of Agriculture, Ruhuna University, Sri Lanka) (2) July 05, 2014: Green economy, environmental governance and sustainable development: The way forward (by Prof. Mangala De Zoysa, Faculty of Agriculture, Ruhuna University, Sri Lanka) (3) October 25, 2014: Life cycle assessment of food production systems: Methodological issues and case studies (by Dr. Mark Lieffering, AgResearch Grasslands, New Zealand) (4) December 6, 2014: Challenges and opportunities of climate change in livestock-based production systems (by Dr. Mark Lieffering, AgResearch Grasslands, New Zealand) (5) January 24, 2015: Valuing Forest ecosystem services: An international perspective and case studies (by Prof. Karachepone N. Ninan, Centre for Economics, Environment and Society, India) ○Coordinator: Makoto INOUE ○授業の方法 外国人客員教員等が、上記のテーマに関して一日ずつ集中講義を英語で行う。 Intensive lecture by Visiting Professors		

分野／自然環境論 (農学生命科学研究科)

Field : Natural Environment

単位／2 Credit : 2

SATOYAMA 学特論 ～緑地創成学特論～

Landscape Ecology & Planning

科目番号 Course ID Number	3911109	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	大黒俊哉 (農学生命科学研究科) Toshiya Okuro (Agriculture)	場 所 Venue	東大・弥生講堂アネックスほか Yayoi Auditorium, Ichijo Hall/ Annex, UTokyo
授業時間 Semester/Time	夏学期 (集中) Summer, Intensive	キーワード Keywords	自然共生社会、生態系サービス、生物多様性 Nature-harmonious Society, Ecosystem Services, Biodiversity
履修上の注意 Important points	集中講義により行う。	講 師 陣 Lectures	大黒俊哉、バリケシット (インドネシア・パジャジャラン大学) Toshiya Okuro and Parikesit (Padjadjaran University, Indonesia)
授 業 内 容 The contents of a lesson	○授業の目的 いわゆる「里山」を「伝統的・持続的な地域資源利用・生態系管理システム」としてとらえ、自然科学的・人文社会的側面からその変遷と現状についての理解を深めるとともに、21世紀の自然共生社会を支える自然・社会システムとして国際社会に発信するための基礎的能力を習得する。 ○授業の内容 本講義では、生態系サービス、生物多様性、資源・エネルギー、コモンス、パートナーシップ等をキーワードに、生態学 (動物、植物、農業、景観、保全)、緑地環境学、農村計画学、社会学、民俗学、人類生態学など、多様な学問領域から里山の自然・社会システムをとらえ、文理融合アプローチによりそれらを体系化していく。担当教員によるオムニバス形式の講義を基本とするが、講義においては知識の習得にとどまらず、ディスカッションやグループワークなど、アクティブラーニングの手法を取り入れ、能動的な参加を求める。英語での講義を予定している。 ○講義日程 6/30 (月) 10:00-17:20 : 講義 (東大・弥生講堂アネックス) 7/ 1 (火) 9:00-17:20 : 講義 (東大・弥生講堂アネックス) 7/ 4 (金) 9:30-17:00 : グループワーク (国連大) 7/ 5 (土) 9:30-17:00 : 巡検 (横浜市・新治市民の森) ○履修後に身につく能力 里山に代表される社会生態学的生産ランドスケープの特徴を俯瞰的に捉える能力。国際的な情報発信能力。 ○成績評価方法 出席、議論への参加状況およびレポートにより評価する。		

分野／健康論（医学系研究科） Field : Health Sciences

単位／2 Credit : 2

国際地域保健学特論Ⅰ

Special Lecture in Community Health I

科目番号 Course ID Number	41122121	使用言語 Language	英語、日本語 English, Japanese
担当教員 Teacher	神馬征峰（医学系研究科） Masamine Jimba (Medicine)	場 所 Venue	医学部・教育研究棟のセミナー室（掲示を確認すること） Lecture Room, Faculty of Medicine Experimental Research Bldg., Hongo Campus
授業時間 Semester/ Time	夏学期、金曜日、3・4限 (13:00-14:30, 14:50-16:20) Summer, Friday (13:00-14:30, 14:50-16:20)	キーワード Keywords	グローバルヘルス、地域保健、プライマリーヘルスケア、 ヘルスプロモーション、学校保健 Global health, Community health, Primary health care, Health promotion
履修上の注意 Important points	受講希望者は事前に名西助教 keiko50@m.u-tokyo.ac.jp へ連絡して下さい。 Please contact Dr. Nanishi at keiko50@m.u-tokyo.ac.jp before enrollment. 授業開始日：4月18日 Starting Date: 18 April	講師陣 Lecturers	国際協力経験豊富な講師陣
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目的／ Course Objectives グローバルヘルス、コミュニティーヘルスと開発、プライマリーヘルスケアの概念を理解する。次に、健康と公正について今日の話題を学ぶ。また、コミュニティーにおける研究手法の基本を理解する。 To understand concepts of community and global health and issues in equity and health. To understand basics in community-based health research. ○授業日程／ Schedule 1. Concept of community and global health What is global health? (神馬 4月18日／ Jimba, April 18) Community development and health (神馬 4月25日／ Jimba, April 25) Primary health care: past and present (神馬 5月16日／ Jimba, May 16) 2. Equity in community and global health Health and human rights (佐瀬 5月2日／ Sase, May 2) Gender and health (佐崎 5月23日／ Sasaki, May 23) Community-based disability program and development (中西 5月30日／ Nakanishi, May 30) HIV/AIDS and migration (沢田 6月5日 木曜 13:00 から 16:20 / Sawada, June 5, 13:00 to 16:20) Health care and undocumented migrants in Japan (沢田 6月19日 木曜 13:00 から 16:20 / Sawada, June 19, 13:00 to 16:20) 3. Research in community and global health Community health assessment (柴沼 6月6日／ Shibamura, June 6) Health education and social behavior theory (Yoo 7月4日) Medical anthropology 1, 2 (松山 7月11日 8:40 から 16:20 / Matsuyama, July 11, 8:40 to 16:20) Qualitative research methods (佐瀬 5月9日／ Sase, May 9) 4. Management and planning for community and global health Social capital (藤澤 6月27日／ Fujisawa, June 27) ○授業の方法／ Teaching Methods 講義、ディスカッション、学生によるプレゼンテーションなど Lecture and presentations. ○教科書／ Textbook and Reference Books I Rootman, S Dupere, A Pederson, & M O'Neill. 2012. <i>Health Promotion in Canada: Critical Perspectives on Practice</i> (Brown Bear Press) A Banerjee, & E Duflo. 2012. <i>Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty</i> (Public Affairs) LW Green & M Kreuter. 2004. <i>Health Program Planning: An Educational and Ecological Approach</i> (McGraw-Hill Humanities/Social Sciences/Languages) ○成績評価基準／ Method of Evaluation 出席、ディスカッションへの参加、プレゼンテーションによる。 Depend on attendance, participation, and presentations.		

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／健康論（医学系研究科） Field : Health Sciences

単位／2 Credit : 2

精神保健学Ⅰ

Mental Health I

科目番号 Course ID Number	41418211	使用言語 Language	英語、日本語 English, Japanese																												
担当教員 Teacher	川上憲人（医）、非常勤講師 Norito Kawakami (Medicine)	場 所 Venue	医学部・教育研究棟 13 階公共健康医学専攻講義室 Lecture Room, 13rd Floor, Faculty of Medicine Experimental Research Bldg., Hongo Campus																												
授業時間 Semester/Time	夏学期、火曜日、5 限（16:40-18:10） Summer, Tuesday (16:40-18:10)	履修上の注意 Important points	職場における精神保健対策について深く学ぶ「精神保健学Ⅱ」と関連する。 授業開始日：4 月 8 日																												
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目的 精神保健の実態およびニーズを把握し、効果的な第一次、第二次、第三次予防対策を立案することができるようになるために、精神保健疫学の基礎および精神保健対策の科学的根拠を知り、地域における対策の進め方について事例（ケーススタディ）を通じて学ぶことで、実践的な能力も身につけることを目的とする。 ○授業の方法 各回 1 テーマの講義あるいは事例研究（ケーススタディ） 担当教員（または非常勤講師）による講義、あるいは学生がテーマに関して発表しこれに担当教員が補足を行い、全員で討論（ディベート）する。 ○教科書・参考書等 教科書は指定しない。毎回、講義資料を配付する。 ○成績評価方法 出席（25％）、課題発表（25％）およびレポート（50％）により総合的に評価する。																														
○授業日程 <table><tr><td>4 月 8 日</td><td>1) オリエンテーション、総論</td></tr><tr><td>4 月 15 日</td><td>2) 精神疾患の疫学（頻度と危険因子）</td></tr><tr><td>4 月 22 日</td><td>3) 精神健康の測定とスクリーニング</td></tr><tr><td>5 月 13 日</td><td>4) 精神保健とサービス利用</td></tr><tr><td>5 月 20 日</td><td>5) 精神疾患の予防</td></tr><tr><td>5 月 27 日</td><td>6) 課題発表 1: 精神保健の科学的根拠（その 1）</td></tr><tr><td>6 月 3 日</td><td>7) 課題発表 1: 精神保健の科学的根拠（その 2）</td></tr><tr><td>6 月 10 日</td><td>8) トピックス①：うつ・自殺対策（国および自治体の対策）</td></tr><tr><td>6 月 17 日</td><td>9) トピックス②：職場のメンタルヘルス</td></tr><tr><td>6 月 24 日</td><td>10) トピックス③：精神保健行政の現状と課題</td></tr><tr><td>7 月 1 日</td><td>11) トピックス④：精神障がいからのリカバリー</td></tr><tr><td>7 月 8 日</td><td>12) トピックス⑤：国際精神保健</td></tr><tr><td>7 月 15 日</td><td>13) トピックス⑥：災害時の精神保健</td></tr><tr><td>7 月 22 日</td><td>14) 課題発表 2: 精神保健の対策を立案する（5,6 限）※</td></tr></table> ※最終回のみ授業時間が 16:40-20:00 となるので注意すること。				4 月 8 日	1) オリエンテーション、総論	4 月 15 日	2) 精神疾患の疫学（頻度と危険因子）	4 月 22 日	3) 精神健康の測定とスクリーニング	5 月 13 日	4) 精神保健とサービス利用	5 月 20 日	5) 精神疾患の予防	5 月 27 日	6) 課題発表 1: 精神保健の科学的根拠（その 1）	6 月 3 日	7) 課題発表 1: 精神保健の科学的根拠（その 2）	6 月 10 日	8) トピックス①：うつ・自殺対策（国および自治体の対策）	6 月 17 日	9) トピックス②：職場のメンタルヘルス	6 月 24 日	10) トピックス③：精神保健行政の現状と課題	7 月 1 日	11) トピックス④：精神障がいからのリカバリー	7 月 8 日	12) トピックス⑤：国際精神保健	7 月 15 日	13) トピックス⑥：災害時の精神保健	7 月 22 日	14) 課題発表 2: 精神保健の対策を立案する（5,6 限）※
4 月 8 日	1) オリエンテーション、総論																														
4 月 15 日	2) 精神疾患の疫学（頻度と危険因子）																														
4 月 22 日	3) 精神健康の測定とスクリーニング																														
5 月 13 日	4) 精神保健とサービス利用																														
5 月 20 日	5) 精神疾患の予防																														
5 月 27 日	6) 課題発表 1: 精神保健の科学的根拠（その 1）																														
6 月 3 日	7) 課題発表 1: 精神保健の科学的根拠（その 2）																														
6 月 10 日	8) トピックス①：うつ・自殺対策（国および自治体の対策）																														
6 月 17 日	9) トピックス②：職場のメンタルヘルス																														
6 月 24 日	10) トピックス③：精神保健行政の現状と課題																														
7 月 1 日	11) トピックス④：精神障がいからのリカバリー																														
7 月 8 日	12) トピックス⑤：国際精神保健																														
7 月 15 日	13) トピックス⑥：災害時の精神保健																														
7 月 22 日	14) 課題発表 2: 精神保健の対策を立案する（5,6 限）※																														

分野／健康論（医学系研究科） Field : Health Sciences

単位／2 Credit : 2

精神保健学Ⅱ

Mental Health II

科目番号 Course ID Number	41418212	使用言語 Language	英語、日本語 English, Japanese																												
担当教員 Teacher	島津明人（医）、川上憲人（医）、非常勤講師 Akihito Shimazu (Medicine), Norito Kawakami (Medicine)	場 所 Venue	医学部・教育研究棟 13 階公共健康医学専攻講義室 Lecture Room, 13rd Floor, Faculty of Medicine Experimental Research Bldg., Hongo Campus																												
授業時間 Semester/Time	冬学期、火曜日、5 限（16:40-18:10） Winter, Tuesday (16:40-18:10)	履修上の注意 Important points	精神保健疫学と対策の基礎について学ぶ「精神保健学Ⅰ」を受講していることが望ましい。 授業開始日：10 月 7 日																												
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目的 職場のメンタルヘルスの専門職として必要とされる知識・技術を、講義および事例研究とその後の討論によって習得することを目的とする。 具体的には、制度・法規、利用者の状態および特性を踏まえた対応、関連職種間の連携、近年の社会経済情勢を踏まえた対策について学び、具体的な対策を現場で進めることのできる能力を養成する。 ○授業の方法 各回 1 テーマの講義あるいは事例研究（ケーススタディ） 担当教員（または非常勤講師）による講義と全員での討論。 ○教科書・参考書等 毎回、講義資料を配付する。 ○成績評価方法 出席（30%）、レポート（70%）により総合的に評価する。																														
○授業日程 <table><tr><td>10 月 7 日</td><td>コース概要、産業精神保健総論</td></tr><tr><td>10 月 14 日</td><td>外部 EAP によるメンタルヘルス支援</td></tr><tr><td>10 月 21 日</td><td>外部のメンタルヘルスサービス機関をどのように選定するか？</td></tr><tr><td>10 月 28 日</td><td>メンタル不調者対応の基本的な枠組み・専門職が留意すべきこと</td></tr><tr><td>11 月 4 日</td><td>ワーク・ライフ・バランスとメンタルヘルス</td></tr><tr><td>11 月 11 日</td><td>組織・個人の活性化とポジティブメンタルヘルス</td></tr><tr><td>11 月 18 日</td><td>職場のいじめとメンタルヘルス</td></tr><tr><td>11 月 25 日</td><td>腰痛とメンタルヘルス</td></tr><tr><td>12 月 2 日</td><td>海外勤務者のメンタルヘルス支援</td></tr><tr><td>12 月 9 日</td><td>経営と産業保健は協調できるか？</td></tr><tr><td>12 月 16 日</td><td>労働者の復職支援プログラム</td></tr><tr><td>1 月 6 日</td><td>中小規模事業所のメンタルヘルス対策</td></tr><tr><td>1 月 13 日</td><td>人事からみたメンタルヘルス対策</td></tr><tr><td>1 月 20 日</td><td>これからの職場のメンタルヘルス</td></tr></table>				10 月 7 日	コース概要、産業精神保健総論	10 月 14 日	外部 EAP によるメンタルヘルス支援	10 月 21 日	外部のメンタルヘルスサービス機関をどのように選定するか？	10 月 28 日	メンタル不調者対応の基本的な枠組み・専門職が留意すべきこと	11 月 4 日	ワーク・ライフ・バランスとメンタルヘルス	11 月 11 日	組織・個人の活性化とポジティブメンタルヘルス	11 月 18 日	職場のいじめとメンタルヘルス	11 月 25 日	腰痛とメンタルヘルス	12 月 2 日	海外勤務者のメンタルヘルス支援	12 月 9 日	経営と産業保健は協調できるか？	12 月 16 日	労働者の復職支援プログラム	1 月 6 日	中小規模事業所のメンタルヘルス対策	1 月 13 日	人事からみたメンタルヘルス対策	1 月 20 日	これからの職場のメンタルヘルス
10 月 7 日	コース概要、産業精神保健総論																														
10 月 14 日	外部 EAP によるメンタルヘルス支援																														
10 月 21 日	外部のメンタルヘルスサービス機関をどのように選定するか？																														
10 月 28 日	メンタル不調者対応の基本的な枠組み・専門職が留意すべきこと																														
11 月 4 日	ワーク・ライフ・バランスとメンタルヘルス																														
11 月 11 日	組織・個人の活性化とポジティブメンタルヘルス																														
11 月 18 日	職場のいじめとメンタルヘルス																														
11 月 25 日	腰痛とメンタルヘルス																														
12 月 2 日	海外勤務者のメンタルヘルス支援																														
12 月 9 日	経営と産業保健は協調できるか？																														
12 月 16 日	労働者の復職支援プログラム																														
1 月 6 日	中小規模事業所のメンタルヘルス対策																														
1 月 13 日	人事からみたメンタルヘルス対策																														
1 月 20 日	これからの職場のメンタルヘルス																														

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)

分野／健康論 (医学系研究科) Field : Health Sciences

単位／2 Credit : 2

医療コミュニケーション学講義

Health Communication Lecture

科目番号 Course ID Number	41418120	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	木内貴弘 (医)、石川ひろの (医) Takahiro Kiuchi(Medicine), Hirono Ishikawa(Medicine)	場 所 Venue	医学部・教育研究棟 13 階講義室 Lecture Room, 13th Floor, Faculty of Medicine Experimental Research Bldg., Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期 (前半)、火曜日、3・4 時限 (13:00-14:30, 14:50-16:20) Summer, Tuesday (13:00-14:30, 14:50-16:20)		
履修上の注意 Important points	○他の授業との関連 医療コミュニケーション学は、公衆衛生学・医学・医療のあらゆる分野と関係しているが、健康社会学、健康教育学、健康増進科学、医療安全管理学との関係が深い。 授業開始日：4 月 8 日		

授業内容 The contents of a lesson

- 授業の目的
本講義の目的は、医療コミュニケーション (ヘルスコミュニケーション) の理論と実践を体系的に学習することにある。医療コミュニケーション学 (ヘルスコミュニケーション学) とは、医療・公衆衛生分野を対象としたコミュニケーション学であり、医療従事者間、医療従事者と患者市民間、患者市民間における健康や医療に関連した知識や情報などのコミュニケーションを対象とする。医療コミュニケーションは、医学・医療と社会のインターフェイスとして、パブリックヘルス分野において、非常に重要な意味を持っている。従来、ヒト対ヒトのいわゆるヒューマンコミュニケーションを主体に考えられてきたが、現在では、これに加えて、インターネット、マスメディア、コンピュータ・ゲーム機等を介したコミュニケーションの意義・役割が増大している。本講義では、個人あるいは社会としての最適な健康上のアウトカムを得るために、医学・医療に関する知識・情報を、正確かつ効果的に伝達し、受け手に理解してもらうために必要な、(1) コミュニケーションの理論体系、(2) コミュニケーションの実務的方法論、(3) コミュニケーションの評価・分析方法等を取り扱ったともに、医療コミュニケーションの具体的な実践例の紹介と分析も行う (具体的な内容は下記の「授業計画及び内容」を参照のこと)。本講義の受講によって、医療コミュニケーションを実践し、改善していくために必要な基礎的な知識を得ることができる。
- 参考文献
Athena du Pre. Communicating About Health: Current Issues and Perspectives. 4th ed. Oxford University Press, 2013
Peter G. Northouse & Laurel L. Northouse 著、萩原明人訳、ヘルス・コミュニケーション 改訂版、九州大学出版会、2010
Debra L. Roter & Judith A. Hall 著、石川ひろの、武田裕子訳、患者と医師のコミュニケーション―より良い関係作りの科学的根拠、篠原出版新社、2007
藤崎和彦、橋本英樹 著、医療コミュニケーション研究会 編、医療コミュニケーション―実証研究への多面的アプローチ、篠原出版新社、2010
- 成績評価の方法
講義への出席 (30%)、試験 (70%) による。
- 授業の方法
・各回原則 1 テーマの講義を行う (2 回で 1 テーマの講義もある)。
・テーマに基づいた追加資料の配布や事例の紹介を行うことがある。

○授業日程

日 時	内 容	担 当
4 月 8 日 (火) 13:00-14:30	I. 医療コミュニケーション学総論 医療コミュニケーション学とは	木内貴弘
4 月 8 日 (火) 14:50-16:20	II. 対人コミュニケーション カウンセリング入門	久田満 (上智大学)
4 月 15 日 (火) 13:00-14:30	II. 対人コミュニケーション 患者市民の立場からみた医療者との関係	山口育子 (COML)
4 月 15 日 (火) 14:50-16:20	II. 対人コミュニケーション 患者市民の立場からみた医療者との関係	山口育子 (COML)
4 月 22 日 (火) 13:00-14:30	II. 対人コミュニケーション 個人の行動変容を促すコミュニケーション	石川雄一 (日本ヘルスサイエンスセンター)
4 月 22 日 (火) 14:50-16:20	II. 対人コミュニケーション 集団の行動変容を促すコミュニケーション	石川善樹 (株式会社キャンサースキャン)
5 月 13 日 (火) 13:00-14:30	I. 医療コミュニケーション学総論 医療コミュニケーションの評価と実証研究	石川ひろの
5 月 13 日 (火) 14:50-16:20	II. 対人コミュニケーション 医療者のコミュニケーション教育	北村聖 (東京大学医学教育国際協力研究センター)
5 月 20 日 (火) 13:00-14:30	I. 医療コミュニケーション学総論 ソーシャルマーケティング入門	木内貴弘
5 月 20 日 (火) 14:50-16:20	III. メディア・コミュニケーション エンターテインメント・エデュケーション	石川ひろの
5 月 27 日 (火) 13:00-14:30	III. メディア・コミュニケーション 新聞	阿部文彦 (読売新聞)
5 月 27 日 (火) 14:50-16:20	III. メディア・コミュニケーション テレビ	市川衛 (NHK)
5 月 28 日 (水) 13:00-14:30	III. メディア・コミュニケーション インターネット	木内貴弘
5 月 28 日 (水) 14:50-16:20	III. メディア・コミュニケーション ヘルスキャンペーン	岩藤重人 (AC ジャパン)



分野／健康論（医学系研究科） Field : Health Sciences

単位／ 1 Credit : 1

医療コミュニケーション学演習

Health Communication Practice Training

科目番号 Course ID Number	41418122	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	木内貴弘（医）、石川ひろの（医） Takahiro Kiuchi(Medicine), Hirono Ishikawa(Medicine)	場 所 Venue	医学部・教育研究棟 13 階講義室 Lecture Room, 13th Floor, Faculty of Medicine Experimental Research Bldg., Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期（後半）、水曜日、3・4 限（13:00-14:30, 14:50-16:20） Summer, Wednesday (13:00-14:30, 14:50-16:20)		
履修上の注意 Important points	「医療コミュニケーション学」講義の受講が望ましいが、「医療コミュニケーション学」講義の知識は前提としない。 授業開始日：6 月 4 日		
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目的 医療コミュニケーションの実践に必要な演習を行うことによつて、「医療コミュニケーション学」の講義で学んだ様々な理論や実践法に対する理解を深めるとともに、具体的な医療コミュニケーションの場（医療機関、官公庁、教育機関、研究機関、患者支援組織、マスコミ等）でこれらを生かすことができるようにすることを目的とする。		
	○授業の方法 ・各回、課題にもとづいて演習・発表・討論を行う。 ・演習毎にプレゼンテーション、レポート提出、相互評価等を行う。 ○教科書・参考書等 田近秀敏：[実践] ビジネス・コーチングプロフェッショナル・コーチの道具箱、PHP 研究所、2003 園田由紀（訳）：MBTI への招待—C.G. ユングの「タイプ論」の応用と展開、金子書房、2002 梅田望夫：ウェブ進化論 本当の大変化はこれから始まる、ちくま新書、2006 ○成績評価の方法 演習への参加、演習内でのプレゼンテーション、作成した資料によつて評価する。やむを得ず欠席する場合には、事前に事情を届け出れば、別途レポートの提出に代える場合がある。		
	○授業日程		
	日 時	内 容	担 当
	6/4 13:00-16:20	I. 対人コミュニケーション演習 接遇演習	佐藤愛子 (東京歯科大学)
	6/11 13:00-16:20	II. メディアコミュニケーション演習 インターネットコミュニケーション演習(1) 注意：ノート PC 必要	木内貴弘 石川ひろの
	6/18 13:00-16:20	I. 対人コミュニケーション演習 MBTI に基づくコミュニケーション演習 (1)	園田由紀 (日本 MBTI 協会)
	6/25 13:00-16:20	I. 対人コミュニケーション演習 MBTI に基づくコミュニケーション演習 (2)	園田由紀 (日本 MBTI 協会)
	7/2 13:00-16:20	I. 対人コミュニケーション演習 MBTI に基づくコミュニケーション演習 (3)	園田由紀 (日本 MBTI 協会)
	7/9 13:00-16:20	I. 対人コミュニケーション演習 コーチング演習	田口智博 (三重大学)
	7/16 13:00-16:20	II. メディアコミュニケーション演習 マス・コミュニケーション演習 ・新聞記事の執筆と評価（記者会見演習） ・既存の新聞記事の評価・分析 注意：ノート PC 必要	木内貴弘 石川ひろの
	7/23 13:00-16:20	II. メディアコミュニケーション演習 インターネットコミュニケーション演習(2) 注意：ノート PC 必要	木内貴弘 石川ひろの

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）

● ● ● ●

分野／健康論（医学系研究科） Field : Health Sciences 単位／2 Credit : 2

Human Ecology I

人類生態学特論 I

科目番号 Course ID Number	41422231	使用言語 Language	English
担当教員 Teacher	Prof. Chiho Watanabe (Medicine), Assoc Prof. Masahiro Umezaki (Medicine)	場 所 Venue	Medical Building 3 Annex, E604
授業時間 Semester/Time	Summer, Friday, 9:00-12:10	履修上の注意 Important points	Starting Date: 18 April
授業内容 The contents of a lesson	The primary goal of Human Ecology is to describe the interactions between human populations and their environments, and analyze them in terms of adaptation. The course examines such topics as population, nutrition, subsistence, disease, and environment in ecological perspectives. The classes will be given in a combination of lectures and discussions. Basic concepts, methodologies and relevant researches will be introduced by lecture; Depending on the topic, there will be reading assignments. - Lectures and presentation will be done in English. - Textbooks/ Reference Books will be announced in the lecture. - Method of Evaluation : Attendance and participation to the class, term report.		

分野／健康論（医学系研究科） Field : Health Sciences 単位／2 Credit : 2

健康教育学

Health Education

科目番号 Course ID Number	41418213	使用言語 Language	英語 English																																																												
担当教員 Teacher	橋本英樹（医） Hideki Hashimoto (Medicine)	場 所 Venue	医学部教育研究棟 13 階 公共健康医学専攻（SPH）講義室 SPH Lecture Room, 13rd Floor, Faculty of Medicine Experimental Research Bldg., Hongo Campus																																																												
授業時間 Semester/Time	冬学期、金曜日、1・2 限 (8:40-10:10, 10:30-12:00)、8 週 Winter, Friday (8:40-10:10, 10:30-12:00) 8 weeks	講 師 陣 Lecturers	橋本英樹、岩永俊博（ヘルスプロモーション研究センター）、岡田加奈子（千葉大学）、戸津崎貴文（みずほ銀行）																																																												
履修上の注意 Important points	「予防保健の実践と評価」「健康増進科学」「社会と健康 I」などと関連する。 授業開始日：11 月 28 日																																																														
授業内容 The contents of a lesson	○授業の目的 生活習慣・健康行動変容に関する理論を講義でまず鳥瞰した後、各理論のフレームを用いて実践のプログラム立案を行う上での長所・短所・限界点をクラス内ディスカッション・レポートで深める。 ○授業の方法 講義・ディスカッション ○教科書・参考書等 Glanz K, et al. Health Behavior and Health Education; Theory, Research and Practice. 4th eds. John Wiley and Sons, 2008 畑 栄一, 土井 由利子. 行動科学—健康づくりのための理論と応用. 南江堂 第 2 版 他、適宜配布 ○成績評価の方法 出席ならびに講義中発言 (40%)・課題およびレポート (60%) ○授業日程 <table border="1"> <tbody> <tr><td>1)</td><td>11/28</td><td>1 限</td><td>Micro-meso level of behavioral theories I</td></tr> <tr><td>2)</td><td>11/28</td><td>2 限</td><td>Micro-meso level of behavioral theories II</td></tr> <tr><td>3)</td><td>12/5</td><td>1 限</td><td>Population level of behavioral theories I</td></tr> <tr><td>4)</td><td>12/5</td><td>2 限</td><td>Population level of behavioral theories II</td></tr> <tr><td>5)</td><td>12/12</td><td>1 限</td><td>Empowerment approach in community I (岩永)</td></tr> <tr><td>6)</td><td>12/12</td><td>2 限</td><td>Empowerment approach in community II (岩永)</td></tr> <tr><td>7)</td><td>12/19</td><td>1 限</td><td>Health marketing in workplace I (戸津崎)</td></tr> <tr><td>8)</td><td>12/19</td><td>2 限</td><td>Health marketing in workplace II (戸津崎)</td></tr> <tr><td></td><td>1/9</td><td></td><td>休講 (SPH 課題発表会)</td></tr> <tr><td>9)</td><td>1/16</td><td>1 限</td><td>Health education at school: Case method I (岡田)</td></tr> <tr><td>10)</td><td>1/16</td><td>2 限</td><td>Health education at school: Case method II (岡田)</td></tr> <tr><td>11)</td><td>1/23</td><td>1 限</td><td>Health literacy</td></tr> <tr><td>12)</td><td>1/23</td><td>2 限</td><td>Decision making and negotiation</td></tr> <tr><td>13)</td><td>1/30</td><td>1 限</td><td>Wrap-up and discussion</td></tr> <tr><td>14)</td><td>1/30</td><td>2 限</td><td>Written exam</td></tr> </tbody> </table>			1)	11/28	1 限	Micro-meso level of behavioral theories I	2)	11/28	2 限	Micro-meso level of behavioral theories II	3)	12/5	1 限	Population level of behavioral theories I	4)	12/5	2 限	Population level of behavioral theories II	5)	12/12	1 限	Empowerment approach in community I (岩永)	6)	12/12	2 限	Empowerment approach in community II (岩永)	7)	12/19	1 限	Health marketing in workplace I (戸津崎)	8)	12/19	2 限	Health marketing in workplace II (戸津崎)		1/9		休講 (SPH 課題発表会)	9)	1/16	1 限	Health education at school: Case method I (岡田)	10)	1/16	2 限	Health education at school: Case method II (岡田)	11)	1/23	1 限	Health literacy	12)	1/23	2 限	Decision making and negotiation	13)	1/30	1 限	Wrap-up and discussion	14)	1/30	2 限	Written exam
1)	11/28	1 限	Micro-meso level of behavioral theories I																																																												
2)	11/28	2 限	Micro-meso level of behavioral theories II																																																												
3)	12/5	1 限	Population level of behavioral theories I																																																												
4)	12/5	2 限	Population level of behavioral theories II																																																												
5)	12/12	1 限	Empowerment approach in community I (岩永)																																																												
6)	12/12	2 限	Empowerment approach in community II (岩永)																																																												
7)	12/19	1 限	Health marketing in workplace I (戸津崎)																																																												
8)	12/19	2 限	Health marketing in workplace II (戸津崎)																																																												
	1/9		休講 (SPH 課題発表会)																																																												
9)	1/16	1 限	Health education at school: Case method I (岡田)																																																												
10)	1/16	2 限	Health education at school: Case method II (岡田)																																																												
11)	1/23	1 限	Health literacy																																																												
12)	1/23	2 限	Decision making and negotiation																																																												
13)	1/30	1 限	Wrap-up and discussion																																																												
14)	1/30	2 限	Written exam																																																												



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／情報論 (学際情報学府) Field : Information Theory

単位／2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 101:

Introduction to Asian Studies: History and International Relations

科目番号 Course ID Number	4971010	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	松田康博 (情報学環) Yasuhiro Matsuda (Interfaculty Initiative in Information Studies)	場 所 Venue	東洋文化研究所 3 階、大会議室 Main Meeting Room, 3rd floor, Institute for Advance Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、火曜日、5 限 (16:40-18:10) Winter, Tuesday (16:40-18:10)	キーワード Keywords	Asia, History, International Relations
授業内容 The contents of a lesson	This course will offer students a series of lectures on Asian history and international relations with the aim of providing a solid foundation in the central topics and most recent scholarship in Asian Studies. This course is required by both M.A.S. and Ph.D. students in the ITASIA program (non-ITASIA students are also invited) and it aims to expand students' knowledge beyond a few specialized countries or areas in Asia by providing a broader perspective of Asia as a whole through the study of history. For further information, please check UT-mate.		

分野／情報論 (学際情報学府) Field : Information Theory

単位／2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 121:

International Politics in East Asia

科目番号 Course ID Number	4971210	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	田中明彦 (東文研) Akihiko Tanaka (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 3 階、大会議室 Main Meeting Room, 3rd floor, Institute for Advance Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、金曜日、3 限 (13:00-14:30) Summer, Friday (13:00-14:30)	キーワード Keywords	International Politics, East Asia, Japan, the United States, China, Southeast Asia, Korean Peninsula, North Korea, world system, regionalism, realism, liberalism, constructivism, power transition, balance of power, history issues, hard power, soft power, new medievalism, democratic peace, economic interdependence
授業内容 The contents of a lesson	This is an intensive seminar on contemporary East Asian international politics in the context of the changing world system. The seminar covers various aspects, both theoretical and issue-based, of international politics in East Asia mainly from the 1980s to the 2010s. The following are the major subjects to be discussed in the seminar: 1. Overview of International Politics in East Asia 2. Theoretical Perspectives of International Politics in East Asia 3. The United States 4. China 5. Japan 6. The Korean Peninsula 7. Regionalism in East Asia 8. Future of International Politics in East Asia For further information, please check UT-mate.		

分野／情報論（学際情報学府） Field : Information Theory

単位／2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 124:

International Conflict Study

科目番号
Course ID Number

4971240

使用言語
Language英語
English担当教員
Teacher藤原帰一（法学政治学研究科）
Kiichi Fujiwara (Graduate Schools for Law and Politics)場 所
Venue法文 1 号館 3 階・第 26 番教室
Room 26, 3rd floor, Faculty of Law & Letters Bldg.1, Hongo Campus授業時間
Semester/Time夏学期、金曜日、4 限（14:50-16:20）
Summer, Friday (14:50-16:20)キーワード
Keywords国際紛争 地域紛争 破綻国家 国際介入
International Conflicts, Regional Conflicts, Failed States, International Intervention授業内容
The contents of a lesson

What is an international conflict? Will it be possible to discuss the origins of international conflicts in more general and abstract ways, or would it be the case that each conflict is so distinct in nature that rule out theoretical abstraction? Those are the basic topics that I aim to cover in this course. International conflicts encompass a wide terrain; here I will focus on what has come to be called the new kind of wars, those in which cultural symbols and identity play out in the development of violent conflicts, as opposed to the more traditional kind of warfare based on the acquisition of secular interests. For further information, please check UT-mate.

分野／情報論（学際情報学府） Field : Information Theory

単位／2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 128:

Surviving Cancer in Asia

科目番号
Course ID Number

4971280

使用言語
Language英語
English担当教員
Teacher赤座英之（先端研）、河原ノリエ（先端研）
Hideyuki Akaza (Advanced Science and Technology),
Norie Kawahara (Advanced Science and Technology)場 所
Venue福武ホール B2 階・福武ラーニングシアター
Fukutake Learning Theater, B2, Fukutake Hall, Hongo Campus授業時間
Semester/Time冬学期、月曜日、4 限（14:50-16:20）
Winter, Monday (14:50-16:20)授業内容
The contents of a lesson

Changes in the disease structure in a globalizing Asia are contributing to a rapid increase in cancer in the region. Cancer is a complex disease that is deeply related to various factors, including genetic predisposition, living environment and lifestyle customs. Cancer represents a grave and common challenge in Asia, where social structures are undergoing significant transformations in all aspects, including in the economy, social security and also in family relationships. What is more, the common challenge of cancer is revealing contemporary issues for society as a whole in Asia. Advances in medicine mean that the number of people surviving cancer in Asia is also increasing and this survivorship and the need for long-term treatment and care is impacting the welfare of patients and their families. Both medical and welfare policies cover areas in which it is not possible to make judgments on the basis of economic considerations alone, given the ethical dimensions of such policies. The countries of Asia are now facing a period of transition in their social structures as societies continue to age, and the very real issue of striking a balance between limited economic and social resources on the one hand and what is acceptable in ethical terms on the other hand is an extremely difficult one to address. Given the difficulties in controlling it cancer cannot be overcome based on global health-based logic, which has functioned to date in countermeasures against communicable diseases. Furthermore, as the economy globalizes the market for anti-cancer drugs is expanding rapidly. The status of drug development itself is an issue that encompasses complex and dynamic factors, with national interests at stake. As such, the structure as it currently stands is not one that can be readily resolved by referring to conventional theories of medical sociology. This lecture series will be held in an omnibus style, with external lecturers being invited to talk about cancer in Asia from their various expert perspectives. The lecturers will delve into issues such as the characteristics of cancer in Asia and the various approaches for regional cooperation that will help to overcome it, examining the current status in the Asian region and the various challenges that are currently being faced. For further information, please check UT-mate.

分野／情報論（学際情報学府） Field : Information Theory

単位／2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 129:

Understanding Asia and Japan through Hong Kong

科目番号
Course ID Number

4971290

使用言語
Language英語
English担当教員
Teacher園田茂人（情報学環）
Shigeto Sonoda (Interfaculty Initiative in Information Studies)場 所
Venue

TBA

授業時間
Semester/Time夏学期、集中
Summer, intensiveキーワード
Keywords

Understanding Asia and Japan, summer program, University of Hong Kong

授業内容
The contents of a lesson

This course is for those who want to understand Asia and Japan through the lens of Hong Kong by participating in joint summer program between University of Tokyo and the University of Hong Kong in August, 2014. The content of the program has not been finalized yet, but international office at the University of Tokyo will start to announce call for participation in summer program in mid-April through the website, when you can get the whole information including schedule, concrete activities, lodging, transportation, and participation fee. Two credits will be offered to those who participate in the program. (<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/administration/go-global/program/program.html>) The program will be consisted of lectures, fieldworks, and presentations. The topics in the program will include (1) history and economy of Hong Kong, (2) Japanese popular culture in Hong Kong, and (3) Japanese company in Hong Kong under globalization. Participants will listen to the lectures delivered by professors in the University of Hong Kong, and then participate in the fieldwork/fieldtrip. Participants in the program will form groups, each of which will make presentation on its research findings on the last day of the program. Graduate students as well as undergraduate students will join the program and the former will be expected to function as a leader of each group. 10 local students in the University of Hong Kong will join the program and work with the students from University of Tokyo. For further information, please check UT-mate.

『日本・アジア学』 講座シラバス (2014 年度)



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／情報論 (学際情報学府) Field : Information Theory

単位／ 2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 131:

Modern Japanese Diplomacy

科目番号 Course ID Number	4971310	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	大島正太郎 (法学政治学研究科) Shotaro Oshima (Graduate Schools for Law and Politics)	場 所 Venue	法文 1 号館 22 番教室 Room 22, Faculty of Law & Letters Bldg.1, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、金曜日、5 限 (16:40-18:10) Winter, Friday (16:40-18:10)	履修上の注意 Important points	公共政策との合併授業
キーワード Keywords	現代日本外交 近代日本外交 Modern Japanese diplomacy, Japan's foreign policy strategy		
授業内容 The contents of a lesson	The course "Modern Japanese Diplomacy" will be looking at Japan's "diplomacy/foreign policy in the 'modern' era." It will approach this subject by asking how major international political events/upheavals, such as wars and revolutions, shaped the strategic environment which directly or indirectly impinged on Japan's security, and in what manner Japan responded to such challenges. "The 'Modern' era" will be defined as post-1815 period up to the present, but most of the focus will be on post-1945 world scene. It will begin by looking at the European imperialist encroachment of Asia, which led to Japan's "opening", and then cover developments leading up to the Second World War. Major focus will be on the strategic environment in this region after the Second World War until the end of the Cold War. Much time will also be allotted to cover the Post-Cold War period until the present. In the final sessions, there will be an overall review of today's strategic environment and the resultant challenges facing Japan. Throughout the course, events/upheavals in the region will always be put in the context of global strategic developments. For further information, please check UT-mate.		

分野／情報論 (学際情報学府) Field : Information Theory

単位／ 2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 132:

Assimilation and Japanese Nationalism

科目番号 Course ID Number	4971320	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	李賢鮮 (東洋文化研究所) Lee Hyunsun (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 3 階、第 2 会議室 Meeting Room 2, 3rd floor, Institute for Advance Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、木曜日、3 限 (13:00-14:30) Winter, Thursday (13:00-14:30)	キーワード Keywords	Nationalism, ethnicity, Japanese and Western societies
授業内容 The contents of a lesson	This course covers major concepts and debates about ethnicity and nationalism. Also, it focuses on nationalism and ethnicity in both contemporary Western and Japanese societies For further information, please check UT-mate.		

分野／情報論 (学際情報学府) Field : Information Theory

単位／ 4 Credit : 4

Information, Technology, and Society in Asia 133:

Japanese Foreign Economic Policy

科目番号 Course ID Number	4971330	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	飯田敬輔 (法学政治学研究科) Keisuke Iida (Graduate Schools for Law and Politics)	場 所 Venue	法文 1 号館 4 階 A4 演習室 Room A4, 4th floor, Faculty of Law & Letters Bldg.1, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、水曜日、4・5 限 (14:50-16:20・16:40-18:10) Winter, Wednesday (14:50-16:20, 16:40-18:10)	履修上の注意 Important points	公共政策との合併授業
キーワード Keywords	Foreign Policy, Trade, Foreign Direct Investment, Japan, US-Japan Relations		
授業内容 The contents of a lesson	The goal of this seminar is to understand how Japan's foreign economic policy is made and where its characteristics come from. This course is primarily intended for international students wanting to understand the political and economic underpinnings of Japan's foreign economic policy, but it will be also useful for students who anticipate practicing foreign economic policy in their professional life, or those who will help shape governmental foreign economic policy in the private sector. For further information, please check UT-mate.		

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）



分野／情報論（学際情報学府） Field : Information Theory 単位／2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 143:

Understanding Taiwan and Japan in Global Settings: NTU-UT Joint Summer Program 2014

科目番号 Course ID Number	4971430	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	園田茂人（情報学環） Shigeto Sonoda (Interfaculty Initiative in Information Studies)	場 所 Venue	TBA
授業時間 Semester/Time	夏学期、集中 Summer, intensive	履修上の注意 Important points	
キーワード Keywords	Understanding Taiwan, summer program, National Taiwan University		
授業内容 The contents of a lesson	This course is for those students who want to understand Taiwan in global settings through participating in the summer program specially tailored to students of the University of Tokyo by College of Social Sciences, National Taiwan University in August, 2014. The content of the program has not been finalized yet, but International Affairs Division of the University of Tokyo will start to announce call for participation in summer program in mid-April through the website, when you can get the whole information including schedule, concrete activities, lodging, transportation, and participation fee. Two credits will be offered to those who participate in the program. (http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/administration/go-global/program/program.html) The program will be consisted of lectures, fieldworks, and presentations. Participants will listen to the lectures delivered by professors in National Taiwan University, and then participate in the fieldwork/fieldtrip. Participants in the program will form groups, each of which will make presentation on its research findings on the last day of the program. Graduate students as well as undergraduate students (capacity: 12 students) will join the program and the former will be expected to function as a leader of each group. Those who will join the program will be partially supported financially thanks to JASSO's scholarship. 12 NTU students will join the program, too. From this year, Tokyo round was created and all the students will join both Taipei Round and Tokyo Round. For further information, please check UT-mate.		

分野／情報論（学際情報学府） Field : Information Theory 単位／2 Credit : 2

Information, Technology, and Society in Asia 319:

MindHacks: Organizing Knowledge, Resources and Research in the Internet Era

科目番号 Course ID Number	4973190	使用言語 Language	英語 English
担当教員 Teacher	ミヒヤエル・シルツ（東文研） Michael Schiltz (Advanced Studies on Asia)	場 所 Venue	東洋文化研究所 3 階、大会議室 Main Meeting Room, 3rd floor, Institute for Advance Studies on Asia, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、火曜日、4 限（14:50-16:20） Summer, Tuesday (14:50-16:20)	履修上の注意 Important points	Due to the collaboration-intensive nature of this seminar series, the number of students will be limited.
キーワード Keywords	Digital humanities, learning technology, library science		
授業内容 The contents of a lesson	The seminar series attempts to familiarize students with a wide range of freely available online tools that are specifically geared towards academic use. These technologies include means for storing and organizing sources, visualize and 'mine' data, alternative search tools and sources contemplating the epistemological consequences of so-called digital humanities. For further information, please check UT-mate.		

分野／情報論（学際情報学府） Field : Information Theory 単位／2 Credit : 2

文化・人間情報学特論Ⅰ

Special Seminars in Cultural and Human Information I

科目番号 Course ID Number	4917030	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	真鍋祐子（情報学環） Yuko Manabe (Interfaculty Initiative in Information Studies)	場 所 Venue	情報学環本館、7 階第一演習室 1st Seminar Room, 7 floor, Interfaculty in Information Studies Bldg, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	冬学期、月曜日、3 限（13:00-14:30） Winter, Monday (13:00-14:30)	履修上の注意 Important points	成績評価の方法：出席状況、レポート、討論への貢献度
キーワード Keywords	東アジア、ナショナリズム、グローバリズム、マイノリティ、在日		
授業内容 The contents of a lesson	東アジアにおける戦争と植民地主義と分断の所産であり、かつ、現今のグローバリズムとナショナリズムの「ねじれ」を体現した存在として、今年度は「在日」に焦点をあてる。在日を含む複数の外部講師を迎え、講義を聞きながら、在日の現在と展望を見ずえるための新たな理論的枠組みを模索する。		

『日本・アジア学』講座シラバス（2014 年度）



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

分野／特論 Field : Advanced Studies

単位／2 Credit : 2

日中関係

Sino-Japanese Relations

科目番号 Course ID Number	2903161-02	使用言語 Language	日本語 Japanese
担当教員 Teacher	丸川知雄（社会科学研究所） Tomoo Marukawa (ISS)	場 所 Venue	社会科学研究所 1 階第一会議室 Meeting Room#1, Institute of Social Science, Hongo Campus
授業時間 Semester/Time	夏学期、金曜日、2 限（10:30-12:00） Summer, Friday (10:30-12:00)	キーワード Keywords	日中関係、日本、中国、外交、資源、投資、貿易、東南アジア
履修上の注意 Important points	教科書を用いて議論するので必ず教科書を入手すること。		

授業内容
The contents of a lesson

2012 年には領土問題を巡って日中関係が大きく動揺した。2010 年に中国と日本の GDP の規模が逆転したときから両国関係の基調が変化した。本講義では最新の情勢を踏まえながら中長期的な視点で日本と中国の関係を、政治外交関係、経済関係、社会文化関係、東南アジアからの視点など、多角的に掘り下げて分析する。

In 2012, Sino-Japanese relationship faced a major challenge triggered by territorial disputes. The basic trend of bilateral relationship has changed since China's GDP surpassed that of Japan's in 2010. This lecture series will view Sino-Japanese relations from various perspectives, such as political and diplomatic relationship, economic relationship, social and cultural issues, and perspectives from South East Asia.

○授業計画

予定しているテーマ

「日中の貿易関係と貿易摩擦」、「日中の企業間競争と補完関係」、「日中関係と国内政治」、「日中間の歴史問題と国民感情」、「日中間の安全保障問題と尖閣」、「友好フレイムの終焉：「民」は日中関係を改善できるか？」、「日中ビジネス交流 30 年（1）：日本人ビジネスマンがみた企業内摩擦の変遷」、「日中ビジネス交流 30 年（2）：対中企業進出の日韓比較」、「中国の対外経済関係 GMS・CAEXPO」、「アジア新興諸国の経済と中国・日本」

○授業の方法

講義、討論

○評価の方法

授業への積極的参加とレポート

○教科書

『日中関係史 1972-2012』Ⅰ 政治、Ⅱ 経済、Ⅲ 社会・文化、Ⅳ 民間 東京大学出版会、2012/14 年

○その他

詳細な日程は東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点の ASNET 講座ウェブサイトにて公表する。

<http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/kyoten/asnet/>

注意①：正規課程とプログラム履修の関係について

NOTE 1 : Standard curriculum and taking part in the program

本プログラムの修了は正規課程の修了とは独立に認定します。したがって、本プログラムにおいて「他研究科（教育部）履修」、「学部科目履修」として取得した単位を、所属する研究科・教育部が正規課程の単位としてどのように取り扱うかは、当該研究科・教育部が決定します。

Recognition of completion of the program is independent of that for completion of the standard curriculum. Therefore, decisions regarding treatment as credit of units gained in this program from "Other graduate school (educational department) enrolment" or "Undergraduate course enrolment" vis-a-vis the standard curriculum of the graduate school or faculty to which the student belongs shall be determined by that graduate school or faculty.

注意②：修士課程から博士課程に進学した時の扱い

NOTE 2 : Treatment of credits when moving from a master's to a doctoral program

修士課程または博士課程在学中に 12 単位を修得した場合だけでなく、東京大学の修士課程から博士課程へ進学した学生は、両課程を通して 12 単位を取得することで修了と認定されます。ただし、東京大学の学部において言語科目群に該当する単位を取得して、大学院に進学した場合においては、学部在籍中に取得した単位を本プログラムの単位とみなすことは出来ません。

For students who gained 12 credits during the term of a master's or doctoral program, or for students at the University of Tokyo who have moved from a master's to a doctoral program, recognition of completion shall be given for 12 credits gained during both courses. However, for students who gained credits for language-related courses at a University of Tokyo undergraduate faculty and moved on to the graduate level, the credits gained by such students while enrolled in that department may not be used as credits in this program.

注意③：平成 18 年度～20 年度の「日本・アジア学講座」との関係

NOTE 3 : Regarding 2006 ~ 2008 Lectures on Japan-Asian Studies

平成 18 年度～20 年度の間に「日本・アジア学講座」として開講された科目のうち、作業委員会が特別に認めた場合には修了要件の単位とすることができます。

If the Managing Committee gives special permission, credits gained from those subjects taught during the Japan-Asian Studies Lectures held between 2006 and 2008 may be counted as credits.

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）

言語科目群

Asian Language Courses

事前に必ず、履修に当たっての注意（履修者の制限など）を、ウェブサイトならびに UT-Mate 上で確認してください。
どちらのキャンパス（本郷・駒場）の科目でも履修可能ですが、学部学生の履修状況によっては、受講できない場合もあります。

For detailed information in English, please visit the website.

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

本郷キャンパス【文学部開講科目】

Hongo Campus (Faculty of Letters)

科目名	科目番号	担当教員	学期	単位	科目名	科目番号	担当教員	学期	単位
中国語前期 (1)	04146401	邵 迎建	夏	2	韓国朝鮮語中級	04146441	五十嵐 孔一	夏	2
中国語前期 (2)	04146402	邵 迎建	冬	2	アラビア語 (1)	04146442	吉田 京子	夏	2
中国語後期 (1)	04146403	邵 迎建	夏	2	アラビア語 (2)	04146443	吉田 京子	冬	2
中国語後期 (2)	04146404	邵 迎建	冬	2	ベルシア語 (1)	04146444	渡部 良子	夏	2
ヒンディー語 (1)	04146437	町田 和彦	夏	2	ベルシア語 (2)	04146445	渡部 良子	冬	2
ヒンディー語 (2)	04146438	町田 和彦	冬	2	チベット語 (1)	04146452	星 泉	夏	2
韓国朝鮮語初級 (1)	04146439	五十嵐 孔一	夏	2	チベット語 (2)	04146453	福田 洋一	冬	2
韓国朝鮮語初級 (2)	04146440	五十嵐 孔一	冬	2					

駒場キャンパス【教養学部開講科目】

Komaba Campus (College of Arts and Sciences)

科目名	科目番号	担当教員	学期	単位	科目名	科目番号	担当教員	学期	単位
共通中国語 (1) (初級文法)	08A4001	孫 軍悦	夏	2	共通中国語 (23) (上級講読)	08A4023	伊藤 徳也	夏	2
共通中国語 (2) (初級会話)	08A4002	孫 軍悦	冬	2	共通中国語 (24) (中級文法)	08A4024	楊 凱榮	冬	2
共通中国語 (3) (中級講読)	08A4003	秋山 珠子	夏	2	共通中国語 (49) (PEAK 初級)	08A4049	張 玉萍	夏	2
共通中国語 (4) (中級講読)	08A4004	秋山 珠子	冬	2	共通中国語 (50) (PEAK 初級)	08A4050	張 玉萍	冬	2
共通中国語 (5) (中級講読)	08A4005	阿古 智子	夏	2	共通韓国朝鮮語 (1)	08A8001	三ツ井 崇	夏	2
共通中国語 (6) (中級講読)	08A4006	阿古 智子	冬	2	共通韓国朝鮮語 (2)	08A8002	金 泰昊	冬	2
共通中国語 (7) (中級会話)	08A4007	林 立梅	夏	2	共通韓国朝鮮語 (3)	08A8003	金 東漢	夏	2
共通中国語 (8) (中級会話)	08A4008	林 立梅	冬	2	共通韓国朝鮮語 (4)	08A8004	金 東漢	冬	2
共通中国語 (9) (中級会話) (PEAK 中級)	08A4009	孫 軍悦	夏	2	共通韓国朝鮮語 (5) (PEAK 中級)	08A8005	張 銀英	夏	2
共通中国語 (10) (中級会話) (PEAK 中級)	08A4010	孫 軍悦	冬	2	共通韓国朝鮮語 (6) (PEAK 中級)	08A8006	張 銀英	冬	2
共通中国語 (11) (中級会話)	08A4011	李 雲	冬	2	共通韓国朝鮮語 (7)	08A8007	橋本 繁	夏	2
共通中国語 (12) (中級作文)	08A4012	未定	冬	2	共通韓国朝鮮語 (8)	08A8008	岩井 智彦	冬	2
共通中国語 (13) (中級作文)	08A4013	柴 森	夏	2	共通韓国朝鮮語 (9)	08A8009	金 東漢	夏	2
共通中国語 (14) (中級作文)	08A4014	柴 森	冬	2	共通韓国朝鮮語 (10)	08A8010	金 東漢	冬	2
共通中国語 (15) (上級講読)	08A4015	未定	夏	2	共通韓国朝鮮語 (21) (PEAK 初級)	08A8021	張 銀英	夏	2
共通中国語 (16) (上級講読)	08A4016	未定	冬	2	共通韓国朝鮮語 (22) (PEAK 初級)	08A8022	張 銀英	冬	2
共通中国語 (17) (上級講読)	08A4017	孫 軍悦	夏	2	共通アラビア語 (1)	08A9001	杉田 英明	夏	2
共通中国語 (18) (上級講読)	08A4018	孫 軍悦	冬	2	共通アラビア語 (2)	08A9002	杉田 英明	冬	2
共通中国語 (19) (上級会話)	08A4019	姚 毅	夏	2	共通アラビア語 (3)	08A9003	杉田 英明	夏	2
共通中国語 (20) (上級会話)	08A4020	姚 毅	冬	2	共通アラビア語 (4)	08A9004	杉田 英明	冬	2
共通中国語 (21) (上級作文)	08A4021	孫 軍悦	夏	2	共通アラビア語 (5)	08A9005	オダイム ムハンマド	夏	2
共通中国語 (22) (上級作文)	08A4022	孫 軍悦	冬	2	共通アラビア語 (6)	08A9006	オダイム ムハンマド	冬	2

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）



東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

科 目 名	科目番号	担当教員	学期	単位	科 目 名	科目番号	担当教員	学期	単位
ヒンディー語 (1)	08A9417	藤井 毅	夏	2	上海語 (2) (初級)	08A9454	周 剛	冬	2
ヒンディー語 (2)	08A9418	足立 享祐	冬	2	台湾語 (1) (初級)	08A9457	王 嵐	夏	2
ヒンディー語 (3)	08A9419	藤井 毅	夏	2	台湾語 (2) (初級)	08A9458	王 嵐	冬	2
ヒンディー語 (4)	08A9420	足立 享祐	冬	2	タイ語 (1)	08A9461	浅見 靖仁	夏	2
ベトナム語 (1)	08A9425	加藤 栄	夏	2	タイ語 (2)	08A9462	浅見 靖仁	冬	2
ベトナム語 (2)	08A9426	加藤 栄	冬	2	モンゴル語 (1)	08A9465	荒井 幸康	夏	2
ベトナム語 (3)	08A9427	藤倉 哲郎	夏	2	モンゴル語 (2)	08A9466	荒井 幸康	冬	2
ベトナム語 (4)	08A9428	岩月 純一	冬	2	ベルシャ語 (1)	08A9469	前田 君江	夏	2
トルコ語 (1)	08A9433	高松 洋一	夏	2	ベルシャ語 (2)	08A9470	前田 君江	冬	2
トルコ語 (2)	08A9434	高松 洋一	冬	2	ヘブライ語 (1)	08A9473	飯郷 友康	夏	2
トルコ語 (3)	08A9435	高松 洋一	夏	2	ヘブライ語 (2)	08A9474	飯郷 友康	冬	2
トルコ語 (4)	08A9436	高松 洋一	冬	2	サンスクリット語 (1)	08A9477	梶原 三恵子	夏	2
広東語 (1) (初級)	08A9441	吉川 雅之	夏	2	サンスクリット語 (2)	08A9478	梶原 三恵子	冬	2
広東語 (2) (中級)	08A9442	谷垣 真理子	夏	2	シリア語 (2)	08A9482	高橋 英海	冬	2
広東語 (3) (中級)	08A9443	吉川 雅之	冬	2	専門中国語 (7)	08B4007	小野 秀樹	夏	2
広東語 (4) (初級)	08A9444	谷垣 真理子	冬	2	専門中国語 (8)	08B4008	川島 真	冬	2
インドネシア語 (1)	08A9445	高地 薫	夏	2	専門韓国朝鮮語 (6)	08B8006	長澤 裕子	夏	2
インドネシア語 (2)	08A9446	高地 薫	冬	2	専門韓国朝鮮語 (7)	08B8007	長澤 裕子	冬	2
インドネシア語 (3)	08A9447	高地 薫	夏	2	専門韓国朝鮮語 (8)	08B8008	崔 泰源	冬	2
インドネシア語 (4)	08A9448	高地 薫	冬	2	専門アラビア語 (3)	08B9003	杉田 英明	冬	2
上海語 (1) (初級)	08A9453	周 剛	夏	2					



Human



Nature



History



Society



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO



東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

- 学生のアジア理解を深める「日本・アジア学」教育プログラム（研究科等横断）
- ウェブサイト、メールマガジン、メーリングリストを通じた情報・意見交換
- 研究者の国際交流・分野間交流の促進

ASNETではアジアに関する情報を掲載したメールマガジンを発行しています。

どなたでも、無料で購読することができます。

ウェブサイトから購読登録をするか、事務局までメールで購読希望のメールをお寄せください。

Network for Education and Research on Asia is a virtual network for the education/studies on Asia.
The network issues an e-newsletter for exchange of information on Asia. Subscription is free.
Please register at the website or contact the network office by e-mail for the subscription.

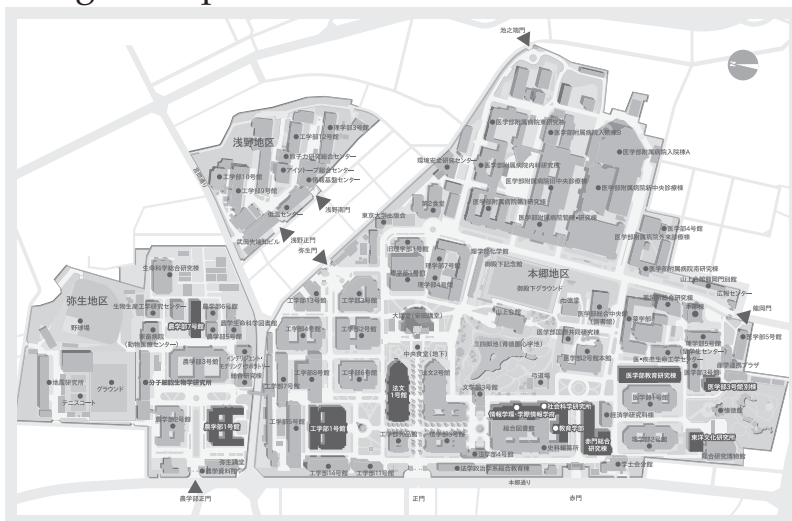
URL : <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

E-mail : asnet@asnet.u-tokyo.ac.jp

『日本・アジア学』講座シラバス（2014年度）

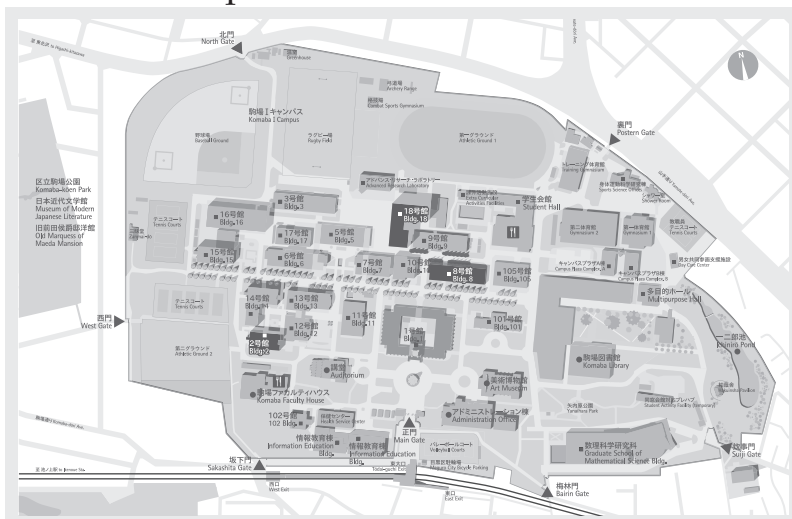
Hongo Campus

本郷キャンパス



Komaba Campus

駒場キャンパス



連絡先・お問い合わせ先

Contact and Inquiries

東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia

電 話 / Tel	03-5841-5868 (DI)
内 線 / Ext	25868
メー ル / E-mail	asnet@asnet.u-tokyo.ac.jp
インターネット / URL	http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/

★ASIAN DIVERSITY★

No. 1

ー「男は女より偉い? イスラームの視点から」ー

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET) では毎週木曜日夕方にセミナーを開催しております。このコーナーでは、当セミナーでの報告を紹介する形で、アジアに関する様々な研究をご紹介します。第一回は後藤絵美氏 (日本学術振興会、特別研究員) による、「イスラームの女性観ー男女の優劣をめぐる啓示解釈を中心にー」(2010年6月24日開催) です。

イスラム社会の女性という、皆様はどのような印象をお持ちでしょうか。イスラームは女性に厳しい宗教なのか、それとも優しい宗教なのか。イスラームの女性観をムスリム知識人の言葉から検討していく、というご報告でした。

「男性は女性のカフワームである」、「男性は女性の一段上にある」。クルアーン (コーラン) のこうした言葉について、近代から現代に至るまで、様々な解釈がなされてきました。ムスリム知識人の間では近代に入っても、この言葉を解釈するにあたって、「男性は女性よりも優位にある」ことを示したものだ、という見方が優勢でした。19世紀に入り、ムハンマド・アブドゥという学者は、男女の格差を夫婦関係に限定することで、それまでの解釈を大きく変えたそうです。

その後、20世紀に入り、サイイド・クトゥブという思想家が、家族という社会集団の中で、男女が異なる役割を担っていることを示すものだという解釈を提示しました。更に、アミーナ・ワドゥードという在米の女性学者が、クトゥブの見解を受け継ぎつつ、更に斬新な解釈を打ち出しました。男女は『同等』であり、男女の違いは女性のみが子供を妊娠し、出産することができる、という点である。このとき、「男性は女性のカフワームである」という言葉は、女性を精神的、知的、物質的に女性をサポートすることである。しかし、これらは責務ではなく、あくまで個人が心がけるべき、姿勢である、と。

後藤氏の発表に対して、「学者の解釈には、実際のイスラームの女性観がどのくらい反映されているのか」、「解釈の変容はイスラーム社会の変容とどの程度、相互関係があるのか」などの質問がなされました。ワドゥードの解釈は現代のイスラームにおいても必ずしも優勢ではないそうです。ムスリム女性の社会進出や服装の変化といった社会的な変化を、宗教言説の変化から検討していきたい、というのが後藤氏の展望だそうです。このセミナーの詳細は下記のURLをご参照下さい。

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6913>



日本・アジアに関する研究教育ネットワーク (ASNET)
安田佳代

★ASIAN DIVERSITY★

★ASIAN DIVERSITY★

No. 2

偶然にできあがった! ?
エミール・ガレ作品にみる
『オリент』

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET) では毎週木曜日夕方にセミナーを開催しております。このコーナーでは、当セミナーでの報告を紹介する形で、アジアに関する様々な研究をご紹介します。第二回は鵜飼敦子氏 (東洋文化研究所、特任研究員) による、「エミール・ガレと『オリент』」(2010年7月1日開催) です。

アール・ヌーヴォーを代表するフランスのガラス工芸家エミール・ガレは、日本でも美術館があり、美術展が開催され、ご存じの方が多いと思います。ガレの作品は、これまでジャポニスムの一例として語られることが多かったそうですが、ガレが「極東」、「日本」をどのように捉えていたのかを、作品と言辞から検討する、というご報告でした。

19世紀半ば頃までの、画一化されたエナメル技法に対して、ガレは、製作過程における即興性と偶然性を重視したガラス工芸の技法を取り入れ、新しい芸術のあり方を示していきました。とりわけ、ガレのガラスの表面を軽やかに舞うという筆致は、高島北海という日本人との出会いから生まれた可能性があるのではないかとのことでした。実際、ガレは日本の植物を栽培し、園芸を嗜み、これらをモチーフにした斬新な作品を生み出していったそうです。19世紀末の日本の近代化への反動が、こうした技術開発のきっかけになったと指摘されていました。

鵜飼氏の報告に対して、「彼の作品の中で、『日本』はどのくらい独特なものなのか」、「ガレは『オリент』の一部として日本を捉えていたのではないか」、「この時期の日仏文化交流を日本側はどのように位置付けていたのか」など多くの質問がなされました。

セミナーの詳細は下記のURLをご参照下さい。
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6921>



日本・アジアに関する研究教育ネットワーク (ASNET)
安田佳代

★ASIAN DIVERSITY★

No. 3

中華料理の美

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET) ではアジアに関する様々な研究、教育活動に従事しています。東京大学AGS、東京大学地球持続戦略研究イニシアティブ (TIGS) との共催の「アジアの食文化とグローバル化」セッションの一つです。今回は2010年10月20日に開催されました、菅豊氏 (東洋文化研究所、教授) による、「中華料理の美」をご紹介いたします。

川料理が味の術と料と似、なれ込意潜よとタミ工ら用、そ
 四理と調理業をへ華卵「類てにさいがなやのへん読加限利る
 はの(刀)食物の中「鵝」とつとといひ物やその場のをてに地
 料理(選料)材とくえば、音よの願ひ物やの国奇用料開
 華て(選)料理徴多と菜字と食ん寿うへなつあ、好を華発、
 中分材丁加工、象が。た冷漢こしん寿うへなつあ、好を華発、
 り、食包じず、を。れい。たうるをの長よま要のこな認、源
 通大富様をな幸くう模」を幸では、そのに必くくは、資見
 じど、豊多様をな幸くう模」を幸では、そのに必くくは、資見
 存なし、(火)の上でその形が「吉匠吉中料では、教皇で食すへ。志境も
 ご料理か用、のし色の鴉吉中料では、教皇で食すへ。志境も
 よ東しを工こ意をうすつて字)さ。めらいたを味をの料、さいやど
 も、(調)加す、工すつて字)さ。めらいたを味をの料、さいやど
 様も、(調)加す、工すつて字)さ。めらいたを味をの料、さいやど
 皆、(調)加す、工すつて字)さ。めらいたを味をの料、さいやど
 料、(調)加す、工すつて字)さ。めらいたを味をの料、さいやど

この研究会は、今後も様々なアジア料理を議題に開催していきます。日本・アジア学研究者データベース <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/dbregistration> に登録して頂き、学内メーリングリストに登録して頂きますと、開催案内がお手元に届きます。ご活用下さい。



日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)
安田佳代

★ASIAN DIVERSITY★

★ASIAN DIVERSITY★

No. 4

コーヒー豆の不平等
—ベトナムコーヒーの美味しい飲み方—

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET) では東洋文化研究所と共催で、毎週木曜日(土)にセミナーを開催しております。今回は池本幸生氏(東洋文化研究所、教授)による、「コーヒー豆の平等ーベトナム・コーヒーの美味しい飲み方ー」(第4回 東文研・ASNET 共催セミナー、2010年6月10日開催)をご紹介します。

朝、ベッドから出るのが辛い季節になりましたが、温かくて芳しいコーヒーを頂くと「今日も頑張るぞ!」という気持ちになりますね。私もコーヒーが好きで、コーヒー豆を買いに行きますが、大抵、南米産のものを購入します。皆様はベトナムが世界第2位のコーヒー輸出国であることをご存知でしょうか?

コーヒー豆の品種として主なものは、アラビカ種とロブスタ種です。アラビカは酸味と香りが特徴であり、世界のコーヒー豆生産量の約3分の2を占めます。他方、ロブスタは苦味とコクを特徴とし、缶コーヒーなど加工用に用いられています。そのため産地が表示されることもなく、「ロブスタの生産国」としてのベトナムはそれほど知られていないのです。

ロブスタを加工せずに、ブラックで頂くこともできます。植民地時代のフランス人達はベトナム産の高品質ロブスタを愉しみ、その飲み方は今でもベトナムに残っています。しかし大抵のベトナムコーヒーはまずく、焙煎時にバターやカカオを混ぜたり、コンデンスミルクやアルコールを入れて飲むそうです。コンデンスミルクをたっぷり入れてとホットチョコレートのような味がします。

ここに先進国と生産国との間の、経済力の差による不平等が見えてくるのだそうです。高品質のものを先進国に輸出した後に残った質の悪いコーヒーや、国際社会の求めに応じて「質より量」を重視して生産したコーヒーを精一杯おいしく飲もうとする工夫が、ベトナムコーヒーの飲み方には反映されているからです。明日の朝、コーヒーを飲まれる際には是非、コーヒーの生産国にも思いを馳せてみて下さい。

セミナーの詳細は下記のURLをご参照下さい。
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6906>
ASNETホームページ
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>



日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)
安田佳代

★ASIAN DIVERSITY★

ASIAN DIVERSITY

No. 5

現代チベット研究が映し出す チベットの多様性

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)では東洋文化研究所と共催で、毎週木曜日にセミナーを開催しております。今回は大川謙作氏(日本学術振興会、特別研究員PD)による、「現代チベット研究と代替民族誌の問題」(第8回東文研・ASNET共催セミナー、2010年7月8日開催)をご紹介します。

チベットが現代において、最もセンシティブな地域の一つであることは、ニュースや新聞を通じて皆様よく御存じのことと思います。チベット文化圏は複数の現代国家にまたがる広大な領域を形成しており、この多様性・複雑性が、チベットを研究対象とする学問領域にも大きな影響を及ぼしていることを伺わせるお話でした。

人類学研究とは、現地調査を通じて、その地域の多様性や普遍性を研究する学問研究です。中でも、チベットを研究対象とする人類学研究には、この地域の多様性に応じて、異なる複数の研究潮流が存在するそうです。セミナーでは「シェルパ中心主義的研究」と「ラサ中心主義的研究」という二つの潮流を取り上げられました。「シェルパ中心主義的研究」は、ネパール・ヒマラヤあるいはインド・ヒマラヤのチベット系住民の社会こそがチベット社会の典型であるとみなし、この地での現地調査をもとにチベット社会の特質を明らかにしようとする研究の一派です。他方「ラサ中心主義的研究」は、ラサと中央チベットをチベットの代表と見なしつつも、チベット本土での現地調査が困難であるため、再構成的民族誌(難民などへの聞き書きによる歴史の再構成)による研究を行う一派です。

チベットの複雑性は以上の通り、複数の研究潮流を生み出したのみならず、各潮流の相互対話を乏しいものとしてきました。チベットでの現地調査が困難であることを理由に、インドやネパール研究に関心を移した学者、またシェルパこそがチベットを代表するものであり、ダライ・ラマやラサはむしろ、チベットの特殊な部分だとみなす学者など、同じチベットを研究対象としつつも、様々な研究スタイルやチベット文化圏のとらえ方も紹介されていました。大川さん御自身は、ラサの御研究を進めていらっしゃるそうです。

セミナーの詳細は下記のURLをご参照下さい。
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6924>
ASNETホームページ
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>



日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
(ASNET) 安田佳代

★ASIAN DIVERSITY★

ASIAN DIVERSITY

No. 6

「魚食文化と鵜飼い」

アジアの隣人を知る12枚の写真
(中国編：その1)

淡水魚は、中華料理に欠かせない。

ソウギョやナマズ、フナ、コイなどは唐揚げや蒸し魚、煮魚となって食卓を賑わす。国土が日本の約25倍もある中国では、淡水魚を食べる文化が非常に発達している。

この魚食文化は、鵜飼い漁も下支えしている。中国では、今でもカワウを使った漁が各地で行われている。カワウは、潜水中に、その場でもっとも獲りやすい魚を獲る。そのため、鵜飼い漁では、一日の漁で獲れる魚が多様である。ただ、多くの淡水魚に商品価値があるため、獲られた魚は市場で瞬く間に売れる。

一方、日本のびわ湖。およそ55種類の淡水魚が生息しているが、商品価値のある魚は10種程度である。仮にびわ湖で鵜飼い漁を行っても魚の買い手が確保できず、生業として成り立たないであろう。

写真は、都市の河川で鵜飼い漁を行なう漁師。都市住民が増えたことでコイなどの需要が増え、鵜飼い漁が続けられる。中国の鵜飼い漁は、魚食文化を背景に、まだしばらくの間、見ることができる。



文・写真：卯田宗平
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
(ASNET)

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。

詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

检索

检索

Asian Diversity by ASNET

「ひとり5センチ」

アジアの隣人を知る12枚の写真
(中国編：その4)

中国の列車はいつでもどこでも非常に混んでいる。乗車時には多くの乗客が車内になだれ込み、到着すると乗客とともに押し出される(写真)。

以前、列車のなかで、私の前に座った中国人に「なんでこんなに混んでいるのか」と聞いたことがある。すると、そのおじさんは「一人5センチだから」と言った。最初、何を言っているのか理解できなかったが、詳しく聞いてみると、中国の線路の総距離を人口で割った値であった。

私自身(皆さんもそうであると思いますが)、線路の総距離を総人口で除したことがなかったので、当時、この「5センチ」を聞いたとき、なにか妙に説得力があるような不思議な感じがした。

後日、調べてみると中国の線路は68,000kmあり、人口は130,628万人であった(2005年当時)。計算してみると、まさに線路はひとり5.2センチであった。「私は飲食店の店長だ」というおじさんが、なぜこの値を知っていたのか疑問は深まるばかりである。

ちなみに日本は、計算してみると、ひとりあたり21.7センチである。日本で中国人から「なんで日本の電車は中国に比べ空いているのか」と問われたら「一人21センチだから」と答える機会をうかがっているが、いまだにそのチャンスは来ない。



写真 大きな荷物をもった乗客

文・写真：卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

Asian Diversity by ASNET
No.10

「日本・アジア学」講義紹介 『アジアの環境研究の最前線』

アジアで発生している環境問題とそれに関わる最新の研究成果を、東京大学の若手研究者10人の協力を得ながらオムニバス形式で学びました。

講義では、アジアの生物多様性や森林伐採、水汚染、化学物質、食環境、大気汚染、土地荒廃、グリーンツーリズムなどをテーマに、まず、各国のフィールドで調査・研究を展開されている研究者の話の聞きまし。そのあと、学生からの質問も受け付け、先生方も親身になって答えました。

この科目は、全学研究科等横断型教育プログラムということもあり、学生の専攻も工学系、新領域、農学、法科大学院など多岐に渡っていました。そのため、学生たちの質問もそれぞれの専門に関わるものが多く、最後の議論はいつも盛り上がりました。

講義の最終回には、有機農業で地域活性化を進める埼玉県小川町に見学に行きました。

化学肥料や農薬を使用せず、バイオガスや太陽光などの自然エネルギーを最大限に生かしながら農業を続ける農家の姿に、これからの日本の農業の進む道を見ました。また、無農薬米で醸した純米吟醸酒(冷酒)もたいへんおいしく試飲しました。



無農薬の大豆づくりを見学する受講生

文・写真：卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

◆『学内広報』「ASIAN DIVERSITY」

Asian Diversity No.11 by ASNET

「日本・アジア学」講義紹介 『アジアでがんを生き延びる』

感染症の克服や目覚ましい経済発展により、高齢化社会にあるアジアは、癌の急増に直面している。がんという病は、遺伝的素因や生活習慣などの違いによる地域性の強いものであり、多様な文化的背景をもつアジアのがんの姿を捉えることは難しい。

本講座を受け持つ赤座研究室は、アジアのがんの特性を欧米と比較検討することで、アジアを中心とした新規薬剤開発や安全かつ有効な治療法の開発を研究している。

本講座では、疾病に関する科学的知識よりも、この重い共有課題をどうアジアとともに乗り越えるべきなのか、アジアのがんに纏わる様々な問いを投げかけ、毎回外部講師を招き、語りを重ねている。各分野の第一人者の方たちの確かな眼差しは、学知の世界にはない具体性を持ち、そこに通底する普遍性を分野を越えて考えることは、新しい知の構築にも繋がっていく。

毎回、様々な切り口で、アジアのがんという事柄が、語られていくことを、小さな教室の中で、その息遣いまでもじっと耳をすませ聞いていく学生は、問われるべきことは何なのか、それぞれの専門領域にひきよせて、問いを立てて、講師と対話をする。がんは、長い歳月を経たひとのくらしの営みの中にある。科学的データだけでは読み解けぬ、この重い共有課題を考えていく道筋を探り当てることは、アジアと日本はどう向き合って生き延びていくのかという問いにも開かれていく。

生命科学がさまざまな知の統合を目指している今、領域を越えた視点の広がりこそが、アジアのダイナミズムのなかで、われわれが生き延びる智慧を紡いでいくはずである。



学生の質問に答える、野木森雅郁アステラス製薬（株）
代表取締役会長（7月22日授業風景）
文・写真：河原ノリエ

『アジアでがんを生き延びる』講義は冬学期も開講します。
詳しくは、

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/edu/>

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

Asian Diversity No.12 by ASNET

「日本・アジア学」講義紹介 『里山学総論』

長い間日本人の暮らしの場であった「里山」は、戦後急速にその価値が低下し、開発による消失と利用放棄による荒廃が進行してきました。その里山が今、21世紀の自然共生社会のモデルとして国際的な注目を集めつつあります。昨年の生物多様性条約締約国会議（COP10）では、人と自然の良好な関係づくりを追究する取り組みとしてSATOYAMAイニシアティブが採択されました。

本科目では、里山を持続的な地域資源利用・生態系管理システムとしてとらえ、自然と人間のダイナミックな関係の変遷、多様な生きものが暮らせるしくみ、そして里山の将来について、自然科学・人文社会科学の両面から紐解いてゆき、自然共生社会を拓く「自然との共生の智慧」を皆さんとともに考えることを目指しています。

本科目は2日間の集中講義と1日の巡検により実施されます。講義では、生態学、緑地環境学、農村計画学、社会学、人類生態学など、多様な学問領域から里山に光があてられ、それらが体系化されるような構成となっています。最終日の巡検では、東京近郊の里山見学に出かけます。里山の自然と生きものや保全活動の現場に触れることで、都市住民や農家など多様な主体によって支えられている「里山のいま」を実感することができます。

受講者は農学生命科学研究科のみならず、工学系、新領域、法科大学院など多岐にわたっており、毎回活発な議論が繰り広げられます。また、国際社会への発信力とコミュニケーション能力の習得を目指し、講義をすべて英語で行っているというのも本科目の特色です。里山の問題を、アジアそしてグローバルな視点から分野や国境を越えて考えてみたい方、とくに留学生の皆さんにはお薦めの科目です。



巡検での自然観察の様子。ドジョウを探す受講生たち。
（横浜市・新治市民の森）

文・写真：大黒俊哉

冬学期には姉妹科目『アジア自然共生論』を開講します。
詳しくは、

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/edu/>

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

**Asian Diversity No.13
by ASNET
ASNET活動紹介
2011年度夏学期総合科目
「日本・アジア学概論」**

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）では大学院生向け研究科横断型教育プログラム「日本・アジア学」を開講しています。この学際的教育を学部生向けにも行ってみよう、という初めての試みが、2011年度夏学期総合科目（国際・地域一般）「日本・アジア学概論：国際社会で活躍する基盤を身に付ける」の開講という形で実現しました。

開講の目的は、大学に入学したばかりの若い学生達に、アジアに存在する様々な問題－工業化による環境汚染、国際公共事業をめぐる争議、交通渋滞と都市開発、資源開発と環境保全－について、自ら主体となって考える機会を提供する、ということでした。

まず、「日本・アジア学」を学ぶ意義について概括的な講義が行われた後、タイ、インドネシア、ベトナム、中国の4カ国に分かれ、各国3回ずつ授業が行われました。各国については、理系の教員によるケース・メソッド方式の授業を通じて、アジアの社会が抱える様々な問題を考察した後、「なぜ、そのような問題が発生するのか？」という学生達の関心を、文系の教員がその国の歴史、社会、文化的背景から解き明かしていきました。

受講にあたっては、事前に課題文の予習が義務付けられるなど、受講生にとっては少々ハードだったかもしれません。しかし約20名の受講生達は、毎回しっかり予習をこなし、積極的にグループ・ディスカッションとプレゼンテーションに参加していました。アジアに存在する様々な問題について多角的に学び、その中から将来の専攻を発見するための、貴重な機会となったことでしょう。本講義は来年度も開講します。やる気あふれる、多くの学生さんの受講をお待ちしています。



（丸川知雄教授（社会科学研究所）による最終講義「中国天津の工業発展史」の様子（2011年7月12日）

文・写真：安田佳代

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

**Asian Diversity No.14
by ASNET
GFES*/ASNET共催
国際ワークショップの開催**

自然条件の制約を受けた森林生態系との相互作用の歴史を通して、森林地域に住む人々の社会の多様性が育まれてきました。ですから、森林のガバナンス（ルールの設定・適用・執行のあり方）はもともと多様であるはずで、一律に木材伐採や造林を推進してきたアジア諸国の集権的な森林政策が、地方分権的な住民参加型森林管理へと移行してきたのは理に適ったことといえます。このような実践や政策の理論的支柱となってきたのが、オストロム氏（2009年ノーベル経済学賞）らによって主導されてきた「コモンズ論」です。これまで重視されてきた「市場」や「政府」ばかりではなく、世界の数多くのフィールド実態に基づき「コミュニティ」の役割に光を当て、資源管理制度の「設計原則」などが提示されてきました。

しかし、これまでの議論は地域資源を地元の人々が利用し管理することを前提としたものであり、外部との連携は「入れ子状の組織」や「多層構造をもつ関係性」として、その重要性が指摘された段階にあります。そこで、初めから外部との協働を前提とする「協治」の設計指針（井上, 2009）のうち、特に「段階的なメンバーシップ」と「応関原則」に着目して、アジア全域の森林ガバナンスを検討するため、2011年10月14日（金）に本学農学部にて国際ワークショップを開催しました。招待者16名（インドネシア、フィリピン、ベトナム、スリランカ、バングラデシュ、ネパール、タイ、中国、韓国）を含む参加者総数は61名で、中身の濃い議論ができました。なお、大学院農学生命科学研究科と学術交流協定を結んだムラワルマン大学（インドネシア）、チッタゴン大学（バングラデシュ）、ルフナ大学（スリランカ）の学長（代理人）からの特別スピーチもいただきました（丹下健副研究科長も同席）。現在は、この国際ワークショップの議論を元にした英語書籍（仮題“Multi-level forest governance in Asia: Recognising diversity”）の出版へ向けて準備をしています。

*GFES（ジーフエス）＝国際森林環境学研究室の略称



国際WSの集合写真（撮影：Mr. Chen Haiyun）
文：井上真（農学生命科学研究科 教授）

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

Asian Diversity No.15 by ASNET

「学際的貧困研究」

ASNETでは、日本学術振興会「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」に採択された「ケイバビリティ・アプローチによる貧困の学際的研究」を今年度から実施しています。この研究は、大陸部東南アジアの4カ国（ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ）を対象として、その貧困問題を学際的に追究しようとするものです。言うまでもなく、貧困とは所得だけで測れるような単純なものではなく、複雑な要因が絡み合っていて、それを捉えるためには学際的なアプローチが必要です。アマルティア・センが提唱するケイバビリティという概念は、人々の暮らしの良さ（Well-being）を捉えるための多面的な概念であり、本研究ではこの概念を応用します。

ASNETが本研究を行なうことの最大のメリットは、ASNETが持つ東大内の学際的な人的ネットワークを活用するということです。ASNETはこれまで横断型教育プログラム「日本・アジア学」などを通して教育活動の面で人的ネットワークを作り上げてきました。本研究はその人的ネットワークをさらに研究活動に活用しようとするものです。そして、個々の研究者が対象4カ国で持っている人的ネットワークにつなげることによって、さらに人的ネットワークを広げていこうというのが我々の狙いです。

本研究で行なったこれまでの活動としては、2011年9月にベトナム国家大学ホーチミン校のベトナム・東南アジア研究所とカンボジアの王立農業大学の協力を得て、ホーチミン市でセミナーを開催した後、メコンデルタからアンコールワットまで車で移動しながら貧困について議論しあいました。10月には日本でセミナーを開催しました。意外に思われたのは、4カ国の研究者が隣国のことについてよく知っているわけではないこと、日本人研究者も自分の研究対象国以外のことはよく知らないということでした。このことは、研究の視野を広げるためにも本研究のような多国間の学際的研究は重要であることを意味しています。

今年度は、2012年1月にはタイのコンケン大学およびラオスの国立大学等の協力により東北タイとラオスのルアンパバンで共同調査を行なう予定です。

文：池本幸生（東洋文化研究所/ASNET 教授）



2011年9月 ベトナムでのセミナー

「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク」（略称ASNET）は、日本を含むアジアを対象とする研究者が部局の枠を超えて集まり、新しい教育や研究の可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

Asian Diversity No.16 by ASNET

2011年度 冬学期総合科目の紹介 「アジア研究のフィールドワーク」

2011年度冬学期に「アジア研究のフィールドワーク」という科目を開講しました。

この科目は、フィールドワークのスキルを身に付けたい学生、ローカルな視点からアジアを学びたい学生、最新の情報技術を使った現地調査の方法を習得したい学生を対象に、その理論と方法を学ぶ科目です。

この授業では、まず文化人類学や生態人類学のフィールドワークに着目し、その長所や短所、先人たちの成果、最近のトピックを講義しました。

その後、オーストラリア・アボリジニ研究で有名な窪田幸子先生（神戸大学）をお呼びし、文化人類学にとってのフィールドワーク、そして長期にわたる参与観察に基づいたアボリジニ社会の変化を紹介して頂きました。

また、情報工学が専門の石川正敏先生（東京成徳大学）をお呼びし、デジタルペンによる野外調査支援の講義と実習を行いました。野外で書いたメモをそのままPCに取り込めるシステムを学生たちと本郷キャンパスで実際に利用し、このシステムの利用可能性を議論しました。

12月には学生たちと中国海南島に実習に行きました。担当教員（卯田）が10年前に調査をしていた少数民族の村を訪れました。村の佇まいはあまり変化しておらず、村のおばあちゃんたちもお覚えていてくれました。10年ぶりに再会した王さんとは、自家製の白酒で乾杯。村の人たちは、村落の変化を学生たちに分かりやすく説明してくれました。学生たちがこの村の10年間の変化をフィールドで目で耳で理解できた瞬間でした。



実習に参加した学生たちと。



10年前に撮った写真を渡し、再会を喜ぶ。

文：卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

Asian Diversity No.17 by ASNET

「日本・アジア学」講義紹介

『アジアでがんを生き延びる』
(地域文化研究特別講義Ⅱ)

Cross-boundary Cancer Studies-越境するがん学-
成長目覚ましいアジアにおいて急増しているがん。

その対策の困難さから、社会に大きな負荷を与えていくと予想されるがんという事象があぶりだす課題を、医学はもとより、政治・外交・経済・文化など様々な領域から捉えて、各分野の第一人者によって、読み解いていく連続講座である。

国際社会において医療はこれまで、安全保障やエネルギーなどの課題にくらべあまり大きなものではなかったが、世界でも未曾有の超高齢化社会に突入する日本が、少し遅れて高齢化社会に入っていくアジア諸国に貢献できることがあるとすれば、それは、がんという難問にどう立ち向かうかという叡智を紡ぐことであろう。限られた医療資源の中、医療格差や、死生観の多様性を乗り越えて、人々が、がんを社会の中でどう捉えて生き延びていけばいいのか。

大学という普遍的な価値を共有し合える機関において、がんというアジアの近未来の難問に応える学術基盤の核を学際的に構築していく意義は大きい。

本講座をきっかけに、海を越えて、日本・韓国・中国で、学際的国際連携プログラムを立ち上げ、知的共有基盤形成活動を目指す動きが始まっている。



武見敬三(財)日本国際交流センター シニア・フェロー
(2011.10.17 授業風景)

「保健・医療分野における 先導的成熟国家の役割と課題」という題で人間の安全保障の概念から、アジアのがん医療の未来について講義を行う。

文・写真：河原ノリエ

『アジアでがんを生き延びる』講義は2012年度も開講します。

詳しくは、<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/edu/>

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

Asian Diversity No. 18
by ASNET

「9.6%」

アジアの隣人を知る写真
(中国編)

中国では、中秋節の前、家族や先生、知人に月餅を送る習慣がある。この時期、各地のスーパーでは写真のような特設売り場ができる。私はクルミの入った月餅が好物であった。

中秋節に配られるこの月餅、問題も多い。それは、月餅自体は小さいが、非常に豪華な包装紙に入れられていることが多いからである。

ある日、本当に失礼と思いつつ、友人から頂いた月餅を実際に量ってみた。その結果、月餅4個の体積は約432立方センチで、包装箱の体積は約4,500立方センチだった。

月餅が包装箱に占める割合は9.6%であった。

こうした現状を受けて（かどうかかわからないが）、政府は「月餅」規定を2005年（2008年改定）につくった。この規定では、月餅と箱の間は2.5センチ以内、包装は3重まで、箱の価格は月餅の価格の20%を超えないなど、たいへん細かいことまで定められている。

この規定ができてから、友人からもらう月餅は幾分シンプルなものが多くなったような気がした。それ以上に、包装より味で勝負しようという業者が増えたのか、以前よりおいしくなった気もした。

何ごとも中身が重要なのである。



写真 月餅の特設売り場

文・写真：卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

Asian Diversity No. 1 9 by ASNET 復興支援ツーリズム

東日本大震災からの復興に私たちはどう関わるべきなのだろうか。復興支援ツーリズムは、多くの人が参加できる支援の方法として考えられています。東洋文化研究所・ASNET共催セミナーでは、石巻専修大学の大森信治郎氏をお招きし、その可能性についてお話しいただきました。大森先生は、東日本大震災の大津波から大きな被害を受けた宮城県石巻市で、専門分野のツーリズムの立場から復興に関わってこられました。被災直後の緊張感が薄れるにつれ、被災者の要求は多様化し、来訪者（ボランティア）の意識も多様化していきます。より多くのボランティアが被災地に訪れるようにするために、観光とボランティア活動を組み合わせた「ボランティア・ツーリズム」は有効な方法だと考えられています。また、観光客を呼び込むことは地域経済の活性化にとっても重要な意味を持てます。雇用を生み出し、産業を復興するためには観光客が現地でお金を使うことは重要なことです。ただし、震災の記憶を忘れないために、訪問者が弔意を表す場を整備するような配慮も必要でしょう。また防災研修のような形で、震災の教訓を生かす仕組みも重要でしょう。

観光客として現地を訪れることは、現地の事情を知ることにつながります。新聞やテレビでは報道されない事実も、現地に行くことによって知ることができ、それは復興を正しい形（正義に合った形）で導くことになります。この点は、第41回共催セミナー「アマルティア・センの『正義のアイデア』」（2011年12月1日）で取り上げたことに関わってきます。特に福島で現実起こっている状況は注目していく必要があります。

原発に依存する開発の形が望ましいのかという点に関しては、第43・44回の共催セミナーで「ドキュメンタリー映画を見る」として「懐かしい未来：ラダックから学ぶ」（2012年1月26日）と「それでも種をまく」（2012年2月9日）として取り上げました。これらの共催セミナーの内容についてはASNETのホームページで「ASNETの活動報告」として見るができます。ぜひご覧ください。

共催セミナーでは、今後も震災復興に関わるテーマを取り上げていきたいと思っています。 文：池本幸生



大森信治郎氏（石巻専修大学経営学部）による講演

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.jp/links/as.jp/>

Asian Diversity No. 2 0 by ASNET 「日本・アジア学概論」

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）では、大学院生向け研究科横断型教育プログラム「日本・アジア学」を開講しています。この学際的教育を学部生向けにも行ってみよう、という目的で、2012年度夏学期総合科目（国際・地域一般）「日本・アジア学概論：国際社会で活躍する基盤を身に付ける」が2012年4月9日に開講しました。昨年度に引き続き、2回目の開講です。

講義の目的は、大学に入学したばかりの若い学生達に、アジアに存在する様々な問題－工業化による環境汚染、国際公共事業をめぐる争議、交通渋滞と都市開発、資源開発と環境保全－について、自ら主体となって考える機会を提供することにあります。講義はASNETの参加する9名の教員が担当し、タイ、インドネシア、ベトナム、中国の4つのパートに分かれ、各国3回ずつ授業が行われます。各国については、理系の教員によるケース・メソッド方式の授業を通じて、アジアの社会が抱える様々な問題を考察した後、文系の教員がその背景を、歴史的・社会的事情から解き明かしていきます。

初回講義では、約200名の学生が参集する中、古田元夫教授（総合文化研究科、本科目責任教員）によるガイダンス、羽田正教授（東洋文化研究所）による「日本・アジア学とは何か？」の講義、そして、堀井秀之教授（工学系研究科）によるケース・メソッド方式に関する説明が行われました。

受講にあたっては、事前に予習が義務付けられ、プレゼンテーションとディスカッションを通じた積極的な授業参加が求められるなど、大学1、2年生には少々ハードな授業かもしれません。しかし、受講生にとっては知的好奇心が尽きないようで、毎回熱心に予習をこなし、積極的に授業に参加しています。アジアに存在する様々な問題について、自らが主体となって学び、考えることは、進路選択そして将来、社会人として活躍していく中で、貴重な糧となることでしょう。ASNETはその学際的ネットワークを活用して、今後も大学院教育のみならず、学部教育にも力を入れていきます。 （文・写真：安田佳代）



初回講義（2012年4月9日）の様子

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.jp/links/as.jp/>

Asian Diversity No.21 by ASNET

「日本・アジア学」講義紹介

『アジアの環境研究の最前線』
(地域文化研究特別講義Ⅱ)

日本・アジアに関する教育研究ネットワークは、2011年から「アジアの環境研究の最前線」という科目を実施しています。

この科目は、アジアで発生している環境問題とそれに関わる最新の研究成果を東京大学に所属する気鋭の若手研究者の協力を得ながらオムニバス形式で学ぶものです。

2012年度に取り上げたテーマは、河川環境や国際衛生行政、健康リスク、水環境、マラリア、労働環境、ジェンダー、沿岸環境、情報システムなどいずれも環境研究でホットな話題ばかりです。また、日本をはじめ、中国やタイ、ベトナム、バングラディッシュ、スリランカ、インドネシアなどアジアの多くの国々や特徴的な地域の事例を取り上げました。

この科目は研究科等横断型であるため、農学や医学、工学、新領域、法学などさまざまな専門をもつ学生が受講します。授業の終盤には若手研究者と交流する時間も設けており、受講生たちは自らの専門に引きつけた質問をし、議論はいつも盛り上がります。

ASNET機構は、今後も『アジアの環境研究の最前線』科目を続けることで、東京大学の大学院生たちにアジアのことを広く、そして深く理解してもらいたいと考えています。



写真 「日本の労働世界とジェンダー」の講義風景
文・写真：卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

Asian Diversity No.22 by ASNET

「日本・アジア学」講義紹介

『グローバルエコノミーと
インドの開発と環境』
(地域文化特別講義Ⅰ)

近い将来世界一となる人口を有し、酷暑と酷寒、豪雨と日照り、豊穡と枯渇というような極端な対照性を特徴とするインド社会は、その両極端を包摂しながら成長を遂げてきました。1960年代からの緑の革命、1990年代からの経済開放政策への移行は、いずれも現在に至るまでインド社会を大きく変化させてきました。そしてその成長は、21世紀の世界の動向を左右する大きな要因となるであろうと予測されています。しかしながらインドの開発と経済発展が貧困・格差という経済的問題だけでなく、汚染や廃棄物問題など様々な問題を生起してきていることも事実です。

本講義ではインドを中心とする南アジアの開発と環境の問題を、最新の研究に従事している学内外の研究者の協力を得て、皆さんとともに考えていくことを目指します。18世紀から現在に至る幅広いタイムスケールとグローバルエコノミーの展開に対する理解を深め、経済発展と環境変動という側面から現代インドを長期的変動の中に位置づけ、現在生じている様々なイシューとその解決法について議論します。人類学、経済学、歴史学、農学、ジェンダーなど様々なバックグラウンドを持つ南アジア研究の専門家を講師として招き、様々な観点からアプローチすることで南アジアの現場の実態に迫ろうと試みます。

受講者は医学系や工学系、人文系と多岐に渡ります。南アジアが専門であるか否かに関わらず、発展途上地域の実情や開発・環境問題を理解するための多様なアプローチを学びたいという学生が積極的に発言し、毎回活発な議論が行われます。南アジアのみならず、世界の開発・環境問題について理解を深めたいという方にお勧めの科目です。



講義風景 文・写真：和田一哉

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

Asian Diversity No.23 by ASNET

「日本・アジア学」講義紹介

『アジアの食と農・環境 (農学国際特論III)』

世界の陸地の2割に人口の6割が住むアジアは世界経済での存在感を高め、世界の成長センターと言われています。しかし、一人あたりのGDPは地域全体としては依然として低く、国による格差も大きいままです。また、熱帯林の消失や都市化・工業化に伴う大気汚染など様々な環境問題が深刻化しています。一方、自然環境や土着の文化などあらゆる面に見られる高い多様性をうまく活用すれば、地域の特性に合った環境保全型農業を通して食を確保しつつ、希望に満ちた社会の将来像を描くことができるかも知れません。

本科目では、アジアの食料、農業・環境の現状と解決策について、俯瞰的な視野を持つとともに、ローカルな現場のリアリティに立脚して検討できるような複眼的な視点を養うことを目指しています。講義を行うのは、アジアなど諸外国から本学が招聘する特任教員など外国の専門家の方々です。インドネシア、フィリピン、タイ、ラオス、ネパール、インド、スリランカ、バングラデシュなどから招聘する特任教員等が、個別のテーマに関して一日ずつ集中講義を英語で行います。

今年度はすでに2回の集中講義を実施しました。1回目のテーマは「環境影響評価およびメコン川流域の影響評価：ラオスを事例として」、2回目は「メコン川流域における観光開発の影響：ラオスを事例として」です。今年度はあと3回、「ボルネオ先住民による焼畑農業の変容（10月6日）」、「ボルネオ先住民社会へのグローバル化の影響（12月1日）」、「地球温暖化と森林政策（1月26日）」というテーマで集中講義を予定しています。

毎回、講義の後半には質疑応答および議論の時間を取っており、活発な議論に展開することもあります。農学生命科学研究科のみならず、他研究科の大学院生（留学生も含む）も受講していますので、気軽に参加してみてください。



講義時の集合写真（2012年7月21日）文・写真：井上真

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

● 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧

東文研・ASNET 共催セミナー (2011年1月開催分)

ASNETでは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所においてセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。



第24回 2011年1月20日(木) 17:00~18:00
意味への収斂とその外部
ランの葬送儀礼の変容を巡って
名和克郎(東洋文化研究所・准教授)

報告者：名和 克郎
報告者：名和 克郎(東洋文化研究所・准教授)

第25回 2011年1月27日(木) 17:00~18:00

お経を「聴く」

アジア各地の聖なる歌
馬場紀寿(東洋文化研究所・准教授)

古代インドで生まれたお経は、長い歴史を経て現在に至るまで、アジア各地で歌われてきた。その歌の背後には、人々の生活と深く結びついていた。その歌の背後には、人々の生活と深く結びついていた。その歌の背後には、人々の生活と深く結びついていた。



会場：東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3階 大会議室
参加費：無料(申し込みは不要です)
お問い合わせ先：電話：03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

政治と言葉

中江兆民『日本に哲学なし』再考

『社会契約論』の漢文訳で有名な中江兆民(1847—1901)は、現在に於いても『東洋のルソー』として知られています。彼の『生前の遺稿』として大ベストセラーになった『一年有半』(1901)の中に、『わが日本より今に至るまで哲学なし』という、よく引用されている一節があります。



写真：西野

◇報告者：ミヤエリ・ブルチャ(国際本部・東洋文化研究所・特任准教授)
◇日時：2011年1月13日(木) 17:00~18:00
◇会場：東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3階 大会議室
◇参加：無料(申し込みは不要です)
◇お問い合わせ先：電話：03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

生業・移動のリズムの運動と物質文化の類似性から浮かび上がるインド洋海域世界 - 新しい世界史へ向けて -

全球規模の環境問題やグローバル経済の進展に直面するわたしたちは、今後、どのような世界史を待たばよいのだろうか。



生業・移動のリズムの運動と物質文化の類似性から浮かび上がるインド洋海域世界という歴史世界はこの問題を考えるひとつの手がかりになると思います。

◇報告者：鈴木英明(財団法人東洋文庫/日本学術振興会特別研究員)
◇日時：2011年2月3日(木) 17:00~18:00
◇会場：東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3階 大会議室
◇参加：無料(申し込みは不要です)
◇お問い合わせ先：電話：03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

普林斯顿修行 生活顛末

報告者は2010年1月からの1年間、プリンストン大学東洋部に訪問研究員として受け入れていただき「修行生活」をお経てきた。このセミナーではこの在外研究の顛末を報告する。一つのスローな研究であるが、この間に何を学んだか、何を学ばなかったか、そしてそうした経験が自分の研究生活や研究姿勢にどう影響を及ぼしたのか。質問を歓迎する。(とはいっても、議論は行かないように気を付けてください。)



プリンストン大にて

◇報告者：森本一夫(東京大学東洋文化研究所西アジア研究部門 准教授)
◇日時：2011年1月28日(木) 17:00~18:00
◇会場：東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3階 大会議室
◇参加：無料(申し込みは不要です)
◇お問い合わせ先：電話：03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

アマルティア・センの『正義のアイデア』

アマルティア・センの『The Idea of Justice』の翻訳『正義のアイデア』がまもなく出版されます。そこで、この本を紹介しながら、アマルティア・センの正義の考え方について簡単に解説します。『正義とは何か』を問う主流派のアプローチとは異なり、いかにして世の中の不正義を取り除いていくかにセンは着目します。そして、ケイバリティ・アプローチがどういう意味を持つかが明らかにされます。

◇報告者：池本幸生(東洋文化研究所 汎アジア研究部門 教授)
◇日時：2011年12月1日(木) 17:00~18:00
◇会場：東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3階 大会議室
◇参加：無料(申し込みは不要です)
◇お問い合わせ先：電話：03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

資源統治と国家権力 (佐藤准教授による帰朝報告会)

自然環境の保護に反対する人は少ない。しかし、環境を保護しようとする積極的な関与が、人間社会にもたらす影響を考えると少ない。環境保護に熱心な人々が考えるのは、様々な保護手段が環境そのものに与える影響であり、それが人間社会に与える影響ではない。私は資源や環境の国家による統治が、人間社会にどのように影響してきたかをアジアの文脈で明らかにしたいと思っている。この報告では、その手始めとして、近代化を始めた国家において、なぜ行政は特定の資源に目をつけてその統治体制を整えようとしたのか、という問いを明治日本とシマム(現在のタイ)で検証し、資源統治の発展段階論の可能性を展望する。

◇報告者：佐藤准(東洋文化研究所 新設アジア研究部門 准教授)
◇日時：2011年12月8日(木) 17:00~18:00
◇会場：東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3階 大会議室
◇参加：無料(申し込みは不要です)
◇お問い合わせ先：電話：03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

ドキュメンタリー映画を見る(第1弾)

『懐かしい未来』

ヒマラヤの辺境ラダック(インド)の伝統的な社会と「開発・発展」による変化は、私たちに「近代化」「発展」「進歩」とは何か、ということを考えるきっかけとなる。問題の根本を見極めることで、希望の未来が浮かびあがる。最近話題の『幸せの経済学 Economics of Happiness』はこれの続編にあたる。本セミナーでは、このドキュメンタリー映画を鑑賞し(前半)、鎌田陽司氏による解説と講演を聴く(後半)。

◇日時：2012年1月26日(木) 18:00~19:00
◇会場：東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3階 大会議室
◇映画のタイトル：『懐かしい未来：ラダックから学ぶ』ダイジェスト版
◇解説者：鎌田陽司氏(NPO法人懐かしい未来、代表理事)
◇講演タイトル：『懐かしい未来へ：幸せの経済学とローカライゼーション』
◇参加：無料(申し込みは不要です)
◇お問い合わせ先：電話：03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

＜東文研セミナー 6/5＞

マムルーク絨毯に見られるトルコ民族の文化的影響

トルコ文化財団イスタンブール局の美術史専門員、奥村純代氏が来日されます。この機会に奥村氏のご著書『The Influence of Turkic Culture on Mamluk Carpets』(イスタンブール、2007年)のテーマについて、お話しくださるようお願いいたしました。日本ではなかなか知る機会が少ないマムルーク朝絨毯に関する貴重なご発表です。どうぞ奮ってご参加ください。

◇日時：2012年6月5日(火)、15:00~17:00
◇会場：東京大学東洋文化研究所3階、第1会議室
◇発表者：奥村純代氏(Turkish Cultural Foundation, Istanbul Office)
◇テーマ：『マムルーク絨毯に見られるトルコ民族の文化的影響』
◇主催：東京大学東洋文化研究所研究「イスラーム美術の諸題」
◇お問い合わせ先：東文研 絨毯研究室(03-5841-5886)

第53回東文研・ASNET共催セミナー

36答申にみる 都市河川廃止論

近代以降、東京では多くの河川や水路がその姿を消しました。幸に、高度成長期に東京都から出された36答申、都内河川の下水道転用を決定し、渋谷川をはじめとする複数の河川が廃止、そして暗渠化されました。本講演では、36答申決定に用いられた当時の資料及び議事録から、答申決定までの経緯とその背後にあった技術者の河川論を明らかにし、これからの河川再生に向けた糸口を探りたいと思います。

◇日時/Date & Time: 2012年6月14日(木) 17:00~18:00
◇会場/Venue: 東京大学本郷キャンパス内 東洋文化研究所1階 ロビー/Lobby, 1st Floor, Institute for Advanced Studies on Asia, UT
◇報告者/Presenter: 中村賢一氏/Shinichi NAKAMURA (東大生産技術研究所 特任助教/Assistant Professor, IS, UT)
◇参加/Entry: 申し込み不要/Not required
◇お問い合わせ先: Tel: 03-5841-5886 E-mail: asnet@asnet-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年5月より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してまいりました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。また、下記でもご参加頂けます。奮ってご参加下さい。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET)

ホームページ: <http://www.asnet-tokyo.ac.jp/>

● 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧

＜東文研シンポジウム 6/2＞

中世日本美術を めぐる諸問題 ー東アジアの視点からー

近年、中世日本美術を隣接学問や東アジアの視点から見直す作業が進んでいる。今回は訪問研究員として日本で研究を進めているお二人、また、仏典を広い視野で研究されている馬場氏に発表をお願いし、様々な作品を対象にしてアジアという視点のお方を考えていきたい。

◇日時: 2012年6月21日(木) 18:00~19:00
◇会場: 東京大学東洋文化研究所 1階 大会議室
◇プログラム
馬場紀寿(東京大学東洋文化研究所 南アジア部門)
「仏像・仏像にはなぜ利益があるのか?」『宝篋印経』の伝播と展開
レイチェル・ヤン・グース(ハーヴァード大学)
「中世日本の五葉三蔵像における様式性ー玄奘三蔵像をめぐって」
アーロン・リブ(コロンビア大学)
「鎌倉時代の『ローカリスティル』と絵巻本を中心に」
◇司会: 飯島聖智(東京大学東洋文化研究所 東アジア第2部門)

＜東文研セミナー 6/23＞

歴史／民俗“編さん” を読み直す 実践としての郷土誌／自治体誌

日本の民俗学において、その学知見を社会へと還元する場としてあり続けてきたものの一つに、全国の地方自治体で行われてきた自治体誌の編纂があります。公共セクターが提供する事業へと関与することは、民俗学の公共性・実践性を発揮する機会としても有効でした。しかし時を経るにつれ、経年劣化というべき体感の形骸化が指摘されていることも事実です。今回の研究会では、そうした自治体誌が成立した背景と現状を踏まえ、広(公共)に資する自治体誌編纂事業とは、どうあるべきかを考え、公共民俗学としての同事業の将来を展望したいと思います。

◇日時: 2012年6月23日(土) 13:00~
◇会場: 東京大学東洋文化研究所3階 大会議室
◇主催/共催: 東文研セミナー、東京大学東洋文化研究所研究員「東アジアにおける『民俗学』的方法的課題」研究会、科研基礎研究(0)「市民社会に対応する『公共民俗学』創成のための基礎研究」(代表: 菅原・東京大学東洋文化研究所教授)、公共民俗学研究会
◇プログラム
室井康成(東京大学東洋文化研究所特任研究員)「編さん」の基調学ー「郷土」の表象をめぐる実践の相観
徳丸亜木(筑波大学教授)「自治体誌編さん」と「語り」の公共性

第62回東文研・ASNET共催セミナー

中国のムスリムと ユーラシアの近代

20世紀前半における「回」概念を手がかりにして

「回」Huiliは、漢語で歴史的にイスラームあるいはムスリムを指す言葉であった。本報告は、「回」の意味の変遷を追うことにより、中国を中心とする近代ユーラシアにおける「民族」概念の形成過程の一端を解明することを目的とする。具体的には、「民族」(minzu)概念が中国に導入された20世紀前半の時期に焦点を当てて、漢語を話すムスリム・エリート(宗教指導者、知識人、ジャーナリストなど)の「回」アイデンティティを考察する。

◇Date & Time: 6 December 2012 (Thu) 17:00~18:00
◇Venue: Main Conference Room, 3rd Floor, IASA
◇Presenter: 山崎典子 Noriko YAMAZAKI (日本学術振興会特別研究員 JSPS Research Fellow)
◇Inquiry: Tel: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してきました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。どなたでもご参加いただけます。詳細の情報は下記のとおりです。
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)
ホームページ: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

第64回東文研・ASNET共催セミナー

伝統を売る人々

日本地方都市小売業における商行為の伝統化

地方都市小売業の商行為は、顧客との長期的な関係による親密さや信用を根拠に「古き良き時代」と結びつけ語られる。本報告では、福岡県の柳川市の商店街の事例をもとに、このような商行為が単純な過去の残存として行われているのではなく、当事者たちの選択において、時代ごとの意味を与えられつつ現在に至ったものであることを明らかにする。そのうえで、苦境が指摘される現代の地方都市商業を別の視点から理解することを旨とする。

◇日時: 2013年1月31日(木) 17:00~18:00
◇会場: 東洋文化研究所1階 ロビー
◇報告者: 塚原伸治氏(日本学術振興会特別研究員 P0)
◇問い合わせ先: Tel: 03-5841-5868
E-mail: asnet@asnet-u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年より、毎週木曜日の夕方に東洋文化研究所でセミナーを開催してきました。これまでにセミナーについてはASNETのホームページをご覧ください。どなたでもご参加いただけます。詳細の情報は下記のとおりです。
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)
ホームページ: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

鶺鴒鑑賞のテクニック (入門編)

日本では1300年以上の歴史を持つとされる
長良川鶺鴒をはじめ、13の市町村で鶺鴒鑑賞
がおこなわれています。

日本の鶺鴒鑑賞には、鑑賞が手段を用いる
「鶺鴒鑑賞」や手段を用いない「鶺鴒鑑賞」
など、技術や方法の違いなど、意外とさまざまな
タイプがあります。

また、中国の鶺鴒鑑賞と見比べてみると、
現在の日本の鶺鴒鑑賞は野生の鶺鴒を主として
利用することや「鶺鴒鑑賞」であることなどの
特徴があります。

本発表では、発表者がこれまでおこなってきた
日本と中国との鶺鴒鑑賞結果を踏まえながら
鶺鴒鑑賞するためのコツをご紹介します。

◇日時: 2013年4月25日(木) 17:00-18:00
◇報告者: 伊田真平(東京ASNET機構)
◆会場: 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
◆参加費: 無料(申し込みは不要です)
◆問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年より、毎週木曜日の夕方にセミナーを開催してきました。どなたでもご参加いただけます。詳細の情報は下記のとおりです。
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)
ホームページ: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

日韓歴史摩擦の政治学

近年、日韓関係には 歴史認識や独島・竹島の領有権をめぐる摩擦
が頻度と強度の両面において深刻さを増している状態である。この
問題に対する客観的な分析や今後のためとれた理解こそが学問的かつ政策的
な課題となっている。

そこで、私は日韓歴史摩擦が生じる原因を国際システム、日韓の国内
政治、国際関係のダイナミクスという三つの分析レベルに分けて検討
しつつ、歴史摩擦のメカニズムを明らかにしたいと考えている。

その上で、今後の日韓関係が歴史摩擦という悪循環を繰り返さず、東
アジア地域の共同建設の主要な役割を担うために、どのようなウィング
や政策戦略が求められているのかを共に考えたい。

◇日時: 2013年5月9日(木) 17:00-18:00
◆報告者: 「日韓交渉史研究の第一人者」
李元徳氏(韓国慶熙大学校教授、東洋文化研究所訪問研究員)
◆会場: 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
◆参加費: 無料(申し込みは不要です)
◆問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年より、毎週木曜日の夕方にセミナーを開催してきました。どなたでもご参加いただけます。詳細の情報は下記のとおりです。
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)
ホームページ: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

他力思想への視座 植木等のスーダラ節

高度経済成長期を象徴する歌手、俳優、コメディアン 植木等(1926 - 2007)が、一
躍、茶の間の人気者として 広く知られるようになったきっかけは、1961年にリリース
された「スーダラ節」の大ヒットにあった。

植木等が、熱心な観衆主義者であった植木等(植木等)の「スーダラ節」が、一躍、わ
かちうけるだけでなく、やがては茶の間の人気者として 広く知られるようになった。この
高揚感からは、大衆文化にまつていかに植木等が、そこには 同時に、明らかに観衆の他
力思想に通じるメタファーが 埋め込まれている。

本セミナーでは、高度経済成長期の日本人を象徴し、いまだに輝きを放ち続ける植木
等が表現しようとした、ものとは何だったのかについて考えるためのいくつかの手がかりを
提示する。

◇日時: 2013年5月16日(木) 17:00-18:00
◆報告者: 山本伸治氏(東京大学 特任研究員)
◆会場: 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
◆参加費: 無料(申し込みは不要です)
◆問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年より、毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加いただけます。詳細の情報は下記のとおりです。
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)
ホームページ: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

リックライダーの夢は現在...

蓄わえられてしまったデータの未来

今年、はじめてのデジタルデータの未来を一般公開
して50周年の節目を迎えています。

そのリックライダーのコンピュートは中からデータを
上り下りするリックライダーのコンピュートと人との共生という
思想から生まれたとされるのが有力です。

今年のはじめてのリックライダーが、新しい未来を築いていく
ために準備されていることを示した上で、デジタル
データについて考えてみます。

リックライダーはデジタルデータを印刷物化し、人々に伝えようという意図があるのですが、この点だけは
現代において通用しないのではないかというのが懸念の一つです。

ではデジタル化されていくデータの未来はどうなるのでしょうか、考えてみたいと思います。

◇日時: 2013年5月23日(木) 17:00-18:00
◆報告者: 藤岡 洋氏(東京大学 特任研究員)
◆会場: 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
◆参加費: 無料(申し込みは不要です)
◆問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年より、毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加いただけます。詳細の情報は下記のとおりです。
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)
ホームページ: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

＜東文研・ASNET共催セミナー＞

中国の冥婚

生者と死者のかかわり

冥婚とは、生者と死者のあいだの婚姻のこと。

本報告では、中国の「冥婚」について、以下のようなお話をします。

1. 「冥婚」とは概念
2. 「冥婚」の種類
3. 歴史の中の「冥婚」現象
4. なぜ「冥婚」をするのか

◇日時: 2013年6月6日(木) 17:00-18:00 * 報告者は中国で20年以上、
研究の経験があります。
◆報告者: 許 慶永氏(東洋文化研究所 訪問研究員)
◆会場: 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
◆参加費: 無料(申し込みは不要です)
◆問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet-u-tokyo.ac.jp

東文研・ASNET共催セミナー

東洋文化研究所とASNETは2010年より、毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加いただけます。詳細の情報は下記のとおりです。
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)
ホームページ: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

● 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧

＜Tobunken/ASNET Seminar＞

How to answer big questions with micro-historical studies Another plea for a new diplomatic history

The fact that early modern Japanese rulers seemed to adapt easily to Western diplomatic practices and therefore became the first East Asian state to develop inter pares relations with foreign nations, while the country itself has been considered an odd player in the Middle Kingdom world order, puzzles historians.



When asking which circumstances led to applied hybrid diplomatic practices, focusing on "big structures, large processes and huge comparisons" proves insufficient. In order to meaningfully integrate intercultural diplomatic relations into global historical research we have to combine macro-level connections with the diversity on the micro level. An actor-based approach that systematically analyses individual agency within the bigger picture of diplomacy, power relations and foreign trade promises more insights than loosely linked case studies.

- ◆ Date : June 13 (Thu), 17:00-18:00
- ◆ Speaker: Birgit Tremml (Research Fellow, JSPS)
- ◆ Venue : Ground floor, Tobunken
- ◆ Fee : Free
- ◆ Contact : Tel 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



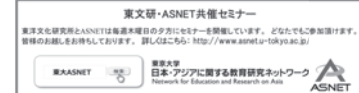
＜Tobunken/ASNET Seminar＞

How to answer big questions with micro-historical studies Another plea for a new diplomatic history

The fact that early modern Japanese rulers seemed to adapt easily to Western diplomatic practices and therefore became the first East Asian state to develop inter pares relations with foreign nations, while the country itself has been considered an odd player in the Middle Kingdom world order, puzzles historians.

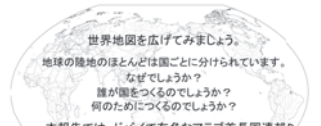


- ◆ 報告者 ビルギット・トレムル氏 (日本学術振興会 外国人特別研究員)
- ◆ 会場 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 無料 (申し込みは不要です)
- ◆ 問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



＜東文研・ASNET共催セミナー＞

誰が国をつくるのか？ 何のためにつくるのか？ —アラブ首長国連邦の歴史から考える—



- ◆ 日時 2013年 6月 20日 (木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 佐藤 尚平氏 (日本学術振興会 特別研究員 SPD)
- ◆ 会場 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 無料 (申し込みは不要です)
- ◆ 問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



＜Tobunken/ASNET Seminar＞

Chinese, Korean, and Japanese Identity in 16th Century a Korean diarist's view of Hideyoshi's invasion

A poor member of the privileged Yangban class in Choson Korea at the end of the 16th century, Oh Hui-min had left his family to travel south when suddenly rumors arrived of a Japanese invasion. As panic swept the country, Oh struggles to find safety and to reconnect with his loved ones. A casual travel diary became a daily record of nine years as a refugee, as Japanese and then Chinese armies, local bandits, plagues, and starvation ravaged the country.



This paper looks at how this man understood what is now called the Imjin War, the first great international war in East Asia. Through his account of his daily life, we see, for example, how his social connections gave him access to information, how he reacted to the arrival of foreigners, and how he viewed the interactions of the court, officials, and commoners.

- ◆ Date : July 18 (Thu), 16:30-17:30
- ◆ Speaker: J. Marshall Craig (Visiting Fellow/ Oxford University)
- ◆ Venue : Main Conference Room, 3rd floor, Tobunken
- ◆ Fee : Free
- ◆ Contact : Tel 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



＜東文研・ASNET共催セミナー＞

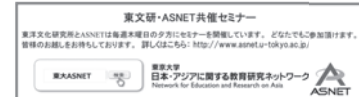
ある朝鮮人の日記にみる秀吉の半島侵略 —16世紀東アジアのアイデンティティ問題—

16世紀末、朝鮮人の兵馬文が、日本軍による朝鮮出兵の噂を耳にしたのは、彼が家族を置いて半島南部への旅に出かけた後であった。



貴しも前編の巻の二に記述された兵馬文は、混乱する朝鮮国内を脱し、何となく変化する軍勢のもとへ脱走した。何もない旅の記録となるはずの兵馬の日記は、日本軍や中国軍、地元の盗賊、疫病、そして飢饉までもが登場する、9年間の難民生活の記録となった。

- ◆ 報告者 マーシャル・クレイグ氏 (東洋文化研究所 訪問研究員)
- ◆ 会場 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3F 大会議室
- ◆ 参加費 無料 (申し込みは不要です)
- ◆ 問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp

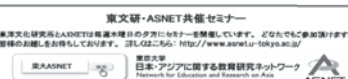


＜東文研・ASNET共催セミナー＞

日本中世の風俗画における 図像の引用と変容 「月次風俗図」のイコノロジー

四季の変化とともに人々の日々の営みを描く風俗画は日本中世において好んで描かれたジャンルである。そのような絵画のなかには類似する図像が見られ、その図像が引用されて変容していることが多くある。

- ◆ 日時 2013年 7月 4日 (木) 15:30-17:00
- ◆ 報告者 井戸 美里 (東洋文化研究所・特任助教)
- ◆ 会場 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3F 大会議室
- ◆ 参加費 無料 (申し込みは不要です)
- ◆ 問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



＜東文研・ASNET共催セミナー＞

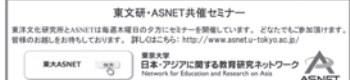
インドネシア政治の中の華人

中国系住民はオランダ植民地以前から現在のインドネシアにある地域に居住しており、今では、数々の法制度にインドネシア国籍を取得している。しかし、「華人」という存在は、政治的、社会的にさまざまな偏見で描かれてきた。その偏見の根拠と変遷が追跡され、排撃の背景にもなってきた。



本発表では、インドネシアの政治や社会の中にある「特別な」華人を捉え、インドネシアがどのような歴史を経験してきたのかを考察する。

- ◆ 日時 2013年 7月 4日 (木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 松村 智雄氏 (東京理科大学非常勤講師)
- ◆ 会場 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 無料 (申し込みは不要です)
- ◆ 問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



＜東文研・ASNET共催セミナー＞

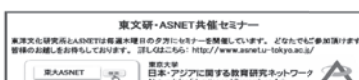
「宗教国家」の内側で ヴェールをめぐる裁判にみるエジプトの政教関係



1923年以降、エジプトの憲法には、「イスラームは国家の宗教である」という文が書き込まれ、71年以降には、「イスラーム法の適用は立憲の主たる源泉である」という言葉も加わった。イスラームを国家の宗教とし、その法の適用が主たる源泉である国家とは、いったいどのような国家だろうか。

本報告では、1980年代後半から2000年代前半までのムスリム女性のヴェール着用に関する裁判事例に国家の理念がどのように反映されているかについて、さまざまな形で解釈されている様子を探っていく。その作業を通して、現在のエジプトで進行中の出来事を見るための視角も提示できればと思う。

- ◆ 日時 2013年 9月 12日 (木) 14:00-15:30
- ◆ 報告者 後藤 絵美 (東洋文化研究所・助教)
- ◆ 会場 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 3F 大会議室
- ◆ 参加費 無料 (申し込みは不要です)
- ◆ 問い合わせ: 電話: 03-5841-5868 E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



＜東文研・ASNET共催セミナー＞

日中戦争期における三峡ダム構想 大谷光瑞とジョン・ルシアン・サヴェージの役割を中心に

中国の三峡ダムの構想は、これまで「国家の父」である孫文(1866-1925)に由来するといわれる。1940年代に採用された三峡の近代化政策の一環であったとされてきた。しかし、長江流域の大規模ダムの建設計画は、実は、日中戦争期(1937-45)に外国政府の間で技術の進歩こそが中国の将来を形作るという意識が芽生える中、形を成したのである。

本報告では、その過程において重要な役割を果たした二人の外国人——技術顧問の一人としてアジア開発に関する「大谷興業計画」をまとめた大谷光瑞(1876-1948)と、米政府連絡役として重慶を訪れ、長江への大規模ダム建設を提議する報告書を作成したジョン・ルシアン・サヴェージ(1879-1967)——に焦点を、結果的には戦争に起因する形で実現したもののこれらの計画が果たしたゆえに、「技術の進歩こそが中国の将来を形作る」という意識が芽生え、1949年以降の中国の発展に期待が寄せられた点に着目する。 ※ 報告は英語で行われます。

- ◆ 日時 2013年 10月 17日 (木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 ボール・クライトマン氏 (東洋文化研究所 訪問研究員)
- ◆ 会場 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 無料 (申し込みは不要です)
- ◆ 問い合わせ: E-mail: asnet@asnet.tokyo.ac.jp



● 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧

<Tobunken/ASNET Seminar> A CRITICAL REFLECTION ON CERAMICS BIENNALES IN EAST ASIA

東アジアのビエンナーレと陶磁器展示

This presentation explores the international ceramics biennale phenomenon within East Asia. Focusing on Japan, Korea and Taiwan, the author analyses the biennale models and develops a comparative analysis of these events. Finally, the future of these events is considered and their complex relationship with contemporary critical theory is examined.

- ◆ Date : May 15 (Thu), 17:00-18:00
- ◆ Speaker : Wendy GERS (Curator Taiwan Ceramics Biennale 2014)
- ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken, The University of Tokyo
- ◆ Fee : Free



<東文研・ASNET共催セミナー> 中国初期文人画を再考する



「中国初期文人画」とは何か。
画面中物が少なく、抽象的な風景図が頭に浮かぶかと思われるが、私の博士論文ではそういった一般常識を覆す物質史料・文字史料を紹介し、先行研究が唐大で多面的な文人画の歴史の、ごく一部だけを曖昧な形で描いてきたという点を指摘する。

本研究会では特に文人画の定義のひとつとされる「画中有詩」に着目し、定義となっている史料をも、これまでは看過されてきた史料をも考慮に入れて、「中国初期文人画」の未発表の諸相を追究する。

- ◆ 日 時 : 2014年5月22日(木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 : エイミー・ホアン (東洋文化研究所・訪問研究員)
- ◆ コメント : 井戸美里 氏 (東京大学 東洋文化研究所 特任助教)
- ◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 : 無料 (申し込みは不要です)



<Tobunken/ASNET Seminar> A New History of Early Chinese Literati Painting

中国初期文人画を再考する



What is early Chinese literati painting? Sparse, abstract landscapes usually come to mind when we think about literati painting, but why? What if the standard version of the history of early literati painting only offers an obscured view of a much bigger, complex picture? This study challenges the dominant narrative on early literati painting by giving equal weight to the testimonies of artifacts as well as that of texts.

Furthermore, it illustrates the instability of "painting embodying poetry", a defining idea in literati painting, with an examination of the dominant, meaning-conferring texts as well as the overlooked, contradictory ones.

- ◆ Date : May 22 (Thu), 17:00-18:00
- ◆ Speaker : Amy C. Hwang (Visiting Fellow, IASIA)
- ◆ コメント : Misato Ide (Assistant Professor, The University of Tokyo)
- ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
- ◆ Fee : Free



<東文研・ASNET共催セミナー> 地域文化の読み取り方 Deep playとしての闘牛

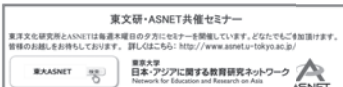
新潟県小千谷市では、角突き(闘牛)が継承されている。それは国指定の重要無形民俗文化財に指定されており、文化財的価値が認識されているが、それは従来の文化の「財」制約的の枠組みを超えた多岐にわたる価値を育む、あるいは創出する文化である。



闘牛という、動物を利用し勝ち負けをつけ、人間がそれを楽しんでいるという一面的な局面だけがとらえられがちであるが、その文化は単なる手型、紙面ではなく、地域(の人びと)のアイデンティティと深く結びつき、社会的、精神的な価値を生み出す源泉となっている。

そのような価値は、小千谷の角突きのみならず、各地の地域文化のなかに共通して見られる価値であり、文化研究において、この側面こそ注目すべきである。本発表では、牛が闘うという局面を見ただけではわからない、人間の生活と結びついた地域文化の奥深さを提示する。

- ◆ 日 時 : 2014年5月29日(木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 : 菅 豊 氏 (東洋文化研究所 教授)
- ◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 : 無料 (申し込みは不要です)



<Tobunken/ASNET Seminar> The compilation of hagiographies in fourteenth-century Coptic society



いかにして伝記を著すか
14世紀コプト聖人伝の場合

Hagiographies are generally perceived to be fictitious in nature. However, what makes a biography work of fiction?

By examining various hagiographies of Coptic saints in Islamic Egypt, I explore the practices and strategies of the author(s) in compiling a hagiography.

- ◆ 日 時 : June 5 (Thu), 17:00-18:00
- ◆ Speaker : Asuka Tsuji (JSPS Fellow)
- ◆ コメント : Kazuo Morimoto (Associate Professor, The University of Tokyo)
- ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
- ◆ Fee : Free



<東文研・ASNET共催セミナー> いかにして伝記を著すか 14世紀コプト聖人伝の場合

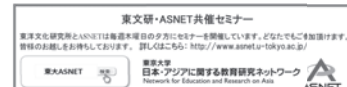


The compilation of hagiographies
in fourteenth-century Coptic society

伝記とは個人の一生の事績を記した記録であるが、その内容には虚構的要素が多量に、そうでないにせよ、虚構入り組む場合が多い。

本報告はイスラム期エジプトに著されたコプト聖人伝を例に、聖人を取り巻く人々の要求や時代背景が伝記の内容に与えた影響について考察する。

- ◆ 日 時 : 2014年6月5日(木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 : 辻 明日香 氏 (日本学術振興会・特別研究員)
- ◆ コメント : 森本一夫 氏 (東京大学 東洋文化研究所 准教授)
- ◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 : 無料 (申し込みは不要です)

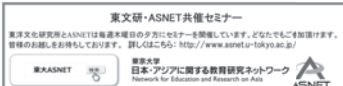


<東文研・ASNET共催セミナー> 宋代士大夫たちの禅悟 蘇東坡の悟道を中心に

The Zen Practices of the Scholar-officials in Song Dynasty
宋の時代、士大夫たちの間で禅の修行が広く流行した。この時代、蘇東坡がおこなったような「声色(しやうしき)から「真面目(しんめんもく)」を撰(えら)び出す」という審美的な禅の境地は、宋代士大夫たちの禅悟の典型的な立場であった。また、この禅の境地は、彼らの文学創作にも大きな影響を与えた。本発表では蘇東坡の「悟道」の経緯を中心に、宋代士大夫たちがいかに悟りを開いて道徳を会得したのかを紹介する。



- ◆ 日 時 : 2014年6月12日(木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 : 王 汝娟 氏 (東洋文化研究所・訪問研究員)
- ◆ コメント : 大木 康 氏 (東京大学 東洋文化研究所 所長)
- ◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 : 無料 (申し込みは不要です)



<Tobunken/ASNET Seminar> The Zen Practices of the Scholar-officials in Song Dynasty Focusing on So-Syoku

宋代士大夫たちの禅悟—蘇東坡の悟道を中心に

In Song Dynasty, Zen was extremely flourishing among the scholar-officials. Mostly, they were inclined to reach Shin-menmoku (真面目) through Syoshiki (声色) in their Zen practices as how So-Syoku (蘇軾) did. Furthermore, this aesthetic character of their Zen practices produced effects on their literature.



- ◆ 日 時 : June 12 (Thu), 17:00-18:00
- ◆ Speaker : Wang Rujuan (Visiting Fellow, IASIA)
- ◆ コメント : Yasushi Oki (Professor, The University of Tokyo)
- ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
- ◆ Fee : Free

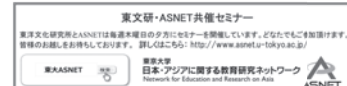


<東文研・ASNET共催セミナー> 新疆学の位置づけ Situating Xinjiang Studies

本セミナーでは、中国新疆ウイグル自治区に関する研究の内容と位置づけを検討する。この学問の背景は何かの、中国学や中央アジア学とどのような関係があるのか、新疆学を断片的な学問として見るのか、どこにどのような長所と短所があるのか、と言問題を明らかにしたい。米国と日本からの新疆に関する研究を例に、本セミナーでは新疆学の境を解明し、この学問を前進させるためのアイデアも提供する。



- ◆ 日 時 : 2014年6月19日(木) 17:00-18:00
- ◆ 報告者 : キャラ・エイブラムソン氏 (東洋文化研究所・訪問研究員)
- ◆ コメント : 高見澤 磨 氏 (東京大学 東洋文化研究所 教授)
- ◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
- ◆ 参加費 : 無料 (申し込みは不要です)



● 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧

<Tobunken/ASNET Seminar>
Situating Xinjiang Studies
 新疆学の位置づけ

This presentation probes the question of how to define and situate academic scholarship connected to the Xinjiang Uyghur Autonomous Region, People's Republic of China. What is the history of the discipline, how does it overlap with Chinese Studies and Central Asian Studies, and what are the strengths and weaknesses of identifying it as a unique area of study? Looking in particular at scholarship about Xinjiang from the United States and Japan, this talk aims to clarify the boundaries of the discipline and offer a series of proposals for moving the discipline forward.



◆ Date : June 19 (Thu), 17:00-18:00
 ◆ Speaker : Kara Abramson (Visiting Fellow, IASIA)
 Comment by Osamu Takamizawa (Professor, The University of Tokyo)
 ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
 ◆ Fee : Free

Tobunken/ASNET Seminar
 IASIA (Tobunken) and ASNET organize collaborative seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

<東文研・ASNET共催セミナー>
清朝の「京報」と外国人読者
 1870年代の世界的大飢饉を中心として

The Peking Gazette and Its Foreign Readers



「京報」とは、中国の明、清時代に存在した法令や奏聞、皇帝の勅諭などをまとめた掲載した小冊子のことである。第二次アヘン戦争以降、イギリス人などの外国人にとって、「京報」は「情報源」であったのみならず、「外交手段」の一つともなっていた。1870年代以後、東アジアで最も影響力のあった新聞の一つ、The North-China Daily News (上海発行の英字紙)は、定期的に「京報」の原文を転載するようになった。そのため、政治界内外の一般のイギリス人が、中国に関する情報を得るようになり、中東外交に大きな影響を及ぼした。本発表では、1870年代の世界的大飢饉の際に見られた、イギリス人の対中救援活動を例として、当時の中東外交の新しい形の一側面を明らかにしたい。

◆ 日 時 : 2014年7月3日(木) 17:00-18:00
 ◆ 報告者 : 趙 曼 氏(東洋文化研究所・訪問研究員)
 ◆ コメント : 張 厚 氏(東洋文化研究所 教授)
 ◆ 会 場 : 東京大学 本部キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
 ※ 報告は日本語で行われます。

東文研・ASNET共催セミナー
 東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。登録のお願いをお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

<Tobunken/ASNET Seminar>
The Peking Gazette and Its Foreign Readers
 Focusing on the Great Famine in 1870s

Peking Gazette, a sort of Chinese pamphlets published during Ming and Qing dynasties, contained information of the decrees, memorials and the news of the Imperial Families. During the period of the second Opium War, the role of Peking Gazette changed from the 'information source' to the 'negotiation method' for the European. And then, one of the most influential English language newspapers named The North-China Daily News began to publish the translation of Peking Gazette regularly from 1871. In that way, an unofficial information network of China had been established and the British public opinion had much more effective in influencing Sino-British relation. This report will take the Great Famine broke out in the 1870s as an example trying to re-examine the features of Sino-British relation during that period.

◆ Date : July 3 (Thu), 17:00-18:00
 ◆ Speaker : ZHAO Ying (Visiting Fellow, IASIA)
 Comment by ZHANG Houqun (Professor, Donghua University)
 ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken

Tobunken/ASNET Seminar
 IASIA (Tobunken) and ASNET organize collaborative seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

GJS Seminar Series
Gender and Literati Art in 19th-Century Japan

Speaker: Yurika WAKAMATSU
 Ph.D. candidate, Harvard University/ Visiting Fellow, Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

Time: July 10, 2014 (Thu) 5:00-6:00 pm
 Location: Lobby (Ground floor), Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo
 Language: English

Organized by Global Japan Studies, GJS/ Network for Education and Research on Asia, ASNET
 Contact: Global Japan Studies Network, gjs@loc-u-tokyo.ac.jp

<東文研・ASNET共催セミナー>
日中「近代化」の意味と変遷
 グローバルヒストリーの視点で

The meaning of "modernization" and its changes in Japan and China



「近代化」という概念は、欧米の学者が欧米社会で後進国を考察するときに使った概念である。日本では「近代化」という言葉が「文明」や「進歩」というイメージで使われていたが、中国では「近代化」という言葉にマイナスのイメージが強く使われるようになった。本発表は、グローバルヒストリーの視点で日中「近代化」について比較検討する試みの中間報告である。

◆ 日 時 : 2014年7月17日(木) 17:00-18:00
 ◆ 報告者 : 張 厚 氏(東洋文化研究所・訪問研究員)
 ◆ コメント : 廣田 茂 氏(東京大学 東洋文化研究所 教授)
 ◆ 会 場 : 東京大学 本部キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
 ※ 報告は日本語で行われます。

東文研・ASNET共催セミナー
 東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。登録のお願いをお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

<Tobunken/ASNET Seminar>
The meaning of "modernization" and its changes in Japan and China
 On the perspective of global history

The concept of "modernization," translated into Japanese as "kindaika (近代化)," is a concept being used by European and American scholars to assess the development, or underdevelopment, of a country. While in Japan, "modernization" is a very commonly used word, in China, the word has a negative connotation. Rather, in the Chinese language, "modernization" is often being translated as "xiandaihua (現代化)." Although the Japanese and Chinese terms share the same Chinese characters their concepts are different. A gap is produced between the researchers as well as the common people of the two countries in their understanding of the concept of "modernization," each being influenced by the translated terminology in their own language. This shows to a certain extent the limit of the Eurocentric and American-centric historical view of the world.

◆ Date : July 17 (Thu), 17:00-18:00
 ◆ Speaker : ZHANG Houqun (Visiting Fellow, IASIA)
 Comment by SONODA Shigetoshi (Professor, The University of Tokyo)
 ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
 ◆ Fee : Free

Tobunken/ASNET Seminar
 IASIA (Tobunken) and ASNET organize collaborative seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

GJS Seminar Series
Honor Among Thieves: The Textual Evolution of Jiraiya monogatari

Speaker: Kevin Mulholland
 Ph.D. candidate, University of Michigan/ Visiting Fellow, IASIA, University of Tokyo
 Comment: OKI Yasushi (Professor, IASIA)

Time: July 24, 2014 (Thu) 4:00-5:00 pm
 Location: Main Conference Room (Third floor), Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo
 Language: English



Organized by Global Japan Studies, GJS/ Network for Education and Research on Asia, ASNET
 Contact: Global Japan Studies Network, gjs@loc-u-tokyo.ac.jp

<東文研・ASNET共催セミナー>
100回記念講演
ベトナム研究の魅力

The Charm of Researching in Vietnam



ASNETと東文研は2011年5月より本曜日の夕方に、共催セミナーを開催してきました。今回、100回目の開催を記念して、ASNETの古田元夫機関長にベトナム研究の魅力についてお話しいただくことになりました。ふるってご参加ください。

◆ 日 時 : 2014年10月9日(木) 17:00-18:00
 ◆ 講演者 : 古田元夫氏 (ASNET機関長) ※ 講演は日本語で行われます。
 ◆ 会 場 : 東京大学 本部キャンパス内 東洋文化研究所 3F 大会議室
 ◆ その他 : 参加費無料、事前登録不要

東文研・ASNET共催セミナー
 東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。登録のお願いをお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

<東文研・ASNET共催セミナー>
私立学校はなぜ潰れるのか
 移行経済期ベトナムにおける公・私関係の再編成



1986年にドイモイ政策を導入したベトナムでは、教育や医療などの公共福祉領域に民間企業が参入することが可能になった。1990年代に市場参入が認可され、高まる競争力の受け皿になることが期待された私立学校は、政策面での強力な後押しにもかかわらず、社会に定着していなかった。近年では財政的基盤を維持できず、潰れる学校も増えている。本発表では、移行経済期ベトナムにおける私立学校の財政面における公・私関係の再編成と、アジアの文脈に照らしてみたいと私の「家畜」に着目して明らかにする。

◆ 日 時 : 2014年10月16日(木) 17:00-18:00
 ◆ 報告者 : 伊藤朱帆氏 (東京大学 EALAI 特任講師)
 ◆ コメント : 池本幸生氏 (東京大学 東洋文化研究所 教授)
 ◆ 会 場 : 東京大学 本部キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー

東文研・ASNET共催セミナー
 東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。登録のお願いをお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

● 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧

<東文研・ASNET共催セミナー>
バイリンガル児童のことは
ウルドゥー語引用のリアル

Quoting in Urdu: Bilingual conversation of Pakistani children in Japan

二つの言語が使われる会話では、何がきっかけとなって言語の切り替えが起こるのだろうか。

関東首都圏のあるモスク教室に通う日パキスタン人バイリンガル児童らは、日本語を使用することが圧倒的に多い。しかし、ときにウルドゥー語を使うことがある。

その一例が、引用(括弧)である。ウルドゥー語による引用は、会話の流れにおいて特別な効果があるだけでなく、バイリンガル児童らの仲間同士のヨコの関係、そして親世代とのタテの関係を再確認するプロセスでもある。本発表では、発話ひとつひとつのつながりの分析を通して、ことばの使用を通じて移民児童の生活世界の理解を試みる。

◆ 日 時 : 2014年10月30日(木) 17:00-18:00
◆ 報告者 : 山下重香氏(日本学術振興会 特別研究員)
◆ コメント : 名和克郎氏(東京大学 東洋文化研究所 教授)
◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
※ 報告は日本語で行われます。

東文研・ASNET共催セミナー
東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。お申し込みはお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

<Tobunken/ASNET Seminar>
Quoting in Urdu
Bilingual conversation of Pakistani children in Japan
バイリンガル児童のことは—ウルドゥー語引用のリアル

What makes bilingual speakers switch between languages in a conversation? Many non-Japanese children who attend state schools in Japan are said to be dominant speakers of Japanese, and speak less of their parents' heritage language. Such is also the case with the bilingual Pakistani children who gather in a mosque classroom in Kanto area.

However, the Pakistani children do occasionally use Urdu, especially in quotations. Quoting in Urdu not only has on-spot pragmatic functions in conversation, but is also part of the larger process of their reaffirmation of social relationships with their peers and the older generation. This presentation will turn-by-turn analyses of conversational episodes, which offer us a peek into the everyday experience as migrant Muslim children in Japan.

◆ Date : October 30 (Thu), 17:00-18:00
◆ Speaker: Rika Yamashita (JSPS Fellow)
◆ Comment by Katsuo Nawa (Professor, The University of Tokyo)
◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
*The presentation will be in Japanese. But English handouts are also available.

Tobunken/ASNET Seminar
IASA (Tobunken) and ASNET organize collaborated seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

<東文研・ASNET共催セミナー>
地域の研究と「地域研究」
東京大学におけるその誕生と今後のゆくえ
Studying Certain Areas or "the Area Studies" at the University of Tokyo

「地域研究」という語が学術的な場面で用いられるようになって半世紀。「地域研究」とは何か? という問いは明確な答えを得ないままに繰り返されてきた。本報告では、その原因の一つとして「地域の研究」と「地域研究」という二つの研究姿勢があることを指摘し、それぞれがどのように誕生し発展してきたのかを東京大学における文学部、東洋文化研究所、教養学部と総合文化研究科の成立を一つの事例として追出す。その上で、「地域の研究」と「地域研究」の特徴や、二つの研究姿勢の今後のゆくえについても考えていく。

◆ 日 時 : 2014年11月13日(木) 17:00-18:00
◆ 報告者 : 後藤純美氏(東京大学 東洋文化研究所 助教)
◆ コメント : 長沢栄治氏(東京大学 東洋文化研究所 教授)
◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
※ 報告は日本語で行われます。

東文研・ASNET共催セミナー
東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。お申し込みはお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

<Tobunken/ASNET Seminar>
The Study of Certain Areas or "Area Studies"
at the University of Tokyo
地域の研究と「地域研究」—東京大学におけるその誕生と今後のゆくえ

The discussions on the topic "what are area studies" have frequently occurred without reaching any consensus. This presentation seeks one of the reasons for this situation by indicating the existence of two opposing methodological stances existing among scholars in this field—that is, on the one hand, "studying certain areas" in combination with existing disciplines and, on the other hand, doing "Area Studies" as an independent, interdisciplinary, and innovative activity. Examples analyzed include the founding and development of the Faculty of Letters, The Institute for Advanced Studies on Asia, College/Graduate School of Arts and Sciences at the University of Tokyo. Further, challenges faced as well as the prospects of the study are described.

◆ Date : November 13 (Thu), 17:00-18:00
◆ Speaker: Emi Goto (Assistant Professor, The University of Tokyo)
◆ Comment by Eiji Nagasawa (Professor, The University of Tokyo)
◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
*The presentation will be in Japanese.

Tobunken/ASNET Seminar
IASA (Tobunken) and ASNET organize collaborated seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

<東文研・ASNET共催セミナー>
東西思想の邂逅
18世紀在华イエズス会士の報告を中心に
Encounter between Eastern and Western Ideas

16〜18世紀、在華イエズス会士(中国に滞在したイエズス会宣教師)がヨーロッパへ送った中国に関する膨大な報告は、一部の東洋・中国趣味の青年たちに受けとられ、知識階級の関心事として広範に流通した。ではこの報告は、中国のいかなる資料に依拠し、またそれほどの程度忠実なのか。本発表では、この基本的かつ重要な問題の解明から出発し、同時代中国における思潮との連関を明らかにすると共に、いかなる資料からも逸脱した、つまり在華イエズス会士が独自に創作した部分にも注目し、そこに現れた主観とヨーロッパにおける思潮との関わりを検討する。

◆ 日 時 : 2014年11月20日(木) 17:00-18:00
◆ 報告者 : 新居洋子氏(東京大学 東洋文化研究所 CPAG特任研究員)
◆ コメント : 大木 康氏(東京大学 東洋文化研究所 教授)
◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー

東文研・ASNET共催セミナー
東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。お申し込みはお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

<Tobunken/ASNET Seminar>
Encounter between Eastern and Western Ideas
Jesuit Missionaries in 18th-Century China
東西思想の邂逅—18世紀在华イエズス会士の報告を中心に

From the sixteenth century to the eighteenth century, Jesuits sent Europe a number of reports on China. These reports not only fascinated a small group of sinophiles and orientalist, but also widely circulated as the issue of great concern for the Republic of Letters. My presentation will take the Vie de Confucius by the French Jesuit Jean-Joseph Marie Amiot (1718-93) as an example, and will start with two very basic questions: (1) what kind of materials in China were these Jesuits reports based on and to what extent are these reports faithful to those materials? (2) to what extent did these reports deviate from any original materials, i.e., how did Jesuits show their own originality in the reports? I will address these questions and examine the influence of the seventeenth- and eighteenth-century Chinese and European thoughts on Jesuits' reports.

◆ Date : November 20 (Thu), 17:00-18:00
◆ Speaker: Yoko Nii (IASA CPAG Fellow, The University of Tokyo)
◆ Comment by Yasushi Oki (Professor, The University of Tokyo)
◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
*The presentation will be in Japanese.

Tobunken/ASNET Seminar
IASA (Tobunken) and ASNET organize collaborated seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

<東文研・ASNET共催セミナー>
見えない女性たち
18世紀広州における社会関係と権力構造
Invisible women: social relations and power in 18th century Canton

広州は18世紀を通じて世界的な交易の中心地であった。交易活動が行われていた数キロ四方の小さな外国区域(内では、当時の中国国内の法律により、外国人女性がこの町に入ることや、外国人の貿易商が中国人女性と会うことが禁じられていた。そこで広州はこれまで主に、男性だけの町として描かれてきた。

しかし、資料を見ると、広州に現地出身の女性たちが存在していただけでなく、彼女たちが交易の現場で活躍し、知的交流の中で重要な役割を果たしていたことがわかる。

本報告では、こうした女性たちに光を当て、18世紀広州の日常生活や権力構造の新しい側面を浮かび上がらせる。

◆ 日 時 : 2014年12月4日(木) 17:00-18:00
◆ 報告者 : リサ・ヘルマン氏(東京大学 東洋文化研究所 訪問研究員)
◆ コメント : 鳥山純子氏(東京大学 東洋文化研究所 特任研究員)
◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
※ 報告は英語で行われます。

東文研・ASNET共催セミナー
東洋文化研究所とASNETは毎週木曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。お申し込みはお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

<Tobunken/ASNET Seminar>
Invisible women
Social relations and power in 18th century Canton
見えない女性たち—18世紀広州における社会関係と権力構造

Canton was throughout the 18th century an important center for global trade. According to Chinese law, no foreign women could enter Canton, and the foreign traders were not allowed to meet Chinese women. Thus the quarters were described as exclusively male. However, studying 18th century Chinese and foreign sources it becomes apparent that the women of Canton were not only present, but active in intercultural contact. Women, and the ideas of women, were used by the Chinese officials to control the foreigners. Consequently, women and the relations to them became important for the foreigners in turn. By bringing out the invisible women of this history, we get a new picture of everyday life and power struggles in 18th century Canton.

◆ Date : December 4 (Thu), 17:00-18:00
◆ Speaker: Lisa Helman (Visiting Scholar, IASA)
◆ Comment by Junko Toriyama (Project Researcher, IASA)
◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken
*The presentation will be in English.

Tobunken/ASNET Seminar
IASA (Tobunken) and ASNET organize collaborated seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/>

東文研 ASNET 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク Network for Education and Research on Asia

第107回東文研・ASNET/ 第4回 GJS セミナー
日本の前で中国を演じる近世琉球
—大英図書館蔵『琉球音楽図』を巡って—

【講演者】
バトリック・シュウェマー氏 (プリンストン大学)

【日時】
2014年12月18日(木)
17:00-18:00
【会場】
東京大学東洋文化研究所
1階ロビー
【言語】英語

主催: 国際総合日本学ネットワーク / 共催: 東文研・ASNET
問い合わせ: 国際総合日本学(GJS)ネットワーク, gjs@ocu-tokyo.ac.jp

● 東文研・ASNET 共催セミナーのポスター一覧

Tobunken/ASNET/GJS Seminar Series
Ryūkyū Play-ing China against Japan:
 Paintings of Theatrical Diplomacy in the
 British Library

Speaker: Patrick SCHWEMMER
 Ph.D. candidate, Princeton University



Time: December 18, 2014
 (Thu) 5:00-6:00 pm
 Location: Lobby, Ground Floor,
 Institute for Advanced Studies
 on Asia, University of Tokyo
 Language: English

Organized by Global Japan Studies, GJS/ Network for Education and Research
 on Asia, ASNET
 Contact: Global Japan Studies Network, gjs@ioc.u-tokyo.ac.jp

Tobunken/ASNET/GJS Seminar Series
Knowledge is a Polyglot:
 Japan and China in the Global Competition for Terminologies

Speaker: Thorsten J. Pattberg [裴徳思]
 Ph.D. / Visiting Fellow, IASA

Hundreds of Japanese loanwords comprising brands, ideas, and concepts from sumo, bushido, and Zen, over kimono, origami, and sushi, to karaoke, loi, and kamikaze have found their way into the English language. By comparison, Chinese loanwords in the English are still relatively few. Following the spirit of HANEDA Masah's proposal for a 'New World History' this lecture will discuss how the Japanese language became a global application for transmitting Japan's originality and ineffectiveness in the world. We will contrast this with past German and English forced 'language imperialism', how US-anglophone publishers are still discriminating against Asian words [this is going to change], and how recent national movements such as Abe's 'Cool Japan', Xi's 'Chinese Dream', and Modi's 'New India' all aim at creating a more diverse, authentic, and accurate history narrative. Capitalism has taught us to compete for natural resources, market shares, and human capital. But nations should also compete for their terminologies. The 21st Century is going to witness tens of thousands of non-Western words enriching the future global language.

Time: January 8, 2015 (Thu) 5:00-6:00 pm
 Location: Lobby, Ground Floor,
 Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo
 Language: English

Organized by Global Japan Studies, GJS/ Network
 for Education and Research on Asia, ASNET
 Contact: Global Japan Studies Network,
 gjs@ioc.u-tokyo.ac.jp

GJS主催・東文研・ASNET共催セミナー

Diary of a Poor Bannerman:
 Surviving Day-to-Day in Qing Beijing in
 the Early Nineteenth Century

【報告者 / Lecturer】
 Bingyu Zheng (Princeton University)

【日時 / Date】
 2015年1月15日 (木) 16:30-17:30
 Jan 15, 2015 (Thu) 4:30-5:30 p.m.

【会場 / Venue】
 東京大学 東洋文化研究所 1階 ロビー
 Ground Floor
 Institute for Advanced Studies on Asia
 The University of Tokyo

【使用言語 / Language】
 英語/English

主催: 東京大学国際総合日本学ネットワーク
 共催: 東京大学東洋文化研究所・ASNET機構

Tobunken/ASNET/GJS Seminar Series
Shinran's Hope in the Age of Mappō
 末法における親鸞の希望

Speaker: Rika Dunlap
 University of Hawaii/ Visiting Fellow, IASA, University of Tokyo
 Comment: Takahiro Nakajima (Professor, IASIA)

Time: January 22, 2015 (Thu) 5:00-6:00 pm
 Location: Lobby, Ground Floor,
 Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo
 Language: English



Organized by Global Japan Studies, GJS/ Network for Education and Research on Asia, ASNET
 Contact: Global Japan Studies Network, gjs@ioc.u-tokyo.ac.jp

＜東文研・ASNET共催セミナー＞
日本の対ミャンマー政府開発援助
 1988年以降の政策変容について

The Changing Nature of Japan's ODA Policy towards Myanmar since 1988
 日本の対ミャンマーの関係を、しばしば「特別な関係」や「歴史的に友好な関係」とをわける。それは1954年に平和条約を締結して以来のものである。1988年以前、日本はミャンマーにとって主要な開発援助国であり、両国の関係は友好的であった。1988年にミャンマーの国内政治に変化があると、日本の対ミャンマー政府開発援助を含む両国の関係性にも変化が生じた。また2010年の選挙の後、国内政治が変化するとも両国の関係性も新たなものとなった。とくに根本的な変化がもたらされたのは、2011年3月にテイン・セイン大統領率いる民主的な政府が発足し、改革路線が敷かれた後のことである。

これ以降、ミャンマーと西欧民主主義諸国の関係性、日本との関係性が改善され、結果として、日本の対ミャンマー援助も増加したのである。本報告では、日本の援助政策の変化について、1988年以降の状況を振り返りつつ考察を行う。

◆ 日 時 : 2015年 1月 29日 (木) 17:00-18:00
 ◆ 報告者 : オー・ソウ・サン氏 (東京大学 東洋文化研究所 訪問研究員)
 ◆ コメント : 池本幸生氏 (東京大学 東洋文化研究所 教授)
 ◆ 会 場 : 東京大学 本郷キャンパス内 東洋文化研究所 1F ロビー
 ※ 報告は英語で行われます。

東文研・ASNET共催セミナー
 東洋文化研究所とASNETは毎週末曜日の夕方にセミナーを開催しています。どなたでもご参加頂けます。登録のお申し込みをお待ちしております。詳しくはこちら: <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia

＜Tobunken/ASNET Seminar＞
The Changing Nature of Japan's ODA Policy towards Myanmar since 1988
 日本の対ミャンマー政府開発援助—政策変容の過程について

Along with the changing domestic political situations in Myanmar in 1988, it can be seen the changes in bilateral ties especially in terms of Japan's ODA policy towards Myanmar. Again, the changing domestic political situation of Myanmar after 2010 election paved the way for the renewal of bilateral relations between two countries. The fundamental changes came in March 2011 with the inauguration of the new democratic government led by President U Thein Sein by introducing reform measures. These changes led to improve relations with Western democratic nations and also Japan. Under these circumstances, Japanese motivation for assistance was also augmented by new rationales. Based on this background, this presentation will examine the changing nature of Japanese aid policy towards Myanmar since 1988.

◆ Date : January 29 (Thu), 17:00-18:00
 ◆ Speaker : Oak Soe San (Visiting Fellow, The University of Tokyo)
 Comment: TBD
 ◆ Venue : Lobby, Ground floor, Tobunken * The presentation will be in English.

Tobunken/ASNET Seminar
 IASIA (Tobunken) and ASNET organize collaborative seminars on Thursdays. It is open to the public. Please visit us at: <http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
 Network for Education and Research on Asia



平成24年度秋期開講受講生募集

グレーター東大塾

04

古田塾／塾長：日本・アジアに関する教育研究ネットワーク 機構長 古田 元夫
(ASNET機構)

テーマ 『アジアの新しい形を構想する』

会 場／東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター

アジア

グレーター東大塾 (Greater Todai Juku)

東京大学における生涯学習プログラムとして発足しました。
グレーターとは、在学教育を拡大して卒業生や社会人を対象とすることから名付けています。先端専門性の高いテーマをピックアップして、課題に精通する第一線教授陣を長とする、「塾」形式で開講します。



ASNET
Asian Studies Network
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク

 **東京大学**
THE UNIVERSITY OF TOKYO
卒業生室
社会連携部



▼ グレーター東大塾パンフレット



ご挨拶



江川 雅子 (東京大学 理事)

Egawa Masako

グレーター東大塾は、卒業生が生涯にわたって大学と絆を持ち続け、世界的視野に立って、公正な社会の実現や科学・文化の創造に貢献し続ける為の仕組みとして生まれました。東大の生涯教育プログラムの中でも、グレーター東大塾は、先端専門性に焦点を置き、現実社会の身近なテーマを取り上げて、塾長となる教授の指導のもとに展開するユニークなものです。一般教養の講義というレベルを超えて、大学と社会が連携して第一線の課題に取り組み、問題解決のネットワークを構築する、それが本プログラムの目的です。

グレーター東大塾の概要

場 所 東大キャンパス内
時 間 平日夜、19時～21時半
期 間 半期、12～15コマ
規 模 クラス25名程度
参加費 30万円前後(プログラムにより異なる)

特 色

- 先端・専門性の高い現代社会的テーマ
- 塾長の個性を尊重した多種多様なプログラム
- 外部講師も含めた実践的内容
- 受講生参加による共同研究・政策提言なども視野

緊密強固な絆



塾長 古田 元夫 教授

〈プロフィール〉

東京大学教養学部教養学科卒業、同大学院社会学研究科修士課程修了、学術博士(東京大学)。東京大学助手、同助教授を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科教授、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構長。現代ベトナムの地域研究が専門で、ドイモイ政策の形成過程、ドイモイ下での社会変動などの研究を行っている。



副塾長 池本 幸生 教授

〈プロフィール〉

京都大学経済学部卒業、京都大学博士(経済学)。アジア経済研究所研究員、京都大学東南アジア研究所助教授、東京大学東洋文化研究所助教授を経て、現在、東京大学東洋文化研究所教授、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク副機構長。専門はタイの所得格差とベトナムの貧困問題に関する研究で、アマルティア・センの『正義のアイデア』の翻訳も行っている。





アジアの新しい形を構想する

塾長：日本・アジアに関する教育研究ネットワーク 機構長 古田 元夫

名目 GDP で日本が中国に「追い越された」こと自体には何の意味もないが、それは、日本経済が成熟期から収縮期に向かっており、再び GDP 競争に参戦することは日本の進むべき道ではないことを象徴的に示している。明治維新以降の日本の経済発展を眺めてみると、高度成長期は異常な時期であり、その時期に作られた楽観的な成長シナリオに基づく制度は将来に亘って持続可能であるはずはなく、「失われた20年」と呼ばれる停滞は、その制度から脱却し、新しい制度を模索している過程と見るべきだろう。

日本がこのような歴史的な転換点にあり、そして、かつての成長シナリオに戻ることはできないのであれば、新しい日本のあり方を構想しなければならない。それは「成長するアジアにおける日本の位置」を模索することになる。将来が過去の延長線上にないとすれば、新しい将来像は、新たな枠組みでアジアや世界を捉えなおすことを必要とする。「新しい世界史」を描くことは、日本とアジアの将来像を描く上で不可欠である。本プログラムでは、インド、インドネシア、ベトナム、ミャンマーという多様な国々を取り上げ、各国の様々な分野の最先端の研究を学ぶことを通して、アジアの発展を歴史的スパンで捉え直し、参加者全員の討議を通して「新しいアジアの形」を展望してみたい。

■ 平成24年度秋期 グレーター東大塾 『アジアの新しい形を構想する』 講座予定

開催日	講座名・内容	講師
10月5日(金)	第1回「新しい世界史」の模索 通常、私たちは「アジア」が存在することを当然として、世界の政治、経済や国際関係を語る。しかし、実は、アジアという空間概念は、近代の産物である。現在私たちが「アジア」ととらえる空間は、もともとあったわけではなく、作られたのである。新しい世界史は、ヨーロッパとアジアをはじめから区別するのではなく、一つの世界を想定し、その過去を描こうとする。新しい世界史の観点に立つと、現在の「アジア」という地域の過去は、どのように描けるのだろうか。参加者とともに議論して考えたい。	東京大学 東洋文化研究所 教授 羽田 正
講座1 インド研究の最先端：何が変わり、どこへ向かうのか？ 想像を超えた変貌を遂げるインド。何がインドを動かし、どこが変わったのか。それはいつから始まり、どこへ向かうのか。いや、それとも何も変わっていないのか。本講義では、大きく変化しつつあるかに見えるインドを世界の長期変動の中に位置づけ、と共に、インドそのものの長期変動の段階と特徴を18世紀から現在までを対象に経済史の視点から整理することによって、インドが進む方向を展望する。		
10月12日(金)	第2回「グローバル・エコノミーの成立とインド」 20世紀半ばを境として、地域別GDP成長率の圧倒的な伸びを示し、一人当たりGDPについても、1970年代から唯一顕著な増加を示しているアジアの動きは、U・オリエント、アジアの復権なのか？ 18世紀半ばからの近代の動きは、歴史上の例外であったのか？ A.G. フランクが突きつけたこの問題は、中国と並ぶアジアの雄、インドの長期変動の中で検証されなければならない。講義では、インドの近世から植民地化までの時期を対象に、グローバル・エコノミーの成立にインドがどのような役割を果たし、自らがどう変化したのかを、農村構造、綿業、東西交易、植民地都市の成長をとりあげて論ずる。そして、18世紀から現在、そして将来に及ぶ世界の構造変化の方向と、そこにおけるアジアやインドの位置について議論したい。	東京大学 人文社会系研究科 教授 水島 司
10月19日(金)	第3回「植民地化とインド社会の変容」 近世のインド社会の変動は、植民地化とどうつながったのか？ 植民地化は、どのような意味をもっていたのか？ 講義では、はじめに、開発、アジアの専制論、私的所有の意味、空間の切片化をテーマにして、この問題を考える。続いて、植民地化という経済的な搾取とされる状況の中で、なぜ耕地も人口も増えたのかという問題を、農村構造、税負担、商人の動向と連関させて論ずる。最後に、人口や耕地の拡大が招いた飢饉や生産の不安定さの問題をどう評価するかという問題を議論する。	
11月2日(金)	第4回「都市のインパクト：インドはどこへ向かうのか」 インド農村は、耕地拡大の限界と人口爆発の問題にどのように対処したのか？ 緑の革命はどう評価すべきなのか？ 劇的な都市の拡大は、農村にどのようなインパクトを与えているのか？ 農村と都市との連関の中で、家族関係、教育への取り組み、カースト関係、階層格差はどう動いているのか？ 講義では、これらの問題を具体的なデータに基づき検討し、最後に、21世紀のインドの役割と、それに対する日本の対応について議論したい。	
講座2 ベトナム フランスからの独立、ベトナム戦争と共産主義経済の混乱の後、1986年のドイモイ政策への転換によって経済開放と市場経済化を進め、ベトナムは目覚ましい経済成長を遂げてきた。米の輸出ではタイを抜いて世界第1位になると言われているし、コーヒーなどの一次産品でも世界の主要な輸出国となっている。その優秀な労働力と、安定した政治・社会、日本・中国・ASEANに近いという地理的優位性により、中国への一極集中を避け、投資リスクを分散させるといふ「チャイナプラスワン」の有力候補として注目を浴びている。この背景で何が起きているのかを、社会、コーヒー、外交の面から見ていく。		
11月12日(月)	第5回 ベトナムの歴史・文化・社会一異質の併存と社会の活気 20世紀の反植民地民族解放運動の旗手でありながら、コロニアルな遺産を自らの誇りとする国、20世紀には対立する概念だった資本主義と社会主義を「共存」させようとするドイモイの試み、伝統的な漢字文化圏にありながら、文字をローマ文字化した唯一の国など、ベトナムの魅力を「異質の併存」に見出しつつ、国家を圧倒する社会の活力という面からベトナム社会の特徴を考える。	東京大学 総合文化研究科 教授 古田 元夫
11月15日(木)	第6回 ベトナム・コーヒーから見るグローバル経済と世界の貧困問題 ベトナムは1990年代に世界第2位のコーヒー輸出国に発展した。しかし、そのことが2000年代初めに世界のコーヒー価格の大暴落をもたらした。世界中のコーヒー生産者が貧困にあえぐ「コーヒー危機」と呼ばれる状況をもたらすひとつの要因となつたとしてベトナムは非難された。なぜそれほど急激にコーヒー生産を伸ばすことができたのだろうか。コーヒーというグローバルな商品を通して、グローバル経済のインパクトが地方のコーヒー生産者にまで届く様子、それがもたらす貧困と環境問題、それを克服するための様々な国際的な支援と努力について考える。	東京大学 東洋文化研究所 教授 池本 幸生



▼ グレーター東大塾パンフレット



講義時間：90分(講義) + 60分(質疑応答) 19:00～21:30

開催日	講座名・内容	講師
11月30日(金)	第7回 ベトナムの外交とアイデンティティ ドイモイ時代の全方位外交は、ベトナムをめぐる国際環境の大幅な好転をもたらした。中でもかつて対立していたASEAN(東南アジア諸国連合)にベトナムが加盟したことは、ベトナムの国際的地位を安定させただけでなく、ASEAN自体の国際的役割を増大させた。こうして「東南アジアの一員」となったベトナムは、一方で、その個性を生かした発展のためには、かつては漢字文化圏、東アジア世界の一員であったという伝統を想起すべきだ、という声が国内で強まっており、漢字教育復活論なども提唱されるようになっている。現在のベトナムを世界の中でどう位置付けるのか、そのアイデンティティをめぐる葛藤を検討する。	東京大学 総合文化研究科 教授 古田 元夫

講座3	インドネシアー経済発展の軌跡とプランテーション産業の変遷 20世紀末のアジア経済危機の打撃とそれに続く政変劇をめぐり抜けたインドネシアは、21世紀に入って年率平均6%を越える安定した経済成長を続け、その潜在力に世界の注目が集まっている。しかしその成長の中身を見ると、東アジア、東南アジアの他の新興諸国とは対照的に、いわゆる輸出指向工業化とはかなり異なるパターンが見いだされる。注目されるのは、工業製品以上に新しいタイプの一次産品輸出が好調であること、また内需が旺盛で、国内総生産(GDP)に対する輸出額の比率つまり輸出依存度に低下の傾向が見られることだ。この講座では、このような経済発展の軌跡を19世紀後半からの近現代経済史全体の歴史的過程のなかで位置づけたうえで、一次産品輸出の主な担い手であるプランテーション産業の歴史と現状を、いくつかの産品に即して明らかにしたい。
------------	---

12月7日(金)	第8回 インドネシア近現代経済史概論 19世紀半ばから現在までのインドネシア経済の歴史的变化を、まず主な輸出産業の変遷という視点から整理する。次に、人口成長と米を中心とする食糧生産の長期的推移を眺め、それが輸出産業の変遷とどう関連しているかを検討する。最後に、過去数十年間の人口構成、労働人口の産業部門別学歴別構成の変化、都市人口と家族構成の変化などを検討して社会経済構造がどう変わってきたかを押さえたうえで、21世紀に入ってからの経済成長のパターンの特徴をいくつかの基礎的統計データを示しながら説明する。	京都大学 特任教授 加納 啓良
----------	---	-----------------------

12月14日(金)	第9回 世界経済とインドネシアの主要輸出品の盛衰(1)：コーヒー、砂糖、米 かつてオランダ領植民地であったインドネシアで19世紀半ばまで最も重要な輸出品であったコーヒーの生産が19世紀末から20世紀初めにかけていったん衰退したあと徐々に復活し、世界第4位の輸出国の地位を確保するに至った経過を検討する。次に、19世紀後半から最重要輸出品になった砂糖が1910～20年代の繁栄を経て1930年代には大きく後退し、独立後1970年代からは増産を続けたにもかかわらず輸出競争力を失って砂糖輸入国に転じた過程を振り返ってその意味を考える。1860年代までインドネシア(ジャバ)は東南アジア最大の米輸出地域だったがプランテーション産業発達と裏腹に1870年代から米輸入国に変わったこと、独立後は「緑の革命」により米の大増産を達成したが依然米輸入は続いていること、そしてそれはなぜなのかを検討する。
-----------	---

12月21日(金)	第10回 世界経済とインドネシアの主要輸出品の盛衰(2)：ゴムとアブラヤシ 隣国であった英領マラヤの後を追いついた1910年代から急増したインドネシア(当時はオランダ領東インド)の天然ゴム生産は1930年代には最重要輸出品となり、独立後も1960年代初めまでその地位を保った。1960年代後半からは石油が最重要輸出品となり、天然ゴムは合成ゴムとの競争に押されて国際価格も低迷したが、1990年代からふたたび世界的需要が急増し成長産業としての地位を回復した。それは、世界経済全体の構造変化とどう関連しているのかを観察する。ゴム以上に近年成長が目覚ましいのが、1970年代にマレーシアで増産が始まり1980年代からはインドネシアにもそれが波及したアブラヤシの栽培とそれを原料とするパーム油の輸出である。現在、インドネシアはマレーシアを抜き世界一のアブラヤシ生産国となった。その過程と歴史的意味を、やはり世界的視野から検討する。
-----------	---

講座4	ミャンマー ミャンマーでは1988年のクーデター以来「軍政」が続いていたが、2008年の憲法制定、2010年の総選挙を経て「民政」に移行した。さらに2012年4月、軍政下で自宅軟禁が続いていたアウンサンスーチー氏が国会議員に当選し、民主化そして同時並行して経済の自由化が雪崩を打ったように進展し始めた。本講義では、こうした変化の背景と現状および今後の展望を経済問題―特に人口の大半を占める農村・農業問題―を中心に議論していく。
------------	---

1月11日(金)	第11回 ビルマとミャンマー―政治経済体制の変容― 独立後から社会主義を志向し、ビルマ式社会主義という特殊な体制を続けてきたミャンマー。体制はなぜ行き詰ったのか、ビルマからミャンマーへの国名変更にはどんな意味があるのか、1988年以降の軍政は社会主義を放棄したのか、現在進行中の民主化と経済自由化はどんな意味を持つのか、といった視点から、ミャンマーの政治経済史を検討する。	東京大学 東洋文化研究所 教授 高橋 昭雄
----------	--	--------------------------------

1月17日(木)	第12回 ミャンマーの経済と農業 ミャンマーの農業部門は国民総生産、労働人口、農村居住人口といった指標で見ると、国民経済の大層を占め、ミャンマー経済の屋台骨を背負ってきた。ミャンマーの農業といえば、平原やデルタが直ぐに想起されるが、それだけではない多様な側面を持っている。また重要産業であるがために経済体制に大きく作用されてきた。ミャンマー農業の地域構造、経済体制と農業との関係、農業技術体系の発展といった観点から、ミャンマーの農業と経済を考える。
----------	--

1月24日(木)	第13回 ミャンマー農村の実像 2010年の総選挙以降、ミャンマーは突然世界の注目を集めるようになった。今後欧米の経済制裁が解かれる中、堰を切ったように外国資本が流入し、農業から商業へ、農村から都市へ、大規模な人口移動が起こるであろう。ではどのような人々が村から町に出てくるのか。6000万人人口の4分の3が居住する農村部は依然として報道も注目もされないブラックボックスである。ミャンマーの農村社会構造にはどのような特徴があるのか、日本の村との違いはどこにあるのか、村人の価値観はどのようなものであるのか、といった視座から、ミャンマー農村社会の実像に迫る。
----------	--

2月8日(金)	第14回 アジアを巡る国際政治	独立行政法人国際協力機構 理事長 東京大学 東洋文化研究所 委嘱教授 田中 明彦
---------	------------------------	--

2月15日(金)	第15回 総合討論：新しいアジアの形、日本の役割
----------	---------------------------------

※講師ならびに講座内容は変更される場合があります。ご了承ください。



▼ グレーター東大塾パンフレット



東京大学 グレーター東大塾 平成24年度秋期受講生募集要項

1. 塾生対象者

商社、運輸業、各種製造業、食品産業等の法人派遣者及び本テーマに関心の強い個人

2. 定員：30名

3. 参加費：30万円

4. 選考方法

書類審査によって入塾を決定します。

応募者多数の場合は専門分野のバランスを考慮し、事務局で選考いたします。

入塾をお断りすることもありますので、ご了承ください。

5. 出願方法と出願期間

(1) 出願方法

参加申込書に必要事項をご記入の上、お申込みください。

申込フォーム URL: <http://tsii.todai-alumni.jp/gtc/>

(2) 締切り日

2012年9月14日(金)

6. 審査・選考結果発表

・書類審査の結果は、2012年9月20日(木)までにメールにて通知いたします。

・選考結果通知後に参加を辞退する場合は、速やかに申し出てください。

7. 参加費の納付

受講が確定した塾生に、参加費納付関連の書類、請求書を郵送いたします。納付期限は2012年9月28日(金)です。

8. 個人情報の取り扱い及び注意事項

・提出された書類は、いかなる事情があっても返却には応じられません。

・出願により知り得た氏名、住所、その他個人情報については、参加者選考、選考結果発表、入塾手続き業務を行うために利用します。また、同個人情報は、入塾者の教務関係や受講料徴収に関わる業務を行うために利用します。上記各種業務は、一部を本学より受託業者に委託して行うことがあり、受託業者に対して、委託した業務を遂行するために必要となる限度で、知り得た個人情報の全部又は一部を提供する場合があります。

・本募集要項の記載内容は変更される場合があります。

お問合せ、お申込先

東京大学卒業生室内・グレーター東大塾事務局 プログラムオフィサー：覚張(かくばり) 功

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1

TEL: 03-5841-1210 FAX: 03-5841-1054 E-mail: juku@todai-alumni.jp

グレーター東大塾 開催実績 参加塾生総数 82名

		講座名	塾長
1	H23年春	「木の社会の実現に向けて」	塾長：東京大学大学院農学生命科学研究科教授 安藤 直人
2	H23年秋	「深海資源戦略」	塾長：東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 飯笹 幸吉
3	H24年春	「海洋生物のポテンシャルを求めて」	塾長：東京大学大学院農学生命科学研究科教授 古谷 研



A Venn diagram consisting of three overlapping circles. The left circle is labeled '情報の発信' (Information Transmission). The middle circle is labeled 'アジア教育' (Education on Asia). The right circle is labeled '研究者交流' (Academic Exchanges). The circles overlap in pairs and in the center, representing the intersection of these three fields.





東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia